ちくま学芸文庫

原典訳 マハーバーラタ 2

第1巻(139-225章) 第2巻(1-72章)

上村勝彦 訳

筑摩書房

目次

原典訳 マハーバーラタ2

[家系図]
太陽神
タパティー
バラターサンヴァラナ
クル
プラティーパ
ガンガー女神
シャンタヌ
サティヤヴァティー
パラーシャラ
ヤドゥ
ヴリシュニ
シューラ
スバラ
ビーシュマ
チトラーンガダ
ヴィチトラヴィーリヤ
アンバー
アンビカー
アンバーリカー
ヴィヤーサ
クリピー
ドローナ
太陽神
ガーンダーリー
シャクニ
アシュヴァッターマン
カルナ
ドリタラーシュトラ
マードリー
パーンドゥ
ヴィドゥラ
クンティー
ヴァスデーヴァ
ドルパダ
ドゥルヨーダナ
ドゥフシャーサナ
(百王子)
ヴィカルナ
ナクラ
サハデーヴァ
ユディシティラ
ビーマセーナ
アルジュナ
(マッツヤ国王)
ヴィラータ
スバドラー
クリシュナ
バララーマ
ドラウパディー
(クリシュナー)
ドリシタデュムナ
シカンディン
ウッタラー
アビマニユ
パリクシット
ジャナメージャヤ
パーンダヴァ
カウラヴァ

主要登場人物

アルジュナ　パーンドゥの五王子のうちの三男。母クンティーがインドラ神より授かった息子。あらゆる武芸に秀でた勇士。妻スバドラーとの間に息子アビマニユが生まれる。

アビマニユ　アルジュナとスバドラーの息子。

アンバー　カーシ国王の長女。アンビカーとアンバーリカーの姉。ビーシュマに復讐を誓い、後にシカンディンという男性になる。

アンバーリカー　カーシ国王の三女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。パーンドゥの母。

アンビカー　カーシ国王の次女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。ドリタラーシトラの母。

ヴァイシャンパーヤナ　聖仙。ヴィヤーサの弟子。蛇の供犠祭を催すジャナメージャヤ王の前で、ヴィヤーサから聞いた『マハーバーラタ』を吟誦する。

ヴァスデーヴァ　ヤドゥ族の長シューラの息子。クンティーの兄。バララーマ、クリシュナ、スバドラーの父。

ヴァースデーヴァ→クリシュナ

ヴィチトラヴィーリヤ　シャンタヌとサティヤヴァティーの次男。カーシ国王の娘アンビカーとアンバーリカーを妃に迎える。

ヴィドゥラ　ヴィヤーサとアンバーリカーの召使女の息子。ドリタラーシトラとパーンドゥの異母弟。

ヴィヤーサ（クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ）　聖仙。『マハーバーラタ』の作者。サティヤヴァティーと聖仙パラーシャラとの間に生まれる。ドリタラーシトラ、パーンドゥ、ヴィドゥラの実父。

ウグラシュラヴァス　吟誦詩人。ローマハルシャナの息子。ヴァイシャンパーヤナが語った『マハーバーラタ』をナイミシャの森で聖仙たちに語る。

カルナ　クンティーが太陽神より授かった息子。生まれつき甲冑と耳環をつけた勇士。

ガンガー　ガンジス川の女神。シャンタヌ王との間に息子ビーシュマを産む。

ガーンダーリー　ガーンダーラ国王スバラの娘。ドリタラーシトラの妻。百王子の母。

クリシュナ　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの息子。バララーマの弟。ヴィシュヌ神の化身とみなされる。

クンティー（プリター）　ヤドゥ族の長シューラの娘。太陽神よりカルナを授かる。パーンドゥの妻。ユディシティラ、アルジュナ、ビーマの母。

サティヤヴァティー　漁師の長の娘。聖仙パラーシャラとの間にヴィヤーサをもうける。シャンタヌの妻となり、チトラーンガダ、ヴィチトラヴィーリヤを産む。

サハデーヴァ　パーンドゥの五王子のうちの五男。マードリーの息子。ナクラとは双子の兄弟。

サンジャヤ　ドリタラーシトラの吟誦者。『マハーバーラタ』の戦争の語り手。

シカンディン　ドルパダの次男。アンバーの生まれ変わり。

シャウナカ　聖仙。十二年におよぶ祭祀を行うナイミシャの森の祭場で、様々な神聖な物語をウグラシュラヴァスから聞く。

シャクニ　ガンダーラ国王スバラの長男。ドゥルヨーダナ兄弟の叔父。

ジャナメージャヤ　パーンダヴァ族の後裔。パリクシットの息子。ヴィヤーサの弟子ヴァイシャンパーヤナの物語る『マハーバーラタ』の聞き手。

シャンタヌ　クル族の王プラティーパの息子。ガンガー女神との間に息子ビーシュマを、サティヤヴァティーとの間にチトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤをもうける。

スバドラー　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの娘。バララーマとクリシュナの妹。夫アルジュナとの間にアビマニユをもうける。

チトラーンガダ　シャンタヌとサティヤヴァティーの長男。

ドゥフシャーサナ　ドリタラーシトラの次男。

ドゥルヨーダナ　ドリタラーシトラの長男。邪悪な性格で、パーンダヴァ兄弟を苦しめる。

ドラウパディー（クリシュナー）　パーンチャーラ国王の娘。パーンドゥの五王子の共通の妻。

ドリシタデュムナ　ドルパダの長男。

ドリタラーシトラ　ヴィヤーサとアンビカーの盲目の息子。ガーンダーラ国王の娘ガーンダーリーを妃とする。百王子の父。

ドルパダ　パーンチャーラ国王プリシャタの息子。祭火よりドラウパディー、ドリシタデュムナ、シカンディンの三人の子を授かる。

ドローナ　聖仙バラドゥヴァージャの息子。クリピーを妻とする。アシュヴァッターマンの父。パーンドゥの五王子とドリタラーシトラの百王子に武術を教授する。

ナクラ　パーンドゥの五王子のうちの四男。マードリーの息子。サハデーヴァとは双子の

兄弟。

パラーシャラ　聖仙。ヴィヤーサの父。

バララーマ　ヴァスデーヴァの長男。クリシュナの兄。

パリクシット　アビマニユとウッタラーの息子。ジャナメージャヤの父。

パーンドゥ　ヴィヤーサとアンバーリカーの息子。ドリタラーシトラの異母弟。五王子の父。

ビーシュマ（デーヴァヴラタ）　シャンタヌ王とガンガー女神の息子。パーンドゥとドリタラーシトラの伯父。

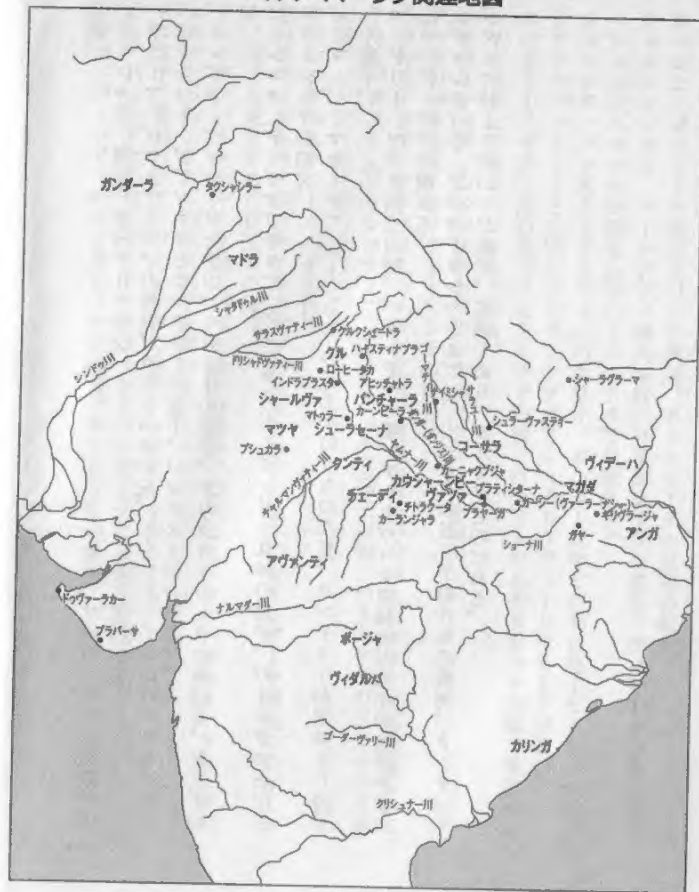
ビーマ（ビーマセーナ）　パーンドゥの五王子のうちの次男。クンティーが風神より授かった息子。

マードリー　マドラ国王の娘。パーンドゥの妻。アシュヴィン双神より双子の息子ナクラとサハデーヴァを授かる。

ユディシティラ（アジャータシャトル）　パーンドゥの五王子のうちの長男。クンティーがダルマ神より授かった息子。高徳であり、ダルマ王と呼ばれる。

第1巻　最初の巻（アーディ・パルヴァン）続き

第百三十九章—第二百二十五章

マハーバーラタ関連地図

(9) ヒディンバ殺し（第百三十九章―第百四十四章）

羅刹女、ビーマを愛する

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

彼らがそこで寝ていた時のことである。その森からほど遠からぬところで、ヒディンバという羅刹がシャーラ樹に住みついていた。(一)彼は強大で残忍であり、人肉を食べ、醜い姿で、黄色い眼をしており、おぞましく、恐ろしい様子をしていた。彼は飢えに苦しみ、肉を求めていたところ、たまたま彼らを見つけた。(二)彼は上方に指を反らせて、ごわごわの髪を掻きむしって揺すり、大きな口を開けてあくびをし、何度も見つめた。(三)この邪悪で強大な食人鬼は、人間の臭いをかいで、妹に言った。(四)

「今日は久しぶりで素敵なごちそうにありつける。俺の舌は涎をたらし、舌舐めずりしている。(五)長いこと使わないでうずうずしている俺の八本の鋭い牙を、彼らの体に、うまそうな肉に、沈めてやろう。(六)人間たちの喉に襲いかかり、血管を引き裂き、新鮮で温かく泡立つ血をたくさん飲んでやろう。(七)行って、森で寝ている奴らは何者であるか調べてこい。強い人間の臭いは俺の鼻を満足させる。(八)人間どもをみな殺しにして、俺のもとに運んでこい。彼らは俺の縄張りで眠っているから、恐れることはない。(九)あの人間どもの肉を好きなように料理して、いっしょに食おう。急いで俺の言ったようにやれ。(一〇)」

羅刹女は兄の言うことを聞いて、急いでパーンダヴァたちのいる所へ行った。(一一)そこ

に行って、彼女は寝ているパーンダヴァ兄弟とプリター(クンティー)を見た。しかし、無敵のビーマセーナは目覚めていた。(一二)彼はシャーラ樹の幹のように背が高く、容姿の点で地上に比べるものがなかった。彼女はビーマセーナを見るやいなや、彼を愛してしまった。(一三)

「彼は浅黒く、偉丈夫で、獅子のような肩をして、光り輝いている。巻貝のような頸をし(頸に三本の筋がある)、蓮のような眼をしている。私の夫にふさわしい人だ。(一四)私は決して残忍な兄の言葉に従えない。夫に対する愛は兄弟愛に勝るものだ。(一五)彼らを殺しても、私と兄の満足は束の間のものだ。だが彼らを殺さなければ、私は永遠に喜ぶであろう。(一六)」

自由に姿を変えられる彼女は、最高の美女の姿をとり、静々と勇士ビーマセーナに近づいて行った。(一七)彼女は神々しい装身具で飾られ、恥じらう蔓草のようだった。彼女は微笑みつつビーマセーナに話しかけた。(一八)

「人中の雄牛よ、今あなたはどこから来られたのですか。そして、あなたはどなたですか。また、ここに寝ている神々しい姿の人たちは誰ですか。(一九)欠点のない人よ、この長身の、美しい顔色の、優美な婦人は、あなたにとって何にあたる方ですか。この森に来て、まるでわが家にいるように安心して寝ている方は。(二〇)この深い森には羅刹が住んでいると、この方は知らないのですか。ここには、ヒディンバという名の邪悪な羅刹が住んでいます。(二一)それは私の兄ですが、その悪い羅刹が私をここに遣わしたのです。彼は神々のようなあなた方の肉を食べたがっています。(二二)私はここで神の子のようなあなたを見て、もう他

の男を夫にしたくはありません。私はそのように誓います。(二三) 法(ダルマ)を知る人よ、このことを知られたら、私にふさわしくふるまって下さい。私は身も心も愛に支配されています。私を愛して下さい。(二四) 強力な人よ、私はあの食人鬼からあなたを救ってあげます。私たちは山城に住みましょう。欠点のない方よ、私の夫になって下さい。(二五) 私は自由に空中を飛んで行くことができます。私とともに、あちこちで無比の楽しみを味わいましょう。(二六)」

ビーマは答えた。

「羅刹女よ、今日生まれ変わったかのように、誰が母や兄や弟たちを捨てることができるか。(二七) どうして私のような男が、愛に悩まされて、眠っている兄弟と母を羅刹の餌食にして行くことができるか。(二八)」

羅刹女は言った。

「あなたの好きなようにします。みなを起こしなさい。きっと私が食人鬼からあなた方を救ってあげます。(二九)」

ビーマは答えた。

「羅刹女よ、私の母と兄弟たちは森で安らかに眠っている。私はお前の邪悪な兄を恐れて、彼らを起こしたりはできない。(三〇) 可愛い女よ、羅刹たちは勇猛な私にはかなわない。人間やガンダルヴァ(半神)や夜叉(ヤクシャ)たちだってかないはしない。美しい眼の女よ。(三一) しなやかな女よ、去るなりとどまるなり、好きなようにせよ、人を食うお前の兄を連れて来たってかまわない。(三二)」

(第百三十九章)/(第百四十章略)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

〔ヒディンバがやって来て、妹の裏切りを知り、怒り狂って妹を殺そうとする〕

しかし、ビーマセーナは、妹に対して怒る羅刹ヒディンバを見て、笑って次のように告げた。(一)

「ヒディンバよ、どうして安らかに眠っている人々を起こそうとするのか。馬鹿な人食いめ、早く俺にかかってこい。(二) さあこの俺だけを攻撃しろ。女を殺すのはよくない。特に、何の悪いこともしないのに。他の者が悪さをしているのに。(三) この娘は今日、自分勝手に俺を愛したのではない。お前の妹は、姿のない愛の神にかりたてられたのだから。馬鹿者、羅刹の面汚しめ。(四) お前の指図により、この可愛い女は、今日、俺の姿を見て愛したのだ。彼女は一族を汚しはしない。(五)」(六—一四略)

ヒディンバは言った。

「俺は今のところ他の連中は殺さない。安らかに眠っていればよい。馬鹿め、今は不愉快なことをほざくお前だけを殺してやる。(一五) お前の体から血を飲んでから、他の奴らも殺す。それから、この不愉快なことをした女を殺してやる。(一六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そう言ってから、食人鬼は手を広げ、怒り狂って勇士ビーマに飛びかかった。（二七）彼は飛びかかって激しく腕を振り下ろしたが、恐ろしく勇猛なビーマは、ふざけているかのように、すぐにその腕をつかまえてしまった。（二八）つかまえられて彼はもがいたが、ビーマは力ずくで、その場所から八弓長（ダヌス）（長さの単位）のところに引きずって行った。獅子が小動物を引きずるように。（二九）ビーマに力まかせに押えられて、羅刹は怒ってビーマに抱きつき、恐ろしい叫びをあげた。（三〇）そこで大力のビーマは再び彼を力まかせに引きずった。その声が安らかに眠る兄弟たちに聞こえないようにしたのである。（三一）羅刹とビーマはお互いに攻撃し合い、全力をあげて格闘した。両者は最高の勇猛さを発揮した。（三二）そして、大木を砕き蔓を引っぱった。発情してひどく興奮した二頭の巨象のように。（三三）両者のたてる大きな音により、勇士たちと母は目を醒まし、前にいるヒディンバー（羅刹の妹）を見た。（三四）

（第百四十一章）

（一）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

人中の虎たちとプリター（クンティー）は目覚め、人間離れしたヒディンバーの容色を見て驚嘆した。（二）クンティーは彼女をつくづく見て、その完全な美しさに驚き、優しく語りかけた。

「神の子のような女（ひと）よ、あなたは誰に属しますか。美しい女よ、あなたは誰ですか。どんな用事で、どこから来たのですか。（三）あなたは森の神か、あるいは天女か。すべて答えて下さい。そして、何のためにここに居るのです。（四）」

ヒディンバーは答えた。

「この黒雲のような大きな森は、羅刹ヒディンバと私の住処（すみか）です。（五）奥様、私はその羅刹王の妹でございます。あなたと息子たちを食おうと望む兄によって遣わされたのです。（六）私はその残忍な兄の命でここに来て、金色に輝くあなたの強力な息子を見ました。（七）すると私は、すべての生類の心の中で動きまわる愛の神にかりたてられて、あなたの息子のとりこになりました。（八）そこであなたの強力な息子を夫と選んだのです。私は彼を連れて行こうとしましたが、できませんでした。（九）それから、私の帰りがおそいので、あの食人鬼は自らやって来て、あなたの息子たちをすべて殺そうとしたのです。（一〇）英邁で偉大なあなたの息子、私の愛する人は、彼を力ずくでうちひしぎ、ここから引きずって行きました。（一一）御覧なさい。人間と羅刹とが戦って、お互いに激しく格闘し、叫びつつ、攻撃し合っています。（一二）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼女の言葉を聞くやいなや、強力なユディシティラとアルジュナとナクラとサハデーヴァは飛び上がった。（一三）彼らは、両者がお互いに勝利を求めて戦いに没頭する二頭の獅子

のように、夢中で格闘しているのを見た。（一四）彼らはお互いに抱きつき、引き合い、燃える火の煙のように地上のほこりをたてていた。（一五）両者は地上のほこりにおおわれて山のようであり、また、霧に包まれた山のように輝いていた。（一六）アルジュナは、このようにビーマが羅刹に苦しめられているのを見て、笑って、徐に言った。（一七）

「大力のビーマよ、恐れるな。我々は疲れて眠っていて、あなたが恐ろしい姿の羅刹と戦っているのを知らなかった。（一八）ビーマよ、この私が応援する。私が羅刹と戦い、ナクラとサハデーヴァが母上を守るであろう。（一九）」

ビーマは言った。

「お前は高みの見物をしておれ。あわててはいけない。俺の腕の中に入ったら、決して生きながらえることはできない。（二〇）」

アルジュナは言った。

「ビーマよ、そんな悪い羅刹をいつまで生かしておくのか。我々は出発しなければならぬ。ここでぐずぐずすることはできない。（二一）もうじき東の空は赤らみ、夜明けになる。その恐ろしい時刻には、羅刹は強力になるのだ。（二二）ビーマよ急げ。遊んでいるな。おぞましい羅刹を殺せ。奴が幻術を使う前に、腕力を発揮せよ。（二三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

アルジュナにそう言われて、ビーマは恐ろしい羅刹の体を何百回も持ち上げて、急激に振

りまわした。（二四）

ビーマは言った。

「お前は無駄な肉をつけ、無駄に太っている。無駄に年をとり、無駄に知恵をつけている。お前は無駄死にするにふさわしい。そうすれば、もはや無駄ではなくなるだろう。（二五）」

アルジュナは言った。

「あなたが、この羅刹と戦って、それを重荷と思うなら、私があなたを応援しよう。すぐに殺してしまいなさい。（二六）あるいは狼腹よ、私自身が彼を殺そうか。あなたが一仕事して疲れ果てたのも無理はない。休息しなさい。（二七）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それを聞くとビーマセーナは非常に怒り、力まかせに羅刹を地面にたたきつけて、獣を殺すように彼を殺した。（二八）羅刹はビーマに殺される時、森じゅうを響かせて、水に濡れた太鼓のように、大きな叫び声をあげた。（二九）大力のビーマは両腕で彼を羽交い締めにして、背骨を折って、パーンダヴァの王子たちを喜ばせた。（三〇）勇士たちはヒディンバが殺されたのを見て喜び、敵を制する人中の虎ビーマセーナを讃えた。（三一）アルジュナは、恐ろしく勇猛で偉大なビーマを讃えてから、更に彼に次のように言った。（三二）

「この森からほど遠からぬところに都があると私は思う。急いで行った方がよい。スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）が我々を見つけないうちに。（三三）」

そこで、敵を苦しめる人中の虎たちは、母とともに出発した。羅刹女ヒディンバーも彼らに従った。(三四)

(第百四十二章)

ビーマは言った。

「羅刹というものは恨みを忘れない。人を迷わす幻術を用いて。ヒディンバーよ、お前も兄の行った道(死)を辿るがよい。(一)」

ユディシティラは言った。

「人中の虎ビーマよ、たとえ怒ったとしても、女性を殺してはならぬ。身体を守ることよりも、法(ダルマ)を守れ。(二)お前は、殺意をもってやって来た強力な羅刹を殺した。その妹は、怒ったとしても、我々に何をするだろうか。(三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ヒディンバーは手を合わせ、おじぎをして、クンティーとユディシティラに告げた。(四)

「奥様、あなたは女性の愛の苦しみを知っておられます。ビーマセーナのために、それが私を訪れたのです。(五)私は時を待ちながら、その最高の苦しみに堪えました。しかし、今、その時が、私に幸せをもたらす時が訪れたのです。(六)私は友達や自分の法(義務)や親族を捨てて、この人中の虎であるあなたの息子を夫として選んだのです。(七)私がこのように申し上げても、この夫と選んだ人とあなたによって、結婚を拒絶されるでしょうか。(八)あなたが私を愚かな女と思おうとも、献身的な従者と思おうとも、奥様、あなたの息子、この夫と結びつけて下さい。(九)私は神のような姿をした彼を連れて、好きなところへ行きたいのです。私はまたもどって来るでしょう。奥様、信用して下さい。(一〇)心で私のことを念じたら、私はいつもみなさんのところへやって来ます。人中の雄牛たちが苦しんでいたり、難所にいる時、私は彼らを救うでしょう。(一一)あなたが進みたい時には、急いであなたを背負って行くでしょう。どうかお願いします。ビーマセーナが私を愛しますように。(一二)」

(一三—一五略)

ユディシティラは言った。

「ヒディンバーよ、まさしくお前の言った通りだ。だが、美しい腰の女よ、お前は私が告げるように、法(ダルマ)を守らなければならぬ。(一六)ビーマセーナが沐浴し、日々の儀式(おつとめ)をすませ、結婚の儀式をすませたら、太陽が沈むまで彼を愛しなさい。(一七)昼間は彼と好きなだけ、思考のように速やかに楽しみなさい。しかし夜は、いつもビーマを帰らせなければならぬ。(一八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

羅刹女ヒディンバーは「承知しました」と約束して、ビーマセーナをともない、上方に進んで行った。■(一九)(二〇—二六略)

羅刹女は思考のように速やかに、あちこちでビーマと楽しんでいるうちに、ビーマの強力な息子を生んだ。〔二七〕その子は、多くの眼を持ち、大きな口をし、その耳は恐ろしく尖っており、恐ろしい姿をして、真っ赤な唇と鋭い牙を持ち、大力であった。〔二八〕〔二九―三二略〕

その輝く（禿頭の）息子――将来の勇士――は、おじぎをして、父と母の足をつかんだ。そこで二人は彼に名前をつけた。〔三三〕ビーマは母親に「彼は瓶（ガタ）のようにてかてかしている（ウトカチャ）」と言ったので、そこで彼をガトートカチャと名づけた。〔三四〕このガトートカチャは、パーンダヴァ兄弟を敬愛した。そして、常に彼らに愛され、彼らに忠実であった。〔三五〕それからヒディンバーは、ビーマとの同棲の期間が終わったことを告げ、約束を交わしてから自分の道をたどった。〔三六〕最高の羅刹ガトートカチャは、父たちに、「必要な時は参上します」と約束して、北方へ向かって出発した。〔三七〕実に彼は偉大なインドラによって、無比の力を持つ偉大なカルナを滅ぼすために、その槍（シャクティ）を奪う目的で創造されたのである。〔三八〕

（第百四十三章）／（第百四十四章略）

(10) バカ殺し（第百四十五章―第百五十二章）

バラモン一家の嘆き

ジャナメージャヤはたずねた。

「最高のバラモンよ、クンティーの息子である勇士たち、パーンダヴァは、エーカチャクラーの都に行って、その後何をしたのか。（二）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クンティーの息子である勇士たちは、しばらくの間、あるバラモンの家に滞在した。（三）彼らはみな、様々な美しい森や土地や川や湖を見ながら行乞（ぎょうこつ）（鉢托）をした。彼らの美質の故に、都の人々は彼らを見て好ましいと思った。（三―四）彼らは毎晩、施食をクンティーに渡した。彼女はそれを配分し、彼らは各自の配分を食べるのであった。（五）勇士たちは母とともに半分を食べた。そして、施食全体の半分を、大力のビーマが食べた。（六）偉大な勇士たちが、そこでこのように生活しているうちに、かなり長い時が過ぎ去った。（七）

ある時、バラタの雄牛たちは行乞に出かけたが、ビーマセーナはたまたまプリター（クンティー）とともに家に残っていた。（八）その時、クンティーは、バラモンの家の中で、恐ろしくけたたましい悲鳴が上がるのを聞いた。（九）みなが悲嘆に暮れて号泣しているのを見て、王妃は、憐憫の情から、またその優しい性質の故に、黙っていられなくなった。（一〇）彼女は心を痛め、同情してビーマに言った。（一一）

「息子よ、私たちはこのバラモンの家で幸福に暮らしました。よくもてなされ、ドリタラーシトラの息子たちに知られることなく、恐れなく過ごしました。（一二）息子よ、そこで私は、このバラモンのために何かよいことができないかと考えていました。その人の家に幸せに住んだ者が当然やるような。（一三）わが子よ、恩を忘れない人だけが人間の資格があります。他人（ひと）が何かをしてくれたら、それ以上お返ししなければなりません。（一四）きっとこのバラモンにつらいことが起きたのです。そこでもし私たちが彼を援助すれば、よいことをしたことになるでしょう。（一五）」

ビーマは答えた。

「彼の苦しみが何か、その原因が何かたずねましょう。それを知ったら、どのように難しいことでも、努力してみます。（一六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

二人がこのように語っている時、またあのバラモンとその妻の嘆き声が聞こえた。（一七）そこでクンティーは急いで、その高潔なバラモンの居間に入った。■仔牛が捕えられた母牛のように。（一八）そしてそこで、悩める顔をしたバラモンとその妻と息子と娘を見た。（一九）

バラモンは言った。

「ああ、この人生は取るに足らず（[illegible]）、無益である。苦に基づき、他者に依存し、ひどく

不幸である。(二〇) 生きることは最大の苦しみである。生きることは最高の熱病である。生きていれば、必ずや争いごとはつきまとう。(二一) 一人として法（ダルマ）と実利（アルタ）と享楽（カーマ）を享受する者はない。しかも、これらから離れることは最高の苦しみと説かれる。(二二) ある人々は解脱（モークシャ）が最高であると説くが、それは決して存在しない。そして財を得れば、すべての地獄が訪れる。(二三) 財を求めることは最高の苦しみである。財が得られたら、それ以上に苦しくなる。財に愛着した人にとって、財を失うことはよりひどい苦しみである。(二四) 私はこの災難から逃れる方法を見つけられない。子供や妻とともに、災いのない場所に逃げるすべもない。(二五) 妻よ、覚えているだろう。私は以前、安全な所に行こうと努力した。しかし、お前は私の言うことをきかなかった。(二六) 私が何度も頼んでも、愚かな女よ、お前は、『私はここで生まれ育ち、父もここにいます』と言った。(二七) お前の父と母は、老いてずっと前に天国へ行き、親族も世を去った。ここに住んでいても何の楽しみがあろう。(二八) お前が親族を望み、私の言葉をきかなかったので、今や家族の滅亡が訪れた。それが私をひどく苦しめる。(二九) いや、むしろこれは私自身の滅亡である。というのは、私は冷酷な男のように、自分だけ生きながらえて家族を捨てることは決してできないから。(三〇) (三一―三三[illegible]) お前は貞節で何の罪もない、いつも忠実な妻だ。私は自分が生きるために、お前を捨てることはできない。(三三) この娘はまだ年端も行かぬ子供で、まだ女になっていない。どうして私が自分で娘を捨てることができよう。(三四) (三五―三八略) これらのうちの誰か一人を冷酷に捨てれば、識者に非難されるだろう。また、もし私自身を捨てれば、私がいなくなってみなは死ぬであろう。(三九) このような難儀に陥って、その災難を乗り越えることはできない。ああ、今、私は家族とともに、いかなる道をとればよいのか。いっそみなで死んだ方がよい。私はもはや生きることができない。(四〇)」

(第百四十五章)

バラモンの妻は言った。

「あなたは普通の人のように嘆いてはなりませぬ。あなたのような知識人が嘆くべき時ではないのです。(一) この世ではすべての人は必ず死ななければなりません。必然的になるべきことを嘆くには及ばないのです。(二) 人は、妻や息子や娘を、すべて自分のために望むのです。そこをよくわきまえて、嘆くのをおやめなさい。私自身がそこへ行きます。(三) (四―二八略) 法（ダルマ）を知る人々は法典において、女性は殺されるべきではないと説きます。そして羅刹も法を知ると申します。彼は私を殺さないでしょう。(二九) 男は必ずや殺されますが、女の場合は、殺されるかどうかわかりません。そこで私を行かせて下さい。(三〇) 私は楽しみました。よいものを得ました。義務（ダルマ）を果たしました。あなたから愛しい子供たちを授かりました。死ぬことは私を苦しめません。(三一)」(三一―三五略)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

妻にそう言われて、夫は彼女を抱きしめ、妻とともにひどく悲しみ、はらはらと涙を流し

（第百四十六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

二人がひどく悩んで話しているのを聞いて、娘は全身で悲しんで、二人に告げた。(一)

「あなた方はどうして、寄る辺がないかのように、ひどく悩んで泣き叫んでいるのですか。私の言うことも少し聞いて下さい。聞いてからふさわしいことをして下さい。(二) 法(ダルマ)によれば、あなた方は私を捨てなければ（嫁にやらなければ）なりません。この点は疑いありません。どうしても捨てなければならない私を捨てて、私一人によりすべてを救って下さい。(三) それ故、『私を救ってくれるだろう』ということで人は子供を望むのです。その時がやって来ました。舟のような私によってみなを救って下さい。(四)」(五―一八略)

このように、彼女の様々な嘆きを聞いて、父と母と娘自身は、三人で泣いた。(一九)

それから、みなが泣いているのを聞いて、幼い息子は、眼を見開いて、優しくたどたどしい声で言った。(二〇)

「お父さん、泣いてはいけない。お母さん、お姉さんも」と言いながら、彼は笑いながら、彼らすべての一人一人に向かってにじり寄って行った。(二一) それから彼は草を持って、喜び勇んで言った。

「これであの人食い羅刹を殺してやる。(二二)」

彼らは苦悩に満ちていたが、幼児のたどたどしい言葉を聞くと、大いに喜んだ。(二三) クンティーは、ちょうどよい時だと考えて、彼らに近づき、死者を甘露でよみがえらすかのように語りかけた。(二四)

（第百四十七章）

人身御供

クンティーはたずねた。

「何故に悩んでおられるのです。本当のことを知りたいと思います。そうしたら、もしできるものならその悩みを取り除いてあげます。(一)」

バラモンは答えた。

「功徳を積んだ方よ、そのお言葉は善き人々にふさわしいものです。しかしこの悩みは、人間には取り除くことができません。(二) この都の付近に、バカという羅刹が住んでいます。彼は強力で、この地方と都市の支配者なのです。(三) この邪悪な食人鬼は、人間の肉を食べております。彼は強力な阿修羅(アスラ)の王で、羅刹の力をそなえ、常にこの地方と都市と国土を守っています。彼のおかげで、我々には敵の軍隊や鬼霊たちの恐れがないのです。(四―五) 彼はその報酬を求めます。荷車一台分の米と、一頭の水牛と、それを持って行く一人の人間です。(六) 一人一人がその食物を提供します。長年のうちにその番がまわって来て、それを免れることはできないのです。(七) もしそれから逃げようとする人々がいれば、あの羅刹は、子供

や妻もろとも彼を殺して食べてしまうのです。(八) ヴェートラキーヤグリハにいるあの国王は、国民が永久に安全になれるような政策をとりません。(九) しかしそれも仕方ないことかも知れません。我々は無力な王の領土に住んでいるのですから。いつも苦しみながら、悪い王に頼っているのです。(一〇) バラモンというものは、誰に属そうとも自由に移動できるものとされます。バラモンは〔その王の、または土地の〕長所により住みつきます。自由に行く鳥のように。(一一)『まず第一に王を見出すべきだ。それから妻を、それから財産を見出すべきだ。以上の三がそろった時、親族と息子たちを養うことができる。(一二)』しかし私は、これら三者を逆の順に獲得しました。そこで我々は、このような災難に至って、ひどく苦しんでいるのです。(一三) 今や我々の番がまわってきました。これで、我々一族は滅びるでしょう。あの羅刹への報酬として、食物と人身御供を一人さし出さねばなりません。(一四) そして私にはどこかで人を買うお金がありません。また、親しい人々をさし出すことはどうしてもできません。あの羅刹から逃れる術がないのです。(一五) そこで私は、とても越えがたい大きな苦しみの海で溺れております。今は、この親族とともに羅刹のもとに行きます。あの悪党がみなをすべて食べることのないように。(一六)」

(第百四十八章)

クンティーは言った。

「あなたは決してこの危険について嘆くことはありません。その羅刹から逃れる方法を見つけました。(一) あなたには一人の息子と一人の気の毒な娘しかいません。あなたや二人の子供や奥さんがそこに行くのはよくないと思います。(二) バラモン様、私には五人の息子がいます。そのうちの一人が、あなたのために供物を持って、その邪悪な羅刹のところに行くでしょう。(三)」

バラモンは答えた。

「私は、自分の生命を惜しんで、そんなことをすることは決してできません。バラモンや客人が、私のために生命を捨てるなどということは。(四)」(五—一二略)

クンティーは言った。

「バラモンよ、私もバラモンは守られるべきだと確信します。また、もし私に百人の息子がいようとも、息子が可愛くないはずはありません。(一三) しかし、その羅刹は私の息子を殺すことはできません。私の息子は強力で、呪句を成就し、威光をそなえています。(一四) 彼は羅刹に食物をすべて与えて、自分自身は助かると確信しております。(一五) 強力で巨大な羅刹たちが勇猛な息子と戦ったのを見てきましたが、彼らはすべて殺されました。(一六) しかし、バラモンよ、このことを決して誰にも告げてはなりませぬ。術を求める人々が、好奇心から私の息子たちを悩ませるといけませんから。(一七) 私の息子が師の許可なしで誰かにその術を教えれば、彼(異本に従い、「私の息子」ととる)はその術によってことを成就できない、と賢者たちは説いています。(一八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クンティーにこのように言われて、そのバラモン夫妻は喜んで、その甘露のような申し出を有難く受け入れた。(一九) そこでクンティーとバラモンは、そろって、風神の息子（ビーマ）に、「やって下さい」と頼み、彼は「承知しました」と二人に答えた。(二〇)

（第百四十九章）／（第百五十章略）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

夜が終わった時、ビーマセーナは食物を持って食人鬼のいる場所に行った。(一) 強力なパーンダヴァは羅刹の森に着くと、その食物を食べながら羅刹の名を呼んだ。(二) その羅刹はビーマセーナの言葉を聞くと、怒ってビーマのいる場所にやって来た。(三) その羅刹は巨大な体で、猛烈に速く、大地を引き裂かんばかりであった。彼は食物を食べているビーマセーナを見ると、眉をひどくひそめ、唇を噛みしめ、眼を見開いて怒って告げた。(四―五)

「そこで俺のために用意された食物を食べている奴は誰だ。俺の見ている前で。ヤマ（閻魔）の住処に行きたいと見える。馬鹿者め。(六)」

ところがビーマはそれを聞いてあざ笑い、羅刹を無視してそっぽを向いて食べ続けた。(七) そこで食人鬼は、恐ろしい（声）をあげ、両手を振り上げて、ビーマセーナを殺そうとして突進した。(八) しかし勇猛な狼腹（ビーマ）は、それでも羅刹を無視して食べ続けた。(九) 羅

刹は怒りにかられ、ビーマの背後に立ち、両手で彼の背中を打った。(一〇) ビーマは強力な両手でひどく打たれても、羅刹を無視して食べ続けた。(一一) そこで強力な羅刹は更に怒り狂い、樹木を持って、ビーマを打とうとして再び突進した。(一二) 人中の雄牛である大力のビーマは、ゆっくりと食物を食べ終わると、水で口をゆすぎ、満足して戦闘のために立ち上がった。(一三) 強力なビーマは笑いながら、怒った羅刹が投げた樹を左手で受け止めた。(一四) そこで強力な羅刹は、更に多様な樹々を引き抜いて、ビーマセーナに投げつけた。ビーマも彼に投げ返した。(一五) かくてバカとビーマとの間に、凄まじい樹木戦が行なわれ、そのため樹木は全滅した。(一六) バカは名乗りをあげながらビーマに突進し、両腕で大力のビーマに組みついた。(一七) 一方、大力のビーマも、その羅刹に組みついて、激しくもがく羅刹を力まかせに引きずった。(一八) 食人鬼はビーマに引きずられ、そしてビーマを引きずっているうちに、すっかり疲れ切ってしまった。(一九) 両者の激しい戦いにより、大地は震動し、巨木が粉々に砕けた。(二〇) ビーマは羅刹が弱ったのを見て、大地にたたきつけ、両手でなぐった。(二一) それからビーマは力まかせに羅刹の背中を膝で押して、右腕で首をつかみ、腰のあたりの衣を左腕で持って、彼を二つに折った。羅刹は凄まじい叫びをあげた。(二二―二三) 恐ろしい羅刹がビーマに砕かれた時、その口から血がほとばしり出た。(二四)

（第百五十一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

物音に驚いて、羅刹の家族たちは召使とともに家から出て来た。(一) 最高の勇士ビーマは、恐れて度を失っている彼らを慰め、約束させた。(二)

「お前たちはもう決して人間を殺してはいけない。もし殺したら、彼と同じようにすぐに死ぬこととなろう。(三)」

彼の言葉を聞くと、羅刹たちは「承知しました」と言って約定を受け入れた。(四) それ以来、その都の羅刹たちは、都の住民たちの眼に、親密な存在と写るようになった。(五) ビーマは死んだ食人鬼を運んで、城門のところに投げ捨てて、人に見られることなく立ち去った。(六)

ビーマは羅刹を殺してから、バラモンの家に帰り、一部始終をユディシティラに語った。(七) 翌朝、人々は都から出て、その場に羅刹が血まみれになって殺されているのを見つけた。(八) それは山の頂が投げ出されたかのようで、この上なく恐ろしい姿であった。人々はエーカチャクラーに行き、都中にこの出来事を知らせた。(九) 都の住民たちは幾千となく、妻子や老人を連れて、バカを見るためにそこにやって来た。(一〇) 彼らはみな、この超人的な行為を見て驚き、神々を拝んだ。(一一) それから彼らは、その日は誰が食物を運ぶ番であるかを計算して知り、みなであのバラモンの所に行ってたずねた。(一二) 様々に質問された時、その優れたバラモンは、パーンダヴァ兄弟をかばいつつ、すべての市民たちに一部始終を語った。(一三)

「私が羅刹の食物の役を命じられ、家族とともに嘆いていた時、ある呪句を成就した強力なバラモンが私を見かけました。(一四) その最高のバラモンは、以前の都の悩みを私にたずねてから、剛毅にも私を慰めながら笑って言いました。(一五)

『私がこの食物をその悪党にとどけよう。私のために恐れる必要はありません。(一六)』

彼は食物を受けとると、バカの森へ出かけました。この行為はきっと彼が世のためにしたことに違いありません。(一七)」

それから、すべてのバラモン、王族(クシャトリヤ)、実業者(ヴァイシャ)、従僕(シュードラ)は喜び、バラモンのための祝祭をとり行なった。(一八) そして、すべての地方民は、その最高の奇蹟を見るために都に集まって来た。一方、パーンダヴァたちは同じ場所に滞在していた。(一九)

(第百五十二章)

(11) チトララタ（第百五十三章―第百七十三章）

ドルパダの子供たち

ジャナメージャヤはたずねた。

「バラモンよ、その人中の虎であるパーンダヴァたちは、羅刹バカを殺した後、どのようなことをしたのか。（一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王よ、彼らは羅刹バカを殺してから同じ場所に滞在していた。あのバラモンの家で最高ブラフマン（梵、最高原理）について学習しながら。（二）

幾日か過ぎて、誓戒を厳守する一人のバラモンが、宿泊のためにそのバラモンの家に来た。（三）常に客人を歓待することを宗とする賢明なバラモンは、彼をもてなして、宿を提供した。（四）それから、人中の雄牛であるすべてのパーンダヴァ兄弟とクンティーは、物語を語るそのバラモンのそばにつききりになった。（五）彼は諸国、種々の聖地、諸王の様々な行為、様々な都市について語った。（六）そこでバラモンは、物語の間に、パーンチャーラ国におけるヤジュニャセーナ（ドルパダ）の娘の驚嘆すべき婿選び式（スヴァヤンヴァラ）について語った。（七）そして、ドリシタデュムナとシカンディンの誕生を語った。また、クリシュナー（ドラウパディー）がドルパダの盛大な祭式において、母なくして生まれたことを語った。（八）人中の雄牛たちは、世間におけ

るこの上なく不思議な話を聞いて、その偉大なバラモンに、その物語を詳しく語ってくれるように頼んだ。（九）

「ドルパダの息子ドリシタデュムナは、どうして火から生まれたのですか。また、クリシュナーはどうして、奇蹟的にも、祭壇の中から生まれたのですか。（一〇）彼（ドルパダの息子）はどうして、偉大な戦士ドローナからすべての武器について学んだのですか。また、どうして親友だった二人（ドルパダとドローナ）は離反したのですか。（一一）」

人中の雄牛たちにこのようにうながされて、そのバラモンはドラウパディーの誕生についてすべてを語った。（一二）

（第百五十三章）

バラモンは語った。――

ガンガードゥヴァーラ（ガンジスが平地に入る場所。ハリドゥワール）に、バラドゥヴァージャという、偉大な聖仙がいた。彼は大なる苦行を積み、偉大な智者で、常に厳しく誓戒を守っていた。（一）ある日、聖仙は沐浴のためにガンガー（ガンジス）川に行き、先にそこに来て水浴を終えた天女のグリターチーを見た。（二）その時、風が吹き、川岸にいる彼女の衣を取り去った。聖仙は衣が脱げてしまった彼女を見て愛欲を抱いた。（三）聖仙は童貞であったので、彼女に愛着して興奮し、その精液がほとばしり出た。聖仙はそれを枡（ドローナ）の中に入れた。（四）それから、その聖者に、息子のドローナが生まれた。彼はヴェーダ聖典とその補助学をすべて学んだ。（五）バラドゥ

ヴァージャにはプリシャタ王という友人がいた。その頃、その王にもドルパダという息子が生まれた。(六)王族の雄牛であるドルパダは、いつも[illegible]棲所に行き、ドローナとともに遊び、学習をした。(七)やがて、プリシャタが死んだ時、ドルパダは王となった。

一方ドローナは、ラーマ（パラシュラーマ）が全財産を布施したいと望んでいることを聞いた。(八)そこで彼は、森へ発つラーマに告げた。

「バラモンの雄牛よ、私はドローナです。財物を求めてやって来ました。(九)」

ラーマは言った。

「今や私には、この身体が残るのみである。バラモンよ、私の武器か身体か、どちらかを選べ。(一〇)」

ドローナは答えた。

「あなたの武器をすべて下さい。その使用法と、それを撤回する方法も教えて下さい。(一一)」

バラモンは語った。——

「承知した」と言って、ブリグの末裔（パラシュラーマ）は彼に与えた。ドローナは受け取り、目的を成就した。(一二)彼はラーマから最も貴重な兵器ブラフマ・アストラを授かって大いに喜び、それ以来、人間のうちの最強者となった。(一三)それから、栄光に満ちた人中の虎ドローナは、ドルパダのもとに行って、「私は友人のドローナだ」と告げた。(一四)

ドルパダは言った。

「無学の者は博識者の友ではない。勇士でない者は勇士の友ではない。王にあらざるものは王の友ではない。旧友が何になるか。(一五)」

バラモンは語った。——

賢者ドローナは、パーンチャーラの王に対し復讐する決意をして、クルの王たちの都、象の都（ハースティナプラ）へ行った。(一六)彼がそこに到着すると、ビーシュマは、孫たちや種々の財宝を引き渡し、弟子として彼に託した。(一七)賢者ドローナは、ドルパダを懲らしめるために、すべての弟子たちを集めて告げた。(一八)

「師に対する謝礼として、いささか思うところがある。諸君が武術を修得したら、それを払ってくれ。欠点のない者たちよ、それを約束してくれ。(一九)」

やがて、すべてのパーンダヴァたちが武術を修得し、修練を完成した時、ドローナは再び謝礼に言及し、次のように言った。(二〇)

「チャットラヴァティー（アヒッチャットラー）に、プリシャタの息子で、ドルパダという名の王がいる。その王国を奪い、速やかに私に与えよ。(二一)」

そこで五人のパーンドゥの息子たちは、戦いにおいてドルパダを破り、彼とその大臣を捕えてドローナに会わせた。(二二)

ドローナは告げた。

「王よ、私は再びあなたとの友情を望む。王でない者は王の友になることはできないと言う。(二三) そこで、ヤジュニャセーナよ、私はあなたの王国を奪うため努力したのだ。あなたはガンガーの南岸の王となり、私は北岸の王となろう。(二四)」

パラモンは語った。——

この大なる侮辱は、一瞬たりともドルパダ王の心から離れなかった。彼は失望し痩せて行った。(二五)

(第百五十四章)

パラモンは語った。——

ドルパダ王は怨恨を抱きつつ、祭式に通達した優れたバラモンを探しながら、多くのバラモンの居住地を遍歴した。(一) 悲しさで心傷ついた彼は、息子の誕生を望んでいたのである。彼は、「私には優れた息子がいない」と常に考えていた。(二) 生まれた息子たちや親族たちに対しては、彼は失望して「ああ、これは駄目だ」と言った。そして彼は、ドローナに復讐したいと望み、ひどくため息をついてばかりいた。(三) しかし、その優れた王がいくら考えこんで努力しても、彼の王族としての力では、ドローナの実力、修練、学識、諸々の業績には対抗し得ないのであった。(四)

ある日、王はヤムナー川にも近いガンガー河畔をぶらついているうちに、神聖なバラモン居住地に到着した。(五) そこにはヴェーダ修得者でないバラモンは皆無で、誓戒を守らないバラモンも皆無であり、心豊かでないバラモンも皆無であった。そこでドルパダは、ヤージャとウパヤージャという、誓戒を厳守し寂静を楽しむ二人の梵仙(バラモンの聖仙)に出会った。二人はカーシャパの族姓(ゴートラ)に属し、「ヴェーダ」本集(サンヒター)の学習に専念していた。(六―七) この二人の最高の聖仙は、彼を救うにふさわしいバラモンであった。彼はありとあらゆる望みをかなえ、熱心に二人に懇願した。(八) 二人の力と知性を理解してから、彼は誓戒を厳守する年少のウパヤージャに密かに近づいた。諸々の望みをかなえて満足させて。(九) 彼はその足下にひれ伏し、気に入るように語り、すべての望みをかなえて、作法に従って敬意を表してから、ウパヤージャに言った。(一〇)

「バラモンよ、ドローナを亡き者にするための息子が生まれるような祭式がないだろうか。ウパヤージャよ、それが成就したら、一億頭の牛をさし上げます。(一一) あるいは、最高のバラモンよ、あなたの気に入るような他のものをすべてさし上げます。確かに約束いたします。(一二)」

そう言われて、聖仙は、「そのようなことはできない」と彼に答えた。そこでドルパダはなおも彼の御機嫌をとりながら彼に奉仕した。(一三)

それから一年が過ぎた時、最高のバラモンであるウパヤージャは、優しい声でドルパダに告げた。(一四)

「私の兄は、森の滝のあたりを歩いていて、清浄かどうかわからない場所に落ちていた果実

を拾いました。(二五) 私は兄の後について行ってその不適切な行為を見ました。彼は不純なものを取る時、決して熟慮しないのでしょう。(二六) 彼は見ても、果実に付随する諸々の欠陥を見ることはなかったのです。清浄かどうか識別しない人は、他の場合においてもどうして〔識別する〕でしょうか。(二七) 彼は師の家に住んで〔ヴェーダ〕本集(サンヒター)の学習をしていた時、いつも他人の残した食物を食べていました。恥じることもなく、何度もその食物を称讃しながら。(二八) 推察するに、あの兄は果報を望むと思います。王よ、彼のところへ行きなさい。彼はあなたのために祭祀を行なってくれるでしょう。(二九)」

一切の法(ダルマ)を知る王は、ウパヤージャの言葉を聞くと、内心ではヤージャのことを嫌っていたが、そのことをよく考えて、尊敬に値する聖仙ヤージャに敬意を表して言った。(二〇)

「主よ、あなたに八万頭の牛をさし上げます。私のために祭祀を行なって下さい。ドローナに対する怨みに燃えている私を喜ばせて下さい。(二一) 彼は最高のヴェーダ学者であり、ブラフマ・アストラ(梵天の武器)に通じた第一人者です。それ故、ドローナは友達同士の争いにおいて私をうち負かしました。(二二) 地上には、クル族の最上の師である賢者ドローナに匹敵するような優れた王族(クシャトリヤ)(武人)(チーシャヤス)はおりません。(二三)(二四から二七の最初の三行まで略) バラモンと王族とを比べたら、バラモンの威光が勝ります。(二七) そこで私は王族の力により敗れましたが、ドローナよりも優れた最高のヴェーダ学者であるあなたを得て、バラモンの威光を獲得しました。(二八) 私はドローナを殺せる、戦場で無敵の息子を得たいのです。それ故、ヤージャよ、祭式を行なって下さい。私は一億の牛をさし上げます。(二九)」

「ヤージャは承知した」と彼に答えて、祭祀のための準備をした。彼は「兄のためだ」と言って、気の進まないウパヤージャを説得して協力させた。このようにして、ヤージャはドローナを滅ぼすことを約束したのである。(三〇)

それから大苦行者ウパヤージャは、王に、息子を得るための祭式について語った。(三一)

「王よ、あなたが欲するように、勇猛で大威光あり強力な息子があなたにできるであろう。(三二)」

ドルパダ王はドローナを殺す息子を念じつつ、祭式が成就するように、すべてを捧げた。(三三) 祭祀の終わりに、ヤージャは王妃を呼んで告げた。

「王妃プリシャティー(プリシャタの嫁)よ、私の方に進みなさい。交わる時がまいりました。(三四)」

王妃は言った。

「バラモンよ、私の顔は香油を塗られ、私は清らかな香りがします。私は息子のために要請されました。ヤージャよ、私に好意をかけて下さい。(三五)」

ヤージャは言った。

「ヤージャが供物を調理し、ウパヤージャがそれを聖句で浄めたからには、どうして願望を成就しないだろうか。あなたは進み出ても、そこに立っていてもよい。(三六)」

バラモンは語った。——

ヤージャがそう言って浄められた供物を火に投じると、火中から神のような童子が立ち上

がった。（三七）彼は炎の色をし、恐ろしい姿をとり、冠をつけ、最上の甲冑をつけ、剣を持ち、弓矢を手にし、何度も雄叫びをあげた。（三八）彼はすばらしい戦車に乗って出発した。そこで、パーンチャーラの人々は喜んで、「万歳、万歳」と叫んだ。（三九）その時、「パーンチャーラ国の危険を除き、名声をもたらし、王の悲しみを除く王子が、ドローナを殺すために誕生したのだ」と、空を飛ぶ見えざる偉大な存在が告げた。（四〇）

そしてまた、パーンチャーラの王女が祭壇の中から立ち上がった。彼女は幸運にめぐまれ、見目麗しい身体をし、祭壇のような〔くびれた〕胴を持ち、魅力的であった。（四一）色浅黒く（美しい色とされる）、蓮弁のような眼をし、髪は黒くカールしていた。まるで女神が人間の姿をとって現われたかのようであった。（四二）その香りは青蓮のようで、遠方まで広がった。最高の容色を持つ彼女に適(かな)う女は地上にはいなかった。（四三）その美しい尻の女が生まれた時、姿のない声が彼女について告げた。

「すべての女性のうちで最上の黒色の女(クリシュナー)は、王族(クシャトリヤ)を滅亡させるであろう。（四四）この美しい胴の女は、やがて神々の目的を果たすであろう。彼女のために、王族たちの大なる危険が生ずるであろう。（四五）」

それを聞くと、すべてのパーンチャーラの人々は、獅子の群のように叫び声をあげた。大地は大喜びをしている彼らを支えることができないほどであった。（四六）

子供を求めるプリシャティー（ドルパダの妻）は二人を見て、ヤージャに近づいて頼んだ。

「この二人が私以外の母を知ることがありませんように。（四七）」

ヤージャは王によかれと思い、「承知しました」と彼女に答えた。満足したバラモンたちは、二人に名前をつけた。（四八）

「このドルパダの息子は大胆(ドリシタ)であり非常に果敢であるから、正義であり、光輝(デュト)から生まれたから、ドリシタデュムナと名づけよう。（四九）」

また、女の子は、黒い色をしていたので、クリシュナーと名づけられた。

かくて、その盛大な祭祀において、ドルパダに双子が生まれた。（五〇）栄光あるドローナは、パーンチャーラの王子ドリシタデュムナを自分の住居に連れて行き、武術を指南した。（五一）聡明なドローナは、将来の運命が避けられないものであると考え、むしろ自己の名声を大切にして、そのようにしたのであった。（五二）

（第百五十五章）

ガンダルヴァとの戦いと友情

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それを聞くと勇士パーンダヴァ兄弟は、槍で貫かれたかのようになり、みな不安な気持になった。（一）クンティーは息子たちが迷い放心しているのを見て、真実を語る彼女はユディシティラに言った。（二）

「ユディシティラよ、私たちはこのバラモンの家に長い間滞在し、美しい都で施物を受けながら楽しんで来ました。（三）私たちはここで、ありとあらゆる美しい森や園林を繰り返し見

ました。(四)もうそれらを見ても、前ほど楽しくなくなりました。また、施食もそれほど受けなくなりました。(五)そこで、もし異存がなければ、私たちはパーンチャーラに行った方がよいと思います。息子よ、初めてのものを見ることは楽しいことでしょう。(六)パーンチャーラ人はよく布施をしてくれるということです。また、あのヤジュニャセーナ(ドルパダ)王は敬虔な人だと聞いています。(七)一カ所に長く住むことはよくないと私は思います。そこでわが子よ、もし異存がなければそこへ行きましょう。(八)」

ユディシティラは答えた。

「あなたのお考えは我々にとっても非常に有益で、実行すべきです。しかし、弟たちが行きたがるかどうかわかりません。(九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クンティーがビーマセーナとアルジュナと双子(ナクラとサハデーヴァ)に出発のことを告げたところ、彼らも「そうしましょう」と答えた。(一〇)そこでクンティーは、息子たちとともに、バラモンに別れを告げ、偉大なドルパダの美しい都に向けて出発した。(一一)　(第百五十六章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

偉大なパーンダヴァたちがそこに潜伏していた時、サティヤヴァティーの息子ヴィヤーサ

が彼らに会いに来た。(一)彼が来たのを見ると、勇士たちは出迎え、ひれ伏して挨拶し、合掌して立ち上がった。(二)聖者はパーンダヴァ兄弟に敬意を表されて満足し、みなに返礼して、座った彼らに優しく言った。(三)

「勇士たちよ、法(ダルマ)と教典に従って生活しているか。尊敬すべきバラモンに対し尊敬を欠くことはないか。(四)」

それから、尊い聖仙は、法と実利(アルタ)に関する言葉を述べてから、様々な会話を交して、更に次のように語った。(五)

「かつて、苦行林にある偉大な聖仙の娘が住んでいた。彼女は細い胴と美しい尻を持ち、眉麗わしく、すべての美点をそなえていた。(六)しかしその娘は、自分のなした業(ごう)(前生の行為の余力)により不幸であり、美しいのに夫を見出せなかった。(七)そこで不幸な女は、夫を得るために苦行を始めた。そして激しい苦行により、シャンカラ(シヴァ神)を満足させたという。(八)彼女に満足した神は、その苦行する女に告げた。

『娘よ、願いごとをかなえてあげる。願いを選ぶがよい。(九)』

そこで彼女は、自分のためになる言葉を繰り返して神に言った。

『すべての美質をそなえた夫を望みます。(一〇)』

すると語るものの最上者である主シャンカラは彼女に告げた。

『娘よ、お前に五人の夫ができるであろう。(一一)』

彼女は、『一人の夫を下さい』とシャンカラに答えた。すると神は再び、次のような至高

の言葉を述べた。（一一）

『お前は夫を下さいと五回言った。お前が他の体をとった時、お前が言ったように実現するであろう。（一三）』

その娘は、神のように美しく非の打ち所のないクリシュナー（ドラウパディー）として、ドルパダの家に生まれた。彼女はお前たちの妻になるべく定められているのだ。（一四）勇士らよ、それ故パーンチャーラ国の都に入れ。彼女を得れば、お前たちが幸せになることは疑いない。（一五）」

パーンダヴァたちの偉大なる祖父、大苦行者は、彼らとクンティーにこのように告げると、別れを告げて立ち去った。（一六）

（第百五十七章）

敵を苦しめる人中の雄牛たちは、母に従い、指示された北方へ向かう平坦な道をとって進んだ。（一）虎のようなパーンドゥの息子たちは、昼夜歩いて行くうちに、ガンガー（ガンジス）河畔の聖地ソーマシュラヴァーヤナに達した。（二）誉れ高いアルジュナは、道を照らすため、また警固のため、松明を持って彼らの先頭を進んだ。（三）

その時、その人気のない清らかなガンガーの流れに、妻たちと水遊びをするために、短気なガンダルヴァ（半神の一種）の王が来ていた。（四）彼は、川に近づいて来るパーンダヴァたちのたてる音を聞いた。非常に強力な彼は、その音を気にしていらだった。（五）彼はそこに母と一

緒のパーンダヴァの勇士たちを見出し、恐ろしい弓弦を引いて言った。（六）（七―一一略）

「俺は腕におぼえがあるガンダルヴァのアンガーラパルナだぞ。俺は誇り高く、気が短く、クベーラ（毘沙門天）の親友である。（一二）これはアンガーラパルナ（の森）と呼ばれる俺の森なのだ。俺の住む森は、ガンガー河畔の美しい森である。（一三）角のある動物であろうと、神であろうと人間であろうと、生きものはここに近づかない。それなのに、どうしてお前たちは近づいたのか。（一四）」

アルジュナは言った。

「愚か者め、海やヒマーラヤやこの川に、夜であろうと昼であろうと、朝夕であろうと、誰が近づくことを禁じられるか。（一五）（一六―一九略）我々を天界に導くこの清らかな神の川（ガンガー）に近づくことは禁止できない。何故お前はその川に近づくことを禁ずるのか。そんな決まりはない。（二〇）どうして我々が、お前の言葉により、立入りを禁止されるべきでないこの聖なるガンガーの水に、自由に触れないであろうか。（二一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

アンガーラパルナはそれを聞いて怒り、弓を引きしぼると、毒蛇のような燃える矢を放った。（二二）しかしアルジュナは、速やかに松明と最上の楯を振りまわして、すべての矢をたたき落とした。（二三）

アルジュナは言った。

「ガンダルヴァよ、そのようなおどしは、武術に通じた者には通用しないぞ。もし武術に通じた者に用いても、泡のように消えてしまう。(二四)ガンダルヴァよ、およそガンダルヴァというものは人間よりも勝ると認めるから、私は〔通常の武器の〕技術によらず、神的な武器で戦うであろう。(二五)ガンダルヴァよ、かってインドラの師の息子ブリハスパティが、このアーグネーヤ（「火神の」という意味）という武器を、バラドゥヴァージャに授けたという。(二六)それはバラドゥヴァージャからアグニヴェーシャに、アグニヴェーシャから私の師ドローナに伝えられた。そして今、その最高のバラモンであるドローナが、それを私に伝授したのである。(二七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そう言って、怒ったアルジュナは燃える武器アーグネーヤをガンダルヴァに向けて放った。それは彼の戦車を焼いた。(二八)強力なガンダルヴァは戦車を失い、よろめき、武器の光輝によって失神し、頭を下にして落下した。(二九)アルジュナは彼の花輪をつけた頭髪をつかんで、武器の衝撃で失神している彼を、兄弟たちの方へ引きずって行った。(三〇)すると、クンピーナシーという名前の彼の妻が、夫を救おうとして、ユディシティラに庇護を求めた。(三一)

ガンダルヴァ女は言った。

「大王さま、私を救って下さい。私の夫を解放して下さい。主よ、私はクンピーナシーという名のガンダルヴァ女です。お慈悲です。どうか救って下さい。(三二)」

ユディシティラは言った。

「彼は戦いに敗れ、名誉を失い、勇気を失い、妻に依存している。お前のような者がどうして、そのような敵を殺すであろうか。敵を成敗する者よ、彼を解放してやれ。(三三)」

アルジュナは答えた。

「よろしい。彼を受け取りなさい。ガンダルヴァよ、行きなさい。嘆くな。今、クルの王ユディシティラがあなたの安全を保証する。(三四)」

ガンダルヴァは言った。

「降参いたしました。私は以前の名を捨て、アンガーラパルナであることをやめます。もはや、力によっても名前によっても、人々の集まりにおいて自慢することはいたしません。(三五)私がガンダルヴァの術によって、神的な武器を持つ最高の若人と戦おうと望んだことは、私にとって非常なもうけものでした。(三六)私の最高の極彩色の戦車は、武器の火により焼かれ、そこで私はチトララタ（「彩色の戦車を有する」という意）からダグダラタ（「その戦車が燃やされた」という意）という名になりました。(三七)私はかつて苦行によりこの術を得ました。今日、私はそれを生命の恩人である偉大な方にさし上げます。(三八)敵を力により気絶させ、屈服させ、彼が庇護を求めて来た時、その生命を助けてやるような人は、どのようなすばらしいものにも値します。(三九)これはチャクシュシー（「天眼通」のようなもの）という術で、マヌがソーマ（幻覚作用のある植物の汁を神格化したもの）に与えたものです。ソーマがヴィシュヴァーヴァスに、ヴィシュヴァーヴァスが私に伝授しました。

(四〇) この師伝の術は、臆病者に伝えられると消滅します。私はこの術の由来をお話ししました。次はその力をお聞き下さい。(四一) 三界(さんがい)にある何かを眼で見ようと望めば、それを見ることができます。欲するがままのあり方で見ることができるのです。(四二) 六カ月の間、同じ一本の足で立っていれば、この術を得ることができます。その誓戒が実行されたら、私は自らその術をあなたに伝えましょう。(四三) 王よ、この術のおかげで我々は人間よりも優れているのです。そして、我々は神通力のおかげで神々に等しいのです。(四四) 最高の人よ、あなた方五人の兄弟に、それぞれ、ガンダルヴァ族の世界に生まれた馬を百頭ずつさし上げます。(四五) それら神々とガンダルヴァに属する馬は、神々しい香りを持ち、思考のように速く、いくら疲れてもその速度は落ちません。(四六) かつて大インドラがヴリトラを退治するために金剛杵(ヴァジュラ)が作られました。それはヴリトラの頭で、十に、百に砕けました。(四七) それから、神々はヴァジュラの部分を分配し崇めました。この世において何かことを成就するものは、金剛杵の体現とされております。(四八) バラモンは金剛杵を執(と)るものであり、王族(クシャトラ)は金剛杵を戦車とし、実業者(ヴァイシャ)は布施という金剛杵を持ち、それよりも低い者たちは労働を金剛杵とするとされております。(四九) 王族の金剛杵は駿馬です。■ 駿馬は殺されるべきではないとされます。ヴァダヴァー（馬たちの母）は戦車の一部〔たる馬〕を生んだ。それ故、馬たち〔の御者は〕スータと呼ばれる。(五〇) ガンダルヴァの世界に生まれた馬は、欲するがままの色と速度をとり、望んだ時にそばに来て、願望をかなえるでしょう。(五一)」

アルジュナは言った。

「ガンダルヴァよ、喜んで与えるにせよ、生命が危ういので与えるにせよ、私は術と財物と学識を〔無償で〕もらいたくはない。(五二)」

ガンダルヴァは答えた。

「交戦における（異本「偉大な人との」）結びつきは、喜びをもたらすものです。私は生命を与えていただいて喜び、あなたに術を伝授します。(五三) 私はあなたから、最高の武器アーグネーヤをいただきます。勇猛なバラタの雄牛よ、そうすれば友情は長く続くことでしょう。(五四)」

アルジュナは答えた。

「その武器と交換に、あなたから馬をいただこう。我々の結びつきが永遠であらんことを。友よ、ガンダルヴァよ、あなた方からの危険を取り除く方法を教えてくれ。(五五)」

（第百五十八章）／（第百五十九章略）

タパティー物語

〔ガンダルヴァはアルジュナにターパティヤと呼びかける。アルジュナはその由来をたずねる（一―二略）〕

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そのようにたずねられたガンダルヴァは、クンティー（プリター）の息子アルジュナに、三界において有名な物語を語った。（三）

ガンダルヴァは語った。――

おお、プリターの息子よ、法（ダルマ）を守る人々の最上者よ、魅力的で敬虔なこの物語を、ありのまま、すべてあなたに語るであろう。（四）あなたをターパティヤと呼んだわけを語るであろう。よく注意して私の話を聞きなさい。（五）その光輝で蒼穹を遍満する日輪に、タパティーという類い稀なる娘がいた。（六）サーヴィトリーの妹であるこの太陽神の娘タパティーは、熱力（タパス）をそなえ、三界において名声を馳せた。（七）女神も阿修羅（アスラ）の女も夜叉女も羅刹女も天女もガンダルヴァの女も、誰も彼女ほどの容色をそなえていなかった。（八）この美しく輝く女は、均整のとれた欠点のない身体で、黒い切れ長の眼をしていた。行儀作法に優れ、善良で、すばらしい衣裳をつけていた。（九）太陽神は、容色と徳性と家柄と知識の点で彼女に似合いの夫は三界に存在しないと考えた。（一〇）

その娘が年ごろになり、嫁にやるべきであると思い、彼は誰に与えようか考えこんで、心の平和を得ることはなかった。（一一）

その頃、リクシャの息子、クル族の雄牛サンヴァラナ王は、常に太陽を崇拝していた。（一二）パウラヴァ家の王は、いつも供物と花輪を供え、誓戒と断食と種々の苦行により、従順で謙虚で清らかに、献身的に昇る太陽を崇拝した。（一三―一四）そこで太陽神は、恩を知り法（ダルマ）を知り、容色の点で地上に並びなきサンヴァラナを、タパティーに似合いの夫であると思った。（一五）そして彼は、誉れ高い家系に生まれた最高の王サンヴァラナに娘を与えたいと望んだ。（一六）ちょうど太陽が、天空において、その光輝により照らすように、サンヴァラナ王は、地上において、その威光により〔諸方を〕照らしていた。（一七）そして、ヴェーダを唱える人々が昇る太陽を崇めるように、バラモン以下の人々はサンヴァラナを崇めていた。（一八）その王は優しさにかけて月を、威光にかけて太陽をしのぎ、親しい人々の間でも、憎む人々の間でも、栄光に満ちていた。（一九）太陽は、このような美質をそなえ正しく行動する彼に、タパティーを与えることを、自ら決意した。（二〇）

ある時、この地上において誉れ高い栄光に満ちた王は、山中の森林に狩に出かけたという。

〔二一〕王が狩をしているうちに、彼の無比の馬は、飢えと渇きのため、山の中で死んでしまった。〔二二〕馬が死んだので、王は徒歩で山中を歩きまわっているうちに、世に類い稀なる切れ長の眼をした少女を見出した。〔二三〕彼も一人、彼女も一人であった。敵を滅ぼす王中の虎は、その娘に近づいて、脇目もふらずに凝視していた。〔二四〕王は、その美貌の故に、吉祥天(シュリー)ではないかと思ったり、地上に堕ちた太陽の光輝ではないかと思ったりした。〔二五〕その黒い瞳の娘が立っている高原は、樹々や茂みや蔓草もろとも、金色に染まっていた。〔二六〕王は彼女を見て、すべての生物の体を軽蔑し、己(おの)が眼の果報を得たと思った。〔二七〕生まれて以来、王は色々なものを見て来たが、彼女に匹敵する姿を何一つとして思い浮べることはできなかった。〔二八〕彼女の美質よりなる[illegible]にその心と眼を縛られ、彼はその場から動くことができず、何も他のことを認識できなかった。〔二九〕きっと創造者は、神と阿修羅(アスラ)と人間たちをかきまぜて、この眼の大きい娘の容姿を作り出したのであろう。〔三〇〕完全な美しさをそなえ、世に類い稀なる娘について、サンヴァラナ王はそのように推量した。〔三一〕

高貴な生まれの王は、その美しい娘を見るやいなや、愛神(カーマ)の矢に苦しみ、もの思いにふけった。〔三二〕王は激しい愛の火に焼かれながらも、勇気を出して、あどけないその美女に語りかけた。〔三三〕

「バナナの幹のような腿の女よ、あなたは誰か。誰に属するか。何のためにここに居るのか。美しい微笑の女よ、どうして一人で、人気(ひとけ)のない森を歩いているのか。〔三四〕まことにあなたは、全身非の打ち所がなく、あらゆる装身具に飾られ、それらの装身具によってさえ切望される飾りのようである。〔三五〕女神でも阿修羅女でも夜叉女でも羅刹女でも、竜女でもガンダルヴァの女でも人間の女でもないと思われる。〔三六〕魅惑的な女よ、私は美女について見聞きしたが、[illegible]それらのうちで、あなたに匹敵する女を見たことも聞いたこともない。〔三七〕」

人のいない森で、王は彼女にそう告げたが、彼女の方は、愛に悩む王に対して何も答えなかった。〔三八〕そして、王がなおも語りかけているうちに、切れ長の眼の女は、雲間の稲光のように、その場で消え失せた。〔三九〕王は狂気のようにその蓮弁の眼の女を捜し求めて、森を隈なくさまよった。〔四〇〕しかしその女を見つけることができず、[illegible]クル族の王はひどく嘆き、しばし動かずに立ち尽くしていた。〔四一〕

(第百六十章)

ガンダルヴァは語った。——

彼女が消え失せた時、王は愛欲に迷い、敵の群を倒す者でありながら、〔自ら〕大地に倒れた。〔一〕王が地面に倒れた時、美しい微笑の、大きな尻の女は、再び王の前に現われた。〔二〕そして、その美しい女は、甘美な声で、愛に悩むクル族の王に告げた。〔三〕

「どうか立ち上って下さい。敵を制する人よ、王中の虎よ、地上において有名なあなたが取り乱してはなりませぬ。〔四〕」

甘美な声でそのように言われた王は、眼の前に立っている大きい尻の女を見た。(五) 愛の火におおわれた心をして、王は黒い眼の女に口籠りながら言った。(六)
「黒い眼の魅惑的な女よ、あなたを愛し、愛に苦しむ私をどうか愛してくれ。私は死んでしまいそうだ。(七) 大きな眼の女よ、蓮花の内部のように輝く女よ、あなたのために、愛神(カーマ)は鋭い矢で私を貫くことをやめようとしないのだ。(八) 身寄りのない美しい女よ、私はこのように愛の大蛇に咬まれた。大きな尻の美しい顔の女よ、そんな私を救ってくれ。(九)
(一〇—一二略) 可愛い女よ、ガーンダルヴァ婚(自由恋愛による結婚)により私のもとに来なさい。バナナの幹のような腿をした女よ、結婚のうちでガーンダルヴァ婚は最上と言われるから。(一三)」
タパティーは答えた。
「王様、私の一存では決められません。私には父がおります。もし私のことがお気に召したら、父に頼んで下さい。(一四) 王様、あなたの心が私に奪われたように、お会いした瞬間、あなたは私の心を奪ったのです。(一五) でも、私の一存で身のふりかたを決められませんから、最高の王よ、おそばには参れません。女というものは自由ではないのです。(一六) 全世界に名高い家柄の王を、慕う者に優しい方を、夫と望まぬ女がおりましょうか。(一七) このようなわけですから、適当な折に、父の太陽に頼んで下さい。平伏し、苦行し、誓戒を保つことにより。(一八) 勇猛な王様、もし父が私をあなたに与えることを望んだら、私は永遠にあなたのものになるでしょう。(一九) 王族の雄牛よ、私はタパティーという名で、サーヴィトリーの妹です。世界の灯明であるあの太陽神(サヴィトリ)の娘です。(二〇)」
(第百六十一章)

ガンダルヴァは語った。——
非の打ち所のない女は、そう言い終わると、速やかに上天へ去った。王の方は、再びその場に倒れた。(一) 時が来て、そびえ立つインドラの旗が倒れるように、地上に倒れた王を、深い森の中で、大臣や随行の人々が発見した。(二) 大臣は、馬をなくして地面に倒れている王を見て、火に焼かれたかのようになった。(三) 彼は急いで近づいて、愛情の故に取り乱して、愛に迷う王を地面から起き上がらせた。(四) 父親が息子を起き上がらせるように。この大臣は、年齢の点で長老であるばかりでなく、叡知の点でも名声の点でも自制の点でも長じていた。彼は王を起き上がらせて、ほっとした気分になり、気持よく優しい声で、起き上がった王に言った。
「人中の虎よ、恐れることはありません。非の打ち所のない方よ、あなた様に幸あらんことを。(五—六)」
彼は、勇猛な王が飢えと渇きのために消耗して大地に倒れたのであると考えた。(七) 彼は蓮花で芳わしい、非常に冷い水を王の頭にふり注いだ。ただし、王の宝冠にはかからないようにして。(八) それから、強力な王は意識を取りもどすと、大臣だけを残して全軍を引き返させた。(九)
王の命令により大軍が去った時、王は再び山の台地に座した。(一〇) それからその大山に

おいて、身を浄め合掌して、太陽神を満足させるために、腕を上方に上げて大地に立ち続けた。（一一）勇猛なサンヴァラナ王は、その時、彼の宮廷僧である最高の聖仙ヴァシシタのことを念想した。（一二）夜も昼も王が同じ場所に立っていた時、第十二日目に、その梵仙（バラモンの聖仙）がやって来た。（一三）その徳性ある聖なる大仙は、神通により、王がタパティーに魅了されたことを知り、王のためを思い、自己を制御した最高の王に語りかけた。（一四―一五）王が見ているうちに、太陽のように輝くその聖仙は、太陽神と会うために上方に昇って行った。（一六）それからバラモンは合掌して太陽に近づき、「私はヴァシシタです」と快活に自己紹介をした。（一七）威光に満ちた太陽神は、その最高の聖者に言った。

「大仙よ、ようこそ。願いの向きを言いなさい。（一八）」

（第百六十二章）

ヴァシシタは言った。

「太陽の神よ、あなたの娘、サーヴィトリーの妹であるタパティーを、サンヴァラナ王のためにいただきたい。（一）かの王は誉れ高く、法（ダルマ）と実利（アルタ）を知り、高い叡知を有する。太陽よ、サンヴァラナはあなたの娘の夫にふさわしい。（二）」

ガンダルヴァは語った。――

バラモンがそう告げると、太陽は与える決意をしていたので、喜んで受け入れて、彼に答

えた。（三）

「サンヴァラナは王のうちの最上者である。聖者よ、汝は聖仙のうちの最上者である。タパティーは女性のうちの最上者である。嫁にやるのは当然である。（四）」

そして太陽は自ら、全身非の打ち所のないタパティーを、サンヴァラナのために、偉大なヴァシシタに引き渡した。かくて大仙は、少女タパティーを受け取った。（五）それからヴァシシタは辞去し、誉れ高いクル族の雄牛のいる場所にもどって来た。（六）

タパティーに心を奪われ、愛にとりつかれていた王は、その美しい微笑の神の娘がヴァシシタとともに訪れたのを見て、喜びのあまりこの上なく明るくなった。（七）心の浄い聖仙ヴァシシタは、王の十二日の苦行が終了した時にやって来たのだった。（八）かくてサンヴァラナは、ヴァシシタの威光のおかげで、恵み深い太陽の神を苦行により満足させて妻を獲得した。（九）（一〇―二一略）

アルジュナよ、このようにして幸ある太陽の娘タパティーは、あなた方の祖先となり、あなた方は彼女にちなんでタパティヤ（タパティーの子孫）と呼ばれるのである。（二二）すなわち、アルジュナよ、サンヴァラナ王はタパティーにクルを生ませ、あなたはタパティヤとなったのである。（二三）

（第百六十三章）

バラモンと王族の争い

（アルジュナはガンダルヴァに、ヴァシシタについてたずねる。ガンダルヴァは、ヴァシシタとヴィシュヴァーミトラの不和について言及する（第百六十四章略））

アルジュナはたずねた。

「清浄なる森に住むヴィシュヴァーミトラとヴァシシタの間に、どのような理由で不和が生じたのか。一部始終を話して下さい。（一）」

ガンダルヴァは語った。――

このヴァシシタ物語、全世界において古伝説（プラーナ）と見なされるものを、アルジュナよ、私からありのままに聞きなさい。（二）

カニヤクブジャ（カナウジ市）に、ガーディという、世に知られた、真実（サティヤ）と法（ダルマ）に専念する偉大な王がいた。（三）その徳性ある王に、豊富な軍隊と乗物にめぐまれ、敵を粉砕する、ヴィシュヴァーミトラという息子がいた。（四）彼は狩をするため、大臣を連れ、深い森林や砂漠で、

鹿や猪を射つつさすらった。（五）

ある時、彼は鹿を求めているうちに疲労し、喉が渇き、ヴァシシタの隠棲所を訪れた。（六）最高の聖仙ヴァシシタは、ヴィシュヴァーミトラ王が訪れたのを見て、尊敬をこめて接待した。（七）彼は足を洗う水と接客用の品と口をゆすぐ水と、歓迎の言葉と、森でとれる供物によって接待した。（八）その偉大なヴァシシタは、望みをかなえる牝牛を所有していた。その牝牛は、諸々の願望をかなえてくれと言われると、どのような望みでもそれをかなえるのであった。（九）（一〇―一一略）

そのすべての望みをかなえられ、接待された王は、大臣や兵たちとともに、この上なく満足した。（一二）（一三―一四略）ヴィシュヴァーミトラは、ヴァシシタの乳牛ナンディー（または、ナンディニー）を称讃し、非常に満足して聖者に告げた。（一五）

「バラモンよ、一億頭の牛と交換で、あるいは王国と交換で、ナンディニーを譲って下さい。偉大な聖者よ、王国を享受しなさい。（一六）」

ヴァシシタは答えた。

「この乳牛ナンディニーは、神と賓客と祖霊のため、祭祀用の乳酪（アージャ）のためのものです。王国と交換してもお譲りできません。（一七）」

ヴィシュヴァーミトラは言った。

「私は王族（クシャトリヤ）だ。あなたは、苦行とヴェーダ学習を拠り所とするバラモンだ。寂静にひたり自己を制御したバラモンに、どうして力があるか。（一八）もし一億の牛と引き換えに私の望

みをかなえないなら、私は自己の法（ダルマ）に訴えるであろう。力ずくであなたの牝牛を連れて行くぞ。（一九）」

ヴァシシタは言った。

「あなたは強力な王で、腕に覚えのある王族である。望みのように速やかにやりなさい。ためらうことはない。（二〇）」

ガンダルヴァは語った。――

そのように言われて、ヴィシュヴァーミトラは、鵞鳥（ハンサ）や月のように〔白く輝く〕牝牛ナンディニーを力ずくで奪った。（二一）するとヴァシシタの美しい牝牛ナンディニーは、鞭や棒で打たれかりたてられながら、鳴き始めた。（二二）彼女は引き返し、聖者の方を向いて立ち、ひどく打たれても、その隠棲所を離れようとしなかった。（二三）

ヴァシシタは言った。

「可愛い牛よ、私はお前の嘆き声を何度も聞いた。ナンディーよ、お前は力ずくで奪われる。私は忍耐強いバラモンだから。（二四）」

ガンダルヴァは語った。――

しかしナンディーは、兵たちの力を恐れ、ヴィシュヴァーミトラを恐れつつも、ヴァシシタに近づいた。（二五）

牝牛は言った。

「聖者よ、恐ろしいヴィシュヴァーミトラの兵に、石や棒で打たれ、私が寄る辺のないもののように泣いているのに、あなたはどうして私を見捨てるのですか。（二六）」

ガンダルヴァは語った。――

このように牝牛が迫害されても、誓戒を守る偉大な聖者は動揺せず、平静さを失うこともなかった。（二七）

ヴァシシタは告げた。

「王族（クシャトリヤ）の力は威光（テージャス）である。バラモンの力は忍耐である。忍耐が私につきまとう。それ故、もし望むなら行くがよい。（二八）」

牝牛は言った。

「聖者よ、そのように言われるとは、私を捨てるのですか。もしあなたが私を捨てなければ、バラモンよ、力ずくで私を連れて行くことはできません。（二九）」

ヴァシシタは告げた。

「私はお前を捨てはしない。可愛い牛よ、もしできるならとどまるがよい。彼らはお前の仔牛を丈夫な縄で縛って、力ずくで連れて行く。（三〇）」

ガンダルヴァは語った。――

「とどまるがよい」という言葉を聞くと、ヴァシシタの乳牛は、頭と首を上方に曲げ、恐ろしい形相を現じた。(三一) 牝牛は怒りで赤い眼をし、雷雲のような鳴き声を上げ、ヴィシュヴァーミトラの軍勢を蹴散らした。(三二) 鞭や棒で打たれ、あちこち追い立てられ、牝牛は怒りで眼をぎらぎらさせ、更に哮り立った。(三三) 彼女は怒りに燃える体をして、真昼の太陽のように輝いた。尾からおびただしい燠火の雨を幾度も発しながら。(三四) 彼女は怒り狂い、その尾からパフラヴァ族を、糞からシャバラ族とシャカ族を、尿からヤヴァナ族を放出した。(三五) そして、その〔口から出す〕泡から、プンドラ族、キラータ族、ドラミダ族、シンハラ族、バルバラ族、ダラダ族、ムレーッチャ族を放出した。(三六) それら創り出された種々の蛮族の群は、様々な甲冑を身につけ、様々な武器を持ち、激昂して、ヴィシュヴァーミトラが見ている前で、その大軍を蹴散らした。(三七) ヴィシュヴァーミトラの軍は、一人につき五人から七人によって囲まれ、おびただしい飛び道具の雨によって追い立てられ、彼の眼の前で、恐怖にかられ、全滅した。(三八) しかし、ヴィシュヴァーミトラの兵たちは誰も、怒ったヴァシシタの軍によって生命を奪われなかった。(三九) ヴィシュヴァーミトラの軍勢は三由旬(ヨージャナ)ほど追い立てられ、恐怖にかられて叫んだが、誰も助けてくれる者を見出せなかった。(四〇)

バラモンの威光から生じた、この大なる奇蹟を見て、ヴィシュヴァーミトラは、王族(クシャトラ)であることに失望して、次のように言った。(四一)

「王族の力など空(むな)しい。バラモンの威光こそ真の力だ。力の強弱を判定するに、苦行(タパス)（熱力）

こそが最高の力である。(四二)」

彼は繁栄した王国を捨て、輝かしい王の富貴を捨て、諸々の享楽を後にして、苦行のみに専心した。(四三) 彼は苦行により成就に達し、その威光により世界を遍満して、燃え上る精神力を持ち、すべてを熱して、バラモンの位に達した。そしてカウシカ（「クシカの息子」。ヴィシュヴァーミトラのこと）は〔天界に達して、〕搾られたソーマ酒をインドラとともに飲んだのである。(四四)

（第百六十五章）

ガンダルヴァは語った。——

この世界に、イクシュヴァーク（甘蔗王）の家系に生まれた、カルマーシャパーダという、その威光にかけて地上に並ぶものなき王がいた。(一) ある時、この勇猛な王は狩のために都を出て、鹿や猪を射ながら森をさまよっていた。(二) この戦いにおいて無敵の王は、渇きと飢えに苦しんでいたが、一人しか通れないような狭い道で、こちらに向かって来る一人の聖者と出会った。彼はシャクティという栄光に満ちた聖仙で、偉大なるヴァシシタの百人の息子のうちの長子であった。(三―四) 王は、「わが輩の進路から退け」と告げた。聖仙は穏やかな言葉で、彼をなだめながら語りかけた。(五) しかし聖仙は、法的にはバラモンが優先すると考えて、道を譲らなかった。王の方も、自尊心と怒りにより、聖者に道を譲らなかった。(六) 王は迷妄に陥り、道を譲らないその聖者を、羅刹のように鞭で打った。(七) ヴァシシタの

息子である最高の聖者は、鞭で打たれて怒りにかられ、王を呪った。(八)
「最低の王よ、お前は羅刹のように苦行者を打ったから、今日以来、お前は食人鬼になるであろう。(九) 人間の肉を食って地上をさまようだろう。最低の王よ、行ってしまえ。」
気力旺盛なシャクティは、王にこのように告げた。(一〇)
その頃、ヴィシュヴァーミトラとヴァシシタは、どちらが王を祭主（後援者、弟子）とするかが原因で対立していた。そして、ヴィシュヴァーミトラが王につき従っていた。(一一) 先に述べたように、二人が言い争いをしていた時、厳しい苦行を積み、威光にあふれた聖仙ヴィシュヴァーミトラは、そのそばに近づいて行った。(一二) 最高の王（仙）は、背後から見て、その聖仙が威光にかけてヴァシシタに等しい、聖仙ヴァシシタの息子であると気づいた。(一三) そこでヴィシュヴァーミトラは身を隠し、自分に有利になるようにことを運ぼうと望んで、二人に近づいた。(一四) シャクティに呪われた王は、シャクティに敬意を払い、なだめようとして彼に庇護を求めた。(一五) ヴィシュヴァーミトラは王の気持を知り（機嫌を取るために有利な条件を出すのではないかと恐れて）、そこである羅刹に、王に（入り込め）と命じた。(一六) その羅刹はキンカラという名であったが、梵仙（シャクティ）の呪詛により、またヴィシュヴァーミトラの命令により、王にのりうつった。(一七) 王が羅刹にとりつかれたのを知り、聖者ヴィシュヴァーミトラはその場から去った。(一八)
それから、その聡明な王は、自己の内にいる羅刹にひどく苦しみつつも、自制して自己を保っていた。(一九) ところが、あるバラモンが外出した王を見かけて、空腹であったので彼に肉の入った食物を求めた。(二〇) そこで王仙ミトラサハ（カルマーシャパーダのこと）は、機嫌を取りながらそのバラモンに答えた。
「バラモンよ、あなたはこの場所に少しの間待っていて下さい。(二一) ここにもどり、望み通りの食物をさし上げます。」
王はそう言って引き上げ、バラモンはそこで待っていた。(二二) しかし、王はそのバラモンとの約束を忘れてしまった。王は後宮に入りくつろいだ。(二三) それから王はバラモンとの約束を思い出して、夜中に起き上がり、急いで料理人を呼んで言った。(二四)
「行け。これこれの場所でバラモンが食物を求めて私を待っている。お前は彼に肉入りの食物を運べ。(二五)」
料理人はどこにも肉を見つけられなくて、途方に暮れて王にそのことを告げた。(二六) しかし羅刹にのりうつられた王は、こともなげに料理人に何度も命じた。
「彼に人間の肉を食べさせろ。(二七)」
そこで料理人は、「かしこまりました」と言って、死刑執行人の部局に行き、恐れることなく、急いで人肉を取って来た。(二八) 彼は料理法に従って、すぐにそれを調理し、米飯と混ぜ、飢えたバラモンの苦行者に与えた。(二九) その最高のバラモンは、超人的な眼でその食物を見て、怒りで眼をつり上げて、「こんなものは食べられない」と言った。(三〇)
「あの王は私に食べられない食物を与えたから、その愚か者は同じ食物（人肉）を貪るようになろう。(三一) 前にシャクティに言われたように、人間の肉を貪り、生類に恐れられて、地

上をさまようであろう。(三二)」
王にかけられた呪いは、二度繰り返され、強力なものとなった。彼は羅刹の力にとりつかれて正気を失った。(三三) その後、羅刹により正気を失ったその最高の王は、ほどなくして、シャクティを見かけて言った。(三四)
「お前は私にこの異常な呪詛をかけたから、まずお前から人間を食べ始めるぞ。(三五)」
そう言って、彼はすぐさまシャクティの生命を奪って、虎が好みの獣を食べるように、彼を食べてしまった。(三六)
ヴィシュヴァーミトラは、シャクティが殺されたのを見て、更にヴァシシタの他の息子たちを食べるように羅刹に命じた。(三七) 彼は怒り狂い、獅子が小さな獣を食べるように、偉大なヴァシシタの百人の息子を食べてしまった。(三八) ヴァシシタは、ヴィシュヴァーミトラのせいで息子たちが殺されたことを聞いたが、大山が大地を支えるように、悲しみを抑制していた。(三九) しかし、この最上の賢者、最高の聖者は、クシカ一族(ヴィシュヴァーミトラが属する一族)を滅ぼそうとは思わず、自己を滅ぼす決意をした。(四〇) その聖仙はメール山の頂から身を投げた。彼の頭は岩石の上に落ちたが、まるで綿の山の上に落ちたようであった。(四一) 聖者は落下により死ねなかったので、大森林に火を放って、そこに入った。(四二) 火はめらめらと燃え上ったが、冷たくなり、彼を焼かなかった。(四三) 偉大な聖者は悲嘆に暮れ、海に行き、首に大きな石を結びつけて海中に飛び込んだ。(四四) しかし、偉大な聖者は、激しい波によって岸に投げ出された。そこで彼は悄然と隠棲所に引き返して行った。(四五) (第百六十六章)

〔ヴァシシタは自殺しようとして方々さまようが、死ねないで隠棲所に帰る(一—一〇略)〕
彼が隠棲所の方に行くと、息子の嫁のアドリシャンティーが後について来た。その時、すぐ後ろの方から、意味を完備した六補助学に飾られたヴェーダ聖典の朗誦の声が聞こえた。(一一) 彼は、「誰が私の後について来るのか」と問うた。「私はアドリシャンティーという名です」と、嫁は彼に答えた。「聖者よ、私はシャクティの妻です。苦行を積んだ哀れな女です。(一二)」
ヴァシシタはたずねた。
「娘よ、このヴェーダとその補助学の朗誦の声は誰のものか。まるで以前聞いたシャクティの朗誦のようだ。(一三)」
アドリシャンティーは答えた。
「これはあなたの息子シャクティから生まれた胎児です。十二年の間、胎内でヴェーダを朗誦しているその子の声です。(一四)」
ガンダルヴァは語った。——
最高の聖仙ヴァシシタはそれを聞いて喜び、「子孫がいた」と言って、死ぬことを思いとどまった。(一五) それから、彼が嫁とともに帰って行く時、人気(ひとけ)のない森で(一六)カルマーシャ

パーダが座っているのを見出した。(二六) その恐ろしい羅刹にのりうつられた王は、彼を見るやいなや、怒って立ち上がり、彼を食べようとした。(二七) アドリシャンティーはその残忍な王を眼前に見て、恐怖にふるえる声でヴァシシタに言った。(二八)
「聖者よ、恐ろしい羅刹が棒を持って、恐ろしい杖を持つ死神のように近づいて来ます。(二九) 聖者よ、あなた以外に、彼を制止できるものは、他に誰も地上におりません。すべてのヴェーダ学者の最上者よ。(三〇) 聖者よ、この恐ろしい姿の悪党から私を救って下さい。羅刹は疑いなく我々を食おうと望んでいるのです。(三一)」

(第百六十七章)

ヴァシシタは言った。
「娘よ、恐れることはない。決して羅刹を恐れる必要はない。お前に近づき恐れさせるこの者は羅刹ではないのだ。(一) 彼は強力で地上に知れわたったカルマーシャパーダ王だ。この恐ろしい男は、この森に住んでいる。(二)」
ガンダルヴァは語った。——
威光を有する聖仙ヴァシシタは、襲いかかってくる彼を見つめ、「フン」という声を出して彼を制止した。(三) 彼は更に呪句(マントラ)で清めた水を王に注いで、彼を恐ろしい羅刹から解放してやった。(四) 実に彼は十二年の間、日食の時に食(グラハ)に呑まれる太陽のように、ヴァシシタ(の息子)の威光によって呑まれていたのであった。(五) 羅刹から解放された王は、太陽が暁(または黄昏)の雲を赤く染めるように、その威光によって広大な森を赤く輝かせた。(六) 彼は正気を取りもどし、合掌しておじぎをし、最高の聖仙ヴァシシタに言った。(七)
「聖者よ、私はスダーサの息子で、あなたの祭主(後援者、弟子)です。最高のバラモンよ、この時に臨み、あなたの望まれることをおっしゃって下さい。何でもいたします。(八)」
ヴァシシタは告げた。
「すべては時(カーラ)(運命)の流れでこうなったのだ。王国に帰ってそれを治めよ。王よ、決してバラモンを軽蔑してはならぬ。(九)」
王は答えた。
「バラモンよ、私はバラモンの雄牛たちを決して軽蔑しないであろう。あなたの教えに従い、私は永遠にバラモンを尊敬するであろう。(一〇) しかし、最高のバラモンよ、私がイクシュヴァークの家系に対して借りを返せるように、あなたにひとつ願いをかなえていただきたい。最高のヴェーダ学者よ。(一一) 私の愛しい王妃、徳性と容色と美質をそなえた王妃に、イクシュヴァークの家系の繁栄のために、息子を授けてやっていただきたい。(一二)」
ガンダルヴァは語った。——
約束を守る最高のバラモンであるヴァシシタは、勇猛な王に「与える」と答えた。(一三) やがて王は、ヴァシシタとともに、世に名高いすばらしい都アヨーディヤーにもどった。

（二四）すべての臣民は大喜びで、天人たちが主神を迎えるように、悪を離れた偉大な王を出迎えた■（二五）（二六―二〇略）

王中の王がその都に入った時、王妃は王の命によりヴァシシタに近づいた。（二一）そして彼女が息子を生むに適した時期に、最高の大仙ヴァシシタは、神聖な作法により、王妃と交わった。（二二）かくて彼女に子が宿った時、最高の聖者は王にいとまを願って、再び隠棲所にもどって行った。（二三）

王妃は胎児を長い間出産しなかった。そこで彼女は石（アシュマン）によって自分の腹を裂いた。（二四）こうして、彼女は十二年間かかってようやく出産したのである。それが、ポータナを建設した王仙アシュマカである。（二五）

（第百六十八章）

海中の火

ガンダルヴァは語った。――

隠棲所に住むアドリシャンティーは、やがてシャクティの息子を出産した。その家系を担う子は、まるでもう一人のシャクティのようであった。（一）尊い聖者の雄牛（ヴァシシタ）は、孫のために、自ら誕生式などの儀式をとり行なった。（二）その子は胎内にいる時、死のうとしていた（パラース）ヴァシシタを思いとどまらせたから、世にパラーシャラとして知られた。（三）その徳性ある男は、生まれて以来、ヴァシシタを父親だと思い、彼が父であるかのようにふるまった。（四）パラーシャラは母のアドリシャンティーの見ているところで、梵仙ヴァシシタのことを「お父さん」と呼んだ。（五）アドリシャンティーは、「お父さん」という意味に満ちた甘い言葉を聞いて、涙にあふれた眼をして彼に言った。（六）

「お父さん、お父さんと呼んではいけません。この偉大な聖者はお父さんではありません。あなたのお父さんは森の中で羅刹に食われたのです。（七）無邪気な人よ、あなたがお父さんだと思っている方は、あなたのお父さんではありません。この聖者は、あなたの偉大な父の父親なのです。（八）」

そう言われて、真実のみを語る最高の聖仙（パラーシャラ）は苦悩し、誇り高い彼は全世界を滅ぼそうと決意した。（九）大苦行者ヴァシシタは、そのように決意した偉大なパラーシャラを制止した。彼がどのような話をしてパラーシャラを止めたか、それを聞きなさい。（一〇）

ヴァシシタは語った。――

クリタヴィーリヤという地上に名高い王がいた。その王中の雄牛は、この世において、ヴェーダ学者であるブリグ一族の祭主（後援者）であった。（一一）その王は、ソーマ祭の終わりに、大量の穀物と財物によって、バラモンたちを満足させた。（一二）その王中の虎が昇天した後、ある時、その一族の人々が財物を必要としたことがあった。（一三）これらすべての王族の人々は、ブリグ一族の財産に目をつけ、それを要求しようとして、最高のブリグ族の人々のもとに行った。（一四）王族（クシャトリヤ）による危険が迫ったのを知って、あるブリグ族の人々は、無尽

の財産を地中に埋めた。またある人々は、他のバラモンたちに与えた。（二五）だが、あるブリグ族の人々は、他に方法を見出〔せない〕ので、望み通りの財産を王族たちに与えた。（二六）
その後、ある王族がたまたまブリグ族の居住地の地面を掘って、財物を見つけた。すべての王族の雄牛たちが集まって来て、その財物を見た。（二七）それから、偉大な戦士たちは怒って、ブリグ族の人々が庇護を求めるのをものともせずに、鋭い矢により彼らをみな殺しにした。彼らは胎児にいたるまで殺害しながら地上を歩きまわった。（二八）ブリグの人々が根こぎにされている間、ブリグ族の妻たちは、恐怖にかられ、ヒマーラヤ山へ避難した。（二九）彼女たちのうちの、一人の美しい腿の女は、難を恐れて、夫の家系を守るために、輝く胎児を一方の腿に入れて運んだ。追手は自らの威光によって輝いているそのバラモンの妻を見つけた。（三〇）その時、その胎児はバラモンの妻の腿を裂いて出生した。真昼の太陽のように王族たちの視力を奪いながら。彼らは視力を失って、山の難所をさまよった。（三一）それから王族の雄牛たちは、初めの意図も忘れて、恐怖にかられ、視力を返してもらうために、その非難の余地ないバラモンの妻に庇護を求めた。（三二）失明した王族たちは、輝きを失った火のようになり、苦しみ途方に暮れて、その貴婦人に言った。（三三）
「奥様の御好意により、王族を眼の見えるようにして下さい。我々は悪事を犯しましたが、悪事をやめて、全員引き上げます。（三四）御子息ともども、我々みなに好意をおかけ下さい。再び視力を授けて、王族を救って下さい。（三五）」

（第百六十九章）

バラモンの妻は言った。
「私はあなた方の視力を奪いませんし、怒ってもいません。きっと、私の腿から生まれたブリグ族の息子が、あなた方に対して怒ったのでしょう。（一）その偉大な息子が、親族を殺されたことを思い出して、あなた方の視力を奪ったのに相違ありません。（二）あなた方がブリグ族の子供たちを、胎児にいたるまで殺した時、私はその胎児を、百年の間、腿の中に入れておきました。（三）ブリグ族が今一度幸福になるようにと、すべてのヴェーダ聖典とその六補助学が、胎内にいる彼に入りこみました。（四）きっとその子が、父を殺されたことで怒り、あなた方を殺そうと望み、その神的な威光であなた方の視力を奪ったのです。（五）その腿から生まれた（アウルヴァ）、私の最高の息子に頼んでみなさい。彼はあなた方の恭順に満足して、視力をもどしてくれるでしょう。（六）」
ガンダルヴァ〔の語る物語の中でヴァシシタ〕は語った。――
そこで、すべての王族の人々は、その腿（ウール）から生まれた子に、「お許し下さい」と言った。すると彼は恩寵をなした。（七）その最高の梵仙は、腿を裂いて生まれたから、アウルヴァという名で世に知れわたった。（八）
さて、王族の人々は視力を回復して引き返したが、このブリグ族の聖者（アウルヴァ）は、全世界の帰滅を願った。（九）その偉大な男は、すべての世界を全滅させることを決意した。（一〇）

このブリグの最上者は、ブリグ族を供養したいと（復讐したいと）望み、全世界を滅ぼすために、激しい苦行に専念した。（一一）彼は激しい苦行（の熱力）により、祖先を喜ばせ、神々や阿修羅（アスラ）や人間の世界（天界・地底界・地上界）を熱した。（一二）それから、祖霊たちは、ブリグの最上者（の意図）を知り、みなして祖霊界からやって来て、次のように告げた。（一三）

「アウルヴァよ、激しい苦行を行なうお前の力はよくわかった。わが子よ。世界のために好意をかけてくれ。お前の怒りを鎮めなさい。（一四）わが子よ、あの時、聖なるすべてのブリグ族が、殺意を抱く王族たちによる殺戮を見過ごしたのは、無力であったからではない。（一五）あまりに長い寿命のため我々はうんざりして、我々は自ら王族に殺されることを望んだのだ。（一六）あの時、誰かが財物をブリグ族の居住地に埋めたのは、怨みを生じさせるために、王族たちを怒らせようとして、そのように取り計らったのである。天界を望む我々に、どうして財物が必要であろうか。バラモンの雄牛よ。（一七）死が我々をさらって行く可能性が全くなかったので、我々はうまい方法を考えついたのだ。（一八）わが子よ、自殺した人はよき世界（天界）に達することはできない。我々はそのように考慮して、自分で自分を滅することはしなかったのである。（一九）そこでわが子よ、お前がやろうと望んでいることは、我々を喜ばせない。全世界を滅ぼそうなどという、悪いことは思いとどまってくれ。（二〇）わが子よ、王族たちや七つの世界は、我々の苦行（タパス）（の力）や威光（テージャス）を害うことはないのだから。湧き上がる怒りを捨てなさい。（二一）」

（第百七十章）

アウルヴァは言った。――

「祖霊たちよ、あの時、私は怒って全世界を滅ぼすという誓いを立てましたが、それを偽りにすることはできません。（一）偽って怒り、誓ったら、私は生きて行くことはできないのです。その怒りは、目的を達成しなければ、火が火鑽棒（ひぎり）を燃やすように、私を燃やすでしょう。（二）理由があって生じた怒りを我慢する人は、真に三目的（ダルマ・アルタ・カーマ）を守ることはできない。（三）実に、教養ない人々を抑止する者は、教養ある人々を守る者である。天界を得たいと望む王は、怒るべきものは怒るべきである。（四）私が胎児として母の腿で寝ていた時、王族による殺戮において、母たちやブリグ族の人々の叫び声を聞きました。（五）最低の王族たちが、胎児にいたるまでブリグの一族を滅ぼすのを、神々をはじめとする世界が容認した時、怒りが私に入りこんだのです。（六）実際、大きな御腹をした私の母たちや、父たちは、あらゆる世界において、その危険を逃れる依り所を得られませんでした。（七）誰もブリグの妻たちを助けられなかった時、母は私を一方の腿に入れて運びました。（八）もし世間において悪事を制止する者がいれば、全世界において悪事は生じないでしょう。（九）しかし、悪事を犯しても、どこにも止める者がいないなら、多くの者がこの世で悪事をなすでしょう。（一〇）能力ある者が、悪事を知りながら止めなければ、彼自身その悪しき行為に関わることになる。（一一）王や神々が、その能力がありながら、私の父たちを救わず、人生は楽しいものと考えるなら、私は怒り、今やこの世界を支配します。しかし、私はあなた方の言葉に背くことは

できません。(一二—一三) だが、私が能力がありながら黙認すれば、世界には再び罪による大なる危険が生ずるでしょう。(一四) また、この私の怒りから生じた、世界を滅ぼそうと望む火は、私の威光で制止しようとすれば、私自身を燃やすでしょう。(一五) しかし、あなた方が全世界の幸せを望んでいることは存じております。ですから、御先祖様方、世界と私とが幸福になれるように取り計らって下さい。(一六)」

祖霊たちは告げた。

「お前の怒りより生じた、世界を滅ぼそうと望む火を、どうか水に放ってもらいたい。世界は水に基づくというから。(一七) すべての液体(ラサ)は水よりなる。すべての世界は水よりなる。それ故、最高のバラモンよ、怒りの火を水に放て。(一八) バラモンよ、もし望むなら、その怒りより生じた火が、水を燃やしながら海中にとどまるようにしよう。世界は水よりなるとされるから。(一九) そうすれば、お前の誓いは真実であるということになろう。そして、神々をはじめとする世界は滅亡しないであろう。(二〇)」

ヴァシシタは語った。——

かくてアウルヴァは、怒りから生じた火を海中に放った。そしてそれは海中で水を食べた。(二一) ヴェーダを知る人々は、それが大きな馬の頭となり、海中で口から火を吐き、水を飲んでいることを知っている。(二二) だからして、パラーシャラよ、お前もまた、最高の法(ダルマ)を知りながら、どうか世界を燃やそうなどと思わないで欲しい。最高の知者よ。(二三)

(第百七十一章)

ヒマーラヤの火

ガンダルヴァは語った。——

偉大なヴァシシタにこのように言われた梵仙(パラーシャラ)は、自らの怒りを抑え、全世界を滅ぼそうという企てを断念した。(一) しかし、この威光に満ちた最高のヴェーダ学者で、シャクティの息子である聖仙パラーシャラは、羅刹の供犠(羅刹を犠牲とする祭祀)を行なった。(二) 祭祀が進行し、偉大な聖者はシャクティの死を想起しつつ、羅刹たちを、老いたものや幼いものにいたるまで焼いた。(三) ヴァシシタといえども、この羅刹殺しを止めることはできなかった。彼の二度目の誓いを妨げるべきではないと結論したからである。(四) 目の前で燃える三つの火の祭祀に座った偉大な聖者は、あたかも第四の火のようであった。(五) 作法に従って供物を投じられる輝く祭祀の火により、空はあかあかと照らされた。雨雲の去った太陽により照らされるように。(六) ヴァシシタをはじめとするすべての聖者たちは、彼を威光により天空で輝く第二の太陽であるかのように考えた。(七)

そこで、広大な叡知を有する聖仙アトリは、その祭祀を終わらせたいと願って、余人によっては非常に近寄りがたいその祭祀に近づいた。(八) 同様に、プラスティヤとプラハとクラトゥも、羅刹たちが滅亡しないように望んで、その盛大な祭式に近づいた。(九) プラスティ

ヤは、羅刹の殺戮を止めて、敵を成敗するパラーシャラに語りかけた。（二〇）
「わが子よ、汝の祭祀は妨げられなかったか。汝は喜んでいるか。何も知らない、罪のないすべての羅刹たちを殺して。（二一）ソーマ酒を飲む者の最高者よ、パラーシャラよ、汝は最も偉大でありながら、このように私の子孫を殲滅（せんめつ）するという、法（ダルマ）にもとることをしているのだ。カルマーシャパーダ王は天界へ昇ろうとしている。（二二）そして、偉大な聖者ヴァシシタの息子たち、シャクティの弟たち、みな満足して、神々とともに楽しんでいる。偉大な聖者よ、これらすべては、ヴァシシタも知っていることだ。（二三）そして、哀れな羅刹たちの殲滅のことも……。ヴァシシタの孫よ、汝はこの祭式の責任者だ。そこで、どうか祭祀をやめて欲しい。これを終了してくれ。（二四）」

プラスティヤにそう言われ、また賢者ヴァシシタにも頼まれ、シャクティの息子パラーシャラは祭祀を終了した。（二五）聖者は、すべての羅刹の供犠のために集めた火を、ヒマーラヤの北の山腹の大森林に放った。（二六）今もなお時節ごとに、常にその火が羅刹や樹々や岩石を食っているのが認められる。（二七）

（第百七十二章）

アルジュナはたずねた。
「カルマーシャパーダ王は、いかなる理由によって、最高のヴェーダ学者である師（ヴァシシタ）に妻を委ねたのか。（一）そして、その偉大なヴァシシタは、以前、この世の最高の法（ダルマ）を知りながら、何故に交わるべきでない女と交わったのか。私の質問に対し、すべてを語って下さい。（二）」

ガンダルヴァは語った。——
アルジュナよ、あなたは不可侵のヴァシシタとミトラサハ（カルマーシャパーダ）王について私にたずねられた。それについてお話しするから聞きなさい。（三）
私は前に、ヴァシシタの偉大な息子シャクティが王を呪ったことを、あなたにお話ししました。（四）勇猛な王は、呪詛に支配され、怒りで眼がくらみ、妻を連れて都から出て行った。（五）彼は妻とともに、人気（ひとけ）のない森へ行ってさまよった。その森は、種々の獣に満ち、種々の生き物にあふれていた。（六）種々の藪や蔓草におおわれ、種々の樹々が茂っていた。呪詛に冒された王は、その恐ろしい叫び声の響く森をさまよった。（七）
ある時、彼は飢えて、自分の食物を探しているうちに、すっかり疲れ果てた。彼はとある森の滝のところで、バラモンとその妻が交わろうとしているのを見出した。（八）その二人は、王を見ると驚いて、ことをすませないで逃げ出した。王は逃げる二人のうちのバラモンの方を力ずくでつかまえた。（九）夫がつかまえられたのを見て、バラモンの妻は言った。
「誓戒を守る王様、私の申し上げることをお聞き下さい。（一〇）あなたは太陽の家系に生まれ、世に名高く、怠ることなく法を守り、目上に熱心に仕えます。（一一）不可侵の方よ、あなたは呪いをかけられても、罪を犯してはなりませぬ。息子を生める時期が来たので、私は

今日、夫と交わっていたのです。(二二) 私はまだ夫とことをすませていません。私はとても子供を生みたいのです。最高の王よ、お願いです。私の夫を放して下さい。(二三)」

彼女がこのように泣き声をあげても、非常に残酷な王は、虎が好みの獣を食うように、その夫を食べてしまった。(二四) 怒りにかられた妻の涙は地上に落ち、火と燃え、その場所を輝かせた。(二五) それからバラモンの妻は、夫の災難を苦しみ、悲嘆に暮れ、怒って王仙カルマーシャパーダを呪った。(二六)

「卑しい男よ、今日、私が目的を果たさず、私の見ている前で、お前は冷酷にも、私の主人、誉れ高い夫を食べた。(二七) それ故、愚か者よ、お前は私の呪いに傷つき、子を生む時期に近づいた時に、即座に生命を捨てるであろう。(二八) そして、お前の妻は、お前に息子を殺された聖仙ヴァシシタと交わって、息子を生むであろう。最低の王よ、その息子がお前の家系を継ぐであろう。(二九)」

その善良なアンギラス(聖仙の一族)の女は、このように王を呪ってから、彼の見ている前で、燃え盛る火の中に入った。(三〇)

聖者ヴァシシタは、偉大な知識のヨーガにより、苦行の力により、すべてを見通していた。(三一) それから、長い期間が過ぎて呪詛から解放された王仙は、マダヤンティー(王妃の名)が息子を生める時期に近づいたが、彼女に制止された。(三二) 王は呪詛に迷わされて、例の呪いを忘れていたのである。最高の王は、王妃の言葉を聞いて、あの呪いを思い出してひどく苦しんだ。(三三) 以上のような理由で、呪詛に悩む王は、自分の妻に〔息子を生ませるようにと〕

ヴァシシタを指定したのであった。(三四)

(第百七十三章)

(12) ドラウパディーの婿選び式（第百七十四章―第百八十五章）

婿選び式の方法

アルジュナはたずねた。

「ガンダルヴァよ、我々にふさわしい司祭（プローヒタ）（宮廷祭僧）となるべきヴェーダ学者はいますか。教えて下さい。あなたはすべてを知っているから。(一)」

ガンダルヴァは答えた。

「デーヴァラの弟であるダウミヤが、この森のウトコーチャカという聖場で苦行しています。もしお望みなら、彼を選びなさい。(二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そこでアルジュナは満足し、作法に従って、ガンダルヴァにアーグネーヤ（火神の武器）を与え、次のように言った。(三)

「最高のガンダルヴァよ、しばらくの間、馬たちを手もとに置いておいて下さい。必要な時にいただきます。それでは、御多幸を祈ります。(四)」

ガンダルヴァとパーンダヴァ兄弟は、お互いに別れを告げ、思い思い、美しいガンガー（ガンジス）河畔から立ち去った。(五) それからパーンダヴァたちは、聖場ウトコーチャカのダウミヤの隠棲所へ行き、彼を司祭に選んだ。(六) 最高のヴェーダ学者であるダウミヤは、足を洗う水と、木の実と根により彼らをもてなし、司祭の職を引き受けた。(七) パーンダヴァたちは、まずバラモンを得たので、富と王国を獲得し、パーンチャーラの王女の婿選び式（スヴァヤンヴァラ）で成功する希望を抱いた。(八) バラタ族の雄牛たちと、その母親との六人は、師（グル）にめぐり会って、守護者を得たかのように思った。(九) というのは、その高邁な叡知をそなえた師は、ヴェーダの真実を知っていたからである。その法（ダルマ）を知りすべてを知る師は、プリターの息子たちを祭主（後援者、弟子）にした。(一〇) 勇士たちは知性、精力、腕力、気力をそなえ、まるで神々のようであったから、師は、彼らが自己の法を追求することにより王国を獲得すると思った。(一一) 王子たちは彼に前途を祝福されてから、こぞってパーンチャーラの王女の婿選び式へ行く決意をした。(一二)

（第百七十四章）／（第百七十五章略）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ジャナメージャヤよ、かくてパーンダヴァ兄弟は、ドルパダ王に統治される南パーンチャーラに行った。(一) 途中、パーンダヴァたちは、偉大で心清く、汚れのないドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）に出会った。(二) 彼らは彼にふさわしく敬意を払い、彼の方も彼らに優しい言葉をかけた。しばらく語り合った後で、彼らは聖仙にいとまごいして、ドルパダの居城に向けて出発した。(三) 勇士たちは、美しい森や湖を見つつ、あちこちで滞在しながら、ゆっくりと進んで行った。(四) ヴェーダを学習し、浄らかで優しく、好ましく語るクルの王子（パーンダヴァ）

たちは、やがてパーンチャーラ国に到着した。（五）パーンダヴァたちは、都市と王の居城を見てから、ある陶工の家に滞在した。（六）そこで彼らはバラモンに変装し、行乞をして生活した。誰もその勇士たちが来ていることに気づかなかった。（七）

ヤジュニャセーナ（ドルパダ）は常々、パーンドゥの息子アルジュナにクリシュナー（ドラウパディー）を与えたいと望んでいたが、そのことを秘密にしていた。（八）そのパーンチャーラ国王は、クンティーの息子たちを探すために、容易に引くことができない剛弓を作らせた。（九）そして、空中に人工の装置を作らせ、その装置に黄金の標的を固定させた。（一〇）

ドルパダは告げた。

「この弓を引き、それから放った矢で〔装置を〕通過して的を射貫いた者が、私の娘を得るであろう」と。（一一）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ドルパダ王はいたるところでこのように布告させた。それを聞いて、すべての王たちがそこに集まって来た。（一二）偉大な聖仙たちも、婿選び式（スヴァヤンヴァラ）を見たいと望んで集まって来た。ドゥルヨーダナをはじめとするクル族の王子とカルナたちもやって来た。（一三）各地から集結した栄えあるバラモンたちや、偉大な王たちの群は、ドルパダに歓迎された。（一四）

（一五―一六略）

パーンダヴァ兄弟はバラモンたちとともに座り、パーンチャーラ国王の最高の栄華を眺めていた。（一七）幾日も過ぎて、〔諸王が〕多くの宝物を贈ったり、役者や舞踊家に飾られて、会場は盛り上って来た。（一八）会場が楽しい雰囲気になった時、第十六日目に、身を洗い浄め、美しい衣装を着て、すべての装身具に飾られたドラウパディーが、見事な装飾をほどこされた勇士の金杯を持って競技場に登場した。（一九―二〇）その時、ソーマカ（パーンチャーラ）の宮廷祭僧、聖句（マントラ）を知る清浄なバラモンは、聖なる草を撒いて、作法に従って火中に乳酪を投じた。（二一）彼は火を満足させ、バラモンたちに祝福の言葉を唱えさせてから、すべての音楽を完全にやめさせた。（二二）そこが静寂になった時、ドリシタデュムナ（ドルパダの息子）が競技場の中央に進み出て、雷鳴のような重々しい声で、意味深く魅力的な最高の口上を述べた。（二三）

「すべての王侯よ、お聞きなさい。ここに弓が、ここに的が、ここに矢がある。五本の矢により、装置の隙間を通過して、的を射貫きなさい。（三四）家柄と容色と力をそなえ、この行ないがたい行為をなした人……。ここにいる私の妹クリシュナーは、今日、その人の妻になるであろう。私の言葉に偽りはない。（三五）」

ドルパダの息子は、彼らにそのように告げた後、ドラウパディーに向かって、集まった諸王について名前、族姓、業績を紹介してから、次のように言った。（三六）

（第百七十六章）

〔集まった諸王の名を列挙してから（一―二〇略）、ドリシタデュムナは言った〕

「彼ら及びその他大勢の領主である、地上に名高い王族たちが、妹よ、お前を求めて

集まっている。(二一)これら勇猛な人々は、お前のために、最高の的を射るであろう。美しい女よ、あの的を射貫いた者を、今日、夫に選びなさい。(二二)」

(第百七十七章)

アルジュナ、剛弓を引く

ヴァイシャンパーヤナは語った。――(一―一四略)

それから、王の群は、クリシュナー(ドラウパディー)を求めて、次々と進み出たが、その弓は非常に堅固で、力の限り試みても、それを引くことができなかった。(一五)諸王は頑張ったが、剛弓の反動によってはじき返されて、地面に倒れて動かなくなり、夢破れて意気消沈した。(一六)諸王の集団は、その剛弓によって、腕環や耳環を粉々に砕かれ、嘆声をあげて、クリシュナーを求める気持も失せて、悲嘆に暮れていた。(一七)会場の群集が動揺し、諸王が名乗り出るのをやめた時、クンティーの息子である勇士アルジュナは、弓矢を引くために進み出た。(一八)

(第百七十八章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

諸王が弓を引くことを断念した時、英邁なアルジュナは、バラモンの中から立ち上がった。(一)主立ったバラモンたちは、インドラの旗のように輝くアルジュナが進み出たのを見て、

鹿皮(バラモンの持物の一つ)を振って叫んだ。(二)ある者たちは反感を抱いた。またある者たちは喜んだ。(三)(四―二二略)

このように、バラモンたちが種々の意見を述べている間に、(二三)アルジュナは動かざる山のように弓のそばに立った。(二四)その勇士は弓のまわりを右まわりにまわってから、敬礼し、喜んでそれをつかんだ。(二五)彼は瞬く間に弓を引き、五本の矢を取り、隙間を通して的を射た。それは射貫かれて勢いよく地上に落ちた。(二六)すると虚空で叫び声が上がった。会場の中では、大喚声が上がった。神は勇士アルジュナの頭上に天上の花を雨降らせた。(二七)人々はいたるところで衣服を振り、ワーワーと叫んだ。空からは一面に花の雨が降った。(二八)演奏者はありとあらゆる楽器を演奏した。吟誦者(スータ)や讃嘆者(マーガダ)の群は朗々と称讃した。(二九)勇者ドルパダはアルジュナを見て喜び、兵たちとともに、彼を後援するために進み出た。(三〇)大喚声が起こった時、法(ダルマ)を守る者たちの最上者ユディシティラは、最高の人物である双子(ナクラとサハデーヴァ)とともに、速やかに宿舎に引きあげた。(三一)

一方クリシュナー(ドラウパディー)は、的が射貫かれたのを見て、またインドラのようなアルジュナを見て、白いすばらしい花輪を持って、微笑みながら彼に歩み寄った。(三二)彼は競技場において勝利し、バラモンたちに讃えられつつ、彼女を受け入れた。それから、その奇蹟的な行為をなした男は、その妻につき従われて、競技場から退場した。(三三)

(第百七十九章)

諸王の怒り

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

王がその娘を偉大なバラモンに与えようとした時、王たちはお互いに顔を見合わせていたが、彼らの間から憤怒が湧き上がった。(一)

「彼は集まった我々を無視して、草のように〔取るに足らぬものと〕して、最高の女性ドラウパディーをバラモンに与えようとしている。(二) 我々を軽蔑したこの邪悪な王を殺してやろう。彼は尊敬に値しない奴で、その徳の点で長老の資格がない。(三) この王たちの敵である悪党を息子もろとも殺そう。彼はすべての王を招待してもてなし、適切に食事を出して、しかも後で軽蔑した。(四) この神々の群のような諸王の集会で、どうして彼は誰も似合いの王を見出さなかったのか。(五) それに、バラモンには求婚者になる資格はない。『婿選び式（スヴァヤンヴァラ）は王族（クシャトリヤ）のもの』と聖典に定められているではないか。(六) 諸王よ、もしこの娘が〔我々のうちの〕誰も望まないのなら、我々は彼女を火の中に投げ込んで国に帰ろう。(七) このバラモンは、無邪気さから、または欲にかられて、偉大な王たちに不愉快なことをしたが、決して彼を殺すべきではない。(八) というのは、我々の王国、生命、富、息子や孫、その他の我々の財産は、バラモンのためにあるのだから。(九) 軽蔑されるといけないから、また、自らの法（ダルマ）を守るために、他の婿選び式がこのようなことにならないようにしよう。(一〇)」

そのように言って、鉄棒のような腕を持つ虎のような王たちは勇み立ち、武器をとり、ドルパダを殺そうとして駆け寄った。(一一) ドルパダは、怒って弓を持って殺到する諸王を見て恐れ、バラモンたちに庇護を求めた。(一二) ところが、発情した象のように、猛烈な勢いで殺到する彼らに対し、強力なパーンドゥの二人の息子が進み出た。(一三) それから王たちは、武器を振りかざし、弓籠手（ゆごて）と弓懸（ゆがけ）をつけ、怒って、クルの王子アルジュナとビーマセーナを殺そうとして襲いかかった。(一四) そこで、驚異的な、金剛杵（ヴァジュラ）のような力を持ち、大力で、並ぶものなき勇士ビーマは、巨象のように、両腕で樹を引き抜いて、その葉を取り除いた。(一五) 太く長い腕をした勇士ビーマは、祖霊の王ヤマ（ダンディン）が恐ろしい杖（ダンダ）を持つように、その樹を持って、雄牛のようなアルジュナの傍らに立った。(一六)

超人的な知性をそなえ（異本の読みによる）、不可思議な行為をなすクリシュナは、アルジュナとビーマの働きを見て、鋤を武器とする兄（バララーマ）に言った。(一七)

「あの盛りのついた雄牛のように歩み、棕櫚のように（または、ターラほどの）巨大な弓を引いたのはアルジュナだ。疑う余地はない。サンカルシャナ（バララーマ）よ、私がヴァースデーヴァ（クリシュナ）であるのが真実であるように。(一八) また、力まかせに樹を引き抜いて、力ずくで諸王を倒そうと身がまえたのは狼腹（ヴリコーダラ）（ビーマ）だ。この今の世で、そのようなことをできる人間は他にいない。(一九) そして、あの前に退場した、蓮弁のような眼をし、すらりとした身体で、大きな獅子のように歩み、修養を積み、色白で、たれ下がり輝く魅力的な鼻をした屈強な男は、ダルマ王（ユディシティラ）である。(二〇) また、カールッティケーヤ（スカンダ、韋駄天）のような二人の童子

は、アシュヴィン双神の息子たち（ナクラとサハデーヴァ）であると思う。パーンドゥの息子たちとプリター（クンティー）は、あのラックの家の火災から逃れたと聞いている。〔二二〕」
汚れなき雲にも似たバララーマは喜んで弟に言った。
「私は嬉しい。幸いにして、我々の父の妹プリターと、クルの長（パーンダヴァ兄弟）たちが逃れたということは。〔二三〕」

（第百八十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
バラモンの雄牛たちは、鹿皮と水瓶を揺って王に告げた。
このように告げるバラモンたちに、アルジュナは笑って言った。
「恐れるには及ばない。我々が敵と戦う。〔二〕」
「あなた方は横で見物していて下さい。〔二〕私が鋭い矢を幾百も浴びせて、怒り狂う彼らを食い止めます。呪句（マントラ）によって毒蛇を制するように。〔三〕」
そう言って、勇士は結婚の贈物として受け取った例の弓をとって、弟のビーマとともに、動かざる山のように立った。〔四〕それから二人は恐れることなく、カルナをはじめとする怒った王族たちに襲いかかった。二頭の象が敵の象たちに襲いかかるように。〔五〕乱暴な王たちは彼らを殺そうとして叫んだ。
「バラモンといえども、戦いを望むなら、戦場において殺される例（ためし）がある。〔六〕」
かくてカルナは戦いを求めて、力強くアルジュナに立ち向かった。象が牝象を求めて、敵象に立ち向かうように。〔七〕強力なマドラ国王シャリヤはビーマセーナに立ち向かった。ドゥルヨーダナたちはバラモンたちと戦った。しかし、戦闘において、彼らは手かげんして、あまり本気を出さずに戦った。〔八〕賢明なるアルジュナは、攻撃をしかけるカルナに対し、剛弓を引き絞り、三本の矢を射た。〔九〕カルナは激しい威力を持つ鋭い矢の勢いにひるみ、注意深く彼に近づいた。〔一〇〕二人の無比の勇士は手練の業を尽くし、互いに勝利をめざし、激しく戦った。〔一一〕「見よ、やられたらやり返すぞ」、「見よ、俺の腕の力を」と、彼らは互いに勇壮な言葉を発した。〔一二〕アルジュナの両腕の力が、地上において無比であることを知り、カルナは激しく戦った。〔一三〕彼はアルジュナの放った高速の矢をたたき落して、高く雄叫びをあげた。兵たちは彼を褒めそやした。〔一四〕
カルナは言った。
「偉大なバラモンよ、あなたは強力で、ひるむことなく、種々の武器の修練を積んでいる。私はあなたと交戦することに満足している。〔一五〕あなたは弓のヴェーダ（兵学）の化身か。それとも、最高のバラモンよ、あなたはラーマ（パラシュラーマ）なのか。あるいは、インドラ御自身か。または不滅のヴィシュヌ神なのか。〔一六〕その神が、正体を隠すために腕の力に訴えて、バラモンの姿をとり、私と戦っているのか。〔一七〕というのは、インドラとアルジュナを除いて、戦闘において猛り立つ私と戦うことのできる人間は他にいないから。〔一八〕」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

アルジュナはそのように言ったカルナに答えた。

「カルナよ、私は弓のヴェーダの化身でもないし、威光あるラーマでもない。私は戦闘に長けたバラモンで、一切の戦士の最上者である。（一九）私は師の教えにより、梵天（ブラフマー）の武器とインドラの武器とに通達した。今、戦いにおいて汝に勝利するためにここに立つ。勇士よ、覚悟せよ。（二〇）」

このように言われて、勇士カルナは戦闘から退いた。バラモンの威光は打ち勝たれがたいと考えたからである。（二一）一方、強力なシャリヤとビーマは、ともに競争心と力に酔い痴れて、そこで戦っていた。（二二）彼らは発情した二頭の巨象のように、互いに呼ばわりながら、拳や膝で打ち合った。しばらくの間、両者は戦闘において相互に引き合った。（二三）やがてこの上なく強力なビーマは、両腕でシャリヤを持ち上げて放り投げた。バラモンたちは笑った。（二四）そこで強力な人中の雄牛ビーマセーナは、驚異的な行為を行なった。彼は地上に落ちた勇士シャリヤを殺さなかったのである。（二五）

シャリヤがビーマセーナに倒され、カルナがひるんだ時、恐れたすべての王は、ビーマを取り巻いて、こぞって言った。

「見事だ。これらのバラモンの雄牛たちは、どこで生まれ、どこに住んでいるのか、知りたいものだ。（二六―二七）というのは、戦場において誰が、ラーダーの息子カルナに対抗することができようか。ラーマ（バラシュラーマ）、ドローナ、クリパ、デーヴァキーの息子クリシュナ、ある

いは勇士アルジュナを除いて……。また、戦場において誰が、最高に強力な、ドゥルヨーダナとマドラ国王シャリヤに対抗することができようか。英雄バラデーヴァ（クリシュナの兄）と、パーンダヴァの狼腹（ビーマ）を除いて……。（二八―三〇）バラモンを巻き込んだこの戦いを中断しよう。そして彼らについて知ってから、戦いを再開しよう。（三一）」

クリシュナはビーマの行動を見て、二人がクンティーの息子であると推測して、「王女は法（ダルマ）に従って獲得された」と言って、すべての王を制止した。（三二）かくて戦いに長けた諸王は戦うことをやめ、すべての偉大な王たちは、驚嘆して、それぞれの国に帰った。（三三）

「競技場はバラモンに支配された。パーンチャーラの姫はバラモンたちに選ばれた」と言いながら、そこに集まった人々は立ち去った。（三四）ルル鹿の皮をまとったバラモンたちに囲まれて、ビーマセーナとアルジュナは、進むのに難渋した。（三五）ひしめく群衆から解放され、敵たちに注視されて（異本による）、クリシュナー（ドラウパディー）に従われて、二人の英雄は輝いていた。（三六）

彼らの母は、行乞（ぎょうこつ）の時間が過ぎても息子たちが帰らないので、種々の不幸な事態を予測して悩んでいた。（三七）

「ドリタラーシトラの息子たちに、クルの雄牛（パーンダヴァ兄弟）であると見破られて、殺されたのではないか。あるいは、幻力（マーヤー）をそなえ、敵意を抱く、恐ろしい羅刹（らせつ）たちに殺されたのではないか。（三八）偉大なヴィヤーサの説いたことは逆しまになったか。」

息子を愛するあまり、プリター（クンティー）は、このように思いわずらった。（三九）しかるに、

午後も大分過ぎたころ、アルジュナ〔たち〕は、雲に囲まれた太陽のように、バラモンたちに囲まれて、陶工の家に（異本による）入った。（四〇）

（第百八十二章）

五王子の共通の妻

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

プリター（クンティー）の二人の強力な息子は陶工の家に帰り、プリターのもとに行き、最高に喜んで、ドラウパディーについて、「我々の得たもの（施物）です」と彼女に告げた。（一）ところが彼女は家の中にいて、息子たちを見ないで、「みなでいっしょに食べなさい（共有しなさい）」と言った。しかしその後で、クンティーは娘を見て、「ああ、何ということを言ってしまったのか」と叫んだ。（二）クンティーは法に背くことを恐れ、恥じて、この上なく喜んでいるドラウパディーの両手をとり、ユディシティラのもとに行き、次のように言った。（三）

「あなたの弟たちが、このドルパダ王の娘を、作法にかなって、私に渡してくれました。ところが、息子よ、私は不注意から、『いっしょに食べなさい』と言ってしまったのです。（四）今私が言ったことが、どうしたら虚偽にならないでしょうか。クル族の雄牛よ、教えて下さい。また、どうしたらパーンチャーラ国王の娘が、前代未聞の非法に陥らないでしょうか。（五）」

最高の威力をそなえたクルの勇士ユディシティラ王子は、しばらく考えて、母のクンティーを慰めてから、アルジュナに告げた。（六）

「お前がドラウパディーを勝ち取ったのだ。お前が王女を満足させなさい。火を燃やし供物を捧げよう。お前は作法に従って彼女の手をとれ（結婚せよ）。（七）」

アルジュナは言った。

「王よ、私を非法に陥らせないで下さい。そんな法は好ましくない。まずあなたが結婚して、それからこの驚異的な勇士ビーマが結婚すればよい。（八）それから私が、そして私の次にマードリーの息子ナクラが、そしてサハデーヴァが最後に結婚する。王よ、ビーマも私も双子も、みんな、この娘はあなたのものだと思っている。（九）このようなわけですから、よく考えて、この場合、法にかない名誉をもたらすような、またパーンチャーラ国王の喜ぶような、なすべきことを言って下さい。我々はみな、あなたの命に従います。（一〇）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

彼らはすべて、そこに立っている誉れ高いクリシュナー（ドラウパディー）を見て、お互いに見つめ合って座し、心の中で彼女のことを想っていた。（一一）無量の威力をそなえた彼らがみな、ドラウパディーを見ているうちに、彼らの感官をかき乱して、愛が顕になって来た。（一二）まことに、創造者自身によって造られた、パーンチャーラの姫の愛らしい容姿は、他の女性を凌駕するものであり、すべての生類を魅了するものであった。（一三）ユディシティラは彼らの様子を知り、ドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）の言葉をすべて思い出し、兄弟たちが相互に

離反することを恐れて、次のように告げた。

「美しいドラウパディーは、我々みなの妻となるであろう。(二四―二五)」

(第百八十二章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その時、すべてのパーンドゥの息子たちは、長兄の言葉について考慮した。無量の威力をそなえた彼らは、心の中でその言葉の意味のみを考えつつ、そこに座っていた。(一) その時、その勇士たちがいる陶工の家に、彼らがクルの勇士たちだと推量したヴリシュニ族の英雄(クリシュナ)が、ローヒニーの息子(バララーマ)とともに訪れた。(二) クリシュナとバララーマは、そこに座っている、太くて長い腕を持つユディシティラと、彼を囲んでそのそばに座っている、火のように輝く男たちを見た。(三) そこでヴァースデーヴァ(クリシュナ)は、近づいて、法(ダルマ)を守る者たちの最高者であるユディシティラに、「私はクリシュナです」と告げて、王子の両足を持った(足下に平伏した)。(四) バララーマも彼に続いて同様に敬意を表した。クルの王子(パーンダヴァ)たちは、喜んで二人を歓迎した。それから、ヤドゥ族の英雄たちは、父の妹の両足を持った。(五) クルの勇士ユディシティラは、クリシュナに息災かどうかたずねてから言った。

「ヴァースデーヴァよ、我々はみな、ここに変装して住んでいるのに、あなたはどうして見破ったのですか。(六)」

クリシュナは彼に笑って答えた。

「王よ、火は隠れていても知られるものだ。人間のうちで、パーンドゥの息子たち以外に、あのような武勇をふるえる者が他にあろうか。(七) あなた方がすべて、あの火から逃れ得たのは幸いなことだ。ドリタラーシトラの邪悪な息子と大臣が計画をたて、成功しなかったのは幸いなことだ。(八) 秘密の場所に隠れているがよい。燃える火のように増大しなさい。ここで王たちが誰もあなた方のことを見破らないように、我々はひとまず宿舎に引き上げることにする。」

不滅の栄光をそなえた彼は、パーンダヴァ兄弟に別れを告げて、バラデーヴァとともに速やかに立ち去った。(九)

(第百八十三章)

〔ドラウパディーの兄ドリシタデュムナは彼らの様子を内偵し、父のドルパダに報告する。そして、彼らの行動や物語から、彼らが王族であり、パーンダヴァ兄弟に違いないと言い切る。ドルパダは大いに喜び、婚礼の準備をして、彼らに使者を派遣する (第百八十四～百八十五章略)〕

(13)

結婚（第百八十六章―第百九十一章）

五人の夫を持つ是非

使者は告げた。

「ドルパダ王は、結婚式に際し、新郎側の人々のため、食事を用意しました。そこで、あなた方とクリシュナー姫は、すべてのお勤め（つとめ）を終えてからいらして下さい。遅れませんように。(二)これらの車は、黄金の蓮で彩られ、良馬につながれ、王者にふさわしいものです。みな様はそれらに乗り、パーンチャーラ国王の宮殿にお越し下さい。(三)」(三―一五略)

（第百八十六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

光り輝くパーンチャーラ国王は、ユディシティラ王子に声をかけ、バラモンを迎えるにふさわしい作法で受け入れた。(二)そして機嫌よく、威光に満ちたクンティーの息子にたずねた。

「あなたがたは王族（クシャトリヤ）ですか、それともバラモンですか。(三)あるいは徳高い実業者（ヴァイシャ）ですか。それとも従僕（シュードラ）の胎に生まれたのですか。あるいは、幻術（マーヤー）により諸方を遍歴するシッダ（半神の一種）が、クリシュナーを求めて、天上から見に来たものですか。真実のことを言って下さい。

我々は非常に疑問に思っています。(三―四)我々の疑問が終われば、我々は満足するでしょうか。勇士よ、我々は運がよいのでしょうか。(五)進んで真実を述べて下さい。王族の間で、真実は慈善の行為よりも優れております。決して不真実を言ってはなりませぬ。(六)神のような勇士よ、あなたの答えを聞いた後で、必ずや作法に従って結婚式をとり行ないます。(七)」

ユディシティラは答えた。

「パーンチャーラの王よ、心配されることはない。喜んで下さい。あなたの望んでいた願望は、確かに疑いもなく成就しました。(八)王よ、我々は王族（クシャトリヤ）です。偉大なパーンドゥの息子です。私はクンティーから生まれた長男です。彼らはビーマセーナとアルジュナです。この二人によって、あなたの娘は王の集会において勝ち取られたのです。(九)また、クリシュナーがいる場所にいるのが双子（ナクラとサハデーヴァ）です。あなたの心の苦しみが消えますように。我々は王族です。あなたの蓮のような娘は、池から他の池に移ったのです。(一〇)大王よ、私はすべて真実を述べました。あなたは我々の目上であり、最高の寄る辺ですから。(一一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その時ドルパダ王は歓喜で眼を見開き、ユディシティラに適切に返答することができなかった。(一二)それから勇猛な王は、努力してその喜びを抑えて、ユディシティラにふさわしく答えた。(一三)そして徳性ある王は、かつて〔火災から〕どのようにして逃れたかをたず

ねた。ユディシティラは彼に、順を追ってすべてを語った。(一四)クンティーの息子の話を聞いて、ドルパダ王はドリタラーシトラ王を非難した。(一五)雄弁なドルパダは、ユディシティラを慰め、きっと王位につけるようになると請け合った。(一六)それから、クンティーとクリシュナーとビーマセーナとアルジュナと双子は、王にうながされて、大宮殿に入った。(一七)彼らはそこでヤジュニャセーナ（ドルパダ）にもてなされて滞在した。王は息子たちとともに、人心地ついた彼らに言った。(一八)

「クルの王子よ、まさに今日、作法に従って手をとりなさい（結婚しなさい）。このめでたい日に、勇士アルジュナが式を行ないなさい。(一九)」

するとダルマの息子ユディシティラ王子が彼に言った。

「王よ、私も縁組みしなければなりません。(二〇)」

ドルパダは言った。

「それでは、あなたが作法に従って私の娘の手をとりなさい。あるいは、勇士よ、あなたがよいと思われる男にクリシュナーを指定しなさい。(二一)」

ユディシティラは答えた。

「王よ、ドラウパディーは我々すべての妃となるでしょう。王よ、私の母が前にそのように告げたのです。(二二)私も、ビーマセーナも、まだ結婚していません。そして、あなたの宝である娘は、アルジュナに勝ち取られました。(二三)宝物は共有するというのが我々の約定です。最高の王よ、我々はその約定を捨てたくはありません。(二四)法（ダルマ）に従って、クリシュナーは我々すべての妃になるでしょう。彼女は火の前で、順に我々すべての手をとらなければなりません。(二五)」

ドルパダは言った。

「クルの王子よ、一人の男が多くの妃を持ってよいとは定められている。しかし、一人の女が多くの夫を持ってよいとは、決して定められていない。(二六)法（ダルマ）を守り清浄なるあなたが、世間の習いにもヴェーダ聖典にも背くことを行なってはならぬ。クンティーの息子よ、どうしてあなたにそんな考えが起ったのか。(二七)」

ユディシティラは答えた。

「大王よ、法というものは微妙であり、我々はその行方を知りません。我々は先人が次々とたどった道に従って行くのです。(二八)私の言葉は虚偽を語りません。また、私の心は非法に陥りません。母がそのように言いましたし、また私自身の願いでもあるのです。(二九)王よ、これは確実に法であります。ためらうことなくそれを行なって下さい。王よ、この点について決して疑念を抱かれぬように。(三〇)」

ドルパダは言った。

「あなたと、クンティーと、私の息子ドリシタデュムナとで、どうすべきか相談して、明日になったら対処しよう。(三一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

で彼らは集まって相談した。その時、たまたまドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）が来訪し

（第百八十七章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

パーンダヴァたちと誉れ高いパーンチャーラ国王は、みな偉大なクリシュナ（ドゥヴァイパーヤナ・ヴィヤーサ）を見て立ち上がり、敬意を表した。（一）聖者はみなに答礼し、息災かどうかをたずねた後で、輝かしい黄金の座席に座った。（二）無量の威光をそなえたクリシュナにうながされて、すべての最高の人々は、上等な座席に座った。（三）それから少し経って、ドルパダ王は穏やかに話しかけて、ドラウパディーの件について聖者にたずねた。（四）

「どうしたら、一人の女が多くの男たちの妻となり、しかも法（ダルマ）が乱れないようにできましょうか。聖者はこのことについて、我々に適切なことをすべておっしゃって下さい。（五）」

ヴィヤーサは言った。

「この損なわれ、世の習いとヴェーダ聖典に反する法について、各々方の意見を聞きたい。（六）」

ドルパダは言った。

「私の意見では、これは非法であり、世の習いとヴェーダとに反する。最高のバラモンよ、一人の女が多くの男の妻になるなどということは聞いたことがない。（七）また、古（いにしえ）の偉大な人々も、このような法を践んだことがない。法にもとることは永遠に行なうべきではない（異本による）。（八）そこで私はそれを実行しようとは決定できない。というのは、私には、このようなことは極めて疑わしい法のように思われる（原文疑問）。（九）」

ドリシタデュムナは言った。

「バラモンの雄牛よ、苦行者よ、もし兄が行ない正しいなら、どうして弟の妻に近づけようか。（一〇）しかし、法は微妙であるので、我々は決してその行方を知りません。我々のような者には、法であるとか非法であるとか決定することはできません。（一一）バラモンよ、ですから、クリシュナーが五人の妻になるべきであるかどうかなどということは、私にはとても決められません。（一二）」

ユディシティラは言った。

「私の言葉は虚偽を語りません。また、私の心は非法に陥りません。（一三）古伝説（プラーナ）において、ガウタマ姓のジャティラーという女性は七仙（サプタリシ）（マリーチャ、アトリ等、著名な七人の聖仙。北斗七星を指すとされる）と関係を持ったとされます。最高の法を守る方よ。（一四）また、目上の言葉が法であるとされ、そしてすべての目上のうちで、生みの母が最高の目上であります。（一五）その母が、『施食のように共有しなさい』と申しました。ですから、最高のバラモンよ、このことは法にかなっていると思います。（一六）」

クンティーは言った。

「徳行のユディシティラが言った通りです。私はひどく虚偽を恐れます。どうしたら虚偽を

免れるでしょうか。（一七）」
ヴィヤーサは言った。
「あなたは虚偽を免れるであろう。これは永遠の法である。しかし、私はすべての者にはそれを語らない。パーンチャーラ国王よ、直々に私の話すことを聞きなさい。（一八）この法が定められた由来を。また、どうしてそれが永遠となったかを。ユディシティラの言ったように、それは疑いもなく法である。（一九）」
ヴァイシャンパーヤナは語った。——
それから聖者ドゥヴァイパーヤナ・ヴィヤーサは立ち上がり、王の手をとって、王の居間に入って行った。（二〇）パーンダヴァ兄弟とクンティーとドリシタデュムナは途方に暮れていたが、その場で二人を待っていた。（二一）それから、ドゥヴァイパーヤナは、偉大な王に、多くの男が一人の妻を持つことが法となった由来を語った。

（第百八十八章）

過去世の因縁

ヴィヤーサは語った。——
かつて神々は、ナイミシャの森において祭祀を行なった。その時、ヴィヴァスヴァット（太陽神）の息子ヤマ（閻魔、死の神）が犠牲獣を殺す役を勤めた。（一）それから、ヤマは潔斎を行なって、

何も生き物を殺さなくなった。そこで生類は、時が来ても死なず、死から解放され、その数が増大した。（二）そこで、インドラ（帝釈天）、ヴァルナ（水天）、クベーラ（毘沙門天）、サーディヤ神群、ルドラ神群、ヴァス神群、アシュヴィン双神、及びその他の神々は、世界の創造者である造物主（プラジャーパティ）（梵天、ブラフマー）のもとに集まった。（三）そこで彼らはこぞって、世界の主に告げた。
「我々は人口増加をひどく恐れています。その危険を恐れ、幸福を願い、みなしてあなたに救いを求めに来ました。（四）」
梵天は言った。
「あなた方はすべて不死であるのに、どうして人間を恐れるのか。決して人間を恐れることはない。（五）」
神々は言った。
「人間（死すべきもの）が不死となったので、（我々と）何の相違もありません。我々はこの平等を恐れて、相違を求めてここに来たのです。（六）」
梵天は告げた。
「祭祀のためにヤマは忙しい。であるからして人間は死なないのである。彼が専念してすべての勤めを終えれば、人間の死ぬ時が来るであろう。（七）あなた方の力にかりたてられて、ヤマの体は強力になり、それは臨終の時に、人間の死をもたらすだろう。人間における力はなくなるであろう（異本に基づく。疑問）。（八）」

ヴィヤーサは語った。――
それから神々は、最初に生まれた神（梵天）の言葉を聞いて、神々が祭祀を行なっている場所に集まった。そこに集まった強力な神々は、ガンガー（ガンジス）川の中に蓮花を見出した。（九）それを見て彼らが驚いていると、彼らのうちの勇者インドラがそこに行った。彼はガンガーが永遠に生まれ出ている所（水源）に、火のように輝く一人の女を見た。（一〇）その女は水を求めて泣きながら、女神ガンガーに飛び込んでそこに立っていた。彼女の涙が水に落ちて、そこで黄金の蓮になるのであった。（一一）インドラはこの奇蹟を見て、その女に近づいてたずねた。

「あなたは誰か。どうして泣いているのか。何が原因で……。どうか本当のことを言ってくれ。（一二）」

女は言った。

「シャクラ（インドラ）よ、私が誰であるか、また何故不幸にも泣いているかを、あなたは知るでしょう。王よ、おいでなさい。私が先に行きますから。私が泣いているわけがわかるでしょう。（一三）」

ヴィヤーサは語った。――
その女の後に従って行くと、彼はほど遠からぬところに見目麗しい若者を見た。その男は、獅子座に座り、若い女とともに、山の王（ヒマーラヤ）の山頂において、骰子で遊んでいるのであった。（一四）神々の王（インドラ）は、彼が骰子にすっかり夢中になっているのを見て怒り、

「全世界は私の支配下にあると知れ。私は主宰神であるぞ」

と告げた。（一五）その神は怒ったインドラを見て笑い、おもむろに彼を凝視した。神々の王は彼に見つめられると硬直し、柱のように立ち尽くした。（一六）その男は、遊戯が終わると、泣いている女神に告げた。

「彼を私のそばに連れて来なさい。もう慢心することもなかろう。（一七）」

彼女が触れるやいなや、体がぐったりして、インドラは地上にくずれ落ちた。激しい威光に満ちた尊い神（実はシヴァ神）は彼に言った。

「シャクラよ、二度と再びあのようにしてはならぬ。（一八）この山の王をどけなさい。あなたの力と精力は無比であるから。山をどけてその中に入りなさい。その中に、太陽のように輝く、あなたと同様の者たちがいるであろう。（一九）」

彼が大山の峰をどけると、彼と等しい輝きを持つ四名の者たちを見出した。彼は彼らを見て悩んだ。「自分も彼らのようになるのであろうか」と。（二〇）すると山の神（シヴァ）は、両眼を見開いて怒り、インドラに言った。

「インドラよ、この洞穴に入れ。汝は愚かにも私を侮辱したから。（二一）」

主にこのように言われて、神々の王は呪詛を恐れて、山の王の頂で風に揺られるアシュヴアッタ樹の葉のように、身体の力も抜け、ひどくふるえた。（二二）彼は突然このように告げられて、おののきながら、頭を下げて合掌し、恐ろしいシヴァ神に言った。

「主よ、今日のところは大目に見て下さい。〔二三〕」

恐ろしい弓を持つ神（シヴァ）は笑って答えた。

「汝のような性質の者は救済されることはない。これらの者たちも前と同様になるであろう。それ故、この洞穴に入って寝ておれ。〔二四〕そうすれば、疑いなく汝らに救済が訪れるであろう。汝らはみな人間の女の胎内に入るべきだ。そこで汝らはなしがたい行動を行ない、他の多くの人々を死に至らしめる。〔二五〕それから、再びインドラの世界にもどるであろう。自己の行為により、以前獲得していたすばらしい世界に。私が告げたことをすべて、その通りに行ないなさい。また、その他様々な意義あることをも。〔二六〕」

前のインドラたちは言った。

「我々は神の世界から、救済が得られがたいと定められている。人間の世界へ行こう。だが、神々が我々を母胎に宿らせてくれなければならない。ダルマ神と風神とインドラとアシュヴィン双神が。〔二七〕」

ヴィヤーサは語った。——

インドラはそれを聞いて、再び最高神に言った。

「私はその仕事のため、私の精液で、これらのうちの第五番目の男を生み出そう。〔二八〕」

恐ろしい弓を持つ神は、本来の恵み深い性質から、彼らの告げた願望をかなえてやった。そして、人間界において、世界中で愛されるあのシュリー（美と幸運の女神）が彼らの妻になるようにした。〔二九〕

それから、シヴァ神は、彼らとともに無比のナーラーヤナ（ヴィシュヌと同一視される）のところへ行った。その神もそのすべてを承認した。このようにして、みなは地上に生まれた。〔三〇〕そして、ハリ（ヴィシュヌ）は、白い毛髪と黒い毛髪を抜いた。二本のうち、一本はヤドゥ族の、ローヒニーとデーヴァキーという女性に入り込んだ。これらの二つの毛はバラデーヴァ（バララーマ）となり、もう一本の黒い毛はケーシャヴァ（クリシュナ）となった。〔三一〕あの最高の山の洞穴に、インドラの姿をとって前に閉じ込められていた男たちは、この（四名の）強力なパーンダヴァとなった。インドラの一部はアルジュナとなった。〔三二〕

王よ、このように、前にインドラであった者たちが、パーンダヴァとして生まれたのだ。そして、以前に彼らの妻に指定されたラクシュミー（シュリー、吉祥天）が、この神々しい姿のドラウパディーなのだ。〔三三〕というのは、神の計らい以外に、どうして祭式の終わりに、大地から女性が出現しようか。その容色は月や太陽のように輝き、そのすばらしい芳香が一クローシャ（距離の単位）も広がるような女性が。〔三四〕王よ、私はまた、満足して、あなたにもう一つの、非常に驚異的な恩恵を授けよう。天眼を与える。クンティーの息子たちを見なさい。清浄で神聖な以前の身体をそなえた。〔三五〕

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、高邁で清浄なバラモンであるヴィヤーサは、その苦行の力により、王に天眼を

与えた。王は彼らすべてがまさに以前の身体をそなえているのを見た。（三六）彼らは神々しく、黄金の王冠と花輪をつけ、インドラに似て、火や太陽のような色をし、装身具で飾られ、若く魅力ある姿で、広い胸を持ち、棕櫚のように背が高かった。（三七）ほこりのつかない神々の衣服をまとい、黄金のすばらしい花輪でこの上なく輝き、三眼の神（シヴァ）かヴァス神群かアーディティヤ神群の化身のようで、すべての美質をそなえていた。彼ら美しい過去のインドラたちを見て、ドルパダ王は喜びかつ驚嘆した。（三八）王は無量の神的な幻力（マーヤー）を得て、シュリーのように最上の容色をそなえ、容姿と光輝と誉れの点で彼らにふさわしい、完全無欠な妻を見出した。（三九）彼はこの大なる奇蹟を見て、ヴィヤーサの両足を持って（平伏した。）そして、満足して、「最高の聖仙よ、あなたにあっては、このようなことは不思議ではありません」と彼に言った。（四〇）

ヴィヤーサは告げた。

「ある苦行林に、ある偉大な聖仙の娘がいた。その娘は美しかったが、夫を見つけることができなかった。（四一）彼女は激しい苦行によりシャンカラ（シヴァ）を満足させたという■主は喜んで、自ら『願いごとを選べ』と彼女に告げた。（四二）そこで娘は、願いをかなえる主に、繰り返し言った。

『すべての美質をそなえた夫を望みます。（四三）』

満足した神々の主シャンカラは、彼女のその願いをかなえた。

『お前に五人のすばらしい夫ができるであろう。（四四）』

彼女は神の御機嫌を取りながら、再び言った。

『私は美質をそなえた一人の夫をいただくだけでよいのです。』

神々のうちの神は機嫌よく、次のようなめでたき言葉を述べた。（四五）

『お前は、夫を下さいと五回告げた。娘よ、その通りになるであろう。お前に幸あらんことを。お前が他の身体に移った時、告げた通りになるであろう。（四六）』

ドルパダよ、彼女は神のような姿をして、あなたの娘として生まれた。非難の余地ないクリシュナー・パールシャティー（ドラウパディー）は、五王子の妻と定められているのだ■（四七）天上のシュリーは、激しい苦行を行ない、パーンダヴァのために、盛大な祭式から生じて、あなたの娘となった。（四八）この神々に愛された光り輝く女神は、自身の行なった行為により、五人の共通の妻となる。梵天は自らそのように彼女を創り出したのだ。ドルパダ王よ、このことを聞いたら、望み通りにするがよい。（四九）」

（第百八十九章）

ドルパダは言った。

「大仙よ、あなたのお言葉を聞かない前は、私はこの件に（反対しようと）努めました。だが、（天に）定められたことに背くことはできません。これはまさに定めですから従うべきです。（一）運命の結び目はほどけません。この世には、自己の行為により定められるものは何もありません。一人の婿のためになされたことが、多くの婿のためのものとなりました。

(二)クリシュナーは前生で、『神よ、私に多くの夫を与えて下さい』と言ったから、その神は、『願い通りにしよう』と彼女に告げました。まことに神はこれについて、最善のことを知っておられるのです。(三)また、シャンカラ(シヴァ)が定められたのですから、法(ダルマ)にかなおうとかなうまいと、私には罪はありません。彼らは作法に従って、望み通りに彼女の手をとる(結婚する)のがよいでしょう。クリシュナーは彼らに定められたのですから。(四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから聖者はダルマ王(ユディシティラ)に言った。

「パーンドゥの息子よ、今日は吉日である。今日、月はプシャ星宿と結合した。お前が最初にクリシュナーの手をとれ。(五)」

そこでヤジュニャセーナ(ドルパダ)王とその息子は、新郎側の人々のための多くの高価な品を運ばせ、娘のクリシュナーを沐浴させ、多くの宝石により飾らせた。(六)それから、彼のすべての友人や、大臣や顧問官や、バラモンや、主立った市民たちが、その結婚を見るために、大喜びで集まって来た。(七)彼の家は、施物を求める人々で飾られ、その庭には種々の蓮が咲き乱れ、高価な宝石の群で燦然と輝いていた。まるで、清らかな星のきらめく天空のように。(八)クル族の若い王子たち(パーンダヴァ)は、飾りつけられ、耳環をつけ、高価な衣服をまとい、上等な栴檀水を注がれ、灌頂(かんじょう)を行ない、浄めの儀式を行なった。(九)彼らはみな、火のように輝く宮廷祭僧ダウミヤとともに、作法にのっとり、次々とその式場に入った。喜んだ大きな雄牛たちが牛舎に入るように。(一〇)それから、そのヴェーダに通じた祭僧は火を燃やし、聖句(マントラ)とともに供物を投じた。そして祭僧はユディシティラを招じ入れて、クリシュナーと結びつけた。(一一)それから、ヴェーダに通じた彼は、手をとり合った二人を、火の周囲を右まわりにまわらせた。それから祭僧は、勇士ユディシティラに別れを告げて王宮を出て行った。(一二)このような次第により、クルの家系を繁栄させる王子たち、最高の容姿を持つ勇士たちは、一日ごとに、そのすばらしい女性の手をとった。(一三)そして、かの梵仙は次のような超人的な最高の奇蹟を告げた。——その威厳に満ちた美しい胴の女は、日毎に処女になったということである。(一四)

結婚式が終わった時、ドルパダ王は勇士たちに多様な最高の財物を贈った。また、上質の黄金で飾られ、それぞれ四頭の馬をつなぎ、金の馬具で飾られた、百台の戦車を贈った。(一五)金色の峰を持つ百の山のような、すばらしい百頭の象を贈った。また、若さにあふれ、高価な衣装と装身具と花輪をつけた、百人の召使女を贈った。(一六)また、ソーマカの王は、聖火の前で、一人一人に、十万の値打ちの財宝を贈った。また、彼の力にふさわしい、高価な衣服と装飾品を贈った。(一七)結婚式が終了して、強力なパーンダヴァ兄弟は多くの宝物とともにかのシュリー(幸運の女神)を得て、インドラのように、パーンチャーラ国王の都で楽しい時を過ごした。(一八)

(第百九十章)/(第百九十一章略)

⒁ ヴィドゥラの到着（第百九十二章—第百九十八章）

パーンダヴァに対する協議

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

美しいドラウパディーがパーンダヴァの妻になったという情報は、信頼の置けるスパイたちによって諸王のもとにもたらされた。（一）あの弓を引いて的を射貫いた偉丈夫は、偉大な弓取りである最高の勝利者アルジュナであったというのである。（二）そして、戦闘において、マドラ王シャリヤを持ち上げて振りまわし、怒って樹木で人々をおびやかした大力の男、そこで少しも動揺しなかったあの偉丈夫は、触れるだけでも恐ろしい勇士ビーマであったのだ。（三―四）

パーンドゥとクンティーの息子たちがバラモンの姿をしていたと聞いて、彼らはすっかり驚いた。（五）というのは、クンティーと息子たちはラックの家で焼死したと聞いていたから、すべての王たちは、「彼らは再生したのだ」と考えたのである。（六）彼らは、プローチャナの行なった冷酷な行為について、クル族のビーシュマを非難した。（七）婿選び式（スヴァヤンヴァラ）が完了して、パーンダヴァ兄弟が選ばれたことを知って、すべての王は、来た道を引き返して行った。（八）

ドゥルヨーダナ王子は、白馬にひかれる勇士（アルジュナ）がドラウパディーに選ばれたのを見て落胆し、兄弟たちとアシュヴァッターマンと母方の叔父（シャクニ）とカルナとクリパとともに

引き返した。ドゥフシャーサナは屈辱を感じながら、低い声で彼に話しかけた。（九―一〇）

「もし彼がバラモンになりすましていなかったら、彼はドラウパディーを獲得できなかったでしょう。王子よ、誰も彼をアルジュナであると正しく見抜けなかったのですから。（一一）運命こそが最も強力であると思います。人間の努力は成果をもたらしません。兄さん、我々の努力は何にもならなかった。パーンダヴァは生きているのですから。（一二）」

彼らはそのように話し合いながら、プローチャナの悪口を言った。やがて彼らは、悩み落胆して、ハースティナプラに入った。（一三）威光に満ちたパーンダヴァが火災から逃れ、ドルパダと結びついたことを知って、また、ドルパダの息子ドリシタデュムナ、シカンディン、及びその他の者たちが歴戦の勇士であることを考えて、彼らは恐れ、希望を失った。（一四―一五）

ところがヴィドゥラは、ドラウパディーがパーンダヴァ兄弟を選んだことを聞き、またドリタラーシトラの息子たちが屈辱を味わい誇りを砕かれて帰ったのを聞いて驚嘆し、喜んでドリタラーシトラに告げた。

「幸いなことに、クルの一族は繁栄いたします。（一六―一七）」

ドリタラーシトラ王はヴィドゥラの言葉を聞いて大いに喜び、「よかった、よかった」と言った。（一八）というのは、盲目の王は、真実を知らずに、長男のドゥルヨーダナがドルパダの娘に選ばれたと思ったからである。（一九）そこで彼はドラウパディーに多くの装飾品を与えるように命じ、「クリシュナー（ドラウパディー）を連れてくるように」と息子ドゥルヨーダナに

命じた。(二〇)後になってから、ヴィドゥラは彼に、選ばれたのはパーンダヴァ兄弟であること、勇士たちはすべて息災でありドルパダに尊敬されていること、その他の兵力を有する多くの人々が彼らと結びついたことを告げた。(二一)

ドリタラーシトラは言った。

「パーンドゥの息子たちは私にとっても息子同然、いやそれ以上である。ヴィドゥラよ、勇士たちが息災であり友邦を得たのであるから、私はいやが上にも嬉しく思う。(二二)というのは、富貴を失って、権力を求める王のうち、ドルパダとその親族を得て、友となりたくないものがあろうか。(二三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

王がそのように述べた時、ヴィドゥラは王に言った。

「王よ、あなたのそのお考えが百年間続きますように。(二四)」

その時、ドゥルヨーダナとカルナが、ドリタラーシトラに近づいて来て次のように言った。(二五)

「王よ、ヴィドゥラのいるところではあなたにお話しできません。内密に申し上げたいことがあります。〔ここでヴィドゥラは退場する〕

あなたはどのようになさりたいのですか。(二六)あなたは競争者の繁栄を御自分の繁栄と考えられるのですか。最高の人よ、あなたはヴィドゥラの前で彼らを称讃したではありませんか。(二七)あることをすべきなのに、あなたは他のことをしています。罪のない方よ。お父さん、常に彼らの力を滅すべきなのです。(二八)〔今や行動の〕時が来ました。我々はそれを追求すべく協議しましょう。彼らが我々と息子と親族と軍隊とを呑みこまないうちに。(二九)」

(第百九十二章)

ドリタラーシトラは言った。

「私もまたお前たちと同じように考えていた。しかし、ヴィドゥラに様子を悟られたくはなかった。(一)そこで、ことさらに彼らの美質のみを称讃したのである。ヴィドゥラが私の意図をそぶりによって見抜けないように。(二)スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)よ、お前が適切と思うことを言いなさい。そしてカルナよ、お前が適切と思うことを私に言いなさい。(三)」

ドゥルヨーダナは言った。

「信頼の置ける巧妙なバラモンを用いて、クンティーの息子たちとマードリーの二人の息子とを離間させましょう。(四)あるいは、ドルパダ王とその息子たちと大臣たちをすべて、莫大な財物で迷わせて、ユディシティラ王子を捨てさせるべきです。または、彼らをかの地にのみ住みたいという気にさせるべきです。こちらに住むのはよくないと一つ一つ説いて、彼らが〔我々から〕離れ、かの地にばかり心を向けるようにすべきです。(五－七)あるいは、方策に長けた誰か巧妙な者を用いて、〔共通の妻に対する〕愛欲を利用して彼らを相互に離間

させるべきです。(八)またはクリシュナー（ドラウパディー）を憤慨させるべきです。彼らは数が多いから、これは容易でしょう。または、まずパーンダヴァを彼女から離間させて、それから彼女を離間させるべきです。(九)または、方策に長けた者を用いて、ビーマセーナを暗殺すべきです。彼は彼らのうちで最も大力ですから。(一〇)彼が殺されれば、彼らは気力を無くし、もはや王位を求めないでしょう。ビーマは彼らの依り所ですから。(一一)アルジュナは、ビーマが背後を守っている時に、戦場において不敗なのです。彼がいなければ、アルジュナは戦いにおいてカルナの四分の一にも及びません。(一二)彼らはビーマセーナがいないと非常に無力であると知り、また我々が強力であると知り、脆くも滅亡してしまうでしょう。(一三)もしパーンダヴァたちが命令に従ってここに来たら、王よ、信頼させておいて死に至らしめましょう。(一四)あるいは、美しい女を用いて、パーンダヴァたちを一人一人惑わせるべきです。そうして、クリシュナーが嫌悪を抱くようにしむけましょう。(一五)あるいは、彼らがここに来るようにとカルナを派遣すべきです。信頼の置ける盗賊たちが途中で遭遇して彼らを殺すように仕組みましょう。(一六)これらの方策のうちで、あなたがよいと思うものを実行に移しなさい。手遅れにならぬうちに。(一七)彼らが王中の雄牛ドルパダに完全に信頼されない今なら、彼らを滅ぼせます。しかし、今後はそうは行きません。(一八)父上、これが彼らをやっつけるための私の意見です。カルナよ、お前はこれがよいと思うか、それとも悪いと思うか。(一九)」

（第百九十三章）

カルナは言った。

「ドゥルヨーダナよ、私はあなたの知恵が正しいとは思わない。パーンダヴァ兄弟は方策によっては滅ぼすことができない。(一)前にもあなたは巧妙な方策で彼らをやっつけようと骨を折ったが、彼らを滅ぼすことはできなかった。(二)王よ、彼らはここ、あなたの近くにいたころ、まだ羽（パクシャ）の生えていない（味方のいない）雛だったが、それでも彼らを抑えることはできなかった。(三)今や彼らはすべて成長し、羽も生え（味方もでき）、異国にいる。方策によっては彼らを滅ぼすことはできないと私は信じている。(四)また、彼らを悪徳にふけらせることもできない。彼らは定まった目的を抱いているから。彼らは疑念を抱いており、父祖の地位を望んでいる。(五)また、彼らを相互に離間させることもできない。同一の妻を愛する男たちは互いに離間しない。(六)また、他者を用いて、クリシュナーを彼らから離間させることはできない。彼女は惨めな彼らを選んだのである。いわんや今、彼らが着飾っている時はなおさらである。(七)一人の女が多くの夫を持つことは、女たちにとって好ましい徳である。クリシュナーはそれを得たのであるから、容易には彼女を離間させることはできない。(八)また、パーンチャーラ国王は廉潔な人である。その王は財物を好まない。たとえ王国を与えても、きっと彼はクンティーの息子たちを捨てないだろう。(九)同様に、彼の息子も有徳で、パーンダヴァ兄弟を敬愛している。それ故、方策により彼らを成敗することは決してできないと私は考える。(一〇)だが、我々は今、次のようにすればよいであろう。人中の雄牛である王

よ。
パーンドゥの息子たちが根を張らぬうちに、彼らを刈り取るべきです。あなたの武勲が輝きますように。(一一)我々の味方が強大で、パーンチャーラの側が弱小であるうちに、彼らを討つべきです。躊躇してはなりません。(一二)彼らの乗物が多くなり、友邦が多くならないうちに、ドゥルヨーダナよ、速やかに武勇に訴えなさい。(一三)パーンチャーラ国王とその強力な息子たちが立ち上がる決意をしないうちに、速やかに武勇に訴えなさい。(一四)ヴリシュニ族の長(クリシュナ)が、パーンドゥの息子たちに王国を取らせるために、ヤーダヴァの軍を引き連れて来ないうちに、速やかに武勇に訴えなさい。(一五)財産、種々の享楽、王国ですら……、王よ、クリシュナがパーンダヴァのために捨てないものはない。(一六)
偉大なバラタは武勇によって地上を征服した。またインドラは、武勇によって三界を征服した。(一七)王よ、王族(クシャトリヤ)にあっては、武勇が讃えられる。王中の雄牛よ、武勇は勇士たちの本務である。(一八)王よ、あなたの四部(象・馬・戦車・歩兵)よりなる大軍によって、ドルパダを粉砕して、速やかにパーンダヴァを連れて来よう。(一九)懐柔策によっても、贈与策によっても、離間策によっても、パーンダヴァを成敗することはできないから、武勇に訴えて彼らを殺そう。(二〇)武勇により彼らに勝利して、この全地上を享受しなさい。王よ、他に方法はありません。(二一)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――

栄光あるドリタラーシトラは、カルナの言葉を聞いて称讃してから、次のように告げた。(二二)
「そのような勇猛な言葉は、叡知に満ち、武器を修得したお前にふさわしい。(二三)しかし、もう一度、ビーシュマとドローナとヴィドゥラと、お前たち二人で、我々に幸福をもたらすような知恵を考え出して欲しい。(二四)」
そこで誉れ高いドリタラーシトラは、すべての顧問官を集めて協議した。(二五)

(第百九十四章)

パーンダヴァとの講和

ビーシュマは言った。
「私は決してパーンドゥの息子たちと戦争をしたくない。私にとって、ドリタラーシトラもパーンドゥも同じなのだ。(一)そして、ガーンダーリーの息子たちもクンティーの息子たちも同じなのだ。ドリタラーシトラよ、私が彼らを守るべきであるように、お前も彼らを守らなければならぬ。(二)私や王と彼らとの関係は、ドゥルヨーダナやその他のすべてのクル族の人々と彼らとの関係と同じである。(三)そのようであるから、彼らとは戦争したくない。あの勇士たちと講和して、彼らに土地を与えるべきである。この王国は、彼らクルの最上者たちの祖先のものであり、父のものでもある。(四)ドゥルヨーダナよ、お前がこの王国を先

祖伝来のものと思うように、パーンダヴァたちも同じように考えているのだ。(五)もしパーンドゥの息子たちが気の毒に王国を得られないなら、それはどうしてお前のものであるのか。バラタ族のうちの誰のものでもありはしない。(六)バラタの雄牛よ、お前が合法的に王国を得たように、彼らもまたまず第一に王国を〔継承する権利を〕得たと私は考える。(七)快く王国の半分を彼らに与えるべきである。人中の虎よ、これがすべての人にとって幸福なことであるから。(八)もしそのようにしなければ、我々の幸福は実現しない。そして、すべてお前に不名誉なことになることは疑いない。(九)名誉を守れ。名誉は最高の力であるから。名誉を失った人の人生は実りのないものと伝えられている。(一〇)クルの王子ドゥルヨーダナよ、その人の名誉が失われないうちは、その人は生き続ける。しかるに、名誉を失った人は滅びる。(一一)クルの一族にふさわしい法(ダルマ)に従え。偉丈夫よ、自分の先人にふさわしくふるまえ。(一二)あの英雄たちが生きていたということは幸いなことだ。プリターが生きていたことは幸いなことだ。邪悪なプローチャナが望みを達しないで死んだということは幸いなことだ。(一三)

ドゥルヨーダナよ、クンティーがあのようなことになったのを聞いてから、それ以来、世間の誰にも顔向けができなかった。(一四)そして、世間の人々は、プローチャナの罪を非難するより、むしろお前の罪を非難している。(一五)ところが彼らが生きていたことにより、お前は罪を免れたことになる。偉大な王子よ、パーンダヴァと会うことを承知しなさい。(一六)あの勇士たちが生きている間は、インドラといえどもその父の遺産を奪うことはでき

ない。(一七)彼らはすべて法に立っていて、すべて心を一つにしているから。特に、王国〔の継承権〕は同等であるのに、彼らは非法によって追放されているのであるから。(一八)もしお前が法を守りたいなら、また、もし私を喜ばせたいなら、また、もし安寧を望むなら、彼らに王国の半分を与えなさい。(一九)」

(第百九十五章)

ドローナは言った。

「協議に集まった顧問たちは、法にかない、適切で、名誉あることを述べるべきであると聞いております。(一)私も偉大なビーシュマと同意見です。クンティーの息子たちに王国を分け与えるべきです。これは永遠の法です。(二)誰か気持よく話す者を速やかにドルパダのもとに派遣しなさい。彼らのために、多くの財宝を持って。(三)ドルパダのために、多くの縁組みの贈物を持って行かせなさい。その結びつきによって最高の繁栄が生ずることを告げさせるべきです。(四)あなたとドゥルヨーダナが喜んでいることを、ドルパダとドリシタデュムナの前で繰り返し告げさせるべきです。(五)そしてその結びつきが適切で好ましいことを語るべきです。繰り返しクンティーとマードリーの息子の機嫌を取りながら。(六)王中の王よ、あなたの言葉により、黄金製の多くの輝かしい装飾品をドラウパディーに贈るべきです。(七)また、すべてのドルパダの息子たちにも、パーンダヴァ全員にも、クンティーにも、ふさわしい装飾品を贈るべきです。(八)このようにして、ドルパダとパーンダヴァたちの機嫌

を取ってから、彼らの帰国について語るべきです。(九)勇士たちがいとま乞いをしたら、美々しい軍隊を派遣すべきです。そして、ドゥフシャーサナとヴィカルナとが、パーンダヴァたちをここに案内すべきです。(一〇)それから、常にあなたに尊敬されつつ、臣下たちの同意も得て、彼らは先祖伝来の地位に就くでしょう。(一一)大王よ、ビーシュマとともに、このようにするのが彼らにとっても、あなたの息子たちにとっても適切であると考えます。(一二)」

カルナは言った。

「腹心のビーシュマとドローナは、すべての仕事において、財物と尊敬を受けている。その二人があなたに有利なことを助言しないとは、これほど不思議なことがあろうか。(一三)悪意をもって、内心を隠して、これが最善だと助言しても、そういう人はどうして賢者たちに受け入れられようか。(一四)難局においては、友人は利益にも不利益にも役立たないものです。すべての人の幸不幸は運命に基づくからです。(一五)賢者も愚者も、老いも若きも、友があろうとなかろうと、人はいたるところであらゆる経験をします。(一六)

昔、ラージャグリハに、マガダ国の諸侯の王で、アンブヴィーチャという者がいた。(一七)彼は全く無能で、ただ息をしているのみという有様で、すべての業務において大臣たちに依存していた。(一八)彼の大臣のマハーカルニという者が最高権力者となり、自分は力を得たと考えて、王を軽蔑した。(一九)その愚か者は、王の享受すべきもの、女や財宝や権力を、すべて自分のものにした。(二〇)その欲張りの欲望は、それらの取得により増大した。

すべてを奪ってから、彼は王国を奪おうと望んだ。(二一)しかし、王は無能で息をすることしかできないのに、彼がいくら努力してもその王国を奪えなかったということであった。(二二)その王が王権を保ち得たのは、きっとそう定められていたからに他なりません。もし、あなたに王国が定められているなら、それは実現します。(二三)全世界の人々が見ている前で、それは必ずやあなたの手中に帰するでしょう。もし定められていないなら、いくら努力しても王国を得ないでしょう。(二四)賢者よ、このようにして、顧問たちが正しいか正しくないか考慮しなさい。そして、邪悪な者とそうでない者たちの言葉を見分けるべきです。(二五)」

ドローナは言った。

「お前がそんなことを言うのは、邪な気持からだということを我々は知っている。パーンダヴァに対する怨恨から、お前は我々の悪口を言っているのだ。(二六)しかしカルナよ、私はクル族を繁栄させるような、最高に有益なことを言っているのである。もしお前がそれを悪いと思うなら、何が最高に有益なことか言ってみよ。(二七)しかし、もし私の言った最高に有益なことと別のことをしたら、クル族は遠からず滅亡すると私は考える。(二八)」

(第百九十六章)

ヴィドゥラは言った。

「王よ、あなたの親族たちは疑いもなく最善の助言をしました。しかし、聞く耳を持たぬ人々には、そのような助言は受け入れられません。(一)クルの長である王よ、ビーシュマはあなたに有益な助言をしましたが、あなたはそれを受け入れなかった。(二)同様にドローナも最高に有益なことを色々と述べたが、カルナはそれがあなたに有益とは考えませんでした。(三)しかし王よ、私が考えるには、あなたにとって、その獅子のような二人の人物よりも親密で、叡知において優れている人は見あたりません。(四)二人は年齢の点でも叡知の点でも博識の点でも長老で、あなたに対してもあのパーンドゥの息子たちに対しても公平です。(五)二人は法(ダルマ)と真実を守ることにおいて、疑いもなく、ダシャラタの息子ラーマやガヤ(王仙名)にも劣りません。(六)この二人は、いまだかつて、あなたに対して何らよからぬことを言ったこともなければ、何か悪いことを行なったこともありません。(七)この不屈の勇者である虎のような二人が、あなたが罪も犯していないのに、あなたに有益なことを助言しないはずはありません。(八)この世における最高の人であるこの二人の賢者は、決してあなたのために曲ったことを言いません。これが私の結論です。(九)(一〇—二二略)

王よ、彼らに好意をかけることにより、あのプローチャナがもたらした御自分の大きな不名誉をぬぐい去りなさい。(二三)また、ドルパダ大王は、かつて我々に怨みを抱きました。彼を受け入れることは、味方を増大させることです。(二四)王よ、そしてダシャールハ族(ヤーダヴァ族)は強力で多数です。クリシュナのいるところに彼らもおります。そして、クリシュナのいるところに勝利があります。(二五)講和によって目的を成就できる場合に戦争に訴える

ような、それほど運命に呪われた者がおりましょうか。(二六)市民と地方民たちは、パーンダヴァ兄弟が生きていると聞いて、非常に会いたいと望んでいます。王よ、彼らを喜ばせてやって下さい。(二七)ドゥルヨーダナとカルナとシャクニは、法(ダルマ)にもとり、叡知をそなえておらず、幼稚です。彼らの言葉に従ってはなりませぬ。(二八)王よ、私は以前、高徳のあなたに申し上げました。ドゥルヨーダナの過失によりこの民は滅亡するであろうと。(二九)」

(第百九十七章)

ドリタラーシトラは言った。

「賢者ビーシュマと聖仙ドローナは、最高に有益な助言をしてくれた。お前も私に真実を語った。(一)クンティーの息子である勇猛な戦士たちが、パーンドゥの息子であるように、法によって、彼らすべてが私の息子であることは疑いない。(二)この王国が私の息子たちに定められているように、この王国がパーンドゥの息子たちに定められていることも疑いない。(三)ヴィドゥラよ、行って彼らに敬意を表し、母親と、神のような姿のクリシュナー(ドラウパディー)とともに連れて来なさい。(四)幸いなことに、パーンダヴァ兄弟は生きていた。幸いなことに、プリター(クンティー)は生きていた。幸いなことに、勇士たちはドルパダの娘を獲得した。(五)幸いなことに、我々はみな栄える。幸いなことに、プローチャナは滅んだ。幸いなことに、私の大きな悩みがなくなった。輝きに満ちたものよ。(六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そこでヴィドゥラは、ドリタラーシトラの命により、ヤジュニャセーナ（ドルパダ）とパーンダヴァ兄弟のもとに行った。（七）法（ダルマ）を知り、すべての学問に通じた彼は、ドルパダと会い、ふさわしく敬意を表した。（八）王の方も法に従ってヴィドゥラを受け入れた。そして両者は形のごとくお互いの健康をたずねあった。（九）ヴィドゥラはそこに、パーンダヴァ兄弟とヴァースデーヴァ（クリシュナ）を見た。彼は彼らを愛情をこめて抱いて、息災であるかどうかたずねた。（一〇）次々と彼らに敬礼されて、無量の知性を持つヴィドゥラは、ドリタラーシトラの言葉により、パーンドゥの息子たちに、繰り返し愛情をこめて息災かどうかたずねた。それから、クル一族によって与えられた種々の宝物や財物を、パーンダヴァとクンティーとドラウパディーとドルパダの息子たちに贈った。（一一―一三）そして、無量の叡知を有する彼は、パーンドゥの息子たちとクリシュナの前で、礼儀正しく、礼節を知るドルパダに告げた。（一四）

「王よ、大臣や息子たちとともに私の言葉をお聞き下さい。ドリタラーシトラとその息子たち、及び大臣と親族たちは、喜んで、幾重にもよろしくと申しておりました。王よ、彼らはまた、この縁組みを非常に喜んでおります。（一五―一六）叡知に満ちたビーシュマも、すべてのクル族の人々とともに、あなた様によろしくと申しておりました。（一七）あなたの友人である、偉大な弓取りドローナも、よろしくと申しておりました。（一八）パーンチャーラの王よ、あなたと親縁関係になったドリタラーシトラは、自分は目的を成就したと考えています。すべてのクル族の人々も同様です。（一九）ヤジュニャセーナよ、たとえ彼らが王国を獲得したとしても、あなたと縁組みするほど喜ばないでしょう。（二〇）このことを承知されたら、パーンダヴァたちを出発させて下さい。クル族の人々は、早くパーンドゥの息子たちに会いたいと切望しております。（二一）彼ら人中の雄牛は、長いこと異国に住みました。彼らもプリターも、都を見たいと願っているでしょう。（二二）そして、すべてのクルの貴婦人たちや、市民や国民たちは、パーンチャーラの姫クリシュナーを見たいと待ちこがれています。（二三）そこであなた様は、パーンドゥの息子たちとその妻、及び私が出発するよう、速やかにお命じ下さい。（二四）王よ、偉大なパーンダヴァたちがあなたに出発を許されたら、ドリタラーシトラに飛脚を送ります。それからパーンダヴァたちとクンティーは、クリシュナーとともに帰国するでしょう。（二五）」

（第百九十八章）

(15) 王国の獲得（第百九十九章）

象の都のパーンダヴァ

ドルパダは言った。

「賢者ヴィドゥラよ、あなたの言う通りだ。この縁組みは私にとっても大きな喜びである。(二) また、この偉大な者たちが家に帰ることは適切なことであろう。しかし、何と言っても、私が自分の言葉でそれを言うことはできない。(三) クンティーの息子である勇士ユディシティラ、ビーマセーナとアルジュナ、雄牛のような双子(ナクラとサハデーヴァ)が同意するなら、また、法(ダルマ)を知るラーマ(バララーマ)とクリシュナとが同意するなら、パーンダヴァ兄弟は帰国するがよい。というのは、この虎のような二人は、彼らの幸福を願っているから。(三―四)」

ユディシティラは言った。

「王よ、我々は弟たちとともに、すべてあなたに依存しています。我々は喜んであなたが言われる通りにいたします。(五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

するとヴァースデーヴァ(クリシュナ)は告げた。

「私は行くのがよいと思う。すべての法を知るドルパダ王が考えるように。(六)」

ドルパダは言った。

「ダシャールハ族の英雄(クリシュナ)、偉丈夫、最高の人が思われるように、その時節が至ったと確信している。(七) 今、私にとって、パーンダヴァたちが大切であるように、ヴァースデーヴァ(クリシュナ)にとっても、彼らが大切であることは疑いない。(八) ダルマの息子であるユディシティラでさえも、人中の虎であるクリシュナが彼らの幸せを願うほどには〔自分たちの〕幸せを願っていないほどだ。(九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、パーンダヴァとクリシュナとヴィドゥラは、ドルパダに別れを告げて、ドラウパディー(クリシュナー)と誉れ高いクンティーを伴ない、楽しく快適に旅して、象の都(ハースティナプラ)へ行った。(一〇―一一) ドリタラーシトラは勇士たちが来ると聞いて、彼らを迎えるために、偉大な弓取りであるヴィカルナとチトラセーナと、最高の弓取りのドローナと、クリパとを派遣した。(一二―一三) 彼らに取り囲まれて、偉大な勇士たちは輝かしく、ゆっくりとハースティナプラの都に入った。(一四) (一五―二〇略) それから彼らは、ドリタラーシトラと、偉大なビーシュマと、その他のふさわしい人々に対して、その足もとに平伏した。(二一) 彼らは全市民と挨拶を交してから、ドリタラーシトラの命に従いその家に入った。(二二) しばらくして勇士たちが疲れもとれた時、彼らはドリタラーシトラ王に呼ばれた。(二三)

ドリタラーシトラは言った。

「ユディシティラよ、弟たちとともに私の言葉を聞きなさい。また諍(いさか)いが起こらぬように、

カーンダヴァプラスタに住みなさい。（二四）お前たちがそこに住み、神々がインドラに守られるように、アルジュナに守護されていれば、誰もお前たちを害することはできない。王国の半分を得て、カーンダヴァプラスタに入れ。（二五）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

彼らはみな、その言葉を受け入れて、王に敬礼した。それから、人中の雄牛たちは、恐ろしい森に向けて出発し、王国の半分を受けて、カーンダヴァプラスタに入った。（二六）不滅の勇士たちは、ヴィヤーサに先導されてそこに行き、その都を天界のように飾りつけた。（二七）そして、ヴィヤーサを導師として、その清浄で吉祥なる土地で地鎮祭を行なってから、勇士たちはその都を測量させた。（二八）その都は、海のような濠に飾られ、白雲のように輝き、雪の山にも似た、空をおおう城壁をそなえていた。そのすばらしい都は、竜（蛇）によって輝くボーガヴァティー（地底の都市）のように輝いていた。（二九—三〇）それは、両翼を持つガルダ鳥に似た恐ろしい形の城門や、雲の群に似た、マンダラ山のような楼門によって守られていた。（三一）（三二—三四略）かくて、インドラプラスタ（パーンダヴァの首都）は、天界（インドラの世界）にも似て、稲妻に囲まれた空中の雲の群のように輝いていた。（三五）その心地よく清浄な地に、クルの末裔（パーンダヴァ）の居城があった。それは財宝の神（クベーラ）の住処にも似て、財宝に満ち、輝いていた。（三六）最高のヴェーダ学者であり、あらゆる言語を知るバラモンたちが、そこにやって来て、喜んで住みついた。（三七）諸地方から財物を求める商人たちがその地にやって来た。

そして、すべての技術を知る人々が、住むために集まって来た。（三八）（三九—四六略）

パーンダヴァたちが、清らかな人々の住む広大な領土に住んでいる間に、彼らの喜びは常に増大した。（四七）こうして、ビーシュマと王（ドリタラーシトラ）が法を守ったおかげで、パーンダヴァたちはカーンダヴァプラスタに住むこととなったのである。（四八）五人のインドラのような勇士のいるそのすばらしい都は、竜によって輝くボーガヴァティーのように輝いた。（四九）英雄クリシュナは、パーンダヴァたちをそこに定住させてから、彼らの同意を得て、〔バラ〕ラーマとともに、ドゥヴァーラヴァティーに帰った。（五〇）

（第百九十九章）

(16) アルジュナ、森に住む（第二百章―第二百十章）

天女を争った悪魔の兄弟

ジャナメージャヤはたずねた。

「苦行者よ、このようにインドラプラスタにおいて王国を得てから、偉大なパーンダヴァたちはその後どのようにしたか。(一)私の先祖であるすべての偉大な人々は……。そして、正妻ドラウパディーは、どのように彼らに従ったか。(二)また、これら五名の栄光に満ちた王者たちは、どのようにして、一人の妻クリシュナー（ドラウパディー）をめぐって、お互いに離間しなかったのか。(三)苦行者よ、私はすべてを詳細に聞きたいと望む。クリシュナーと結婚した彼ら一人一人の行動を。(四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ドリタラーシトラに承認されて王国を得た、威光に満ちた、人中の虎であるパーンダヴァたちは、クリシュナーとともに楽しく暮らした。(五)威光に満ちた、真実を重んじるユディシティラは、王国を得て、法（ダルマ）に従って弟たちとともに地上を守護した。(六)叡知に満ち、真実と法に専念するパーンドゥの息子たちは、最高の喜びを味わいながらそこに住んだ。(七)人中の雄牛たちは、市民たちのためにすべての職務を果たしながら、高価な王座に座していた。(八)さて、彼ら偉大な男たちがみなして座っていた時、たまたま神仙ナーラダが訪れた。(九)

聡明なユディシティラは、神仙が座った時、自ら作法に従って接客用の品を出してから、彼に王国の様子を報告した。(一〇)聖仙はそのもてなしを受けて満足し、祝福の言葉によって讃えてから、彼に「座りなさい」と告げた。(一一)ユディシティラ王は許しを得て座り、クリシュナーに使いを遣って、聖者が訪れたことを知らせた。(一二)ドラウパディー（クリシュナー）はそれを聞くやいなや、入念に身を浄めてから、ナーラダとパーンダヴァたちがいる所に来た。(一三)敬虔なドルパダの娘は、神仙の足下に平伏し、合掌し、ふさわしくヴェールをまとって立っていた。(一四)徳性あり真実を語る最高の聖仙ナーラダは、クリシュナーに種々の祝福の言葉をかけてから、その非の打ち所のない女性に、「もう行ってよろしい」と告げた。(一五)クリシュナーが去った時、聖仙は、人のいない所で、ユディシティラをはじめとするパーンダヴァたちに言った。(一六)

「誉れ高いパーンチャーラの王女（クリシュナー）は、あなた方の共通の正妻である。あなたたちが離間しないように、規定を定めなければならない。(一七)

スンダとウパスンダという、三界において有名な阿修羅（アスラ）の兄弟がいた。彼らはいつもいっしょにいて、他の者たちには殺されることはなかった。(一八)彼らは共通の王国を治め、同じ家に住み、寝食を共にしていたが、ティローッタマー（天女の名）をめぐってお互いに殺し合った。(一九)それ故、お互いを栄えさせるような友情を守りなさい。ユディシティラよ、あなた方に離間が生じないようにしなさい。(二〇)」

ユディシティラはたずねた。

「偉大な聖者よ、スンダとウパスンダという阿修羅は何者の息子ですか。また、どうして離間が生じたのですか。どうしてお互いに殺し合ったのですか。(二一)また、そのティローッタマーという天女は誰の娘ですか。彼女に対する愛ゆえに迷った彼らがお互いに殺し合ったというその天女は。(二二)苦行者よ、これらすべてをありのままに聞きたいと思います。我々は非常に興味があります。(二三)」

（第二百章）

ナーラダは語った。——

ユディシティラよ、私はこの古い物語を詳しく語るから、弟たちとともに、ありのままに聴きなさい。(一)

昔、偉大な阿修羅ヒラニヤカシプの家系に、ニクンバという、威光ある強力な悪魔の王がいた。(二)恐ろしく勇猛で強力な二人の息子が彼に生まれた。彼らはいっしょに食事をし、お互いに相手なしではどこへも行かなかった。(三)二人はお互いの喜ぶことをなし、お互いの好ましいことを語り、性質も行ないも同じで、一つのものが二つに分かれたかのようであった。(四)

この強力な兄弟は、成長した時、何か仕事をする際には必ず同じ決定をするのだった。そして彼らは、心を合わせて、三界を征服しようと企てた。(五)そのために彼らは潔斎し、ヴィンディヤ山に行き、そこで激しい苦行を行なった。長い時が過ぎて、彼らは苦行の力を獲

得した。(六)彼らは飢えと渇きに苦しみ、髪を結い樹皮をまとい、全身ほこりにまみれ、風を食べて(断食して)いた。(七)彼らは自身の肉を火中に供え、つま先で立ち、上方に腕を上げて、瞬きをしないで、長い間誓戒を守っていた。(八)ヴィンディヤ山は、二人の苦行の力に長いこと熱せられて煙を放った。それは奇蹟のようであった。(九)神々は二人の激しい苦行を見て恐れ、その苦行をやめさせるために色々と妨害をした。(一〇)そこで宝物や女たちで二人を何度も迷わせようとしたが、大戒に専念する兄弟は誓戒を中断することはなかった。(一一)そこで神々はその偉大な二人に対して幻術(マーヤー)を用いた。——彼らの妹たちや母や妻や従者たちが、装身具を落し髪をふり乱し、着物もすっかり脱げ、槍を持つ羅刹たちにおびえて逃げまどっていた。(一二—一三)すべての女たちは、走りまわって、彼らに向かって「助けて」と叫んでいた。しかし、大戒に専念している兄弟は、誓戒を中断することはなかった。(一四)彼らのいずれも動揺せず、苦しまないでいた時、女たちと鬼たちはすべて消え失せた。(一五)

それから、全世界の祖父(ピターマハ)である梵天は、直々に偉大な阿修羅に近づいて、二人の願いをかなえてやった。(一六)その時、非常に勇猛な兄弟スンダとウパスンダは、梵天を見て、合掌して立った。(一七)そして、二人はいっしょに、主なる神に告げた。

「もし祖父が我々の苦行に満足されたなら、我々が幻術と武器を知悉し、強力であり、望むままの姿をとれるようにして下さい。もし主が我々に満足されるなら、二人とも不老になれますように。(一八—一九)」

梵天は言った。

「不死となることを除いて、願ったことはすべて実現するであろう。不死なる者たち（神々）に等しい、何か他の死の定め（死に方）を選べ。（二〇）このようにしよう（異本「勢力を持とう」）として、激しい苦行を始めたのであろうから、汝らを不死にすることはしない。（二一）汝らは三界を征服するために苦行を企てたのであろうから、魔王たちよ、私は汝らの望みをかなえないのだ。（二二）」

スンダとウパスンダは言った。

「祖父よ、我々相互を除いて、三界に存する動不動のものは何でも、それらすべてのものからの危険がありませんように。（二三）」

梵天は言った。

「要請の通りに願いをかなえてやろう。また、死の定め（死に方）もその通りになるであろう。（二四）」

ナーラダは語った。――

梵天は彼らの願いをかなえてから、兄弟の苦行をやめさせて、梵界へ去った。（二五）二人の魔王はすべての願いをかなえられて、全世界の者たちに殺されない体となって、自分たちの住居に帰った。（二六）偉大な阿修羅たちが願いをかなえられ、目的を達したのを見て、親しい者たちは二人のことを大いに喜んだ。（二七）そこで二人は編髪を解いて王冠をつけ、高

価な装身具を身につけ、汚れない衣服をまとった。（二八）そして、すべての願望を満たす、時節はずれのカウムディー祭（軍神カールッティケーヤの祭り）を行ない、二人の魔王と彼らの親族は大いに喜んだ。（二九）家々には、常に、「食べなさい、味わいなさい、楽しみなさい、歌いなさい、飲みなさい、与えなさい」という言葉が聞かれた。（三〇）あちこちで大いに飲み、高らかな手拍子が響き、悪魔たちの都はすべて喜びにあふれた。（三一）思いのままの姿をとる悪魔たちが多彩な娯楽で遊び戯れている間に、年月は一日のように過ぎ去った。（三二）（第二百一章）

ナーラダは語った。――

祭りが終わるやいなや、兄弟は三界を征服しようとして、協議をしてから、軍隊の出動を命じた。（一）親族や悪魔の長老や顧問たちに別れを告げて、出発の儀式を行ない、二人はマガー星宿の支配する月（一月中旬―二月中旬）の夜に出発した。（二）彼らは、棍棒や矛や槍や槌を持ち甲冑を身につけた（異本による）悪魔の大軍とともに出かけた。（三）吟誦者（チャーラナ）たちが戦勝を祈る祝歌や讃歌で称える中を、彼らは喜び勇んで出陣した。（四）欲するがままに進む二人の悪魔は、空中に飛び上がり、戦いに酔い痴れて神々の世界へ行った。（五）二人が来るのを知り、また、梵天が二人に恩寵を与えたことを知って、神々は天界を捨てて梵界へ行った。（六）勇猛な兄弟はインドラの世界を征服し、夜叉と羅刹の群と空を飛ぶものたちを征服した。（七）偉大な阿修羅たちは、地中に住む竜（蛇）たちを征服し、海に住むものたち、すべての蛮族（ムレーッチャ）の種類

を征服した。(八) それから、命令に厳格な二人は、全地上を征服しようと企て、兵士たちを呼んで非常に残酷なことを告げた。(九)
「王仙とバラモンたちは、盛大な祭祀と供物とにより、神々の威光と力と富貴を増大させている。(二〇) 彼らすべての阿修羅の敵どもは、このように増長しているので、我々はみなで寄ってたかって、彼らをみな殺しにすべきである。(二一)」
このように東の海岸で一同に命じてから、彼らは残酷な計画を企てて、あらゆる方角へ向かって行った。(二二) いかなるバラモンでも、祭祀を行なったり行なわせたりしているのを見ると、強力な兄弟は、彼らをすべて残虐に殺した。(二三)
二人の兵士たちは、清らかな心の聖仙たちの隠棲所において、火供(アグニホートラ)〔の火〕を取っては、恐れることもなく水に投げ込んだ。(二四) 怒った偉大な苦行者たちが発する呪詛は、恩寵により力を増した二人には効き目がなかった。(二五) 岩に向けて放たれた矢のように、呪詛が効き目がなかった時、バラモンたちは誓戒を捨てて逃げ去った。(二六) 地上において苦行を成就し、自制し、寂静に専念する人々は、二人を恐れて逃げ出した。蛇たちがガルダ鳥を恐れるように。■ (二七) 隠棲所は混乱し、水瓶や杓子(祭式用の杓)は散乱して壊れた。全世界はカーラ(破壊神)に殺されたかのように空虚になった。(二八) 王仙や聖仙が姿を隠したので、偉大な阿修羅たちは二人して決定し、殺害しようと望み、姿を変えた。(二九) 二人はこめかみから分泌液を流す、盛りのついた象の姿をとり、難所に隠れている者たちをヤマ(閻魔)の世界に送った。(三〇) 残虐な彼らは獅子や虎になり、また姿を消し、様々な方法で、聖仙を見つけては殺した。(三一)
その時、地上では、祭祀とヴェーダ学習は停止し、王やバラモンは滅び、祭りや儀礼も滅んだ。(三二) 売買は行なわれず、神々の崇拝も止み、祭礼も婚礼もなくなった。そこで大地の女神は恐怖にかられ、溜め息をついた。(三三) 農業も牧畜も途絶え、都市も■棲所も破壊され、骨や骸骨が散乱し、大地はおぞましい姿となった。(三四) そして、祖霊祭は行なわれなくなり、ヴァシャット(神に供物を捧げる時に唱える文句)という音も祈禱もなくなり、世界は醜くなり、恐ろしい姿となった。(三五) 月と太陽、惑星、星々、星宿や、天空に住む者たちは、スンダとウパスンダのそのような所業を見て嘆き悲しんだ。(三六) かくて二人の悪魔は、残酷な行為により一切の方角を征服して無敵となり、クルクシェートラに住みついていた。(三七)

(第二百二章)

ナーラダは語った。――
それから、すべての神仙、シッダ(半神の一種)、最高の聖仙たちは、その大殺戮を見てこの上なく苦しんだ。(一) 怒りを制し、自己を制御し、感官を制御した彼らは、その時、世界に対する哀愍の情から、梵天の世界へ行った。(二) そして彼らは、シッダや梵仙たちに取り巻かれて、神々とともに座っている梵天に会った。(三) そこには、マハーデーヴァ神(シヴァ)、火神(アグニ)と風神(ヴァーユ)、月神(チャンドラ)と太陽神(アーディティヤ)、ダルマ神、最高の神(パラメーシティン)(ヴィシュヌ)、ブダ神(水星)(原文疑問)がいた。(四)

ヴァイカーナサス（聖仙の一種）、森に住み光線を飲むヴァーラキリヤ（聖仙の一種）、アジャ、アヴィムーダ（いずれも聖仙の一種か）などの、威光を秘めた苦行者たち、これらすべての聖仙たちが梵天に仕えていた。（五）

すべての大仙たちはそろって梵天に近づいて、スンダとウパスンダの行状をすべて告げた。（六）彼らがどのようになしたか、どのような次第で行なったか、すべて残らず梵天に知らせた。（七）それからすべての神群と最高の聖仙たちは、その件について〔解決してくれるよう〕梵天をうながした。（八）梵天はみなの言葉を聞いてから、どのように解決したらよいか、しばし考えこんだ。（九）それから、二人を殺そうと述べて、ヴィシュヴァカルマン（毘首羯磨、一切造者）を呼んだ。彼を見て、大なる熱力（タパス）を持つ梵天は命じた。

「誰からも求められるような美女を造りなさい。（一〇）」

梵天におじぎをしてその言葉を歓迎し、彼は努力して考察してから、その天女を創造した。（一一）三界にある動不動のもので何か美しいものがあったら、それをあちこちから努力して集めた。（一二）そして、何千万という宝物を彼女の体に入れ、その宝の群からできた神々しい姿の女を造った。（一三）ヴィシュヴァカルマンが多大の努力によって創造したこの女は、容色にかけて、三界における女たちと比較にならぬほど美しかった。（一四）彼女の体には、ほんのわずかでも、完全な美を備えていない部分はなく、また、見る者たちの眼がひきつけられない部分はなかった。（一五）彼女はシュリー（美の女神、吉祥天）の化身のようで、美しい容姿をして、すべての生物の眼と心を奪った。（一六）彼女は諸々の宝の部分（ティラ）を少しずつ集めて造ら

れたから、梵天は彼女をティローッタマーと名づけた。（一七）

梵天は告げた。

「ティローッタマーよ、行け。愛らしい女よ、その魅力的な姿で、阿修羅の兄弟のスンダとウパスンダを迷わせてくれ。（一八）お前を見るやいなや、お前のために、その完全な容色のせいで、彼らがお互いに対立するようにせよ。（一九）」

ナーラダは語った。——

彼女は「かしこまりました」と約束して、梵天に敬礼してから、神々の集団を右まわりにまわって〔敬礼した〕。（二〇）尊い神マヘーシュヴァラ（大自在天、シヴァ）は、南側で東方を向いて座っていた。神々は北側に座っていた。聖仙たちはいたるところに座っていた。（二一）彼女がそこで神々の集団を右まわりにまわっていた時、インドラと聖なる神スターヌ（シヴァ）とは、平静さを保っていた。（二二）しかし、彼女が〔右〕脇を通過した時、シヴァ神は見たくてたまらなくなり、彼の南側に、睫（まつげ）を曲げた別の顔が生じた。（二三）彼女が彼の背後をまわっていた時、彼の西側に顔が生じた。彼女が彼の北側を通過した時、彼の北側に顔が生じた。（二四）大インドラにも、側面と背面と前面に、赤い大きな千の眼がいたるところに生じた。（二五）このようにして、かつてシヴァは四面となり、インドラは千眼を持つものとなったのである。（二六）同様にして、神群と聖仙たちの顔は、ティローッタマーが通る方角すべてに向けられた。（二七）梵天以外のすべての偉大な者たちの視線は、おびただしく彼女の身体に

注がれた。(二八) 彼女が歩いて行く時、すべての神々と最高の聖仙たちは、彼女はすでにその完全な美しさによって任務を果たしたも同然だと考えた。(二九) 彼女が出発した時、梵天はすべての神々と聖仙の群を帰らせた。(三〇)

(第二百三章)

ナーラダは語った。——

悪魔の兄弟は、地上を征服し、ライバルがいなくなり、恐れもなくなり、三界を平定し、目的を成就した。(一) 彼らは神々とガンダルヴァと夜叉(ヤクシャ)と竜と諸王と羅刹(らせつ)たちのすべての宝物を奪って、最高に満足した。(二) この世に、二人に対抗する者は一人もいなくなった時、彼らは努力しなくなり、神々(不死者)のように楽しんだ。(三) 二人は、多くの女性、花輪、香、種々の食物、飲物、その他様々な好ましいものによって、最高の喜びに達した。(四) 彼らは後宮において、森や庭園において、山や林において、その他望むがままの場所において、神々のように楽しんだ。(五)

それから、ある日、彼らはヴィンディヤ山の尾根の平坦な岩の上で、先端に花をつけているシャーラ樹のもとで遊ぶために出かけた。(六) すべての望みを満たす神々しい品がとり集められた時、彼らはそこで、女たちとともに喜んで座っていた。(七) それから、女たちが、音楽と舞踊によって二人にかしずいた。そして、二人を喜ばせるために、讃歌をともなう歌によって彼らに奉仕した。(八)

その時、ティローッタマーは、その森で花を摘みながら、一枚の赤い布により、しどけなく衣裳をまとい、川岸に生じたカルニカーラの花を摘み、二人の偉大な阿修羅のいる場所に、しずしずと近づいて行った。(九—一〇) 二人の方は、上等の酒を飲み、酔って眼のはしを赤くして、その美しい尻の女を見るやいなや興奮した。(一一) 二人は立ち上がって座席を離れ、彼女の立っているところへ行った。二人は愛欲にかられ、彼女を求めた。(一二) スンダはその美しい眉のティローッタマーの右手をつかみ、ウパスンダは左手をつかんだ。(一三) 二人は、恩寵を受けて慢心し、また肉体的な力により、財物や宝物におごり、また酒を飲んで酔い、これらすべてのことに酔い痴れて、お互いに眉をひそめ、酔いと愛欲にかられて、相互に言い合った。(一四—一五)

「彼女は俺の妻で、お前の姉だ」とスンダは言った。

「彼女は俺の妻で、あなたの義理の妹だ」とウパスンダは言った。(一六)

「彼女はお前のものではない。俺のものだ」ということで、怒りが二人に入りこんだ。二人は彼女が原因で、恐ろしい棍棒をつかんだ。(一七) 彼女への愛に迷い、二人は恐ろしい棍棒をつかんで、「俺が先だ、俺が先だ」と言って、相互に打ち合った。(一八) 恐ろしい二人は、棍棒に打たれて、全身血にまみれ、天空から落ちた二つの太陽のように地面に倒れた。(一九) そこで、女たちは逃げ去り、悪魔の群も悲嘆と恐怖にふるえて、すべて地底界(パーターラ)へ去った。(二〇)

それから、心清らかな梵天が、神々や大仙たちとともに、ティローッタマーを讃えつつ、その場にやって来た。(二一) 梵天に願いをかなえてやると告げられた彼女は、ただ「喜んで

下されば」と答えた。そこで喜んだ梵天は彼女に告げた。(二二)
「美しい女よ、お前はアーディティヤ神群の動く世界を飛翔するであろう。その輝きの故に、誰もお前をよく見ることはできないであろう。(二三)」
このように彼女に恩寵を与えてから、全世界の祖父である主(梵天)は、インドラに三界を託して、梵界へ去った。(二四)
「このように、団結して、すべてのものごとについて同一の決定を下していた二人は、ティロータマーのために怒り狂い、お互いに殺し合った。(二五)それ故、私は愛情からあなた方すべてのバラタ族の英雄たちに告げる。ドラウパディーのために、あなた方みなに離間がないよう、どうかそのようにしてくれ。もし私を喜ばせたいなら。(二六)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
偉大な大仙ナーラダにこのように言われた時、彼らは集まって、無量の威力に満ちた神仙ナーラダを証人として、相互に約定を定めた。(二七)
「もし我々のうちの一人が、ドラウパディーといっしょにいる他の誰かを見るなら、その者は十二年の間、梵行者(清浄行者)として、森で生活しなければならない。(二八)」
法(ダルマ)に従うパーンダヴァ兄弟がこのような約定を定めた時、偉大な聖者ナーラダは喜んで、望みのままの方角へ立ち去った。(二九)
このようにして、彼らはナーラダにうながされて、あらかじめ約定を定めた。そこで彼らはすべて、それ以来お互いに離間しなかったのである。(三〇)

(第二百四章)

約定にそむいたアルジュナ

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
パーンダヴァたちはこのように約定を定めて、そこに住み、武威によって他の王たちを支配下に置いた。(一)クリシュナー(ドラウパディー)は、無量の威力に満ちた五名の獅子のような兄弟に対して従順であった。(二)彼女は、彼ら五人の勇士たちといっしょにいて、彼らが彼女といる時と同様に、最高に幸せであった。ちょうどサラスヴァティー川が象たちといっしょの時のように。(三)偉大なパーンダヴァたちが、法に従って暮らしている間、すべてのクル族の人々は、過失を離れ幸福に繁栄した。(四)
さて、長い時が過ぎて、ある盗賊たちがあるバラモンの牛を盗んだ。(五)その財産が奪われた時、バラモンは怒りにかられ、カーンダヴァプラスタに来て、パーンダヴァたちに向かって叫んだ。(六)
「卑しい、残忍な、無分別な奴らが、このあなた方の領地から、力ずくで私の牛の群を奪った。パーンダヴァたちよ、追いかけて下さい。(七)不注意なバラモンの供物が鴉にさらわれる。虎が留守の間に、その洞窟を卑しいジャッカルがあさる。(八)バラモンが盗難にあった時は、法(ダルマ)と実利(アルタ)が損なわれる。私が泣き叫んでいる時、武器をとって下さい。(九)」

クンティーの息子ダナンジャヤ（アルジュナ）は、泣き叫んでいるバラモンのそばにいて、その叫びを聞いた。（一〇）その勇士はそれを聞くやいなや、「恐れることはありません」とバラモンに言った。ところが、偉大なパーンダヴァたちの武器が置いてある部屋に、ユディシティラがクリシュナーといっしょにいた。（一一）アルジュナは入ることも去ることもできずにいた。しかも苦悩するバラモンの言葉は絶えず彼をせきたてるのであった。バラモンが助けを呼ぶ中で、アルジュナは苦しんで考えた。（一二）

「気の毒なバラモンの財産が奪われつつある時、彼の涙をぬぐい去るべきであるということは確かである。（一三）もし、門のところで嘆いている彼を私が守らなければ、〔他者の不幸を〕見過ごしたという大なる非法（アダルマ）が王に生じることになろう。（一四）そして、〔他者の〕守護ということに関し、我々みなが義務にもとるということが確定し、この世において我々が法を守らぬということになろう。（一五）だが、アジャータシャトル（ユディシティラ）王に断わらないで私が入って行けば、疑いもなく、私は王の不興をこうむるであろう。（一六）もし王の〔部屋に〕入れば、私は森に住むこととなろう。大なる非法を犯すか、それとも森で死ぬか？　たとい身を滅ぼすとも、法こそが大切である。（一七）」

アルジュナはこのように結論して、入って行って王に挨拶してから、弓を取り、喜び勇んでバラモンに告げた。

「バラモンよ、急いで来なさい。卑しい盗賊どもが遠くへ行かないうちに、いっしょに追いかけ、今、私は盗賊の手からあなたの財産を取りもどします。（一八—二〇）」

その偉丈夫は弓を持ち、鎧をつけ、軍旗のはためく戦車に乗り、追跡して、その矢で盗賊を粉砕して、バラモンの財産を取りもどした。（二一）それをバラモンに渡し、名誉を得て、敵を悩ます勇士アルジュナは都に帰った。（二二）彼は兄たちみなにおじぎをし、彼らにも歓迎されたが、ユディシティラに次のように言った。

「あの誓戒を私にお命じ下さい。（二三）私はあなたを見たことにより約定に違反しました。私は森に住みます。我々はこのような約定を定めたのですから。（二四）」

突然このように言われて、兄のユディシティラは、何という悲しいことを言うのかと悲嘆に暮れて、口ごもりながら、不屈の弟アルジュナに告げた。（二五）

「もし私があなたの信頼に価するなら、非難の余地のない者よ、私の言葉を聞きなさい。勇士よ、あなたは私の部屋に入って、私に不快なことをしたが、私はすべてを許す。私の心は傷ついていない。（二六）弟が兄の部屋に入っても罪とはならぬ。兄が弟の部屋に入ったら規定に背くが。（二七）勇士よ、思いとどまってくれ。私の言葉に従え。お前は法（ダルマ）に背いていない。お前は私を傷つけてはいない。（二八）」

アルジュナは答えた。

「見せかけだけで法を行なってはならぬと私はあなたから聞きました。私は真実から外れることはないであろう。私は真実を武器とします。（二九）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼は王の許しを得て、梵行のために潔斎して、十二年の生活を送るために森に入った。(二〇)

(第二百五章)

アルジュナと女たち

ヴァイシャンパーヤナは語った。――(一―七略)

アルジュナと〔彼に従った〕バラモンたちが森に移住した時、バラモンたちは多くの火供(アグニホートラ)を行なった。(八)その自己を制し正道を守る偉大な賢者たちが、灌頂(かんじょう)(水を注ぐ儀式)を行ない、火を起こして燃え上がらせ、供物を投じ、対岸に至るまで花を供えた時、そのガンガー(ガンジス)の門(ガンガー・ドゥワール)はこの上なく輝いた。(九―一〇)

このように、移住で何かと多忙であった時、ある日、アルジュナは灌水のためにガンガーに降りて行った。(一一)そこで灌水を行なって祖先を供養してから、彼は火の儀式を行なうために水から上がろうとした。(一二)その時、竜王の娘でウルーピーというものが、彼を愛して、彼を水中に引き入れた。(一三)アルジュナは、そこで、カウラヴィヤ竜の最高に飾りつけられた宮殿において、見事に設置された聖火を見た。(一四)アルジュナはそこで火の儀式を行なった。彼は恐れることもなく火中に供物を投じたので、火は彼に満足した。(一五)

アルジュナは火の儀式を行なってから、笑いながら竜王の娘に言った。(一六)

「美しい女よ、どうしてこのような乱暴をしたのか。この美しい国は誰のものか。また、あ

なたは誰か。誰の娘か。(一七)」

ウルーピーは答えた。

「アイラーヴァタの家系に生まれた、カウラヴィヤという名の竜がおります。私は彼の娘で、ウルーピーという名前の竜女です。(一八)私は灌水のために川に降りたあなたを見るやいなや、愛の神に迷わされたのです。(一九)あなたのため、愛の神にかき乱された一途な女を、今、御自身を密かに下さることにより喜ばせて下さい。(二〇)」

アルジュナは告げた。

「可愛い女よ、ダルマ王(ユディシティラ)が私に十二年の梵行(禁欲生活)を命じたのだ。私は自由にはできない。(二一)しかし、水を行く女よ、私はあなたの喜ぶようにもしたいのだ。私はいまだかつて決して嘘をついたことがない。(二二)どうしたら虚偽でなく、しかもあなたを喜ばせることができるか。竜女よ、私の法(ダルマ)が損なわれぬようにしなければならぬ。(二三)」

ウルーピーは言った。

「アルジュナ様、あなたが地上をさすらうわけを私は知っています。兄上があなたに梵行を命じたわけも。(二四)『お互いに、ドルパダの娘といっしょにいる時、我々の誰かが血迷ってその部屋に入るなら、その者は十二年間、森で梵行を行なわなければならぬ』と、あなた方は約定を定めました。(二五)そこで、ドラウパディーのためにあなた方のうちの一人が追放されたのは、そこにおける法のためです。ここでは(私の場合は)法は損なわれることはありません。(二六)大きい眼の方よ、苦しむ人々を救済すべきです。私を救済すれば、あなたの法は

損なわれません。(二七)あるいは法をわずかに侵害することがあるとしても、アルジュナよ、私に生命を与えるのですから、それもまたあなたの法でありましょう。(二八)アルジュナよ、あなたを愛する私を愛して下さい。これは（愛する女を受け入れるということは）善き人々の説です。もし愛して下さらないなら、私は死ぬと思って下さい。(二九)勇士よ、私に生命を与えることにより、最高の法を行なって下さい。最高の人よ、私は今、あなたに庇護を求めます。(三〇)アルジュナ、あなたはいつも、苦しむ寄る辺のない人々を守護します。私は今、あなたに庇護を求めます。苦しんで慟哭しています。(三一)私は愛をこめてあなたを求めます。ですから私を喜ばせて下さい。そこであなたは御自身を私に下さって、私の望みをかなえて下さい。(三二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

竜王の娘にこのように言われて、アルジュナは法にもとづいて、すべてその通りにした。(三三)栄光ある彼は、その夜を竜宮で過ごして、太陽が昇った時、カウラヴィヤの住居から立ち去った。(三四)

（第二百六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

インドラの息子（アルジュナ）は、このことをすべてバラモンたちに語ってから、ヒマーラヤの中腹へ行った。(一)彼はアガスティヤ・ヴァタとヴァシシタの山に達し、ブリグの峰で自身を浄めた。(二)そのクルの勇士は聖地や聖域で千頭の牛を寄進し、バラモンたちに住居を与えた。(三)最高の人物である彼は、ヒラニヤビンドゥの聖地で沐浴し、最高の山や清浄な聖域を見た。(四)それから、バラタの雄牛であるその最高の人物は、バラモンたちとともに山を下り、東方の地方に行こうとして出発した。(五)クルの勇士は順次に諸々の聖地を見た。そしてナイミシャの森付近で、美しいウトパリニー川を見た。(六)ナンダー川、ウパナンダー川、名高いカウシキー、大河ガヤー、ガンガー（ガンジス）川を見た。(七)このように、すべての聖地や隠棲所を見て、自身を浄めつつ、バラモンたちに財産を与えた。(八)彼はアンガ国、ヴァンガ国、カリンガ国にあるすべての清浄なる聖地と聖域を訪れ、作法通りに拝んで、財産を寄進した。(九)

カリンガ国の城門において、アルジュナに従って来たバラモンたちは、彼に別れを告げて引き返した。(一〇)勇士ダナンジャヤ（アルジュナ）は彼らと別れを告げ、わずかな供を連れて、海岸へ行った。(一一)彼はカリンガを過ぎ、神聖で心地よい土地や聖域を見ながら進んだ。(一二)苦行者たちに飾られたマヘーンドラ山を見て、海岸ぞいに、徐々にマナルーラ（異本―マニプーラ）に行った。(一三)そこですべての清浄なる聖地と聖域を訪れて、勇士は法を知るマナルーラの領主チトラヴァーハナ王のもとへ行った。(一四)この王には、チトラーンガダーという見目麗しい娘がいた。アルジュナはたまたま、都を歩いている彼女を見かけた。(一五)彼はチトラヴァーハナの美しい尻の娘を見て愛し、(一六)王のもとに行って自分の意図を告げた。王は彼に好意的に語りかけた。(一七)

「この家系にプラバンカラ（異本――プラバンジャナ）という王がいた。彼は息子がいなかったので、子孫を求めて最高の苦行を行なった。（一七）激しい苦行と礼拝により、シヴァ神は彼に満足した。（一八）シヴァは彼のために、この家系の代ごとに一人ずつの子供を授けることにした。それ故、この家系においては、常に一人ずつの子供が生まれるのである。（一九）私のすべての先祖たちには、いつも息子が生まれた。しかし、私には娘が生まれた。彼女は必ずや家系を持続させなければならぬ。（二〇）最高の人よ、私は彼女が私の息子であるといつも思って来た。指定女（プトリカー）（息子のない父に、相続人となる息子を生むよう指定された娘）は理論的には（相続息子を生むから）〔息子と〕呼ばれる。バラタの雄牛よ。（二一）そこで、彼女に私の家系を相続する息子を生ませてくれ、という条件を結納金（シュルカ）代りにして欲しい。この約定と交換に彼女を受け取りなさい。（二二）」

彼は承知したと約束して、その娘を受け取った。アルジュナはその都に三年間滞在した。（二三）

（第二百七章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その後、バラタの雄牛（アルジュナ）は南の海岸にある、非常に清浄で、苦行者たちに飾られた聖地を訪れた。（一）しかし、そこでは、苦行者たちは五つの聖地を避けて近づかなかった。昔は、苦行者たちはそれらの地をよく訪れたものであったのに……。（二）それらは、アガスティヤの聖地、スバドラの聖地、非常に清浄なプローマンの聖地、馬祀と同様の果報をもたらす清らかなカランダマの聖地、こよなく罪悪を鎮めるバラドゥヴァージャの聖地である。（三）アルジュナはそれらの聖地がさびれているのを見て、また、敬虔な聖者たちに避けられているのを見て、合掌して苦行者たちにたずねた。

「ヴェーダの学者たちは、どうしてこれらの聖地を避けるのですか。（四―五）」

苦行者たちは答えた。

「それらの地には五匹の鰐（グラーハ）が住み、苦行者たちをさらう。それ故、クルの王子よ、それらの聖地は避けられるのです。（六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それを聞くと最高の勇士は、苦行者たちに止められたが、それらの聖地を見に出かけた。（七）そして勇士は、大仙のスバドラの最高の聖地に着くと、速やかに水に飛びこんで沐浴した。（八）すると水中にいる大きな鰐が、人中の虎であるダナンジャヤ（アルジュナ）を水中でつかまえた。（九）最強の勇士アルジュナは、はねまわる鰐を捕えて、力まかせに水から立ち上がった。（一〇）ところがその鰐は、誉れ高いアルジュナに引っぱり出されるやいなや、すべての装身具に飾られた美しい女となった。彼女は美しさに輝き、神々しい姿をし、魅力的であった。（一一）アルジュナはこの大なる奇蹟を見て、この上なく喜び、その女にたずねた。（一二）

「美しい女よ、あなたは誰か。またどうして鰐になったのか。そしてまた、何のためにこのような大罪を犯したのか。（一三）」

女は語った。——
勇士よ、私は神々の森を徘徊するヴァルガーという名の天女で、いつも財富の神（クベーラ、毘沙門天）のお気に入りでした。（二四）私には四人の友がいました。みな美しく、望みのままどこにでも行けるのでした。ある時、私は彼女たちとともに、世界守護神（クベーラ）の宮殿へ出かけました。（二五）途中で我々は、誓戒を厳守するバラモンを見ました。彼は容姿端麗で、一人で学習し、修行に専念しておりました。（二六）彼の苦行の力（熱力）により、その森は輝きにあふれていました。彼は太陽のようにその場所全体を輝かせていました。（二七）そのような彼の苦行の力と奇蹟的な様子を見て、我々はその苦行の妨害をしようと企てて、その場に降りました。（二八）私とサウラベーイーとサミーチーとブドブダーとラターは、同時にそのバラモンに近づきました。（二九）私たちは歌い、笑い、そのバラモンを誘惑しました。しかし彼はどうしても我々に関心を払いませんでした。威光に満ちた彼は、汚れなき苦行を続け、動揺しませんでした。（三〇）しかしそのバラモンは、怒って私たちを呪ったのです。

「お前たちは鰐となって水中に百年間住め。（三一）」

（第二百八章）

ヴァルガーは続けた。——
そこで我々はみな非常に苦しみ、その苦行を積んだ不屈のバラモンに庇護を求めました。■

（一）

「私たちは容色と若さと愛の神のために慢心し、不始末をしでかしました。バラモン様、どうか我々をお許し下さい。（二）苦行者様、私たちが自己を抑制したあなたを迷わせようと、ここに来たことだけでも、我々は十分に死に価します。（三）しかし法を考察する人々は、女というものは元来殺されるべきではないと考えます。それ故、法を知る人よ、法により我々を殺すべきではありません。（四）法を知る人よ、バラモンは一切の生類を慈しむと言われます。美しい人よ、この賢人たちの言葉が真実となりますように。（五）教養ある人々は、庇護を求める者たちを守護するものです。私たちはあなたに庇護を求めます。ですから、どうかお許し下さい。（六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
このように言われて、日月のように輝く、清浄な行為をなす敬虔なバラモンは、恩寵をかけた。（七）
バラモンは告げました。
「『百』と『千』と『一切』とは、すべて無尽を表わす言葉である。しかし私の言った『百』は数量〔を表わす語〕であって、無尽を表わす言葉ではない。（八）お前たちが鰐となって人々を水中で捕えている時、ある最高の男がお前たちを水から陸に引き上げる。（九）その時、お前たちはみな、再び本来の姿を取りもどすであろう。私は冗談を言っている時にも、いま

だかつて虚偽を言ったことがない。(二〇) それ以後、これらの聖地は『女性の聖地（ナーリーティールタ）』という名で、いたるところで有名になるであろう。神聖で賢者たちを清めるものとなるであろう。(二一)」

ヴァルガーは続けた。——

それからそのバラモンに敬礼して、右まわりにまわって敬意を表してから、非常に悩んでその場所を離れて、我々は次のように考えました。(二二)

「私たちはみな、どこで、またどうしたら短期間で、我々を再びもとの姿にもどしてくれる男の人に会うことができるか。(二三)」

我々はそのように考えると、すぐに、栄光に満ちた神仙ナーラダに会いました。(二四) 我々はみな、無量の輝きを持つその神仙を見て喜び、彼におじぎをしてから、顔を曇らせて立っていました。(二五) 彼は私たちに苦悩の原因をたずねました。我々はそれを聞き、ありのままを彼に語りました。(二六)

「南の海岸の湿地に五つの聖地がある。その清浄で心地よい湿地に急いで行きなさい。(二七) そこで、人中の虎であるパーンダヴァ、心の清いダナンジャヤ（アルジュナ）が、疑いもなくあなた方をすぐにこの呪詛から解放してくれるであろう。(二八)」

彼の言葉を聞いて、我々はみなここに来ました。それは真実でした。非の打ち所のない方よ、今日、私はあなたによって解放されました。(二九) しかし、私以外の四人の友はまだ水の中にいます。勇士よ、善行を行なって下さい。彼女たちをすべて救ってあげて下さい。(三〇)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、高邁で強力なパーンダヴァの勇士は、すべての女たちを呪詛から解放してやった。(三一) 天女たちは本来の身体を取りもどして水から立ち上がり、前と同じ姿にもどった。(三二) 王子はそれらの聖地を浄めてから、彼女たちに別れを告げ、チトラーンガダーと再会するためにマナルーラの都へ帰った。(三三) アルジュナは彼女にバブルヴァーハナ王を生ませた。彼は息子を見てから、ゴーカルナに向けて発った。(三四)

（第二百九章）

クリシュナを訪問する

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

勇猛極まりないアルジュナは、西海岸のすべての聖地と聖域を次々と訪れた。(一) 彼は西海岸のすべての聖地と聖域をまわってから、プラバーサに到着した。(二) クリシュナは、勇猛で無敵の勇士が聖地巡礼をしているうちにプラバーサ国に到着したことを聞いた。(三) そこでクリシュナは密かにアルジュナに会いに行った。そしてプラバーサにおいて、クリシュナとアルジュナは再会した。(四) 実は聖仙ナラとナーラーヤナである二人の親友は、互いに

抱き合って、息災かどうかたずね合い、森の中で座った。(五) それから、クリシュナはアルジュナにその行動をたずねた。
「パーンダヴァよ、何のために聖地を巡礼しているのか。(六)」
そこでアルジュナは、一部始終をすべて語った。クリシュナは聞いて、「なるほど」とうなずいた。(七) クリシュナとアルジュナは、プラバーサにおいて好きなだけ楽しんでから、ライヴァタカ山に滞在すべく出発した。(八) 人々はクリシュナの命により、前もってその山を飾りつけ、食物を運んでおいた。(九) アルジュナはすべてを受けて享受し、クリシュナとともに、役者と舞踊家の演技を見た。(一〇) 威光に満ちたアルジュナは、彼ら全員を称讃してから引きとらせ、よくしつらえられた神々しい寝台へ行った。(一一) 彼はサートヴァト（クリシュナ）に、諸々の聖地や山々や川や森の情景を語った。(一二) アルジュナは話しているうちに、その天国のような寝台で眠りこんでしまった。(一三) そして彼は、甘美な歌とヴィーナーの音と、讃歌と祝歌によって目覚めた。(一四) 彼が必要なことを行なってから、クリシュナが彼に挨拶した。彼らは黄金造りの車に乗ってドゥヴァーラカーに向かった。(一五) ドゥヴァーラカーは、アルジュナをもてなすために、家々の庭にいたるまで飾りつけられてあった。(一六) ドゥヴァーラカーに住む人々は、アルジュナを見ようとして、幾百幾千となく急いで王道にやって来た。(一七) 女たちも幾百幾千と見物に来た。ボージャ族、ヴリシュニ族、アンダカ族の人々も大勢集結した。(一八) 彼はボージャ、ヴリシュニ、アンダカのすべての子息たちにもてなされ、挨拶すべき人々に挨拶し、すべての人々に歓迎された。(一九) 勇士は

いたるところで少年たちに尊敬をこめて挨拶され、同年輩の人々をすべて、繰り返し抱きしめた。(二〇) 彼は宝石や歓楽に満ちたクリシュナの快適な邸で、クリシュナとともに多くの日々を過ごした。(二一)

（第二百十章）

(17) スバドラーの掠奪（第二百十一章—第二百十二章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。──

その数日後、ライヴァタカ山で、ヴリシュニ族とアンダカ族の人々の間で盛大な祭りが行なわれた。(一)その山の祭りで、ボージャ、ヴリシュニ、アンダカの勇士たちは、バラモンに莫大な布施をした。(二)その山の土地は、いたるところ、宝石をちりばめたテラスや光の樹によって飾られた。(三)音楽家たちはそこで楽器を演奏し、舞踊家たちは舞い、歌手たちは歌を歌った。(四)強力なヴリシュニ族の少年たちは、飾りつけられ、黄金をちりばめた乗物に乗り、いたるところで〔きらびやかに〕練りまわっていた。(五)市民たちは妻や従者を連れて、幾百幾千となく、徒歩で、あるいは様々な乗物に乗ってやって来た。(六)バララーマは酩酊し、〔妻の〕レーヴァティーとともに、音楽士を従えて歩きまわった。(七)また、ヴリシュニの威光に満ちた王ウグラセーナも、千人の妻を連れてやって来た。音楽師たちは彼のために歌を歌った。(八)戦に酔い痴れるルクミニーの息子（プラデュムナ）とサーンバは酩酊し、神々しい花輪と衣装をつけ、神々のように楽しんだ。(九)アクルーラ、サーラナ、ガダ、バーヌ、ヴィドゥーラタ、ニシャタ、チャールデーシュナ、プリトゥ、ヴィプリトゥ、サティヤカ、サーティヤキ、バンガカーラ、サハーチャラ、ハールディキヤ、クリタヴァルマン、その他名前はあげないが大勢の人々が、各々女たちや音楽士たちに囲まれて、そのライヴァ

タカ山における祭りを飾った。(一〇—一二)

大そうめでたい喧騒が繰り広げられている時、クリシュナとアルジュナはいっしょに歩きまわっていた。(一三)二人は歩いているうちに、女友達の中にいる、美しく身を飾った、クリシュナの妹のバドラー（スバドラー）を見た。(一四)アルジュナが彼女を見るやいなや、彼に愛が生じた。(一五)そこでクリシュナは微笑して言った。

「森に住む人の心が愛にかき乱されているのかい。(一六)アルジュナよ、彼女は私の妹で、サーラナと同腹である。もしあなたにその気があるなら、私が父に頼んであげよう。(一七)」

アルジュナは言った。

「ヴァースデーヴァの娘で、クリシュナの妹で、おまけに容姿にめぐまれている。誰が彼女に迷わないだろうか。(一八)もしヴリシュニ族の姫であるあなたの妹が私の妃になるなら、私はあらゆる有効な手段をとるであろう。(一九)クリシュナよ、彼女を得る何か方法があったら教えて下さい。人間にできることなら何でもやります。(二〇)」

クリシュナは言った。

「人中の雄牛よ、王族(クシャトリヤ)の結婚は婿選び式(スヴァヤンヴァラ)がよいとされる。しかしアルジュナよ、それは不確実である。女心というものはわけがわからないからね。(二一)勇猛な王族にとって、結婚の方法として、力ずくで掠奪することも讃えられる、と法(ダルマ)の学者たちは知っている。(二二)アルジュナよ、そこであなたは、私の美しい妹を力ずくで奪え。彼女が婿選び式でどのよう

に望むか誰もわからないから。(二三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

アルジュナとクリシュナは方針を決定した後、インドラプラスタにいるユディシティラ王のもとに飛脚を送った。王はすべてを聞くやいなや承諾した。(二四—二五)

(第二百十一章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

結婚について兄の同意を得たアルジュナは、その娘がライヴァタカ山へ行ったことを知った。(一)クリシュナの同意を得て、今後の方針について相談し、(二)アルジュナはクリシュナの助言に従って、黄金造りの戦車に乗って出発した。(三)その戦車は、適切に設計され、サイニヤとスグリーヴァ(いずれもクリシュナの駿馬)をつなぎ、まわりを鈴の列で飾られ、一切の兵器を装備し、雷雲のような音を響かせ、燃え上がる火のように輝き、敵の喜びを挫くものであった。(三—四)彼は戦いの身仕度を整え、甲冑をつけ剣を帯びて、弓籠手と弓懸をつけて、狩に出る口実のもとに急いで出発した。(五)

一方、スバドラーの方は、山の王ライヴァタカとすべての神々を崇拝して、バラモンたちに祝福してもらってから、山の周囲を右まわりにまわって敬意を表し、ドゥヴァーラカーに向けて出発した。アルジュナは彼女に飛びかかり、力ずくで戦車に乗せた。(六—七)それから、

その人中の虎は美しい微笑の彼女を連れて、空中を行く(かのような)戦車で自分の都へ帰った。(八)おつきの兵士たちは、スバドラーが奪われたのを見て、みな叫びながらドゥヴァーラカーの都へ帰った。(九)彼らはこぞってスダルマーという集会場へ行き、集会場の長に、アルジュナの勇ましい行為をすべて語った。(一〇)集会場の長は彼らの話を聞くと、黄金で飾られた、大きな音を出す戦いの太鼓を鳴らした。(一一)その音に動揺して、ボージャ、ヴリシュニ、アンダカの人々は、飲食物を投げ捨てて集会場に集まって来た。(一二)それから、人中の虎であるヴリシュニとアンダカの勇士たちは、黄金製の、高価な敷物をしいた、宝玉や珊瑚をちりばめた、燃火のように輝く玉座に、幾百となく座った。あたかも火が火炉に座すように。(一三—一四)神々のように座る彼らの群において、集会場の長は随行の人々とともに、アルジュナの行為を語った。(一五)酔いで赤い眼をしたヴリシュニの勇士たちは、それを聞くと、アルジュナに対して我慢ができず、自尊心にかられて飛び上がった。(一六)

「急いで戦車に馬たちをつなげ。槍を持って来い。高価な弓と、大きな鎧を持って来い。(一七)」

ある者たちは「戦車に馬をつなげ」と御者たちに叫んだ。またある者たちは、黄金で飾られた馬を自ら引いて来た。(一八)戦車と鎧と旗が用意され、勇士たちは叫び、大混乱に陥った。(一九)

その時、酩酊し黒衣を着て森の花々の花輪をつけた、カイラーサ山のようなバララーマが、酔い痴れて、次のように言った。(二〇)

「愚か者たちよ、クリシュナが沈黙しているのに、何をしているのか。彼の気持も知らないで怒り、徒らに騒ぎたてるとは。(二一) まずこの大知者にその意図を語ってもらい、彼がしたいと思うことを懸命に実行せよ。(二二)」

鋤を武器とする者(バララーマ)からこのような有益な助言を聞いて、彼らは沈黙し、それからみなは、「それがよい、それがよい」と言った。(二三) 賢明なバラデーヴァ(バララーマ)のこの正当な言葉を聞いて、彼らはみな、再び集会場の中で座った。(二四) それからバララーマは勇士ヴァースデーヴァ(クリシュナ)に言った。

「クリシュナよ、あなたは何故沈黙し、傍観して座っているのか。(二五) 不滅のものよ、あなたのために、我々はみなアルジュナをもてなしたのだ。ところがあの愚かな家名を汚す男は、そのもてなしに価しなかった。(二六) というのは、自分が良家の生まれと考える男なら、誰が、そこで食事をした後で食器を割ることができるだろうか。(二七) 結びつきを望み、以前になされた〔好意〕を尊重し、繁栄を求める者なら、誰があのように乱暴にふるまおうか。(二八) 彼は実に我々を侮辱し、ケーシャヴァ(クリシュナ)を無視して、今日、力ずくで、自己の死を招くスバドラーの掠奪を行なったのだ。(二九) ゴーヴィンダ(クリシュナ)よ、彼は私の頭を足で踏みつけたのに、どうして私が我慢できよう。蛇が足で踏まれたら我慢できないように。(三〇) 今、私は地上からクル族(パーンダヴァ)を抹殺してやろう。私はアルジュナの罪に我慢できないから。(三一)」

このように、彼が雷雲や太鼓のような声で叫ぶと、すべてのボージャとヴリシュニとアンダカの人々はそれに呼応した。(三二)

(第二百十二章)

(18) 結婚の贈物（第二百十三章）

アルジュナとスバドラーの結婚

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
すべてのヴリシュニ族がこのように繰り返し告げた時、ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は、法（ダルマ）と実利（アルタ）にかなった言葉を述べた。（一）
「アルジュナは我々の一族を侮辱したのではない。彼は疑いもなく、一層の尊敬を示したのである。（二）アルジュナは、あなた方サートヴァタ族が財物に貪欲でないと考え、また婿選び式（スヴァヤンヴァラ）は制しがたいと考えたのである。（三）また、娘を家畜のように譲ることを誰が承諾するであろうか。更にまた、この世でいかなる男が子孫を売るであろうか。（四）アルジュナはこれらの難点を考慮したものと私は思う。そこでアルジュナは、法に従い、力ずくで娘を奪ったのである。（五）そしてこの縁組みはふさわしいものである。スバドラーは誉れ高く、アルジュナもまた同様である。そこで力ずくで奪ったのである。（六）アルジュナはバラタと偉大なシャンタヌの家系に生まれ、クンティボージャの娘の息子である。誰が彼を望まないだろうか。（七）また、貴兄、インドラとルドラ（シヴァ）を含む全世界において、武勇にかけてアルジュナを凌駕するものを私は知らない。（八）彼の戦車はあのようなもので、しかも彼は私の馬たちを用いている。アルジュナは手練の業を持つ戦士である。彼に匹敵する者があろうか。（九）アルジュナを追いかけて、快く礼を尽くして懐柔してから、引き返させなさい。私はそれが最善だと思う。（二〇）もしアルジュナが我々を力ずくで破って自分の都へ帰るなら、我々の名誉はたちまち台無しになるであろう。しかし懐柔策の場合は敗北ということはない。（二二）」

クリシュナの言葉を聞いて、人々はその通りにした。アルジュナはそこに引き返し、結婚式を執り行なった。（二二）そして彼はそこでもう一年間過ごした後、プシュカラにおいて残りの期間を過ごした。それから十二年が完了した時、彼はカーンダヴァプラスタに入った。（二三）

アルジュナは礼儀正しく王（ユディシティラ）に近づいて〔挨拶して〕、バラモンたちに挨拶してから、ドラウパディーに近づいた。（二四）ドラウパディーは愛情ゆえにアルジュナに答えた。
「アルジュナよ、サートヴァタの娘がいるところへ行きなさい。荷物をきつく縛っても、〔第二の縄がかけられる時、〕最初の結びはゆるんでしまうものですから。（二五）」

アルジュナは、このように色々と不平を言うクリシュナー（ドラウパディー）をなだめて、何度も許しを乞うた。（二六）それから、アルジュナは急いで、赤い絹の衣を着ていたスバドラーをせきたてて、牛飼女のなりをさせた。（二七）美しく誉れ高い勇士の妻は、その姿で前にも増して輝きつつ、王宮に行った。そして、大きくて茶色の目をした誉れ高いバドラー（スバドラー）は、プリター（クンティー）に挨拶した。（二八）それから、満月のような顔のバドラーは、急いでドラウパディーに近づいて挨拶し、「私は召使の女です」と言った。（二九）クリシュナーは立ち上がって、そのマーダヴァ（クリシュナ）の妹を抱きしめて、満足して告げた。

「あなたの夫が敵（または、「別の妻」）を持ちませんように。」
バドラーも喜んで、「そうであって欲しいです」と彼女に答えた。（二〇）そこでパーンダヴァの勇士たちは心から喜び、クンティーもこよなく喜んだ。（二一）
蓮の眼をした心清らかなクリシュナは、パーンダヴァの勇士アルジュナがインドラプラスタのすばらしい都に着いたことを聞くと、（バラ）ラーマとともに、ヴリシュニとアンダカの高官と勇猛な戦士たちをともなってやって来た。（二二—二三）勇士シャウリも、兄弟や息子や幾百の戦士たちに囲まれ、大軍に守られてやって来た。（二四）ヴリシュニの勇士たちの将軍である、賢明で誉れ高い勇者アクルーラもやって来た。（二五）誉れ高いアナードリシティ、まるでブリハスパティ（神々の師）自身の弟子のような、聡明で誉れ高いウッダヴァ、サティヤカ、サーティヤキ、サートヴァタ族のクリタヴァルマン、プラデュムナ、サーンバ、ニシャタ、シャンク、勇猛なチャールデーシュナ、ジッリン、ヴィプリトゥ、大力のサーラナ、最高の賢者ガダ、これらの人々と、その他のヴリシュニとボージャとアンダカの大勢の人々が、多くの贈物を持ってカーンダヴァプラスタにやって来た。（二六—二九）
ユディシティラ王はクリシュナが来たことを聞いて、彼を迎え入れるために双子（ナクラとサハデーヴァ）を遣わした。（三〇）二人に迎えられてヴリシュニの大軍は、旗と旗標に飾られたカーンダヴァプラスタに入った。（三一）その都の道路は掃き清められ、花の群で飾られていた。清涼な栴檀水や清らかな香りに満ちていた。（三二）あちこちで、よい香りのアグル香がたかれていた。清潔な人々に満ち、商人たちに飾られていた。（三三）

最高の人物である勇士クリシュナは、（バラ）ラーマとともに、ヴリシュニとアンダカと偉大なボージャたちに囲まれて、その都に入った。（三四）そして彼は、幾千という市民やバラモンたちに敬意を払われつつ、インドラの宮殿にも似た王宮に入った。（三五）ユディシティラは作法に従ってラーマに会い、クリシュナの頭に接吻し、腕で抱きしめた。（三六）一方クリシュナは、喜んでいる王に礼儀正しく挨拶した。そして人中の虎ビーマに、作法に従って敬意を表した。（三七）ダルマ王ユディシティラはまた、ヴリシュニとアンダカの指導者たちを、作法に従い適切に歓迎した。（三八）彼はある人々を年長者として、敬意を表した。またある人々を同年配として、敬意を表した。またある人々に愛情をもって挨拶した。それらの人々も、尊敬をこめて彼に挨拶した。（三九）
それから誉れ高いヴァースデーヴァ（クリシュナ）は、新郎側の人々のために、最高の財物を与えた。そしてスバドラーには親族から贈られる婚礼の贈物を与えた。（四〇）（四一—五一略）
ダルマ王ユディシティラはそれらすべてを受け取って、ヴリシュニとアンダカの勇士たちに敬意を表した。（五二）そこに集まった、偉大なクル（パーンダヴァ）とヴリシュニとアンダカの指導者たちは、神々の住処における善行の人々のように楽しんだ。（五三）クルとヴリシュニの人々は、あちこちで、痛飲し、大きな音をたてて手拍子をとり、その場にふさわしく、喜びのままに楽しんだ。（五四）このようにして、最高に強力な彼らは、何日も楽しんでから、クルの人々に敬意を払われつつ、再びドゥヴァーラヴァティーの都へ帰った。（五五）ヴリシュニとアンダカの勇士たちは、ラーマに率いられて、クルの勇士たちに与えられた輝かしい宝

物を持って帰って行った。（五六）しかし偉大なクリシュナは、アルジュナとともにその美しいインドラプラスタの都に滞在し、彼とともにヤムナー河畔を散策した。（五七）

それから、クリシュナの愛しい妹であるスバドラーは、光り輝くサウバドラ（アビマニユ）を産んだ。パウローミー（インドラの妻）がジャヤンタを産んだように。（五八）スバドラーは、長い腕を持ち、気力にあふれた、雄牛のような眼をした、敵を制する人中の雄牛である勇士アビマニユを産んだ。（五九）彼は恐れることなく（アビー）、怒り（マニユ）を抱いているから、そのアルジュナの雄牛のような息子はアビマニユと呼ばれた。（六〇）その優れた戦士は、祭祀においてこすられるシャミー樹〔の棒〕の内部から火が生じるように、サートヴァタの女とアルジュナの間に生まれた。（六一）彼が生まれた時、勇士ユディシティラは、バラモンたちに一万の牝牛と、一万の貨幣（ニシュカ）を与えた。（六二）その子は幼少の頃からクリシュナに可愛がられ、父たちやすべての臣民たちの月のようであった。（六三）生まれて以来、クリシュナは彼のために種々のめでたい式を執り行なった。そしてその子は、白月における月のように成長して行った。（六四）その勇士は、ヴェーダを知るアルジュナから、四部門よりなる十種の、神々と人間とに属するすべての弓のヴェーダ（兵学）を学んだ。（六五）強力な彼は、種々の武器の知識とそれらを用いる巧みさについて、また一切の行動について、卓越した業を学んだ。（六六）アルジュナは、スバドラーの息子を、理論と実践に関して自分と同程度にして、その子を見て満足した。（六七）彼はすべての頑強さに恵まれ、すべての優れた特徴をそなえ、不可侵であり、雄牛のような肩をし、蛇のように広い口をしていた。（六八）獅子のように誇り高く、偉大な弓取りであり、発情した象のように勇猛で、雷雲や太鼓のような声をたて、満月のような顔をしていた。（六九）彼は、勇気と力と容色と姿形にかけて、クリシュナに匹敵するほどであった。アルジュナは、インドラのように、そんな息子を見て〔満足した〕。（七〇）

吉相をそなえたパーンチャーラの王女（ドラウパディー）も、五人の夫から、勇猛で美しい、五つの山のような、五人の息子たちを産んだ。（七一）すなわち、ユディシティラによりプラティヴィンディヤを、ビーマによりスタソーマを、アルジュナによりシュルタカルマンを、ナクラによりシャターニーカを、サハデーヴァによりシュルタセーナを産んだ。■ アディティがアーディティヤ神群を産んだように、パーンチャーラの王女はこれら五人の勇士たちを産んだ。■
（七二―七三）（七四―七九略）

ダウミヤは作法に従い、彼らのために、順次に、誕生式、剃髪式（頭頂に一房の髪を残す）と入門式を行なった。■（八〇）行ない正しく誓戒を守るこれらの子供たちは、ヴェーダの学習を行なった後、アルジュナから、神々と人間に属する一切の弓術（武術）を修得した。（八一）パーンダヴァ兄弟は、広い胸を持つ、神の子にも似たこれらの強力な息子たちにめぐまれて大いに喜んだ。
（八二）

（第二百十三章）

(19)

カーンダヴァ森炎上（第二百十四章―第二百二十五章）

火神の要請

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼らはインドラプラスタに住んでいる間、ドリタラーシトラ王とビーシュマの命により、他の王たちを滅ぼした。(一)すべての人々は、ダルマ王(ユディシティラ)に依存して、幸福に暮らした。ちょうど個我が、清らかな特徴をそなえ善行を行なうそれぞれの身体に依存して楽しむように。(二)バラタの雄牛は、法(ダルマ)と享楽(カーマ)と実利(アルタ)とに、等しく敬意を払った。あたかも親族を持つ人が、三人の親族を公平に敬うように。(三)法と実利と享楽とが、均衡を保って、地上において体現化したかのようであった時、王はあたかも第四のもののように見えた。(四)

(五―一三略)

〔クリシュナが滞在して、〕何日かが過ぎ去った時、アルジュナはクリシュナに言った。

「クリシュナよ、暑くなった。ヤムナー川へ行こう。(一四)マドゥスーダナよ、もしよければ、親しい人々に囲まれ、そこで遊んで、夕方に帰って来よう。(一五)」

クリシュナは答えた。

「アルジュナよ、私もそうしたい。親しい人々に囲まれ、水の中で、好きなだけ遊ぼう。(一六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

アルジュナとクリシュナは相談して、ユディシティラの許可を得た後に、親しい人々に囲まれて出発した。(一七)やがて一行は、種々の樹が茂り、様々な家々のある、インドラの住処(すみか)のようなすばらしい遊戯場に着いた。(一八)そこにはクリシュナとアルジュナにふさわしい、高価で美味な種々の食物や飲物や、様々な花輪が準備されていた。(一九)彼らは種々の輝かしい宝石に満ちたその場所に入った。そして、すべての人々は好きなように遊んだ。(二〇)クリシュナとアルジュナの指示に従い、好みのままに、ある女たちは森で、またある女たちは水で、またある女たちは家の中で遊んだ。(二一)ドラウパディーとスバドラーは、酩酊して、女たちに高価な衣服と装身具を与えた。(二二)ある女たちは浮かれて踊った。またある女たちは叫んだ。またある女たちは笑った。またある女たちは上等の酒を飲んだ。(二三)そしてまたある女たちは泣き出した。またお互いにぶち合った。またある女たちは、お互いに秘密のことを相談し合った。(二四)そしてその華やかな森は、いたるところ、魅力的な笛やヴィーナー(琵琶)や太鼓の音で満ちた。(二五)

そのような光景が繰り広げられている間、アルジュナとクリシュナは、その付近の非常に心地よい場所へ行った。(二六)そこへ行くと、偉大な勇士クリシュナとアルジュナは、高価な座席に座った。(二七)そこで二人は、過去の多くの武勇伝や恋愛のことを語り合って楽しんだ。(二八)二人がそこに座って、大空にいるアシュヴィン双神のように楽しんでいた時、一人のバラモンが近づいて来た。(二九)彼はシャーラの大木のように背が高く、熱せられた

黄金のように輝き、黄褐色で、黄色いひげをはやし、均整のとれた体をしていた。(三〇)朝日のようであり、黒衣をまとい、髪を編んでいた。蓮弁のような顔をして、黄色で、光り輝いていた。(三一)アルジュナとクリシュナは、光り輝く最高のバラモンが近づいて来るのを見て、速やかに立ち上がった。(三二)

(第二百十四章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼はアルジュナとクリシュナに言った。

「カーンダヴァ森の近くに立つ、世界的な英雄たちよ。(一)私は大食のバラモンで、常に際限なく食べている。私はお二人にお願いします。私を満腹にさせて下さい。(二)」

そう言われて、(三)クリシュナとアルジュナは彼に答えた。

「あなたはいかなる食物で満足するのですか。我々はその食物をさし上げるよう努力しましょう。(三)」

するとその聖者は、どのような食物を用意しましょうかと言う二人に告げた。(四)

「私は普通の食物は食べない。私は火神である。私にふさわしい食物をいただきたい。(五)インドラが常にこのカーンダヴァの森を守っている。そこで私は、その偉大な神に守られているこの森を焼くことができない。(六)ここには、彼の友人のタクシャカ竜が一族とともに住みついている。そこでインドラはこの森を守っているのである。(七)それに付随して、多くの生物が守られている。インドラの威光により、私は森を焼くことができない。(八)私が燃え上がるのを見ると、彼は雨雲により雨を降らせる。そこで私は、森を焼こうと望んでも、焼くことができないのである。(九)しかし、武術に秀でた二人の助力者とお会いしたからには、私はカーンダヴァの森を焼くことにする。私はこの食物を選んだ。(一〇)最高に武術に秀でたお二人は、いたるところで豪雨を防ぎ、全面的に生き物を完全に制止して下さい。(一一)」

そう言われてアルジュナは、インドラの意志に逆らってカーンダヴァの森を燃やそうと望む火神に答えた。(一二)

「私は多くの神聖な最高の武器を持っています。私はそれらにより、大勢のインドラとでも戦うことができます。(一三)しかし神よ、私には戦闘において奮戦する私の勢いに耐え得る、腕力に釣り合った弓がありません。(一四)また、私がすばやく射る場合には、多くの無尽の矢が必要です。また私の戦車は、望むだけの矢を積むことができません。(一五)風のように速い神的な白馬が必要です。そして雷雲のように轟く、太陽のように輝く戦車が必要です。(一六)クリシュナにもまた、その力量に釣り合った武器がありません。戦闘において彼が竜や鬼神(ピシャーチャ)を殺し得るような武器が。(一七)神よ、この仕事が成就するような方法を教えて下さい。大森林に雨を降らせるインドラを制止できるような方法を。(一八)火神よ、人間の努力でできることなら、我々は何でもやります。だが神よ、それができるような道具を下さい。(一九)」

(第二百十五章)

アルジュナとクリシュナの武器

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そのように言われて、火神は世界守護神のヴァルナ（水天）に会いたいと願って、そのアディティの息子である水に住む神、水の主のことを思念した。（一）その神は、思念されたことを知って、火神に会いに来た。火神はその水の主、第四の世界守護神に敬意を表してから、その偉大な守護神に言った。（二）

「ソーマ王に与えられた弓と、二つの箙（えびら）と、猿の標識のついた戦車をすぐに引き渡してくれ。（三）というのは、アルジュナがガーンディーヴァ（弓の名）で大仕事をやろうとしているから。またクリシュナは円盤（チャクラ）を用いて……。私のためにそれを渡しなさい。」

ヴァルナは、「与えるであろう」と火神に答えた。（四）それから彼は、その驚異的で強力な宝の弓を渡した。その弓は名誉と名声を増大させ、一切の武器にうち破られることなく、一切の武器を撃破し、一切の武器の長であり、敵軍をおびやかす。（五）それ一つで百千に匹敵し、王国を繁栄させ、きらびやかで種々の色に輝き、美しく傷ひとつない。（六）それは神々や悪魔やガンダルヴァ（半神族）たちに永遠に敬われている。彼はまた、二つの無尽の（矢を入れた）すばらしい箙を引き渡した。（七）それから彼は、神馬をつなぎ、すばらしい猿の旗標のついた戦車を引き渡した。それは、白雲にも似た、思考や風のように速い、金の首輪をつ

けた、ガンダルヴァの銀色の馬にひかれていた。（八）その戦車はあらゆる装備を積み、神々や悪魔たちにうち破られることなく、光り輝き、大音響をたて、すべての生類を魅了する。（九）世界の主である造物主のヴィシュヴァカルマン（毘首羯磨）が、自己の熱力（タパス）によりそれを作った。その形は、太陽の姿にも似て、筆舌に尽くしがたいものである。（一〇）ソーマ神は、象や雲に似て、美しさで燃えるようなその戦車に乗って、悪魔たちを征服したのであった。（一一）その最高の戦車の上に、インドラの弓（虹）のように輝く、非常に美しい、最高の黄金の旗竿が立っていた。（一二）その旗竿の上に、獅子や虎のような特徴をそなえた神々しい猿が、咆哮するかのようにきらめいていた。（一三）その旗の上に、種々の巨大な生き物がいて、その叫び声により敵の軍隊の意識を失わせるのであった。（一四）

アルジュナは種々の旗により飾られたその戦車を右まわりにまわってから、神々に敬礼した。（一五）それから戦闘の準備をし、鎧をつけ剣を帯び、弓籠手（ゆごて）と弓懸（ゆがけ）をつけ、善行をなした人が天車に乗るように、その戦車に乗りこんだ。（一六）そして、かつて梵天に作られた神聖な最高の弓ガーンディーヴァをつかんで、アルジュナは大いに喜んだ。（一七）それから強力な彼は、火神に敬礼して弓を取ると、力をこめて弓に弦を張った。（一八）強力なアルジュナが弦を張っている時、その音を聞いた者たちの心はふるえた。（一九）戦車と弓と無尽の（矢を入れた）箙を得て、アルジュナは援助の仕事が可能になり喜び勇んだ。（二〇）火神はまた、クリシュナに、大事にしていたアーグネーヤ（「火神の」という意）、ヴァジュラナーヴァ（または、「中心が金剛でできた」）という円盤（チャクラ）を与えた。そこで彼も仕事が可能になった。（二一）そして火神は彼に告げた。

「クリシュナよ、あなたは疑いなく、戦闘において人間を超えた者たちにも勝利するであろう。(二二) これにより、あなたは合戦において、強力な敵を滅ぼすことにかけて、疑いもなく、常に人間・神・羅刹・吸血鬼(ピシャーチャ)・悪魔・竜たちを凌駕するであろう。(二三) クリシュナよ、あなたが戦場でこれを敵に投げると、その度ごとに、それは妨げられることなく殺戮して、再びあなたの手にもどって来るであろう。(二四)」

そしてヴァルナは彼に、雷のような音をたてる、悪魔を滅ぼす、カウモーダキーという名の、ヴィシュヌ神の恐ろしい棍棒を与えた。(二五) それから、喜んだクリシュナとアルジュナは火神に言った。

「我々は武器を修得し、武器を完備し、戦車を手に入れ、軍旗を持った。(二六) 神よ、我らはすべての神々や阿修羅(アスラ)とさえ戦うことができる。いわんや蛇(タクシャカ竜)のために戦いを望む一人のインドラと戦うのはわけのないことである。(二七)」

アルジュナは言った。

「強力なクリシュナが戦いにおいてその武器の円盤(チャクラ)を投げれば、三界において、彼がうち破れないような者は存在しない。(二八) また火神よ、私もガーンディーヴァ弓と無尽の矢を入れた箙を取って、戦闘において全世界を征服することができる。(二九) 主よ、この森を大火ですっかり取り囲み、好きなように燃やしなさい。今や、我々は援助することができる。(三〇)」

森を焼く

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クリシュナとアルジュナにそう言われた火神は、激しい姿をとって、森を焼き始めた。(三一) 七つの炎を持つ火神は、カーンダヴァ森をすっかり取り囲み、怒り狂って、宇宙紀(ユガ)の終わりを現出するかのように、森を焼いた。(三二) 火神はその森を包囲して遍満し、雷雲のような音を響かせ、一切の生類を焼いた。(三三) 焼かれているその森の姿は、輝きわたる山の王、黄金のメールの姿さながらであった。(三四)

(第二百十六章)

二人の人中の虎は、戦車に乗り、森の両側にいて、あらゆる方角で生き物の大虐殺を行なった。(一) カーンダヴァ森に住む生物が逃げようとするのを見ると、二人の勇士は、いたるところで追跡した。(二) 戦車は速やかに進むので、彼らは逃げる隙間を見出すことができなかった。その最高の戦車に乗る二人の戦士は、振りまわされたかのように〔一つの輪になって〕見えた。(三) カーンダヴァ森が燃えている時、何千という生き物は、恐怖の叫び声を上げて、十方に飛び散った。(四) 多くのものは〔体の〕一部を焼かれ、また他のものたちは〔全身を〕焦がされ、目を見開き、倒れ、動転し、意識を失った。(五) あるものたちは子供を

抱きしめ、また他のものたちは両親を抱きしめ、愛情の故に捨て去ることができず、いっしょに死んで行った。(六)他のものたちは、幾千となく、形相を変えて飛び出し、あちこち走りまわり、再び火の中に飛びこんだ。(七)(八―一三)

歓喜した火神の大火炎は、天空に飛び、神々に非常な動揺を引き起こした。(一四)そこですべての偉大な神々は、神々の王、千眼者インドラに庇護を求めた。(一五)

神々は言った。

「これらすべての生き物たちはどうして火に焼かれているのか。神々の王よ、世界の終末が訪れたのではないでしょうね。(一六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼らからそのことを聞くと、インドラは自ら視察して、カーンダヴァ森を救うために出発した。(一七)神々の王インドラは、様々な形をした雲の大群により空をおおって、雨を降らせた。(一八)千眼者(インドラ)は、カーンダヴァの火に対して、車軸ほどの太さの雨を百千と降らせた。(一九)しかしその雨は、まだ目的に達しないうちに、火の熱力によって空中で干上がり、いずれも火に達することがなかった。(二〇)そこでインドラは火に対して大いに怒り、大量に水を放出して再び雨を降らせた。(二一)その森は火と雨を受け、煙と稲光に満ち、雷と共鳴し、凄まじい有様となった。(二二)

(第二百十七章)

神々との戦い

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

勇士アルジュナは最高の武器の威力を示し、矢を雨のように射て、雨を降らせるインドラを制止した。(一)そして彼は、カーンダヴァ全体を矢でおおって、雨を森から引き離した。(二)アルジュナが矢を射て、その森を矢でおおっている間、いかなる生き物もそこから逃げ出すことはできなかった。(三)

その時、強力な竜王タクシャカは、その燃える森におらず、クルクシェートラにいた。(四)しかし、タクシャカの息子である強力なアシュヴァセーナはそこにいた。彼は火から逃れるために懸命に努力した。(五)しかしアルジュナの矢に悩まされて、脱出することができなかった。そこで蛇の娘である母親が、彼を呑み込んで救おうとした。(六)まず彼の頭を呑み、それから尾を呑んでいる間、その竜女は息子を救おうと望んで、上方に昇ろうとした。(七)アルジュナは、広い刃のついた鋭い矢で、去ろうとする彼女の頭を切った。神々の王(インドラ)は彼女を見て、その息子を救おうと考え、風と雨を送ってアルジュナを錯乱させた。その間にアシュヴァセーナは救われた。(八―九)

その時、その恐ろしい幻力(マーヤー)を見て、竜に欺かれたアルジュナは、空を行く(生き物)たちを、二つに、三つに断ち切った。(一〇)そして怒ったアルジュナと、火神とクリシュナとは、

その蛇を呪った。「あれは拠り所を持たないであろう」と。（蛇が脱皮することの説明神話であろう）(二一)
　それからアルジュナは、その詐術を想い起こして怒り狂い、鋭い矢で空をおおい、千眼者（インドラ）に戦いを挑んだ。(二二) 神々の王も、アルジュナが激したのを見て、自分の輝かしい武器を投げた。それは空全体に広がった。(二三) それから空にいるヴァーユ（風神）は、大音響をたて、すべての海を動揺させて、豪雨を降らせる雲の群を生じさせた。(二四) 対策に通じたアルジュナは、それを撃退するために、呪句を唱え加持して、最高の武器ヴァーヤヴィヤ（風神の武器）を放った。(二五) それによって、インドラの雹撃と雲の威力は失われた。豪雨は干上がり、稲光は消え失せた。(二六) すぐに空の汚れと闇は鎮まり、快い涼しい風が吹き、日輪はもとの状態にもどった。(二七) 火神は妨害がなくなって喜び、様々な姿をとり、この上なく輝き、その音で世界を満たして燃え広がった。(二八)
　森火事がクリシュナとアルジュナに守られているのを見て、スパルナ（ガルダ）を祖とする鳥たちは、自尊心にかられて、空に舞い上がった。(二九) ガルダの一族は金剛のようなクリシュナとアルジュナを、翼やくちばしや爪で攻撃しようとして空から降下した。(三〇) また、蛇の群も、アルジュナのそばに近づき、燃えるような口をして、恐ろしい毒を吐き出した。(三一) アルジュナは怒った鳥たちを見るや、彼らを矢で射貫いた。彼らは力尽きて、燃える火に落ちて死んだ。(三二)
　それから、神々やガンダルヴァ（半神の一種）や夜叉や羅刹や蛇たちが、戦いを望み、この上ない叫び声をあげて飛びかかった。(三三) 彼らは、鉄砲（アヤハカナパ）(?)、円盤、石弓を手に振りかざして、怒りの勢いにまかせて、クリシュナとアルジュナを殺そうとした。(二四) 彼らが叫び声を上げて武器の雨を降らせている間、アルジュナは鋭い矢で彼らの頭を断ち切った。(二五)
　威光に満ちた勇士クリシュナは、円盤によりダイティヤとダーナヴァ（いずれも悪魔の種類）の群を殺戮していた。(二六) また他の強力な悪魔たちは、矢に射貫かれ、円盤の威勢にかりたてられ、死んだかのように立ち尽くしていた（異本による）。(二七) そこで怒った神々の主シャクラ（インドラ）は、白い象に乗り、彼ら二人に襲いかかった。(二八) 彼は雷電をつかんで、その武器である金剛杵（ヴァジュラ）を激しく投げた。そして阿修羅（アスラ）の殺戮者（インドラ）は神々に、二人はもうおしまいだと告げた。(二九)
　神々の王インドラが偉大なる雷電を振り上げたのを見て、神々はすべて、各自の武器をつかんだ。(三〇) ヤマ（閻魔）王はカーラ（破壊神）の杖を持った。財宝の主（クベーラ、毘沙門天）は棍棒（異本による）をつかんだ。ヴァルナは輪縄（索縄）を、シヴァは三叉の槍（「ヴィチャクラ」疑問）を持った。(三一) アシュヴィン双神は輝く薬草を持った（双神は神の医師）。ダートリは弓を、ジャヤは杵を持った。(三二) 怒った大力のトゥヴァシトリは山を持った。アンシャは槍を、死神（ムリテュ）は斧をつかんだ。(三三) アリヤマンも恐ろしい鉄棒を持って歩きまわった。ミトラは鋭い縁（へり）の円盤を持って立っていた。(三四) プーシャンとバガとサヴィトリは怒り、弓と剣をとって、クリシュナとアルジュナに襲いかかった。(三五) 強力なルドラ神群とヴァス神群とマルト神群と、一切諸神と、その威光により輝くサーディヤ神群、及びその他の多くの神々は、種々の武器をとり、二人の最高の人間、クリシュナとアルジュナとを殺そうとして進撃した。(三六－三七)

その大いなる戦闘において、生物の滅亡をもたらす、宇宙紀（ユガ）の終末にも似た、諸々の驚異的な前兆が現われた。(三八) 戦いにおいて無敵の二人の不屈な勇士は、激したインドラと神々を見て、恐れることなく、弓をかまえて立っていた。(三九) 彼らは各々、やって来る神々を見て猛り立ち、金剛杵のような矢を放って彼らを防ぎ止めた。(四〇) 神々は幾度もはなはだしく戦意を喪失し、恐怖のあまり戦場を捨ててインドラに助けを求めた。(四一) 天界に住む聖者たちは、クリシュナとアルジュナによって神々が防ぎ止められたのを見て驚嘆した。(四二) インドラも、戦闘における二人の力量を幾度も見て非常に喜び、再び二人と戦いを交えた。(四三) そこでインドラはまたアルジュナの力量を知りたいと思い、岩石の大雨をふり注いだ。アルジュナは大いに怒って、その雨を矢で粉砕した。(四四) 神々の王インドラは、効果がなかったのを見て、更にその雨を増加させた。(四五) インドラの息子（アルジュナ）は激しい矢によって岩石の雨を破壊して、父を喜ばせた。(四六) そこでインドラは、マンダラ山から両手で大きな峰を樹木もろとも引き抜いて、それを投げつけてアルジュナを殺そうとした。(四七) するとアルジュナは、高速の、燃える先端を持ち、一直線に飛ぶ矢によって、その山の峰を粉々に砕いた。(四八) その山が砕ける有様は、まるで太陽と月と惑星をともなう天空が砕ける有様のようであった。(四九) その大きな峰は森に落ち（異本による）、またもやカーンダヴァに住む生き物をはなはだしく殺害した。(五〇)

（第二百十八章）

阿修羅マヤを助ける（二一九略）

神々は二人の力から森を救うことができず、その火災を鎮めることができなかったので退却した。(二〇) インドラは神群が退却したのを見て、喜んでそこにとどまり、クリシュナとアルジュナを讃えた。(二一) 神々が退却した時、非常に荘重に響きわたる、姿なき声がインドラに向かって告げた。(二二)

「あなたの友である竜王タクシャカはここにいない。カーンダヴァが燃えた時、彼はクルクシェートラに行った。(二三) そしてまた、ヴァースデーヴァ（クリシュナ）とアルジュナとが共に戦う時には、あなたは二人に勝利することはない。シャクラよ、私の言うことを聞きなさい。(二四) 彼らは天界においてその名も高い、ナラとナーラーヤナである。あなたも彼らの力量と武勇のほどを知っているだろう。(二五) この古（いにしえ）の最高の聖仙である両者は、不可侵で、戦いにおいて無敵であり、全世界において彼らがうち破られることはあり得ない。(二六) この両者は、すべての神々と阿修羅たちと、夜叉、羅刹、ガンダルヴァ、人間、キンナラ（半神の一種）、蛇たちに尊敬されるべきである。(二七) それ故、インドラよ、神々とともにここから去りなさい。そして、この定められたカーンダヴァの滅亡を見物していなさい。(二八)」

(二九) 偉大なインドラが去ったのを見て、神々は急いで、こぞってインドラの後を追った。

神々の主はその言葉を聞いて、真実だと思い、怒りと遺恨を捨てて、天界へ去った。

(二〇) 神々の王が神々とともに去ったのを見て、クリシュナとアルジュナは獅子吼した。(二一) 神々の王が去った時、クリシュナとアルジュナは喜んで、恐れることなく再び森を焼いた。(二二) アルジュナは風が雲を駆逐するように、神々を駆逐してから、矢を射て、カーンダヴァに住む生き物を殺した。(二三) アルジュナが射る矢に貫かれて、いかなる生き物も、そこから逃げ出すことはできなかった。(二四) 大きな生き物といえども、戦場において、射損じることのないアルジュナを見ることすらできなかった。いわんや戦をしかけることなどなおさらできなかった。(二五) 彼は一頭を百本の矢で射貫き、また百頭を一本の矢で射貫いた。彼らはまるでカーラ（破壊神）自身によって撃たれたかのように、息絶えて火の中に倒れた。(二六) 彼らは岸辺にも険阻な場所にも、祖霊や神々の聖域においても、寄る辺を見出すことはなく、苦熱が生じた。(二七)(二八―三四略)

その時、クリシュナは、マヤという名の阿修羅（アスラ）がタクシャカの住処（すみか）から突然逃げ出したのを見た。(三五) 風を御者とする火神は、結髪の苦行者が体現したかのようになって、雷雲のように咆哮し、彼を焼こうとして追い求めた。クリシュナも円盤を振りかざし、彼を殺そうとして立ちはだかった。(三六) マヤは振り上げられた円盤と、焼こうとする火神を見て、「アルジュナよ、急いで来て下さい」と叫んだ。(三七) アルジュナは彼の恐怖の叫びを聞いて、マヤを蘇生させるかのように、「恐れることはない」と答えた。(三八) アルジュナがナムチの兄弟であるマヤの安全を保証した時、クリシュナは彼を殺すことを思いとどまり、火神も彼を焼かなかった。(三九) その森が燃えている時、火神は、アシュヴァセーナ、マヤ、四羽のシャールンガカ鳥の六名を焼かなかった。(四〇)

（第二百十九章）

シャールンガカ鳥の物語

ジャナメージャヤはたずねた。

「バラモンよ、その森がそのように燃えていた時、どうして火はシャールンガカ鳥を焼かなかったのか。それをすぐに話してくれ。(一)アシュヴァセーナと悪魔のマヤが焼かれなかった理由は語られたが、シャールンガカたちが焼かれなかった理由は語られなかったから。(二)シャールンガ(シャールンガカ)たちが滅びなかったという奇蹟を語ってくれ。火に遭遇した時、彼らは何故滅びなかったのか。(三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

あの時、火がシャールンガカたちを焼かなかったわけをすべてありのままに語りましょう。バーラタよ。(四)

法(ダルマ)を知る人々の最高者、誓戒を厳守する苦行者である、マンダパーラという博識の大仙がいた。(五)彼は禁欲を守る聖仙の道に従い、ヴェーダを学習し、法に専念し、苦行を積み、感官を制御していた。(六)彼は苦行の窮極に達し、肉体を捨てて祖霊の世界へ行ったが、そ

こで修行の果報を得ることはなかった。(七)彼はそれらの世界を苦行により獲得したにもかかわらず、それらが果報をもたらさぬことを知って、ダルマ王の側にいる天人たちにたずねた。(八)

「私が苦行によって得たこれらの世界は、どうして私に閉ざされているのですか。このような果報をもたらす行為を私はそこでしなかったのでしょうか。(九)それが原因でこの苦行の果報が閉ざされたことを、私はそこで行ないましょう。天人たちよ、お話し下さい。(一〇)」

神々は告げた。

「バラモンよ、人間がそれを負債として生まれるところのものを聞きなさい。すなわち、疑いもなく、祭式と梵行(禁欲と学習)と子孫とである。(一一)そのすべては、祭祀と苦行と息子によって除去される。あなたは苦行を積み、祭祀を行なったが、あなたに子孫はいない。(一二)その息子という件で、これらの世界はあなたに閉ざされているのだ。息子を生め。そうすれば永遠の世界を享受するであろう。(一三)聖者よ、息子(プトラ)はプットという地獄から父親を救い出す(トラ)。それ故、最高のバラモンよ、子孫の存続に努力せよ。(一四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

神々の言葉を聞いて、マンダパーラは、一体どこで速やかに多数の子供ができるであろうかと考えた。(一五)彼は考えているうちに、鳥たちが多くの子供を持っているということに思いあたった。そこで彼はシャールンガカ鳥となって、ジャリターという雌鳥と交わった。

〔一六〕聖者は彼女にヴェーダを知る四名の息子を産ませてから、まだ卵の中にいる幼い息子たちを母親とともに森に置き去りにして、ラピター（卵の雛鳥）のもとへ行った。〔一七〕聖者がラピターのもとへ去った時、ジャリターは子供への愛情に迷い、大いに心配した。〔一八〕悩んだジャリターは、夫に捨てられた、捨てるに忍びない卵の中の幼い聖仙たちを、カーンダヴァの森に置き去りにしなかった。そして愛情に迷う彼女は、生まれた子供たちを彼女のやり方で育ててやった。〔一九〕その後、聖仙マンダパーラは、カーンダヴァの森でラピターと飛びまわっている間に、火神が森を焼きに来たのを見た。〔二〇〕火神の計画を知り、また彼の息子たちが幼いことを考え、その梵仙は恐れ、息子たちのことを託して、威光に満ちた世界守護神である火神を讃えた。〔二一〕〔二二―二九略〕

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

マンダパーラに讃えられて火神は、その無量の威光を有する聖仙に満足した。そして心から喜んだ火神は、「あなたにどのような恩恵を与えたらよいか」と彼にたずねた。〔三〇〕マンダパーラは合掌して火神に言った。

「カーンダヴァの森を燃やす時、私の息子たちを見逃して下さい。〔三一〕」

「承知した」と約束して、火神は、その時、森を焼こうとして、カーンダヴァにおいて燃え上がった。〔三二〕

（第二百二十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

火神が燃え上がった時、シャールンガカたちは非常に苦しんで悩み、この上なく恐れたが、寄る辺を見出すことはなかった。〔一〕哀れなジャリターは、幼い子供たちを見て非常に苦しんで泣いた。〔二〕〔三―一〇略〕

シャールンガ鳥たちは、嘆いている母に言った。〔一一〕

「お母さん、愛着を捨てて、火のないところへ飛んで行きなさい。我々が死んでも、またあなたに息子たちができるでしょう。しかし、あなたが死んでしまったら、我々の家系は存続しません。〔一二〕その両方のことを考慮して、我々の家のためになることをして下さい。お母さん、あなたにとってこれが最後の機会です。〔一三〕我々の家系を滅ぼしてまで、息子たちに愛着をかけてはなりません。〔高い〕世界を望む父の行為が無駄になりませんように。〔一四〕」

ジャリターは言った。

「この樹のそばに鼠の穴があります。急いでそれに入りなさい。そこなら火の危険はありません。〔一五〕子供たちよ、そうしたら私は土でその穴をふさぎます。そうすれば、燃える火に対処することができると思います。〔一六〕火がなくなったら、土の堆積を取り除くためにもどって来ます。火から逃れるためにこの計画に従いなさい。〔一七〕」

シャールンガカたちは答えた。

「我々は羽根がなく、肉だけですから、肉食の鼠が我々を殺すでしょう。その危険を考えると、そこに住みたくはありません。(一八)どうしたら火が我々を焼かず、鼠が我々を食べないでしょうか。どうしたら我々の父の行為が無駄にならず、お母さんが生きながらえるでしょうか。(一九)鳥たちは、穴にいれば鼠に殺され、〔外にいれば〕火に殺されます。この両方のことを考慮すると、食われるより焼け死ぬ方がましです。(二〇)穴の中で鼠に食べられて死ねば、我々は軽蔑されるでしょう。しかし、火によって身を捨てることは、識者に勧められております。(二一)」

(第二百二十一章)

ジャリターは言った。

「鼠はこの穴から出たところ、鷹がその小動物を両足でさらって行きました。彼を恐れることはありません。(一)」

シャールンガカたちは言った。

「鼠が鷹にさらわれたかどうか、全くわかりません。また他の鼠がそこにいるかも知れません。我々は彼らを恐れます。(二)火がこちらに来るかどうかは疑問です。風向きが逆になりました。そして、疑いもなく鼠の危険はあります。(三)お母さん、疑いなく死ぬことよりも、死ぬかどうか疑問の方が優れています。ふさわしく空を飛びなさい。美しい息子たちを見出すことでしょう。(四)」

ジャリターは言った。

「私は確かに鷹が穴に近づくのを見ました。その強力な鷹は、穴から出て這いまわる鼠を捕えてさらって行きました。(五)私は飛び立ったその鷹の後ろからついて行って、鼠を穴からさらった彼を讃えました。(六)

『鷹の王よ、あなたは我々の敵を捕えて飛行する。天界に達して、敵なく、黄金の体を持つものとなりなさい。(七)』

その飢えた鳥がそれを食べてしまった時、私は彼に別れを告げて、家に引き返しました。(八)子供たちよ、安心して穴に入りなさい。危険はありません。私の見ているところで、確かに鷹が鼠をさらいました。(九)」

シャールンガカたちは言った。

「お母さん、我々は前に鼠がさらわれたかどうか確かめていません。確かめないうちは穴に入ることはできません。(一〇)」

ジャリターは言った。

「鷹が鼠をさらったことを私が確かめているのですよ。ですから恐れることはありません。私の言う通りにしなさい。(一一)」

シャールンガカたちは言った。

「あなたは誤った手当てにより大なる危険を取り除くことはできません。知識が混乱する時、その行為は分別にもとづいたものではありません。(一二)また、我々は何の役にも立ちませ

ん。あなたは我々のことを知りません。その我々を、あなたはどうして苦しみながら扶養するのですか。我々はあなたにとって何ですか。(一三)あなたは若く美しく、夫を見つけることができます。夫に従いなさい。すばらしい息子たちを得なさい。(一四)私たちは火に入り、美しい世界へ達するでしょう。あるいは、火は我々を焼かないかも知れません。そうしたらまた、我々のところにもどって来て下さい。(一五)」

(第二百二十二章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そのように言われて、雌のシャールンガ鳥は、カーンダヴァ森に息子たちを残して、急いで火のとどかない安全な場所へ行った。(一六)それから、激しい炎を上げて燃える火が、マンダパーラの息子であるシャールンガ鳥たちのいる所にやって来た。(一七)彼らは、自分の威光により燃え上がる火を見て、〔まず〕ジャリターリが火に告げた。(一八)

(第二百二十二章)

〔子供たちの言葉〕(第二百二十三章略)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その時、マンダパーラも、息子たちのことを考え続けていた。火神に頼んでおいたが、やはり心配しないわけには行かなかった。(一)彼は息子のことで悩んで、ラピターに言った。

「ラピターよ、私の子供たちは逃げることができないのか。(二)火が広がり、風が速やかに吹く時、私の子供たちは逃げることができずにいるのだろう。(三)どうして彼らのあの哀れな母親は、助けることができないのか。息子を救うことができないで、彼女は苦しんでいるだろう。(四)走ることも飛ぶこともできない私の息子たちのことを心配して、近くで鳴きながら飛びまわっているのであろうか。(五)私の息子のジャリターリはどうしているか。サーリスリクヴァはどうしているか。スタンバミトラはどうしているか。ドローナはどうしているか。またあの哀れな女はどうしているか。(六)」

そのように森で嘆いている聖仙マンダパーラに対して、ラピターは嫉妬して言った。(七)

「あなたは息子たちを心配しているのではない。彼らは聖仙で威光をそなえ力に満ちているとあなたは言いました。彼らには火の危険はありません。(八)またあなたは私の面前で、火神に彼らを託しました。そして偉大な火神は、承知したと約束しました。(九)世界守護神〔火神〕は決して偽りを言いません。しかも彼らは雄弁です(第二百二十三章で、息子たちは火神を讃えている)。あなたの心は彼らにはありません。(一〇)あなたはあの私の敵(恋敵であるジャリター)のことを心配して悩んでいるのです。きっと前に彼女を愛したようには、私を愛していないのです。(一一)親しいものに愛情がなく、他のものを愛するあなたが、〔解決する〕能力がありながら、御自身が苦しむのを見過ごすことは、決して適切ではありません。(一二)あなたはジャリターのために悩んでいるのですから、彼女のところに行きなさい。私は悪い夫といっしょになったと思って、一羽で暮らしましょう。(一三)」

マンダパーラは言った。

「私はお前が考えるような理由から、世間で暮らしているのではない。子孫のために行動しているのである。そして私の子孫は危機に陥っている。(二四)すでにできたものを捨てて、これからできるものに期待する愚者を世人は軽蔑する。お前の好きなようにするがよい。(二五)この燃える火は、樹々を舐め尽くしながら、私の心におぞましく不吉な苦しみを生じさせる。(二六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。

火がその場から過ぎ去った時、子供のことを心配するジャリターは、急いで息子たちのところへ行った。(二七)哀れな彼女は泣き叫んでいるうちに、森の中で息子たちがみな、火を免れて無事でいるのを見出した。(二八)彼らを見たということはまことに信じがたいことであった。彼女は泣きながら、繰り返し子供たちを一羽ずつ慈しんだ。(二九)

それから、突然、マンダパーラがやって来た。ところが、息子たちはみな、彼を歓迎しなかった。(三〇)彼らは一羽ずつ、ジャリターに向かって繰り返しさえずっていたが、その聖仙に対しては、よいことも悪いことも、何も言わなかった。(三一)

マンダパーラは言った。

「どれがお前〔たち〕のうちで長男か。どれが次男か。どれが三男か。どれがお前の末の子か。(三二)私が苦しんでこのように言っているのに、どうして私に答えないのか。私はお前

たちを火神に委ねたが、決してそれで安心していたわけではない。(三三)」

ジャリターは言った。

「あなたにとって長男や次男がどうだというのです。三男やこの哀れな末の子がどうだというのです。(三四)あなたはかつて、私を完全に捨てて去りました。あの若くて美しい微笑のラピターのところへ行きなさい。(三五)」

マンダパーラは言った。

「この世で女性にとって、〔夫〕以外の男と、恋敵以上に危険なもの(異本を考慮した)は存在しない。(三六)というのは、あの誓戒を守り全世界に有名な美しいアルンダティーといえども、最高の聖仙ヴァシシタを疑ったのであるから。(三七)七仙(北斗七星)のうちの傑物である彼は、この上なく心清らかで、常に妻の喜ぶこと、ためになることに専念したが、彼女はその聖者を軽蔑した。(三八)彼女はこの悪い考えにより、煙る火(または「暁光」)のような色になり、見え隠れする美しくない〔星となり〕、凶兆のように見られているのである。(三九)お前もまた、子供のためにやって来た夫の私を軽蔑するのだから、その点で彼女と同様である。(四〇)男は妻であるからといって決して信用してはならぬ。妻は子供を持つと、義務のことを考えないから。(四一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、息子たちはみな、彼にふさわしく仕えた。そして彼は息子たちを慰めようとし

た。(三二)

(第二百二十四章)

マンダパーラは言った。

「私はお前たちを守るために、火神に頼んだ。そして火神は、承知したと、前もって約束した。(一)火神の約束を知り、またお前たちの母が法(ダルマ)をわきまえていること、またお前たちの最高の力量を知って、私は前にここに来なかったのである。(二)息子たちよ、死を恐れる必要はない。火神もお前たちが聖仙であることを知っている。お前たちはブラフマン(梵、最高原理)を知っている。(三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

このように息子たちを慰めてから、マンダパーラは彼らと妻を連れて、その土地から離れ、他の土地へ行った。(四)

一方、激しい光輝を有する火神は、世界に無畏を生じさせつつ、クリシュナとアルジュナとともに、カーンダヴァの森を激しく燃やした。(五)火神は脂肪と髄の川を飲んで、最高に満足してアルジュナを見た。(六)それから、天空から聖なる神々の王(インドラ)がマルト神群に囲まれて降下して、アルジュナとクリシュナに告げた。(七)

「汝らは、神々でさえなしがたい行為を行なった。私は満足した。願いをかなえるから選べ。

人間に得られがたい願いでも。(八)」

アルジュナはインドラからすべての武器を得たいと願った。インドラは彼がそれらを手に入れる時を定めた。(九)

「パーンダヴァよ、神聖にして偉大なる神(マハーデーヴァ)(シヴァ)が満足した時、それらの武器をすべてお前に与えるであろう。(一〇)私はまさにその時を知っている。お前が大なる苦行を行なったら、私はそれらをお前に与えるであろう。(一一)お前はすべてのアーグネーヤ(火神の武器)とヴァーヤヴィヤ(風神の武器)と、私のすべての武器を得るであろう。(一二)」

ヴァースデーヴァ(クリシュナ)は、アルジュナとの永遠の友情を願った。神々の王は喜んで彼のその願いをかなえた。(一三)インドラは喜んで彼らの願いをかなえてから、火神に別れを告げ、神々とともに天界へ去った。(一四)火神は、五日と一日の間、鳥獣もろともその森を焼いてから、非常に満足して鎮まった。(一五)彼は肉を食べ、脂肪と血を飲んでから、最高に喜んで二人に言った。(一六)

「最高の人物であるあなた方により、私は大いに満足させられた。勇士たちよ、あなた方とお別れする。望みのままの場所へ行きなさい。(一七)」

このようにして、アルジュナとクリシュナと悪魔のマヤは火神と別れた。(一八)それから、三名はいっしょに遍歴してから、快い川岸にそろって腰をおろした。(一九)

(第二百二十五章)

(第一巻終わり)

第2巻　集会の巻（サバー・パルヴァン）

第一章—第七十二章

(20) 集会場（第一章—第十一章）

パーンダヴァの集会場

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから〔阿修羅〕マヤは、合掌し、優しい言葉で繰り返し敬意を表し、ヴァースデーヴァ（クリシュナ）の前でアルジュナに告げた。（一）

「クンティーの息子よ、あなたは怒ったこのクリシュナから、そしてまさに私を焼こうとする火から、私を救って下さいました。おっしゃって下さい。あなたのために何をいたしましょうか。（二）」

アルジュナは答えた。

「あなたは私にあらゆることをしてくれた。御機嫌よう。偉大な阿修羅よ、さようなら。いつも私に友情を抱いて下さい。我らもあなたに友情を抱きます。（三）」

マヤは言った。

「人中の雄牛よ、これはあなたにふさわしい言葉です。しかし私は友情から何かをしたいと思います。（四）というのは、私は魔族のうちのヴィシュヴァカルマン（一切造者）、偉大な技術者（カヴィ）ですから。パーンダヴァよ、私は今あなたのために何かをしたいと思います。（五）」

アルジュナは言った。

「あなたは私によって生命の危機を救われたと考えている。そうであるとしても、私はあなたに何もさせることはできない。（六）しかし、あなたの願望を無駄にしたくはない。クリシュナのために何かをして下さい。そうすれば私に恩を返したことになる。（七）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

マヤに催促されて、クリシュナはしばらくの間、彼に何を依頼しようかと考えた。（八）そしてクリシュナは、彼に「ダルマ王（ユディシティラ）にふさわしいと思うような集会場を作ってもらいたい」と依頼した。（九）「それが作られた時、この全世界の人々がそれを見て驚嘆しても、模倣することができないような集会場を作れ。（一〇）あなたが工夫した神的な意匠、阿修羅的、人的な意匠を見てとれるような集会場を作れ。マヤよ。（一一）」

マヤはその言葉を受けて喜び、パーンダヴァのために、天宮にも似た集会場を作ることにした。（一二）

それからクリシュナとアルジュナは、ユディシティラにすべてを報告し、マヤを紹介した。（一三）その時、ユディシティラはふさわしく彼に敬意を表した。丁重にもてなされたマヤは、恭しくその敬意を受けた。（一四）マヤはパーンドゥの息子たちに昔の神々（または阿修羅）の業績を語った。（一五）マヤは、少しの間休息し、計画を立ててから、偉大なパーンダヴァたちのために集会場を作り始めた。（一六）威光に満ちたマヤは、パーンダヴァたちと偉大なクリシュナの意向に従い、吉日に〔起工の〕の儀式を行なった。（一七）精力的な彼は、最上のバラモン

たちを、幾千となく、乳粥により満足させ、多くの財物を与えた。（一八）それから彼は、すべての季節の美質にめぐまれた、神々しい外観の、魅力的な一万腕尺の土地を、縦横に測量した。（一九）

（第一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

崇拝に値するクリシュナは、友情あふれるパーンダヴァたちに敬われて、カーンダヴァプラスタに滞在していた。（一）大きい眼のクリシュナは、父に会いたくなり、帰国の決意をし、ダルマ王（ユディシティラ）とプリター（クンティー）に別れを告げた。（二）世人に礼拝さるべきクリシュナは、父の妹（クンティー）の両足に頭をつけておじぎをした。彼女はその頭に接吻して、彼を抱きしめた。（三）そのすぐ後で、誉れ高いクリシュナは自分の妹（スバドラー）に会った。善良で優しく語るスバドラーに、聖クリシュナは愛情の涙を浮べて近づいて、有意義な言葉、真実で有益な言葉、簡潔で適切な最上の言葉を述べた。（四―五）彼女は彼に、肉親の人々への伝言を託した。そして彼に敬意を表し、何度も頭を下げておじぎをした。（六）クリシュナは美しい妹を祝福してから別れを告げ、そのすぐ後でクリシュナー（ドラウパディー）とダウミヤに会った。（七）最高の人物であるクリシュナは、礼儀正しくダウミヤにおじぎをして、ドラウパディーを慰め、別れを告げた。（八）聡明にして強力なクリシュナは、アルジュナとともに、兄弟たちのところに行った。五人の兄弟に囲まれて、彼は神々に囲まれたインドラ（帝釈天）のようであった。

（九）このヤドゥ族の雄牛は、花輪と祈禱と敬礼と、種々のお香により、神々とバラモンたちを崇拝した。そして、最高に堅固な彼は、すべてのなすべきことを行なってから出発した。（一〇）彼は祝福に値するバラモンたちに、凝乳の入った器と果実と米粒とともに、財物を布施してから、右まわりにまわって敬意を表した。（一一）それから彼は、ガルダ鳥の旗標をつけ、棍棒、円盤、剣、シャールンガ弓などを装備した、高速の黄金の戦車に乗った。（一二）蓮の眼をした彼は、吉日、めでたい星宿、めでたい刻限に、サイニヤとスグリーヴァという馬にひかせた車で出発した。（一三）ユディシティラ王は友情から、彼の後から車に乗り、彼に最上の御者ダールカをどかせて、クル族の主である彼自身が手綱をとった。（一四）アルジュナもまた車に乗り、黄金の柄のついた、白い大きなヤクの尾の払子を右まわりに揺り動かした。（一五）強力なビーマセーナもまた、双子（ナクラとサハデーヴァ）とともに、祭官と市民たちに囲まれて、クリシュナの後ろからついて行った。（一六―一七略）勇猛なクリシュナは兄弟たちにつき従われて、愛しい弟子たちにつき従われた師のように輝いていた。クリシュナは悲しむアルジュナに別れを告げて抱きしめ、ユディシティラとビーマセーナと双子に敬意を表した。（一八）双子はクリシュナを固く抱きしめて別れの挨拶をした。それから彼は彼らと礼儀正しく再会を約した。（一九）それからクリシュナは、パーンダヴァたちと彼の後を慕う人々を引き返らせ、インドラのように自分の都に帰った。（二〇）人々は視界の続く限り、眼によってクリシュナの後を追った。それからは、友愛に満ちて、心によって彼の後を追った。（二一）彼らがクリシュナを飽かず見守っている間に、見目麗しい彼は速やかに見えなくなった。

(二二) 人中の雄牛であるパーンダヴァたちは、クリシュナのことを思い続けていたが、しぶしぶ引き返し、みなして自分たちの都に帰った。一方、クリシュナも車に乗って、やがて〔首都の〕ドゥヴァーラカーに着いた。(二三)

(第二章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、マヤは最高の勇士アルジュナに言った。

「さようなら。私は出発しますが、すぐにもどって来ます。(一) カイラーサ山の北、マイナーカ山の付近、心地よいビンドゥサラス湖のあたりで、すべての魔類が祭祀を行なっている間、私は宝玉づくりの資具を作りました。(二) それは約束を守るヴリシャパルヴァン(魔王の名)の集会場にありました。もし今もあるならそれを持ってもどって来ます。(三) それから、私は誉れ高いパーンダヴァのために集会場を作りましょう。驚異的で、人の心を喜ばせる、すべての宝物で飾られた集会場を。(四) ビンドゥサラス湖には、最高の棍棒があります。それは、ヤウヴァナーシュヴァ(マーンダートリ)王が、戦闘で敵たちを殺してからそこに置いたものです。それは金色の斑点で多彩に飾られ、重く、強靭で、堅固です。(五) それは十万の棍棒にも匹敵し、敵を全滅させます。ちょうどあなたにガーンディーヴァ弓がふさわしいように、それはビーマにふさわしいものです。(六) また、ヴァルナに由来する、デーヴァダッタという大音響をたてる大法螺があります。私はこれらすべてをあなたにあげます。その点、疑い

はありません。」

その阿修羅はアルジュナにそう言ってから、北東の方角へ行った。(七)

カイラーサ山の北、マイナーカ山の付近に、高価な宝玉でできたヒラニヤシュリンガという聖山がある。(八) また、心地よいビンドゥサラス湖がある。そこでバギーラタ王は、ガンガー(ガンジス)川——バーギーラティーと呼ばれる——を見ながら、多年の間滞在していた。(九) そこで、偉大なる一切万物の主は祭祀を行ない、百の主要な祭式を催した。(一〇) そこに、宝玉づくりの祭柱と黄金づくりの祭壇が設置された。それは美のためであって、〔教典の〕範例に従って作られたものではない。(一一) シャチーの夫である千眼者(インドラ)は、そこで祭祀を行なってから成就に達した。そこにおいて、激しい威光を有する永遠なる生類の主は、全世界を創造した後、幾千という生類に囲まれて崇拝されている。(一二) またそこでは、ナラとナーラーヤナ、梵天、ヤマ(閻魔)、第五にスターヌ(シヴァ)たちが、千の宇宙紀(ユガ)の終末にサットラ祭を催す。(一三) そこではまた、ヴァースデーヴァ(クリシュナ)が信念をもって、教養ある人を導くために、常に千年のサットラ祭により祭祀を行なっている。(一四) そこでクリシュナは、幾千幾百万という、黄金の輪で飾られた祭柱と、非常に輝かしい祭壇とを寄進した。(一五)

マヤはそこに行き、棍棒と法螺と、ヴリシャパルヴァンの集会場の資具であった水晶〔など〕を取った。彼はキンカラという羅刹たちとともに、これらをすべて取ったのである。(一六) その阿修羅はそれらすべてを持ち帰り、比類のない集会場を作った。それは宝玉で作

られ、美しく、神々しく、三界において有名になった。(一七) それから彼は、最高の棍棒をビーマセーナに与えた。そして、最高の法螺デーヴァダッタをアルジュナに与えた。(一八)

ところでその集会場は、その柱は黄金でできていて、その全体の長さ（周囲）は一万腕尺（キシュク）であった。(一九) それは神々しく輝き、火や太陽や月のような外観を呈していた。(二〇) それはその輝きにより、燦然たる太陽の輝きを凌駕するかのようであり、神聖で燃え上がるかのように、その神々しい威光により輝いていた。(二一) それは山や雲のように、空をおおって立っていた。長く広大で、繊細で害悪を離れ、疲労を取り去るものであった。(二二) それは最上の資材をそなえ、宝玉の壁で囲まれ、多くの宝物と財物に満ち、ヴィシュヴァカルマン（マヤ）によって見事に建てられたものであった。(二三) ダーシャールハ族のスダルマンや、梵天の集会場も、マヤが作ったその無比の集会場ほど美しさにめぐまれていなかったであろう。(二四)

キンカラという八千名の羅刹たちが、マヤに命じられて、その集会場を守り維持した。(二五) 彼らは空中を飛行し、恐ろしく、巨体で、大力であった。赤色または黄色い眼をし、貝のような耳をし、勇猛であった。(二六) マヤはその集会場の中に、類ない蓮池を作った。それは瑠璃の葉におおわれ、宝玉の茎よりなる蓮に満ちていた（原文疑問）。(二七) 紅蓮（パドマ）と白蓮（サウガンディカ）に満ち、種々の鳥の群がいて、開花した蓮で色とりどりになり、亀や魚により飾られていた。(二八) 美しい岸の階段があり、すべての季節に汚れない美しい水をたたえ、風に吹き散らされた真珠の粒に満ちていた。(二九) 何人かの王たちは、宝玉や宝物におおわれたその蓮池に近づいて見ても、池だと気づかず、知らないで落ちてしまった。(三〇) その集会場のまわりには、常に花をつけた種々の大樹があった。それらは青々とし、涼しい陰を投げかけ、心地よいものであった。(三一) いたるところ芳香のする森と、ハンサ鳥やカーランダヴァ鳥のいる、チャクラヴァーカ鳥に飾られた蓮池があった。(三二) 風はいたるところ水と陸に生ずる花々の香を運び、パーンダヴァたちに奉仕した。(三三) マヤは十四カ月かかって、このような集会場を作り、完成した時、ユディシティラに報告した。(三四)

（第三章）

ナーラダ仙、王のための政策を説く

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、ユディシティラ王はそこに入場した。そして王は、一万人のバラモンを供応した。(一) ギー、乳粥、蜜、食べられる根と実を出した。また、新しい衣服や、種々の花輪を贈った。(二) 王は彼らの各々に千頭の牛を与えた。そこでは、吉日を寿ぐ音声は天にとどかんばかりであった。(三) クル族の長は、種々の楽器や歌により、また様々な香により、神々を供養してから入場した。(四) そこで、レスラー、役者、闘士、吟誦者（スータ）、讃頌者（ヴァイターリカ）たちが、七夜の間、偉大なユディシティラに仕えた。(五) ユディシティラはこのように供養（プージャー）を行なってから、その心地よい集会場において、弟たちとともに楽しんだ。天上におけるインドラのように。(六) その集会場には、様々な国から集まって来た聖仙や王たちが、パーンダヴァたち

ともに座っていた。(七) アシタ・デーヴァラ、サティヤ、サルパマーリン、マハーシラス、アルヴァーヴァス、スミトラ、マイトレーヤ、シュナカ、バリ、(八) バカ・ダールビヤ、ストゥーラシラス、クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ、シュカ、スマントゥ、ジャイミニ、パイラ、ヴィヤーサの弟子である我々、(九) ティッティリ、ヤージュニャヴァルキヤ、ローマハルシャナとその息子、アプスホーミヤ、ダウミヤ、アーニーマーンダヴィヤ、カウシカ、(一〇) ダーモーシュニーシャ、トライヴァニ、パルナーダ、ガタジャーヌカ、マウンジャーヤナ、ヴァーユバクシャ、パーラーシャリヤ、サーリカたち、(一一) バラヴァーカ、シニーヴァーカ、スティヤパーラ、クリタシュラマ、ジャートゥーカルナ、シカーヴァット、スバラ、パーリジャータカ、(一二) 聖者パルヴァタ、聖者マールカンデーヤ、パヴィトラパーニ、サーヴァルニ、バールキ、ガーラヴァ、(一三) ジャンガバンドゥ、ライビヤ、コーパヴェーガシュラヴァス、ブリグ、ハリバブル、カウンディニヤ、バブルマーリン、サナータナ、(一四) カクシーヴァット、アウシジャ、ナーチケータス、ガウタマ、パインガ、ヴァラーハ、シュナカ、大苦行者シャーンディリヤ、カルカラ、ヴェーヌジャンガ、カパーラ、カタ、(一五) これら法(ダルマ)をわきまえ、自制し、感官を制御した聖者たち、及びその他の、ヴェーダとヴェーダ補助学に通じ、法を知る、汚れなき最高の聖仙たちが、聖なる物語を語りつつ、偉大なユディシティラに伺候した。(一六—一七)

同様に、栄光あり偉大で徳性ある最高の王族(クシャトリヤ)たちもユディシティラに伺候した。例えば、ムンジャケートゥ、サングラーマジット、ドゥルムカ(中略)などである。(一八—三三) これら誓い

を堅く守り約束を守る諸王は、その集会場において、神々が梵天に仕えるようにユディシティラに仕えた。(三四)

(第四章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

こうして偉大なパーンダヴァたちがそこに座し、偉大なガンダルヴァ(半神族)たちが座していた時、絶大な威光をそなえたナーラダ仙が、全世界を遍歴している間に、聖仙たちとともにその集会場を訪れた。(一—二) 無量の輝きを持つその神仙は、パーリジャータ、聡明なライヴァタ、スムカ、サウミヤとともに、集会場にいるパーンダヴァたちに会うために、喜びにあふれて、思考のように速やかにやって来た。(三) 一切の法(ダルマ)を知るパーンダヴァの長子は、ナーラダ仙が訪れたのを見て、弟たちとともに急いで立ち上がり、喜んで、礼儀正しく挨拶をした。(四) 法を知る彼は、作法に従って、ふさわしい座席を聖仙に勧め、諸々の宝物を贈り、何でも望み通りにすると言って敬意を表した。(五) ヴェーダに通達した大仙は、すべてのパーンダヴァに敬意を表されてから、法と享楽(カーマ)と実利(アルタ)をそなえたユディシティラに質問した。(六)

ナーラダは言った。

「あなたの実利はうまく行っているか。しかも心は法において楽しんでいるか。諸楽が享受されているか。しかも心は苦しんでいないか。(七) 王よ、先祖によって践(ふ)まれた不滅の生き

方、人間（じんかん）にあって法と実利をそなえた生き方に従事しているか。（八）実利によって法を、法によって実利を、あるいは歓喜を本質とする享楽によってその両者を妨げていないか。（九）最高の勝利者、時を知る者、（願いをかなえる者よ。常に実利と法と享楽を、時に応じて配分して、実践しているか。（一〇）王の六計（または「六種の美質」）により、七種の方策を、〔敵味方の〕長所と短所を、〔敵味方の〕十四の〔構成要素〕を正しく吟味しているか。（一一）最高の勝利者よ、味方と敵方を調査して、和平を結び、八種の事業に従事しているか。（一二）バラタの雄牛よ、あなたの六種の国家構成要素は欠けるところはないか。豊かで災禍に陥らず、すべて忠義であるか。（一三）また、それらは推理と使節（スパイ）によって詮議されているか。審議された政策が、あなたかあなたの大臣たちによって漏れていないか。（一四）あなたは時に応じて和平と戦争を行なっているか。また、中立国と中間国に対し、〔適切な〕活動を行なっているか。（一五）勇士よ、顧問官（マントリン）たちは知性の点であなた自身に等しく、清潔で、生活能力があり、良家の生まれで、忠義であるか。（一六）というのは、バーラタよ、王の勝利は審議（マントラ）（政策）にもとづき、政治論に通じ政策に富んだ大臣たちによりよく守られるから。（一七）あなたは眠りに負けないか。適切な時に目覚めるか。また後夜（ごや）においてあなたは実利を知り、実利について考察するか。（一八）あなたは一人で政策を審議しないか。〔あまりにも〕多数と審議しないか。審議されたあなたの政策が（国じゅうに知れわたっていないか。（一九）わずかな出費で大きな成果のあるような有利〔な政策〕を決定して、速やかに着手しているか。そのような政策を妨害していないか。（二〇）すべての事業があなたに知られていないことはないか。疑わしいことはないか、あるいは、すべてが再び放置されることはないか。実にこの場合は介入することが〔成功の〕原因である。（二一）王よ、人々はあなたがすでに行なった、または大部分行なった諸行為を知っているか。勇士よ。そして、まだ行なわない行為を知らないでいるか。（二二）一切の教典に通じたすべての師たちは、すべての王子や主要な戦士たちを教え導いているか。（二三）あなたは千人の愚者とひきかえに、一人の賢者を買っているか。実に賢者は、困難な事態において、最善のことをなすであろうから。（二四）すべての城砦は、財物、穀物、武器、水、器械、技師、弓取りに満ちているか。（二五）知性あり、勇猛で、自制し、巧妙な一人の大臣がいて、王や王子に大なる繁栄をもたらしているか。（二六）敵方の十八名の要人と、味方の十五名の要人とを、それぞれ三人ずつの秘密のスパイにより探知しているか。（二七）敵たちに探知されることなく、あらゆる時に対策に努力し、常に専心してすべての敵を見張っているか。敵を殺す者よ。（二八）あなたの司祭は修養をそなえ、良家の出で、博識であるか。妬み（不満）がなく、適切に質問し、好遇されているか。（二九）彼はあなたの聖火に専心しているか。儀軌を知り、知性あり、廉直であるか。適切な時に供物が火に捧げられるべきことを常に知らせているか。（三〇）あなたの占星家はヴェーダ補助学に通じ、星学を説明し、（すべての前兆に通じているか。（三一）あなたは主要な臣下を大きな仕事に、中位の臣下を中位の仕事に、（低い臣下を低い仕事に任じているか。（三二）〔潔白か否かの〕試験を通過した、清潔な、（譜代の最高の大臣たちを、あなたは最高の仕事に任じているか。（三三）あなたの顧問官たちは、苛酷な刑罰によってひどく臣民を苦しめることなく、国土を治めて

いるか。バラタの雄牛よ。(三四)彼らはあなたを軽蔑してはいないか。祭官が堕姓者を軽蔑し、妻が好色で厳格な夫を軽蔑するように。(三五)あなたの将軍は大胆で勇猛で知性あり、充足し清潔か。家柄よく忠義で敏腕か。(三六)あなたの軍隊のすべての高官たちは戦いに通達しているか。偉大な業績が認められ、勇猛であるか。好遇され尊敬されているか。(三七)あなたは軍隊にふさわしい食糧と俸給を与えているか。適切な時に与えるべきものを与え、遅滞することはないか。(三八)というのは、食糧と俸給の遅滞により従者は困窮し、主人に対して怒るから。それは非常に大きな不利益であるとされる。(三九)良家の子弟たちは、主要な者以下、すべてあなたに忠実か。彼らは常に戦いにおいて、あなたのために生命を捨てるか。(四〇)勝手な性格で、教令を逸脱し、すべからく一人で軍事的な多くのものごとについて、恣意的に命じていないか。(四一)臣下は雄々しい努力により仕事を飾り、過分の名誉と食糧・俸給を得ているか。(四二)学術を修め、知識に通じた人々に対し、ふさわしく、その美質に応じて、贈物を与えているか。(四三)あなたのために死んだ人々や災難にあった人々の妻たちを扶養しているか。バラタの雄牛よ。(四四)恐怖から屈服した敵、無力の敵、戦いにおいて敗れた敵がやって来た時、それを息子のように保護しているか。プリターの息子よ。(四五)王よ、あなたは全世界に対し、父母のように公平で柔和であるか。(四六)バラタの雄牛よ、敵が災禍に陥ったと見てとったら、三種の力(軍事経済力、政策能力、気力)を考察してから、速やかに進軍するか。(四七)〔進軍の〕決定と勝利は背面〔の備え〕に依存することをよくわきまえ、前もって軍隊に俸給を与えて……。(四八)敵の国土に隠された財宝を、軍隊の長たち

に、その功に応じて与えているか。勇士よ。(四九)まず自己を克服し、感官を制御して、あなたは怠慢で感官を制御しない敵たちを征服しているか。プリターの息子よ。(五〇)あなたが敵に対して進軍する際、懐柔策・贈与策・離間策・実力行使という方策が先行しているか。適切に正しく実行されているか。(五一)本拠(自国)を確固たるものにして遠征に行くか。王よ。そして彼ら(敵)を征服するために進軍し、征服した後は守護するか。(五二)四種の軍よりなる、八部門をそなえたあなたの軍隊は、軍司令官に見事に指導され、敵を撃退するか。(五三)勇士よ、敵国においては、戦闘の際、穀物の取り入れと種まきを損なうことなく敵を撃破しているか。大王よ。(五四)あなたの指令を受けた多くの人々は、自国と敵国において諸々の任務を実行しているか。そして相互に〔秘密を〕守っているか。(五五)大王よ、あなたに信頼された人々が、食物や衣類や香料を守っているか。(五六)あなたの宝庫、糧食庫、乗物、門、武器、収入は、高潔な忠臣たちによって守られているか。(五七)王よ、あなたはまず自分自身を内部者(顧問官、宮廷祭僧など)と外部者(地方の長、国境守備官など)〔の謀叛〕から守り、彼らを身内の人々から守り、彼らを相互に守っているか。(五八)あなたの飲酒、賭博、娯楽、女性〔への耽溺〕に際し、彼らが朝、あなたの悪徳より生じた出費に気づくようなことはないか。(五九)あなたの支出は、収入の半分、または四分の一、あるいは四分の三でまかなわれているか。(六〇)親族、師、長老、商人、技師たちが困窮し庇護を求めて来た時、あなたは常に財物や穀物によって彼らに好意をかけるか。(六一)すべての計算係と記録係は、収入と支出とに専心しているか。彼らは常に、朝、収入と支出とをあなたに報告するか。(六二)諸事に経験を

積み[illegible]あなたのためを思い、友好的な人々が、前に罪を犯していない場合に、彼らを職務から解任することはないか。バーラタよ。(六三) 臣下たちの上中下の別を知り、彼らを適切な職務に任じているか。バーラタよ。(六四) 貪欲な者、盗癖のある者、敵意を抱く者、未成年者たちが、あなたの諸事業に従事していないか。(六五) あなたは、貪欲な者、盗賊、王子、女性たちによって、国土（地方）を苦しめていないか。農民は豊かであるか。(六六) 国土における諸々の貯水池は大きくて、満水であるか。区域ごとに設置されているか。農業は降雨だけに頼ってはいないか。(六七) 耕作者の種と食物が欠乏する時、[illegible]百につき一プラティカ（貨幣の単位？）の利息により、恩典の貸付けを与えるべきである。(六八) 親愛なる人よ、あなたの経済（牧畜、農業、商業）は善き人々により実行されているか。この世間は経済に依存して幸福になる。(六九) 王よ、あなたの地方において、行ない清らかで賢明な五人ずつ（の行政官）は、よく任務を実行し、結束して、安寧をもたらしているか。(七〇) 都市の守護のために、村は都市と同様にされて（守られて）いるか。あなたに貢献する辺境の地域は（異本による）すべてあなたの村と同様にされているか。(七一) あなたの領地では、軍隊に従われたスパイと（異本による）、長官たちが、平坦地と山地と、諸都市を巡回しているか（原文疑問）。(七二) 女たちを慰めているか。彼女らはよく守られているか。彼女らを信用しないでいるか。彼女らに秘密を洩らしてはいないか。(七三) 夜間、スパイから（情報を）聞き、なすべきことを考察し、内部者について知り、諸々の好ましいことを享受しつつ眠るか。(七四) 王よ、夜の最初の二更（ヤーマ）の間に眠り、最後の更に起床し、法（ダルマ）と実利（アルタ）について考察するか。(七五) パーンダヴァよ、あなたは時を知り、常に適切な時に起床し、身を飾って（異本による）、顧問官たちとともに人々に接見するか。(七六) 赤衣をまとい刀を持ち美々しく着飾った兵が、警護のために、あなたの側近く仕えているか。勇士よ。(七七) あなたはヤマ（閻魔）神のように、正しく裁定して、相手が好ましい者でも好ましくない者でも、処罰さるべき者と尊敬さるべき者とに対処しているか。(七八) あなたは身体的苦痛を薬や節制により除去しているか。精神的苦痛を長老に仕えることにより除去しているか。プリターの息子よ。(七九) 医師たちは八部門よりなる医術に通じているか。そして親密で忠義で、常にあなたの身体のためを思っているか。(八〇) 王よ、あなたは請願者や対抗者たちが訪れた時、高慢や迷妄や欲望により、彼らを追い出すようなことを決してしないか。(八一) あなたは人々が信頼や愛情から寄る辺を求めて来た時、貪欲や迷妄により彼らの生計を妨害することはないか。(八二) あなたの都市や地方の住民たちは、敵に買収され、こぞってあなたに敵対するようなことを決してしないか。(八三) あなたの弱小の敵が武力により制圧されているか。強力な敵が政策により、あるいは武力と政策とにより制圧されているか。ユディシティラよ。(八四) すべての主立った領主たちはあなたに対して忠誠であるか。彼らはあなたに魅了されて、あなたのために生命を捨てるか。(八五) あなたはバラモンや善き人々を、彼らのすべての知識における長所に応じて、よく尊敬しているか。それはあなたの至福をもたらす。(八六) あなたは先人によって践（ふ）まれた、ヴェーダにもとづく法（ダルマ）に専念し、同様になすべく、その行為に専念しているか。(八七) あなたの家において、有徳のバラモンたちが、あなたの見ている前で、美味で功徳ある食物を食べているか。贈物をもらって……。(八八) あなたは自制し、

一心になって、ヴァージャペーヤとプンダリーカの祭式をすべて行なおうと、全面的に努力しているか。(八九) 親族、目上、長老、神、苦行者、聖域、聖樹、バラモンに対し、あなたは敬礼するか。(九〇) 非難の余地のない者よ、あなたには、長寿と名声をもたらし、法・享楽・実利を実現する知性と行動があるか。(九一) このような知性により行動する者の国土は滅びることがない。その王は地上を征服して、この上なく幸福になる。(九二) 潔白で心の清い貴人が、教典に昧い人々から貪欲により讒訴され拘留されてはいないか。(九三) 当局者により尋問され、現行犯で逮捕された盗賊が、収賄により釈放されてはいないか。人中の雄牛よ。(九四) バーラタよ、富者と貧者の間で〔争いが〕生じた時、あなたの大臣たちが財物で買収され、事実を誤って見ることはないか。(九五) 異端、不真実、怒り、不注意、遅滞、知者に目見えぬこと、怠惰、気の散ること、(九六) 一つのことのみを考えること、実利を知らない人々とともに実利を考察すること、決定したことを開始しないこと、政策の秘密を守らないこと、(九七) 吉祥の式を行なわないこと、感官の対象に執着すること。あなたは以上の十四の王の過失を除去しているか。(九八) あなたにとって諸ヴェーダは実りあるか。あなたの財産は実りあるか。あなたの妻は実りあるか。あなたの学識は実りあるか。(九九)」

ユディシティラはたずねた。

「どのようにして諸ヴェーダは実りあるのですか。どのようにして財産は実りあるのですか。どのようにして妻は実りあるのですか。どのようにして学識は実りあるのですか。(一〇〇)」

ナーラダは答えた。

「諸ヴェーダはアグニホートラ祭において実りある。財産は布施と享受において実りある。妻は快楽と息子において実りある。学識はよい性質と行ないにおいて実りある。(一〇一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

偉大な苦行者である聖者ナーラダは、このように告げた直後に、徳性あるユディシティラに、以下のことをたずねた。(一〇二)

ナーラダは言った。

「利得を求めて遠方より来た商人たちは、収税官たちによって規定通りの関税を取り立てられているか。(一〇三) 王よ、あなたの都市や地方において、それらの人々は尊敬され、詐欺により騙されることなく商品をもたらしているか。(一〇四) あなたは常に実利を知り法を考察する長老たちの、法と実利にかなった言葉を聞いているか。親愛なる者よ。(一〇五) あなたは農作物や畜牛や花と果実(の増殖)に関し、また法(義務)のために、バラモンたちに蜜と酥油を与えているか。(一〇六) あなたは常に、すべての技師たちに、四カ月未満の期限で、材料と道具を正確に提供しているか。(一〇七) 大王よ、あなたは行なわれた仕事を調査し、それを行なった人を立派な人々の中で称讃し、敬意を払いつつねぎらっているか。(一〇八) バラタの雄牛よ、あなたはすべての論書を修得したか。すなわち、象の論書、馬の論書、戦車の論書、兵を。君主よ。(一〇九) バラタの雄牛よ、あなたの家においては、弓のヴェーダ(兵学)の論書、器の論書、都市に関する論書が常に実修されているか。(一一〇) 非の打ち所のない者よ、あな

たはすべての武器、梵杖（呪詛、呪法）、敵を滅ぼす毒物の使用を知っているか。（一一一）あなたは火、蛇、猛獣、病気、羅刹の危険から自分の国土を守っているか。（一一二）あなたは父親のように、盲人、唖者、歩行不自由者、身体障害者、身寄りのない者、遊行者たちを守っているか。法を知る者よ。（一一三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

偉大なクル族の雄牛である王は、最高のバラモンの以上のような言葉を聞くと、喜んで敬礼し、足下にひれ伏し、神のようなナーラダに言った。■（一一四）

「あなたが言われた通りにいたします。というのは、私の知性はいっそう増大しましたので。」（一一五）

そう言って、王は言われたように実行した。そして、海に取り巻かれた大地を獲得した。

ナーラダは告げた。

「このように四姓（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ）よりなる社会を守ることに専念する王は、この世で非常に幸福に暮らした後、インドラ（帝釈天）の世界へ行く。（一一六）」

（第五章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

大仙の言葉が終わった後で、ダルマ王ユディシティラは、敬意を表し、許可を得てから、次々と質問をした。（一）

「聖者よ、あなたはこの正しい法についての結論を適切に説いて下さいました。私はこの教令を、能力の限り、正しく実行します。（二）昔、王たちになされたことはすべて、疑いなく、ふさわしい成果をもたらしました。それはしかるべき理由を持ち、意義を有します。（三）主よ、我々も彼らの正道を歩むことを望みますが、自己を制御した彼らのようには進むことができません。■（四）」

徳性ある彼はこのような言葉を述べて、敬意を表していた。そして、ややあってから、潮時と見て、安楽に座している、諸世界をへめぐる聖者ナーラダに向かって、彼に奉仕する大知者ユディシティラは、諸王の中でたずねた。（五―六）

「あなたはいつも、かつて梵天に創られた多種多様の世界を観察しながら、思考のように速やかにへめぐっておられる。（七）あなたはかつて、このような集会場を、またはこれ以上すばらしい集会場を、どこかで見られたことがあるか。バラモンよ、私の質問に答えて下さい。（八）」

ナーラダはダルマ王の言葉を聞くと、微笑し、優しい声で彼に答えた。（九）

「親愛なる王よ、宝玉でできたあなたの集会場に匹敵するものは、人間界においてはかつて見たことも聞いたこともない。バーラタよ。（一〇）しかしながら、私は語ろう。祖霊の王（ヤマ、閻魔）、英邁なるヴァルナ（水天）、インドラ（帝釈天）、カイラーサ山に住む神（クベーラ、毘沙門天）の集会場に

ついて。（二二）また、疲労を取り去る、神聖なる梵天の集会場について語ろう。もしあなたが聞きたいと望むならば。バラタの雄牛よ。（二三）」

ナーラダにこう言われて、気高いダルマ王ユディシティラは、すべての王に囲まれて、弟たちとともに、合掌して、ナーラダに向かって、次のように答えた。

「それらすべての集会場についてお話し下さい。我らは聞きたいと思います。（二三―二四）バラモンよ、それらの集会場はいかなる材料でできているのですか。どのくらいの広さで、どのくらいの長さですか。またその集会場においては、いかなる者たちが祖父（梵天）に仕えていますか。（二五）またその集会場では、いかなる者たちが、神々の王インドラに、ヴァイヴァスヴァタ・ヤマに、ヴァルナに、クベーラに仕えていますか。（二六）神仙よ、以上すべてをありのままに語って下さい。我々はこぞってあなたからそれを聞きたいと望みます。我々は最高に興味を抱いていますので。（二七）」

パーンダヴァにこのように言われて、ナーラダは彼に答えた。

「王よ、それらの神聖なる集会場について私の話すことを順次聞きなさい。（二八）」

（第六章）

インドラ（帝釈天）の集会場

ナーラダは語った。

「シャクラ（インドラ）の神聖で輝かしい集会場は、彼の偉業によって獲得された。クル族の王よ、太陽のように輝くその集会場は、シャクラ自身によって創設された。（一）それは百ヨージャナ（由旬）の広さ、百五十ヨージャナの長さ、五ヨージャナの高さで、空中にあり、自由に移動する。（二）そこには老いや苦悩や疲労がなく、病気もない。それは吉祥であり、美しく、部屋と座席に満ち、心地よく、天樹に飾られている。（三）プリターの息子よ、その集会場において、神々の主は、偉大なインドラ妃であるシャチーと、シュリー・ラクシュミー（吉祥天）とともに、最高の席に座っている。バーラタよ。（四）彼は言語に絶する身体をし、王冠をかぶり、上腕に赤色の腕飾りをつけ、無垢の衣服をまとい、多彩な色の花輪をつけ、フリー（廉恥）とキールティ（名声）とデュティ（光輝）とともに座している。（五）

王よ、そこでは常に、すべてのマルト神群、すべての家長、シッダ、神仙、サーディヤ神群、神々の群が、偉大なインドラに仕えている。（六）彼らはすべて、従者を連れ、神々しい姿をし、美しく飾られており、勇猛で偉大な神々の王に仕えている。（七）プリターの子よ、汚れなく、罪障を除き、火のように輝き、威光に満ち、ソーマ酒を供え、罪悪を離れ、疲労を離れた、すべての神仙たちがシャクラに仕えている。（八）すなわち、パラーシャラ、パルヴァタ、サーヴァルニ、ガーラヴァ、シャンカ、リキタ、聖者ガウラシラス、（九）ドゥルヴァーサス、デールガタパス、ヤージュニャヴァルキヤ、バールキ、ウッダーラカ、シュヴェータケートゥ、シャーティヤーヤナ、（一〇）ハヴィシュマット、ガヴィシタ、ハリシュチャンドラ王、フリディイヤ、ウダラシャーンディリヤ、パーラーシャリヤ、クリシーフヴァアラ、

(二一)ヴァータスカンダ、ヴィシャーカ、ヴィダートリ、カーラ、アナンタダンタ、トゥヴァシトリ、ヴィシュヴァカルマン・トゥムブル。(二二)以上のような、母胎から生じた、あるいは生じない、風を食べて(断食して)生活する、聖火を捧ずる聖仙たちが、金剛杵(ヴァジュラ)を持つ全世界の主に伺候している。(二三)サハデーヴァ、スニータ、大苦行者ヴァールミーキ、サミーカ、サティヤヴァット、約束を守るプラチェータス、(二四)メーダーティティ、ヴァーマデーヴァ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、マルッタ、マリーチ、スターヌ、大苦行者アトリ、(二五)カクシーヴァット、ガウタマ、タールクシヤ、聖者ヴァイシュヴァーナラ、聖者カーラカヴリクシーヤ、アーシュラーヴィヤ、ヒラニヤダ、サンヴァルタ、デーヴァハヴィヤ、強力なヴィシヴァクセーナ、(二六)神聖な水と薬草、シュラッダー(信仰)、メーダー(叡知)、サラスヴァティー(弁舌)、アルタ(実利)、ダルマ(法、義務)、カーマ(享楽)、稲妻、(二七)雨雲、風、雷、東方、祭祀(の供物)を運ぶ二十七の火、(二八)アグニーショーマ、インドラーグニ、ミトラ、サヴィトリ、アリヤマン、バガ、一切のサーディヤ神、シュクラ、マンティン、(二九)祭祀、謝礼、惑星、すべてのストーバ、祭祀を担う一切の聖句(マントラ)、以上のものがそこに集合している。(三〇)同様に、魅力的な天女(アプサラス)やガンダルヴァたちが、様々な舞踊、器楽、歌、娯楽によって、神々の王インドラを楽しませている。(三一)また、彼らは讃歌、祝福の言葉、儀式、勇武によって讃えつつ、偉大なインドラを楽しませている。(三二)その他、すべての梵仙と王仙、すべての神仙などが、花輪をつけ、飾られ、火のように輝く種々の天車に乗って出入する。ブリハスパティとシュクラも、ともにそこを訪れている。(三三—三四)彼ら及びその

他の、自己を制し誓戒を守る多くの、月のように見目麗しい聖仙たちが、月のような天車に乗って出入する。ブリグと七仙たちも、梵天の言葉により、そこにいる。(三五)王よ、以上が私の見たインドラの集会場プシュカラマーリニーである。非の打ち所のない大王よ、私は次にヤマの集会場について述べるから、聞きなさい。(三六)」

(第七章)

〔第八章から第十一章にかけて、ナーラダは、ヤマ、ヴァルナ、クベーラ、梵天の集会場について描写するが、ここでは省略する。〕

ハリシュチャンドラ王の栄光

ユディシティラはたずねた。

「最高に雄弁なる主よ、あなたの述べられるところでは、一般に王たちはヤマの集会場にいるということです。(四三)また、竜(ナーガ)(蛇)、魔王たち、河川、海たちは一般にヴァルナの集会場にいるということです。主よ。(四四)また、夜叉、グヒヤカ、羅刹、ガンダルヴァ、天女(アプサラス)、雄牛を旗標とする神(シヴァ)は、富神(クベーラ)の集会場にいます。(四五)また、梵天の集会場には、偉大な聖仙、一切諸神の群、すべての学問(教典)が存するということです。(四六)また、聖者よ、インドラの集会場には、若干の例をあげれば、神々、ガンダルヴァ、種々の偉大な聖仙たちがいるということです。(四七)しかし偉大な聖者よ、王仙(王族出身の聖仙)としては、ただハリ

シュチャンドラのみが、偉大な神々の王の集会場に常にいるということです。(四八)この高名な王はインドラに比肩するが、彼はいかなる誓戒を守り、いかなる行為を行なったのか。いかなる苦行を行なったのか。(四九)また、バラモンよ、あなたは祖霊の世界に行った私の父、栄光あるパーンドゥを見ました。あなたが彼に会った様子はどのようでしたか。(五〇)また、彼は何と言いましたか。尊者よ、そのことを知りたいと思います。あなたからすべてをお聞きしたいと、この上なく好奇心にかられますので。(五一)」

ナーラダは言った。

「王中の王よ、あなたがハリシュチャンドラについて私にたずねるので、私は聡明なる彼の偉大さを語ろう。(五二)

その王は強力で、すべての王の皇帝であった。一切の王は、彼の命令に服従していた。(五三)彼は唯一の黄金で飾られた勝利の戦車に乗り、その剣の威光により七大陸を征服した。王よ。(五四)彼は、山や森林をともなう大地を征服してから、盛大なラージャスーヤ（皇帝即位式）の大祭を開催した。(五五)すべての王は彼の命令により財物を運び、その祭祀においてバラモンたちの接待役となった。(五六)ハリシュチャンドラ王は、満足して、祭官たちに対して、そこで彼らに望まれた財物を、その場でその五倍も与えた。(五七)プラーサルパ（儀式がサダス小屋に移る時を指すと思われる）の時に至って、彼は色々の地方からやって来たバラモンたちを、種々の財物によって満足させた。(五八)望みのままに準備された種々の食物により満腹し、多くの宝物により満足したバラモンたちは称讃した。――この王は他の王たちよりも、はるかに威光あり誉れ高

い。(五九)プリターの息子よ、このようなわけでハリシュチャンドラは幾千の王を超えて輝いているのだ。バラタの雄牛よ、そのことを知りなさい。(六〇)

威光にあふれたハリシュチャンドラは、盛大な祭祀を終了した後、灌頂（即位式）を受け、輝かしい世界皇帝の位についた。(六一)他の王たちでも、ラージャスーヤ（皇帝即位式）の大祭を行なう者たちは、大インドラとともに楽しむのだ。バーラタよ。(六二)また、戦闘において逃げることなく死ぬ者たちは、インドラの住処に達して楽しむ。バラタの雄牛よ。(六三)そしてまた、この世で激しい苦行により肉体を捨てる栄光ある者たちも、彼の住処に達して、常に輝く。(六四)

ところで、クンティーの息子よ、クル族の王であるあなたの父パーンドゥは、ハリシュチャンドラ王の栄光を見て驚嘆して告げた。(六五)あなたは地上を征服することができ、あなたの弟たちはあなたに従う。最高の祭式であるラージャスーヤを行なえと。バーラタよ。(六六)人中の虎パーンダヴァよ、あなたは彼の望みを実行しなさい。彼らは先人たちとともに、大インドラの世界へ行くであろう。(六七)王よ、この大祭は多くの障碍をともなうと伝えられる。祭祀を害う婆羅門鬼たちが弱点をうかがっているから。(六八)そして、地上を滅ぼす戦争がつき従う。それに関し、滅亡をもたらす前兆もいささかある。(六九)王中の王よ、そのことをよく考えて、適切なことを実行しなさい。常に四姓（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ）を守るべく、怠ることなく精励せよ。繁栄せよ。喜べ。布施によりバラモンを満足させよ。(七〇)

以上、あなたが私にたずねたことに詳しく答えた。では、さらばじゃ。私はクリシュナの

都（ドゥヴァーラヴァティー）めざして行く。（七一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ジャナメージャヤよ、ナーラダはパーンダヴァたちにこのように告げると、一緒に来た聖仙たちに囲まれて出発した。（七二）そして、ナーラダが去った時、ユディシティラは、弟たちとともに、最高の祭式であるラージャスーヤについて考えた。（七三）（第十一章途中から）

(21) 協議（マントラ）（第十二章—第十七章）

ラージャスーヤ祭（皇帝即位式）の計画

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ユディシティラは聖仙が話したことを聞くと、ため息をついた。（一）彼はラージャスーヤ祭の遂行について思い悩み、心が安まることがなかった。（二）偉大な王仙たちの栄光を聞き、祭祀の執行者たちが清浄な行為によって彼らの世界を獲得したことを知って、そして特に、王仙ハリシュチャンドラがラージャスーヤ祭を行なって〔インドラの世界で〕輝いているのを知って、彼はラージャスーヤ祭を行なうことを望んだ。（二―三）それからユディシティラは、集会場にいるすべての人々に敬意を表し、また彼ら一同に敬礼を返されている時、その祭祀のことのみを思念していた。（四）そしてクル族の雄牛は、ラージャスーヤ祭について幾度も考えてから、その祭式を行なう決意をした。（五）更に、驚異的な精力と威力を有する彼は、法（ダルマ）のみを守り、全世界の人々に有益なことは何であろうかと思念した。（六）一切の法を知る人々の最上者であるユディシティラは、すべての民衆に好意を寄せ、差別することなく、すべての人々に有益なことを行なうのであった。（七）このようであったから、人々は彼を父親のように信頼し、彼を憎む者は存在しない。だから彼はアジャータシャトル（敵のいない者）と呼ばれるのである。（八）

最高に雄弁な彼は、そこで顧問官や弟たちを集めて、ラージャスーヤについて繰り返した

ずねた。（九）たずねられた顧問官たちは、祭祀をしたいと望む大知者ユディシティラに対し、そろって次のような適切な言葉を述べた。（一〇）

「その祭祀により灌頂（かんじょう）を受けた王はヴァルナ（天水）の位に達するから、彼は現在王ではあるが、それにより世界皇帝の位をすべて望んでいることになります。（一一）クル族の王よ、あなたの友人たちは、世界皇帝にふさわしいあなたにとって、今やラージャスーヤを行なう時であると考えています。（一二）その祭祀を行なう時は、王族の合意にもとづき自由であります。その開始の時において、誓戒を厳守する祭官たちは、サーマン（詠歌）を唱え、六つの火壇を設置します。（一三）祭祀の終わりに、彼は杓子による献供（ホーマ）を行ない、一切の祭祀〔の効果〕を達成し、灌頂を受けます。それにより、彼は一切勝者と呼ばれます（原文疑問）。（一四）勇士よ、あなたはそれにふさわしい方です。我々はすべてあなたの支配下にあります。大王よ、ためらうことなくラージャスーヤを行なう決意をなさい。（一五）」

すべての親しい人々も、別個に、またこぞって、同様に告げた。勇士ユディシティラは彼らの法（ダルマ）にかない、大胆で、好ましく、最高の言葉を聞いて、それを心で受け入れた。（一六）親しい人々の言葉を聞き、またそれが自分に可能であると知り、彼は繰り返しラージャスーヤについて思念した。（一七）英邁な彼は、弟たちとともに、また偉大な祭官たちとともに、またダウミヤやドゥヴァイパーヤナなどの顧問官たちとともに、何度も協議した。（一八）

ユディシティラは言った。

「世界皇帝にふさわしいラージャスーヤの大祭について、それを信じて語っている私のこの

願望は、どのように実を結ぶであろうか。(一九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

王にこのように問われて、彼らはその機会に、法(ダルマ)を本性とするユディシティラに、次のように答えた。

「法を知る方よ、あなたはラージャスーヤの大祭にふさわしい方です。(二〇)」

王が祭官や聖仙たちや弟たちはその言葉を歓迎した。(二一)しかし思慮深い大知者である王は、世界に益あることを望み、更にまた自ら熟考した。(二二)知者は能力とその適用を考慮し、時と場所、出費と利得を熟考し、知性により正しく行動して、滅びることはないものだ。(二三)というのは、祭祀の企ては単に自己の繁栄のため(異本にもとづく)であってはならぬと考え、彼は努力してなすべき仕事(の重荷)を担いつつ、なすべきことを決定するために、まさにクリシュナのことを念想した。クリシュナ、すなわちジャナールダナはハリ(ヴィシュヌ)であり、全世界のうちの最高者であると思ったからである。(二四-二五)ユディシティラはその勇士について考えた。——彼は計り知れず、不生であるが、その意志により人間(じんかん)に生まれ、神に等しい行為をなす。(二六)彼の知らないことはない。彼の行為から生じないものはない。彼が耐えられないことはない。——ユディシティラはクリシュナについて以上のように考えたのである。(二七)

ユディシティラはこのように決意して、生類の師(グル)に対し、師にふさわしく、速やかに使者

を送った。(二八)その使者は駿足の車でヤーダヴァの地に着き、ドゥヴァーラヴァティーにおいて、ドゥヴァーラカーに住むクリシュナに面会した。(二九)クリシュナの方も、自分に会いたがっているユディシティラに会いたいと思い、インドラセーナ(使者の名)とともに、インドラプラスタに向けて出発した。(三〇)

クリシュナは駿足の乗物に乗って、様々な国を過ぎ、インドラプラスタにいるユディシティラのもとに行った。(三一)ユディシティラとビーマは、王宮において、兄弟であるかのように彼を歓待した。それから彼は喜んで、父の妹(クンティー)に会った。(三二)彼は親密な友であるアルジュナに会って喜び、楽しく語り合った。双子(ナクラとサハデーヴァ)は、師に対するように彼に仕えた。(三三)クリシュナが清浄な場所で休息し、時間ができ、面会できるようになった時、ユディシティラは彼のもとに来て自分の意図することを告げた。(三四)

ユディシティラは言った。

「クリシュナよ、私はラージャスーヤ(皇帝即位式)を行ないたいと望んでいるが、あなたがよく知っているように、それは単なる願望によっては達成されない。(三五)その王にあっては一切が可能であり、あらゆるところで尊敬されている、一切の君主である王が、ラージャスーヤを行なうことができる。(三六)私の友たちは集まって、そのラージャスーヤを行なうべきだと言った。クリシュナよ、私はあなたの言葉により、最終的な決断をするつもりだ。(三七)というのは、ある人々は、友情から欠点を指摘しない。また、他の人々は、利益を望んで好ましいことばかり話す。(三八)またある人々は自分に好ましいこと、有益なことのみ

を望む。意図することに関し、一般にこのように人々が語ることが認められる。(三九) しかしあなたは、それらの動機を超越し、欲望と怒りとを超越しているので、どうかこの世で我々に最も適切なことを、ありのままに告げていただきたい。(四〇)」

(第十二章)

無敵のマガダ国王ジャラーサンダ

聖クリシュナは言った。

「大王よ、あなたはそのすべての美質により、ラージャスーヤにふさわしい。しかし、あなたはすべてを知っているが、私はいささか述べることにする。バーラタよ。(一) ジャマダグニの息子ラーマ(パラシュラーマ)に殺されずに生き残った王族(クシャトラ)の子孫が、今の世で王族と呼ばれるものである。(二) 王よ、王族たちは〔代々の〕教えの言葉により、このような一族の協約を作ったが、それはあなたの知るところである。バラタの雄牛よ。(三) 地上において列をなす王たち、及びその他の王族たちは、イラとイクシュヴァークの家系の出であると主張する。(四) 王よ、イラとイクシュヴァークの家系に属する王たち、〔その両方に〕百一の王家があると知れ。バラタの雄牛よ。(五) また、ヤヤーティの家系とボージャ族の家系の広がりも非常に顕著であり、大王よ、その広がりは四方に達している。(六) そしてすべての王族は、彼らの栄光に敬意を表している。

ところが、あるジャラーサンダという王が、中部の地を支配して、一族を相互に離間させ

ようとした。……彼は世界皇帝(サムラージ)の位についた(原文疑問)。(七―八) 威光にあふれたシシュパーラ王は、彼に全面的に依存して、その将軍となった。(九) カルーシャの王ヴァクラは、強力で幻術の力により戦う者であるが、彼に弟子のように仕えた。(一〇) その他にハンサとディパカという、強力で偉大な二人の王が、強力なジャラーサンダに寄る辺を求めた。(一一) ダンタヴァクラ、カルーシャ、カラバ、メーガヴァーハナも同様である。ブータ珠と呼ばれる神聖な宝玉を頭につけるバガダッタ王は、ヤヴァナ族(ギリシア)の王であるムラとナラカとを討伐し、無限の力を持ち、ヴァルナ(天水)のように西方を統治している。(一二―一三) そのバガダッタ王は、あなたの父上の旧友である。彼は言葉と行為によってはジャラーサンダに服従しているが、心の中ではあなたに、父上に対するのと同様、愛情で結ばれ、忠誠心を抱いている。地上の西南の辺境を守る王、あなたの母方の叔父である、クンティの後裔、敵を苦しめる勇士プルジットは、ただ一人、友情からあなたに帰服している。(一四―一六)

以前私が殺さなかった、「最高の人」と知られる、あの愚かなチェーディ国王は、ジャラーサンダに寄る辺を求めた。(一七) 彼はこの世における「最高の人」と自認し、常に迷妄により私の称号を用いている。(一八) プンドラのヴァースデーヴァとして世に知られるあの王は、ヴァンガ、プンドラ、キラータの間に力を有している。〔彼もジャラーサンダに味方している。〕(一九) 大王よ、ボージャ族であり、インドラの友である強力なビーシュマカ王は、知識と力によりパーンディヤ、クラタ、カイシカを征服した。(二〇) 彼の弟のアーフリティは勇士で、戦いにかけて、ジャマダグニの息子(ラーマ)に匹敵する。敵の勇士を殺すその勇猛

なビーシュマカ王はマガダ国王に忠誠である。(二一) 我々は親族であり、常に恭しく彼に好ましいことを行なって忠誠であるが、彼は好ましくないことばかりして、我々に忠誠ではない。(二二) 王よ、彼は自分の家系と力を無視して、その輝かしい名声を見てジャラーサンダに依存している。(二三) また北部ボージャの十八の部族は、ジャラーサンダを恐れて、西方に避難した。(二四) シューラセーナ、バドラカーラ、ボーダ、シャールヴァ、パタッチャラ、ススタラ、スクッタ、クニンダ、及びクンティも同様である。(二五) シャールヴェーヤの諸王とその一族郎党、南部パーンチャーラ、クンティにおける東部コーシャラも同様である。(二六) また、マツヤとサンニャスタパーダは、恐怖にかられ、北方を捨てて、南方に避難した。(二七) 同様に、すべてのパーンチャーラは、ジャラーサンダに対して恐怖にかられ、自国を捨てて、ありとあらゆる方角に逃げた。(二八)

ところで少し以前に、愚かなカンサは、親族を迫害し、ジャラーサンダの二人の娘を妃に迎えた。(二九) すなわち、サハデーヴァ(ジャラーサンダの息子)の妹の、アスティとプラープティという名の女たちである。愚かな彼は、その力により親族たちを迫害した。(三〇) そして彼は最高の位置に達したが、これは彼の大いなる政策の誤りであった。ボージャの王族の長老たちは、あの邪悪な男に苦しめられ、親族を救おうと望み、我らの側についた。アーフカの娘スタヌをアクルーラに嫁がせ、私はサンカルシャナ(バララーマ)とともに一族の義務を行なった。私はラーマとともに、カンサとスナーマンを殺した。(三一―三三)

しかし危険が近づき、ジャラーサンダが立ち上がった時、アシターダシャーヴァラの部族

(原文疑問)が政策を協議した。(三四) 『我々が百人を殺す強力な武器で絶えず攻撃して、三百年たっても、彼の軍隊を滅ぼすことはできないであろう。(三五)』というのは、彼には、力にかけて神のような、強者のうちでも最も優れたハンサとディバカという最高の戦士がいたからである。(三六) その二人の勇士と、強力なジャラーサンダとの三者は、三界に匹敵すると私は考える。(三七) これは我らだけの意見ではない。他の王たちもみな、同様の意見であった。(三八)

さて、ハンサというある偉大な王がいた。彼は他のアシターダシャーヴァラと戦った。(原文疑問)(三九) ある人が、ハンサは殺されたと告げた。それを聞いて、ディバカはヤムナー川に入水した。(四〇) この世でハンサなしでは生きることはできないと考えて、ディバカは死んだのである。(四一) 一方、敵の都城を征服する勇士ハンサも、ディバカについて同じように聞いて、ヤムナー川に行き、入水した。(四二) ジャラーサンダ王は、二人が水死したのを聞いて、シューラセーナから自分の都へ帰った。バラタの雄牛よ。(四三)

その王が引きあげた時、我々はみな、再びマトゥラーで幸せに幕らした。(四四) ところが、蓮のような眼をした、カンサの妻、すなわちジャラーサンダの娘は、父のマガダ国王のもとに帰った。(四五) 彼女は夫の不幸を嘆き、夫の殺害者を殺して欲しいと、繰り返し父をせきたてた。(四六) そこで我々は以前に協議したことを思い出し、意気阻喪して退却した。(四七) 我々は彼を恐れて、別々に莫大な富をまとめ、財産と親類縁者とともに逃走した。(四八) 我々は考えて、みなして西方のライヴァタ山に飾られる美しい都クシャスタリー(ドゥヴァーラカー)

に避難した。(四九)王よ、我々は再びそこに居住した。そして神々によってすら難攻の、堅固な城砦を造った。(五〇)婦人といえどもそこに籠れば戦えるほどである。いわんや、ヴリシュニの雄牛の場合はなおさらである。我々はそこに、何らの危険もなく住んでいる。(五一)マーダヴァの聖地である名山を眺めて、マーダヴァ族は最高に喜んだのである。(五二)

このように我々は当初よりジャラーサンダに悩まされて来たが、あなたに寄る辺を求め、その結びつきにより力を得た。(五三)(五四―五九略)

バラタ族の最上者よ、あなたは常に世界皇帝(サムラージ)の美質をそなえ、自らを王族の皇帝にするにふさわしい。(六〇)しかし、王よ、強大なジャラーサンダが生きている間は、あなたはラージャスーヤ祭を達成することはできないと私は考える。(六一)彼はすべての王たちを征服して、ギリヴラジャ(マガダの都市)に閉じこめている。獅子が巨象たちをヒマーラヤの洞窟に閉じこめるように。(六二)このジャラーサンダ王は、王たちを犠牲にして祭祀を行なおうと望んでいる。というのは、彼はマハーデーヴァ(シヴァ)を満足させて、諸王を征服したのであるから。(六三)彼は戦いを挑んだ王たちを破る度に、拘束して自分の都に連れ帰り、人質収容所を作った。(六四)

大王よ、我々もまた、ジャラーサンダを恐れて、マトゥラーを捨てて、ドゥヴァーラヴァティー(ドゥヴァーラカー)の都に行った。(六五)もしあなたがその祭祀を達成したいと望むなら、彼らを解放し、ジャラーサンダを殺すことに努力せよ。(六六)クルの王よ、さもなければ、ラージャスーヤ祭を全面的に行なうという企ては不可能である。最上の知者よ。(六七)非の打ち所なき王よ、以上が私の意見である。このようであるから、論理的に考えて、自ら決定して、あなたの考えをありのまま私に告げて下さい。(六八)」

(第十三章)

ジャラーサンダ王の出生の秘密

ユディシティラは言った。

「英邁なあなたは、余人の言えないことを言われた。まことに、地上において、あなたのように疑惑を解決できる者は他にいない。(一)王家ごとに王たちがいて、それぞれ自分に好ましいことを行なっている。しかし彼らは世界皇帝の地位に達していない。世界皇帝という語は全体に関わるものであるから。(二)他人の力を知る者が、どうして自己を称讃することができるか。他者と関わって讃えられる人が尊敬されるのである。(三)地上は広大で多様であり、多くの宝に満ちている。遠方へ出かけて行って、最良のものをよく知ることができる。ヴリシュニ族の長よ。(四)ところで私は寂滅のみが最高のものであると思う。しかし〔囚われの王たちを〕解放することから寂滅は生じないであろう。〔ラージャスーヤを〕企てれば、最高の境地は達成されないと私は考える。(五)一族に生まれた賢者たちは、まさに次のように理解している。――いつの日か何者かが彼らの最上者になるであろうと。クリシュナよ。(六)」

ビーマは言った。

「企てに努力しない王は、蟻塚のように崩壊する。また、方策(ウパーヤ)なしに強者を征服〔しようとする〕弱小の王も同様である。(七)しかし、王よ、一般に弱小の者でも孜々として正しい政策をとれば、強敵に勝利し、政策により自己に有益な目的をとげることができる。(八)クリシュナには政策、私には力、アルジュナには勝利がある。我々は三つの火のように、マガダを征服しよう。(九)」

クリシュナは言った。

「利得に専念する愚者は、[illegible]取りこみ、[illegible]その結果を考慮しない。(一〇)以下の五名が世界皇帝であると我々は聞いている。それ故、人々は利得に専念する愚かな敵を容赦しない。(一〇)以下の五名が世界皇帝であると我々は聞いている。すなわち、ヤウヴァナーシュヴァは租税をやめることと、バギーラタは守護することから、カールタヴィーリヤは苦行とヨーガにより、バラタ王は力により、マルッタは富貴により、世界皇帝となった。(一一)ブリハドラタの息子ジャラーサンダは、法(ダルマ)と実利(アルタ)と政策に関して、成敗されるべき対象となった。バラタの雄牛よ、そのことを知れ。(一二)しかし百一の王家は彼を抑止することができない。そこで彼は、今やまさにその力によって世界帝国を作っている。(一三)財宝をもらった王たちは、ジャラーサンダに仕えている。しかし、幼小より不正に従って来た彼は、それによっても満足しない。(一四)彼は即位灌頂した王や主要人物を力ずくで取りこんでいる。彼が人から貢物を受けないということは決してない。(一五)このようにしてジャラーサンダは、百あまりの王をすべて支配下に置いた。プリターの息子よ、非常に弱小の王がどうして彼に近づけようか。(一六)獣主(シヴァ神)の神殿において、犠牲獣のように、浄められて犠牲に供されるあの征服された王たちにとって、人生にいかなる喜びがあろうか。バラタの雄牛よ。(一七)王族(クシャトリヤ)は武器により死ねば尊敬される。我々はみなでマガダに対抗しようではないか。(一八)王よ、八十六名の王たちがジャラーサンダにより連れ去られた。残りは十四名である。これから彼は残虐な行為をするであろう。(一九)それを妨害する者は、輝かしい名声を得るであろう。そして、ジャラーサンダを征服する者は、必ずや世界皇帝(サムラージ)になるであろう。(二〇)」

（第十四章）

ユディシティラは言った。

「私は世界皇帝の位を得たいと望み、自己の利益に専念し、[illegible]どうして単なる蛮勇により、しいてあなた方を恐ろしい〔敵〕に対して送り出せよう。(一)ビーマとアルジュナは両眼であり、クリシュナは意(こころ)であると私は思う。意と両眼を失ったら、私の人生はどのようになろうか。(二)というのは、越えがたい、恐ろしく勇猛なジャラーサンダの軍と遭遇したら、疲労があなた方をうちひしぐであろう。その場合、どのようにしたらよいのか。(三)このようにもくろみがはずれた場合、まさしく不利益が生ずる。私個人としてはこう考える。聞いて下さい。(四)クリシュナよ、私はこの企てを放棄した方がよいのだ。私の心は今はそれをやりたくない。ラージャスーヤ祭は達成しがたい。(五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

アルジュナは最高の弓と無尽の〔矢を入れた〕箙（えびら）と、戦車と軍旗と集会場とを得て〔勇み立ち、〕ユディシティラに言った。（六）

「私は弓矢と気力と味方と土地と名声と力を得ました。王よ、望んだことというのは達成しがたいものです。（七）定評のある学者たちは、良家に生まれることを非常に称讃します。また力に等しいものは存在しません。しかし、私は気力を評価します。（八）強力な家に生まれた王族も、気力がないなら何ができましょう。すべからく王族の仕事は征服にあります。（九）すべての美質を欠いていても、気力ある者は敵を滅ぼす。すべての美質をそなえていても、気力のない者は何ができよう。（一〇）財物のように、すべての美質は、勇武において確立します。実に決断は勝利の原因です。行為は運命に依存します（原文疑問）。（一一）力をそなえた人も、怠慢によりそれを享受できません。強力な敵も、怠慢から、その敵たちにより滅びます。（一二）無力な者には失意があり、また力ある者には迷妄があります。その二つは滅亡の原因であり、勝利を望む王はその二つを捨てるべきです。（一三）もしその祭祀のために、ジャラーサンダ討伐と王たちの解放を行なうことができれば、それ以上のことがありましょうか。（一四）しかし、それを企てない時は、必ずや人々は我々に〔王者の〕美質がないと結論するでしょう。王よ、あなたは疑いのない美質よりも、どうして美質のない方をよいと思うのですか。（一五）寂滅を望む聖者たちになれば、袈裟は容易に得られます。だが我々は、あなたが世界皇帝になることを願って、敵と戦います。（一六）」

（第十五章）

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「アルジュナはこのように、バラタ族の家系に生まれたクンティーの息子にふさわしい見解を示した。（一）我々は死の時期を知らない。夜であるか昼であるか。また我らは、誰か戦わないで死ななかった者がいると聞いたことがない。（二）男はまさにこの心を満足させる仕事をなすべきである。すなわち、規定に見られる政策により敵を攻撃するということを。（三）交戦においては、危険のない、よい政策が最高の拠り所である。双方が等しい場合は、疑惑が生ずる（勝利は不確定）。しかし、双方が等しいということはあり得ないであろう。（四）もし我々が政策により、敵王に接近すれば、どうして敵を滅ぼせないか。川の激流が樹木を倒すように。敵の弱点を攻撃し、自分の弱点を補強して……。（五）より強力な敵に対しては、陣形を整えて後衛を置いて〔というような公開戦により〕進軍してはならぬ、というのが知者の政略である。この場合、私もそれがいいと思う。（六）というのは、我々は気づかれることなく敵の住処に入り、敵王を攻撃して、あの願望を達成しても、非難されないだろう。（七）何故なら人中の雄牛よ、彼のみが一人、生類の内我のように、常に富貴を担っているのであるから。彼が滅べば軍隊も滅ぶのだ。（八）もし彼を殺した後、我々が残った敵と交戦して〔死んだ〕としても、我々は親族を救おうと努力したのであるから、天界へ達するであろう。（九）」

ユディシティラは言った。

「クリシュナよ、そのジャラーサンダというのは何者なのだ。彼の力量と武勇はいかなるものか。火にも似たあなたと接触して、蝗(いなご)のように燃やされないとは。(一〇)」

クリシュナは言った。

「王よ、ジャラーサンダがどのような力量と武勇を持っているか聞きなさい。また、幾度も悪行を働いたのに、我々が彼を見過しているわけを。(一一)

ブリハドラタというマガダ国の王がいた。彼は三つの軍団の長で、誇り高い戦士であった。(一二)彼は美しく、力量をそなえ、栄光あり、無比の勇猛さをそなえ、常に戒行により痩せた体をし、まるで第二のインドラのようであった。(一三)彼はその威光にかけて太陽に等しく、忍耐にかけて大地に等しかった。怒りにかけて死神ヤマ(閻魔)に等しく、富貴にかけてヴァイシュラヴァナ(クベーラ)のようであった。(一四)バラタの最上者よ、彼の高貴な生まれにふさわしい美質によって、全地上は遍く満たされた。太陽の光線によって満たされるように。(一五)バラタの雄牛よ、強力な彼は、美貌と財産に満ちた、カーシ国王の双子の娘を娶った。(一六)その人中の雄牛はその二人の妻の前で、交互に、『私は決して出し抜かない』と約束した。(一七)その王は、愛しい似合いの妻たちにより、象が二頭の牝象により輝くように輝いていた。(一八)その王は二人の間で、ガンガー(ガンジス)川とヤムナー川の間の海さながらに輝いていた。(一九)

彼が享楽に耽っているうちに、青春は過ぎ去った。しかし家系を担う息子は一人も生まれなかった。(二〇)多くの儀礼や護摩(ホーマ)や、息子を願う祭祀によっても、その最上の王は、家系を繁栄させる息子を得ることはなかった。(二一)その時彼は、偉大なガウタマ・カークシーヴァットの息子で、苦行に憔悴した、気高いチャンダカウシカが、たまたま来訪して、樹の根もとに身を寄せていることを聞いた。王は妻たちとともに、ありとあらゆる高価な品をさし出して彼を満足させた。(二二―二三)堅く誓いを守り、真実を語る最高の聖仙は、彼に告げた。

『私はあなたにすっかり満足しました。誓戒を守る王よ、恩寵を与えるから選びなさい。(二四)』

そこでブリハドラタは、妻たちとともに敬礼し、彼に言った。息子を見ることに絶望して、涙で口ごもりながら。(二五)

ブリハドラタは言った。

『尊者よ、王国を捨てて苦行林に行こうとする私にとって恩寵が何になりましょう。息子のいない不幸な私にとって王国が何になりましょう。(二六)』

クリシュナは続けた。

「それを聞いて聖者は心を動かし、考えこんでしまった。そして彼は、同じマンゴー樹の陰に座った。(二七)座っているその聖者の膝に、オウム〔などの鳥〕に食われない、瑞々しい一つのマンゴーの実が落ちた。(二八)最上の聖者はそれを取り、心の中で加持祈禱し、その息子を授ける無比の果実を王に与えた。(二九)そしてその叡知に満ちた偉大な聖者は王に言った。

『王よ、行きなさい。あなたは目的を成就した。引き返しなさい。(三〇)』

最高の王は約束に従って、一つの果実を二人の妻に与えた。(三一) 美しい二人は、そのマンゴーを二つに分けて食べた。聖者の誓言により目的は実現するものであるから、二人はその果実を食べて妊娠した。王は彼女たちを見て最高に喜んだ。(三二―三三)

さて、叡知に満ちた王よ、時が過ぎその時期が来ると、二人は半分の身体の息子を生んだ。(三四) それらは一つの眼、一つの腕、一つの足、半分の腹と顔と尻を持っていた。その半身の息子たちを見て、二人はすっかりふるえ上がった。(三五) 二人の姉妹は悲嘆に暮れ、相談し合って、非常に苦しみながらも、生きている半身のものたちを捨てた。(三六) 二人の乳母はその二つの新生児をしっかりと包んで、後宮の門から出て、捨ててから速やかにもどった。(三七)

その時、人間の肉と血を食す羅刹女で、ジャラーというものが、四辻に捨てられていた子供たちを拾った。(三八) ところがその羅刹女は、運命の力にかられ、その半身の子供たちを運びやすくしようとして、それらを接合した。(三九) 二つの半身は接合されるやいなや、一つの身体になり、雄々しい男児が出現した。(四〇) 王よ、それからその羅刹女は、驚いて目を見張り、その金剛のように堅固な幼児を運ぶことができなくなった。(四一) 子供はその赤い掌を握りしめ、口にあてて、雷雲のように猛烈に泣き叫んだ。(四二) その声に動転して、後宮の人々と王が急いで出て来た。(四三) 二人の女はすっかりやつれ、絶望していたが、乳で満ちた乳房をして、息子を取りもどすために急いで近づいて行った。(四四) 羅刹女はそのような二人の女を見て、また子孫を望む王と、その強力な息子とを見て考えた。(四五)

『私はこの息子を切望する王の領土に住んでいるから、雲の連なりが太陽を奪うように、この幼い息子を奪い去ることはよくない。(四六)』

彼女は人間の姿をとって、王に告げた。

『ブリハドラタよ、私はこのあなたの息子をお渡しします。お受けなさい。(四七) 彼は最高のバラモンの指令により、あなたの二人の妻に生まれたものです。乳母たちに捨てられましたが、私が彼を救ったのです。(四八)』

バラタの最上者よ、それからカーシ国王の美しい娘たちは、その子供に急いで駆け寄り、ほとばしり出る乳を降り注いだ。(四九) 王はすべてを知って大喜びし、羅刹女のように見えないその新しい黄金のように輝く羅刹女にたずねた。(五〇)

『蓮花の内部の輝きを有する女よ、私に息子を授けて下さったあなたは誰ですか。美しい女(ひと)よ、どうかおっしゃって下さい。私にはあなたは女神であると思われますが。(五一)』

(第十六章)

羅刹女は言った。

『私はジャラーという名です。あなたに幸あらんことを。望みのままの姿をとる羅刹女です。王中の王よ、私はあなたの家で、尊敬されて、幸せに暮らして来ました。(一) 敬虔な王よ、そこで私はいつも恩返しを考えているうち、あの半身の息子たちを見ました。(二) 私がたま

たまその二つを接合したところ、それはこの王子になったのです。大王よ、それもあなたの幸運によるものです。私は単なる手段にすぎません。(三)」

クリシュナは続けた。

「王よ、このように告げて、彼女はその場で消え失せた。王は息子を抱いて、自分の家に入った。(四)そこで彼はその子供のためになすべき儀式を行なった。そして、羅刹女のために、マガダ国中で盛大な祭礼を行なうよう命令した。(五)造物主(プラジャーパティ)のような父親は息子に名前をつけた。彼はジャラーによって接合された(サンディタ)から、ジャラーサンダと名づけられた。(六)マガダ国王の威光に満ちた息子は成長した。彼は供物を焼べられた火のように、大きく強力になった。(七)

やがて時が過ぎ、あの偉大な苦行者である尊者チャンダカウシカは、再びマガダ国を訪れた。(八)プリハドラタは、彼の来訪を喜び、大臣や従者を連れ、妻と息子とともに出迎えた。(九)王は足を洗う水と接客用の品と口をゆすぐ水を出して彼を歓待した。そして王は、王国とともに息子を彼にさし出した。(一〇)尊い聖者はマガダ王からその供養を受け入れて、心から喜んで王に告げた。(一一)

『王よ、私は知恵の眼により、すでに一切を知っている。王中の王よ、王子がどのようになるか聞きなさい。(一二)諸王はこの強力な男の力量に匹敵しないであろう。王よ、神々によって投じられた武器でさえ、彼に苦痛を生じさせないであろう。川の流れが山を苦しめないように。(一三)彼はすべての即位した王たちの頭上に輝くであろう。太陽が星々の輝きを奪

うように、彼はすべての王の輝きを奪うであろう。(一四)大軍を擁する王たちといえども、彼を攻撃して、火に入る蝗のように滅亡するであろう。(一五)彼はすべての王の豊かな富を取り込むであろう。雨季に河川の主(海)が、増水した諸川を取り込むように。(一六)強力な彼は、四姓よりなる社会を正しく維持するであろう。すべての作物を担う広大なる大地が、善悪のものを支持するように。(一七)あらゆる王たちが彼の命令に従うであろう。体を持つ生類が万物の本体(アートマン)である風(ヴァーユ)に従属するように。(一八)全世界で最強のこのマガダ国王は、自ら、ルドラ、偉大なる神、三都の破壊者、ハラ(すべてシヴァ神の異名)を見るであろう。(一九)』

聖者はこのように告げるや、自己の仕事のことを考えて、プリハドラタ王のもとを辞した。(二〇)それからマガダ国王プリハドラタは、都に入り、親類縁者に囲まれて、ジャラーサンダを灌頂して(即位させて)から、最高の寂滅に達した。(二一)ジャラーサンダが即位した時、プリハドラタ王は、二人の妻に従われて、苦行林での生活に勤しんだ。(二二)父が母たちとともに苦行林にいる間、ジャラーサンダはその力によって諸王を支配下に置いた。(二三)やがて長い時が過ぎて、苦行林にいるプリハドラタ王は、苦行を行じて、妻たちとともに天界に赴いた。(二四)

ジャラーサンダには、ハンサとディバカという、武器によって殺されない者がいた。二人は、政策にかけて最高の知者であり、戦闘の論書に通達していた。(二五)その強力な二人については、私はすでにあなたに話した。彼ら三名は三界に匹敵したと私は考える。(二六)勇猛なる大王よ、以上のようなわけで、強力なククラとアンダカ、及びヴリシュニは、政略上

の理由でジャラーサンダを見過していたのだ。（二七）」

（第十七章）

(22) ジャラーサンダ（第十八章―第二十二章）

マガダ国へ行く

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「ハンサとディバカは倒れた。カンサとその大臣は打倒された。今やジャラーサンダを殺す時が来た。(一)すべての神と阿修羅ですら、戦闘において彼に勝つことはできない。しかし、格闘により彼を破ることができると思う。(二)私には政略が、ビーマには力がある。そしてアルジュナは我々二人の守護者である。王よ、我々は三つの火のように彼を成敗するであろう。(三)人のいない所で我々三人に攻撃されたら、彼は疑いもなく我々のうちの一人と戦おうとするだろう。(四)彼は世間を侮り、力におごっているから、挑戦を受けたら、必ずやビーマセーナと戦おうとするであろう。(五)大力の勇士ビーマは彼を殺すことができる。死神が動揺した世界を滅ぼすように。(六)もし決心されたら、もし私を信頼するなら、すぐにビーマセーナとアルジュナを私に預けて下さい。(七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

バガヴァット（クリシュナ）にこのように言われたユディシティラは、喜びに輝く顔をして立っているビーマとアルジュナを見て、彼に答えた。(八)

「クリシュナよ、クリシュナよ、そのように言われるな。敵を悩ます勇士よ。あなたはパーンダヴァ一族の守護者である。我らはあなたに依存している。(九)クリシュナよ、あなたの言われることはすべて正しい。実にあなたは、幸運の女神が顔を背ける人々を導かないのだ。(一〇)私があなたの指示に従えば、ジャラーサンダは殺され、諸王は解放され、ラージャスーヤ祭は達成されたも同然だ。(一一)速やかに行動する方よ、私が世のためになすべきこの仕事が実現するように行動して下さい。最高の人よ。(一二)実にあなた方三人がいなければ、私は生きていられない。法（ダルマ）と享楽（カーマ）と実利（アルタ）を失い、病に苦しむ者のように不幸である。(一三)クリシュナがいなければアルジュナはいない。アルジュナがいなければクリシュナはいない。この世には、この二人のクリシュナに征服されないものはないと私は考える。(一四)そしてこの栄光ある狼腹（ビーマ）も、力ある者たちのうちで最強の誉れ高い勇士であり、あなた方二人と組めば、いかなることでもできる。(一五)というのは、汪溢する力は正しく導かれれば、最高の仕事をなしとげるから。盲目的で不条理な力は、賢明な人々によって導かれるべきであると説かれる。(一六)世の人々が低地に水を導くように、知性に富んだ人々は、弱点のある所に力を導くものだ。(一七)それ故、政策論を知る、世に知られた人物であるクリシュナに依存して、我々は仕事を成就すべく努力しよう。(一八)クリシュナよ、このように諸々の仕事においては、仕事の目的を成就するために、実行の方法をともなう、叡知と政策と力を前提とすべきである。(一九)かくして、仕事の目的を成就するために、アルジュナはヤドゥ族の長クリシュナに従え。ビーマはアルジュナに従え。政策と勝利と力は、勇武において成就するであろう。(二〇)」

このように言われて、威力に満ちたすべての兄弟たち、すなわちクリシュナと二人のパーンダヴァは、マガダ国めざして出発した。(二一)

彼らは威力に満ちたヴェーダ修得者であるバラモンの衣服を着て、友たちの親密な言葉で祝福された。(二二)その時、親族のために義憤に燃え、最上の衣服をまとい、太陽と月と火のような彼らの身体は凄まじいものであった。(二三)一つの仕事に専念した、戦いにおいて無敵の二人のクリシュナが、ビーマに先導されているのを見て、ジャラーサンダは殺されたも同然であると彼（ユディシティラを指すか）は考えた。(二四)というのは、この偉大なる両者は、一切の行為の開始における主であり、また、法（ダルマ）と実利（アルタ）と享楽（カーマ）のためになされる行為を回収する主でもあるから。(二五)

彼らはクルの国土から発って、クルの未開地（ジャーンガラ）を通過し、美しい蓮の湖に行き、カーラクータ山を過ぎ、ガンダキーヤーとショーナとサダーニーラーという、一つの山から流れる川々を次々と通過して行った。(二六―二七)美しいサラユー川を渡り、東部コーサラを見て、ミティラーを過ぎ、マーラー川、チャルマンヴァティー川を通過して進んだ。(二八)それからクリシュナたち三人は、そろって東方に向い、ガンガーとショーナを渡り、クラヴァ樹におおわれるマガダの地に着いた。(二九)常に畜牛に富み、水にめぐまれ、樹々の美しいゴーラタ山に達して、彼らはマガダの都を見た。(三〇)

（第十八章）

ヴァースデーヴァは言った。

「プリターの息子よ、これが美しいマガダの大都市だ。心地よく、畜牛に満ち、常に水にめぐまれ、災いなく、立派な邸宅に満ちている。(一)友よ、大山ヴァイハーラ、ヴァラーハ、ヴリシャバ、リシギリ、第五にチャイティヤカ、これらの美しい山々、高い峰を有し、樹々で涼しい山々は、お互いに体を結び合わせ、結束してギリヴラジャを守っているかのようである。(二―三)恋人たちに好ましいロードラ樹の森は、花々にその枝の先をおおわれ、芳香あり、魅力的であり、山々を隠すかのように茂っている。(四)そこにおいて、誓戒を厳守する偉大な聖仙ガウタマは、シュードラ女のアウシーナリーに、カークシーヴァなどの息子を生ませたのだ。(五)ガウタマは、その住居に住んだことから、諸王の示した好意により、マガダの家系を愛した。(六)アンガ国王やヴァンガ国王などの強力な王たちは、かつてガウタマの住居を訪れて楽しんだものだ。(七)プリターの息子よ、ガウタマの住処の付近に生じた、あの魅力的なプリヤーラの森と、美しいロードラの森を見よ。(八)そこにはまた、敵を苦しめる勇猛な蛇（竜）、アルブダとシャクラヴァーピンがいた。そこにはまた、スヴァスティカ〔竜〕とマニ竜との最高の住処があった。(九)マニのおかげでマガダの地は雨雲に見捨てられることがないのだ。カウシカとマニマットも、いやが上にも好意を注いだ。(一〇)ジャラーサンダは成功が去ることはないと考えている。我々は彼を攻撃し、今日こそ彼の高慢を打破してやろう。(一一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
そのように言って、威力に満ちたすべての兄弟たち、すなわちクリシュナと二人のパーンダヴァは、マガダの都めざして出発した。（一二）満足した豊かな人々に満ち、四姓の人々に満ち、多くの祝祭のある、難攻のギリヴラジャに、彼らは近づいて行った。（一三）その時、彼らは、ブリハドラタ一族や市民たちに崇敬されている、都の門である高山には近づかなかった。（一四）そこにおいて、ブリハドラタは、豆を食べる雄牛を殺して、三つの豆の茎を太鼓にした（原文疑問）。（一五）彼はその皮を張り、それらの太鼓を自分の都に安置したが、かつて、それらの太鼓は、そこで天上の花を降り注がれて音をたてたという。（一六）

彼らはマガダの人々に非常に愛されるチャイティヤカ山の端を走った。ジャラーサンダを殺そうと望み、その山頂をまさに破壊せんとするかのように……。（一七）その山頂は堅固で、非常に広大で、古よりそびえ、種々の花輪で崇拝され、常に確固としている。それを、勇士たちは、大きな腕で打ち壊した。それから彼らは、マガダの都を見て、入って行った。（一八—一九）

まさにその時、司祭たちは象に乗るジャラーサンダ王の周囲を火を持ってまわり、王に敬意を表していた。（二〇）彼らはヴェーダ修得者の身なりをし、その腕のみを武器として他に武器を持たず、ジャラーサンダと戦おうと望み、都に入った。（二一）彼らは食物や花輪を売る市場の最高のにぎわいを見た。それは盛大で、すべての美質をそなえ、すべての欲望をそそる品に満ちていた。（二二）最高の人々、すなわちクリシュナとビーマとアルジュナは、市

場のこのような繁栄を見て、大通りを進んで行った。（二三）強力な男たちは、花輪作りから花輪を力ずくで奪い、すべて多彩な色の衣服をまとい、花輪をつけ、輝かしい耳環をつけ、英邁なジャラーサンダの宮殿に入って行った。ヒマーラヤの獅子が牛舎を見て入るように。（二四—二五）彼ら腕力のある勇士たちの、栴檀や伽羅を塗られた、石柱のような腕は、美しく輝いていた。（二六）象のように巨大で、シャーラ樹の幹のようにそびえ立つ、広い胸を持つ彼らを見て、マガダの人々は驚嘆した。（二七）彼ら強力な人中の雄牛たちは、人々にあふれた三つの部屋を通り過ぎて、誇らしく王に近づいた。（二八）洗足の水と接客用の飲食物にふさわしい、尊敬やもてなしにふさわしい彼らに対し、ジャラーサンダは立ち上がって、作法通りに接待した。（二九）そしてその王は、彼らに、「ようこそ」と告げた。というのは、次のことが世に知られた彼の信条であったから。（三〇）たとい真夜中であろうと、ヴェーダ修得者のバラモンがやって来たのを聞いたら、常勝の王は出迎えるというのが。（三一）しかしその時、最高の王ジャラーサンダは近づいて、彼らが前例のない服装をしているのを見て驚いた。（三二）

人中の雄牛たちは、ジャラーサンダ王を見るや、みなして言った。（三三）
「王よ、御機嫌麗しう。恙なきように。」
彼らはみな直立し、代わる代わる王を見つめていた。（三四）それからジャラーサンダは、バラモンに変装したクリシュナとパーンダヴァたちに、「座りなさい」と告げた。（三五）そこで人中の雄牛たちは三人とも席についた。盛大な祭式で煌々と燃える三つの火のように。

(三六)

真実を守るジャラーサンダ王は、彼らの身なりを非難して彼らに言った。(三七)

「私の知るところでは、この人の世で、ヴェーダ修得者の生活を送るバラモンは、公に花輪や香油を決してつけないものだ。(三八) ところがあなた方は、花をつけ、腕には弓弦のあとがある。そして王族の威力を帯びながら、バラモンであると称している。(三九) このように多彩な色の衣服をまとい、公然と花輪や香油をつけたあなた方は何者か。真実を語れ。王族においては、真実は輝くものだ。(四〇) あなた方は何故、チャイティヤカの山頂を壊して、門を通らないで、我々の居住地に侵入したのか。王に対し罪を犯すことを恐れもせずに。(四一) これはバラモンにあるまじき行為だ。一体何を考えているのか、言いなさい。特にバラモンにとって、力はその舌に存するのに。(四二) またこのように私に近づいて、我らが捧げる敬意をどうして受け入れないのか。また我々のもとに来た目的は何か。(四三)」

このように言われて、気高く雄弁なクリシュナは、柔和で深みのある声で答えた。(四四)

「バラモン、王族、実業者がヴェーダ修得者の生活を送ることができる。そして、彼らには、特別の規定とともに、一般的な規定もある。(四五) 特別の規定を守る王族は、常に繁栄に達する。花を持つ者たちには繁栄は確実であるから、我々は花をつけている。(四六) 王族は腕の力を有するが、言葉の力は持たない。それ故、ブリハドラタの息子よ、王族の言葉は謙虚であるとされる。(四七) 創造者は自己の力を王族の腕に宿らせた。王よ、もしそれを見たければ、疑いもなく今日見るであろう。(四八) 立派な人々は、常に、友の家には門を通って入るが、敵の家には門を通らずに入るものだ。だから我々は門を避けたのである。(四九) 我々は目的があって家に入り、敵から敬意を受けはしない。以上が我々の信条であると知れ。(五〇)」

（第十九章）

ビーマ、ジャラーサンダを倒す

ジャラーサンダは言った。

「私はいつあなた方から憎まれたか覚えていない。また、いくら考えても、あなた方に対して敵意を抱いた覚えはない。(一) 敵意がないのに、どうして罪もない私を敵と考えるべきか。言ってくれ、バラモンたちよ。というのは、このことは立派な人々の協約である。(二) 王族といえども、罪のない人を害すれば、疑いもなく、法(ダルマ)の侵害によりその心は苦しむのである。(三) それ故、法を知り偉大な誓戒を守る者でも、この世で不適切に行動すれば、罪ある帰趨に至り、自己の幸福を損う。(四) 王族の法により、私が三界において善行者たちのうちで最上であり、罪のないことを知りながら、あなた方は痴れ事をしゃべっているかのようだ。(五)」

ヴァースデーヴァは言った。

「大王よ、ある一人の王が一族の重責を担っている。我々三人は彼の指令によって立ち上がったのである。(六) 王よ、あなたは世界中に住む王族たちを犠牲にした。そのような残酷な

罪を犯しながら、どうして罪がないと考えているのか。（七）最高の王よ、どうして王が善良な王たちを害するのか。あなたは王たちを幽閉して、ルドラ（シヴァ）神に供えようとしている。（八）ブリハドラタの息子よ、あなたの犯した罪は我々にも達するであろう。というのは、法（ダルマ）を実践する我々は、法を守ることができる。（九）人間を犠牲に供えるなどということは、決して見られたことはない。それなのに、あなたはどうして人間を犠牲にしてシャンカラ（シヴァ）神を祀ろうと望むのか。（一〇）王族が同じ王族を犠牲獣として扱おうとしているのだ。ジャラーサンダよ、あなたのように愚かな者は他にいない。（一一）そこで我々は苦しむ人々を探して、親族の繁栄のために、親族を滅ぼすあなたを成敗しようとしてここに来たのである。（一二）もしあなたが、この世に王族のうちで〔あなたに対抗する〕男が他にいないと考えるなら、王よ、それはあなたの大きな考え違いだ。（一三）王よ、自分の高い生まれを知るいかなる王族が、戦闘の直後に、不滅で無比の天界に達しないだろうか。（一四）王族たちは天界をめざして、戦闘という祭祀のために潔斎し、諸世界を征服する（異本に従う）。マガダ国王よ、そのことを知れ。（一五）王よ、勝利は天界の源である。大なる名声は天界の源である。苦行は天界の源である。戦闘においては、その〔天界への〕道は確実である。（一六）それによりインドラが阿修羅どもを征服し、世界を守護するもの、それは実にインドラのヴァイジャヤンタ（軍旗、または宮殿）であり、常に専心した特性である（原文疑問）。（一七）天界をめざして、誰にあなたのような戦闘能力があろうか。強大な力を誇るマガダの大軍によって……。（一八）しかし、王よ、他の者たちを軽蔑してはならぬ。すべての人にあなたに等しい力と威光があるわけでは

ないので、王よ、目覚めぬうちは自分に力があると思っているがよい。ところが我々はその力に対抗できる。王よ、だから私はあなたに言うのである。（一九―二〇）マガダ国王よ、同等な人々に対して慢心と尊大さを捨てよ。息子や大臣や軍隊とともにヤマ（閻魔）の住処に行ってはならぬ。（二一）ダンボードバヴァ、カールタヴィーリヤ、ウッタラ、ブリハドラタ、これらの王はより優れた者を軽蔑して、その軍隊とともに滅びた。（二二）人々をあなたから救おうと望む我々は、確かにバラモンではない（異本による）。私はシャウリ・フリシーケーシャ（クリシュナ）だ。ここにいる二人の勇士は、パーンドゥの息子たちである。（二三）王よ、我々はあなたに挑戦する。マガダ国王よ、毅然として戦え。あるいは、すべての王たちを解放せよ。ヤマの住処に行ってはならぬ。（二四）」

ジャラーサンダは言った。

「私は征服されない王たちを捕えたりはしない。征服された者がどうして反抗するだろうか。また、この世で、私に征服されない者が誰かいるか。（二五）クリシュナよ、王族にとって、このことは正当な生き方であると言われる。攻撃して支配したら、思いのままにふるまってよいということは。（二六）クリシュナよ、私は神のために諸王を集めたのに、どうして恐怖により、今、彼らを解放できようか。王族の生き方を考えてみても……。（二七）軍隊を率いて布陣した軍隊とともに、あるいは一人で一人とともに、または二人、三人とともに、同時にあるいは別々に、私は戦ってやる。（二八）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ジャラーサンダ王は、そのように告げてから、恐ろしく勇猛な者たちと〔死を覚悟して〕戦うことを欲し、その時〔息子の〕サハデーヴァの即位灌頂式を命じた。(二九) ところで、その戦闘が近づいた時、王はカウシカとチトラセーナという二人の将軍のことを思い出した。(三〇) かつてこの二人の名は、世間では、人々にハンサとディバカと呼ばれ、人の世で人々に尊敬されていたのだ。(三一) 一方、主クリシュナは、その王が最高の強者であり、虎のように勇猛であることを思い出した。(三二) そして、真実を守るクリシュナは、地上において恐ろしく勇猛なジャラーサンダ王を殺すことは、他の者に指定された役割であることを思い出した。(三三) 自制した人々のうちの最上者である、バララーマの弟クリシュナは、自らは殺さずに、梵天の命令を前提として、彼を殺そうと望んだのである。(三四) 〔第二十章〕

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、雄弁なヤドゥの長クリシュナは、戦いの決意をしたジャラーサンダ王に言った。(一)

「王よ、我々三人のうちで誰と戦いたいと思うか。我々のうちの誰が戦いの準備をすべきか。(二)」

クリシュナにそう言われて、威光に満ちたマガダ国王ジャラーサンダは、ビーマセーナと

戦うことを選んだ。(三) 彼の司祭は、最上の薬、鎮痛剤、気つけ薬を持って、戦おうとするジャラーサンダの近くに立った。(四) 有名なバラモンに祝福されて、王族の法（クシャトラダルマ）に忠実である英邁なジャラーサンダは、戦いの準備をした。(五) ジャラーサンダは王冠を脱ぎ、髪を整え、海岸線を越えた海のように立ち上がった。(六) 聡明な王は恐ろしく勇猛なビーマに言った。

「ビーマよ、私はあなたと戦う。より強い者に敗れる方がよいから。(七)」

そう言って、敵を挫く威光に満ちたジャラーサンダは、ビーマセーナに対して飛びかかった。阿修羅バリがインドラを攻撃するように。(八) 強力なビーマセーナは、クリシュナと協議した後、彼に祝福されて戦いを望み、ジャラーサンダを攻撃した。(九) それから彼ら人中の虎は素手で相対した。両者は勝利を望み、最高に勇み立った。(一〇) その時、両者が腕で打ち合い、つかみ合うことにより、金剛杵（ヴァジュラ）と山との衝突のような、もの凄い音が響いた。(一一) 二人は力にかけて最強であり、最高に勇み立ち、お互いの隙をうかがい、互いに勝利を望んでいた。(一二) かくて、人々を遠ざけて、人気（ひとけ）のない場所で、ヴリトラとインドラのように強力な両者の対決において、恐ろしい戦闘が行なわれた。(一三) 彼らは種々のやり方で〔原文疑問〕お互いに引きずり合い、膝で蹴り合った。(一四) それから、大声で互いに罵り合い、岩石の群がぶつかるように打ち合った。(一五) 広い胸と長い腕を持ち、格闘に長けた両者は、鉄棒のような腕で打ち合った。(一六)

　その偉大な二人の男の合戦は、カールッティカ月の最初の日に始まり、第十三日まで、昼夜連続して、休むことなく続けられた。しかし、第十四日目の夜に、(一七) マガダ国王は疲労によ

り戦いをやめた。(一七―一八)その王が疲れたのを見て、クリシュナは恐ろしい行為のビーマに、諭すかのようなふりをして告げた。(一九)

「クンティーの息子よ、戦いに疲れた敵を苦しめてはいけない。というのは、もし苦しめられたら、彼は完全にその生命を捨てるから。(二〇)それ故、クンティーの息子よ、あなたは王を苦しめてはならぬ。バラタの雄牛よ、あなたは彼とともに両腕で戦え。(二一)」

クリシュナにこのように言われて、勇士ビーマはジャラーサンダの弱みを知り、彼を殺す決意をした。(二二)そこで最強のクルの王子である狼腹（ビーマ）は、無敗のジャラーサンダを破るべく、彼をつかんだ。(二三)

（第二十一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それからビーマセーナは、ヤドゥの後裔のクリシュナに言った。ジャラーサンダを殺そうと望み、強い決意をして。(一)

「クリシュナよ、私は腰布の結び目を締め〔て身構え〕たから、この悪党を殺さずにはいられない。ヤドゥ族の虎よ。(二)」

このように言われて、虎のようなクリシュナは、ジャラーサンダを殺したいと望み、せき立てながら狼腹に向かって告げた。(三)

「ビーマよ、あなたの神的な最高の精神力、あなたの風神の力を、ジャラーサンダに向けて、

今日我々に見せてくれ。(四)」

そのように言われて、大力の勇士ビーマは、強力なジャラーサンダを持ち上げて、振りまわした。(五)百回振りまわしてから、両腕で背骨を砕いた。そして彼を折り曲げ、粉砕し、雄叫びをあげた。(六)そのパーンダヴァが彼を粉砕し、叫んだ時、その大きな音はすべての生類を恐怖させた。(七)ビーマセーナとジャラーサンダの叫びによって、すべてのマガダ国民はおののき、女たちは流産してしまった。(八)

「ヒマーラヤが裂けたのか、あるいは大地が裂けたのか。」

マガダの人々は、ビーマセーナの叫び声を聞いてそう思った。(九)

それから勇士たちは、夜、王宮の門のところで眠るかのように死んでいる王を残し、退出した。(一〇)クリシュナは旗のひるがえるジャラーサンダの戦車に馬をつなぎ、二人の兄弟をそれに乗せ、そして親族たちを解放した。(一一)大きな危険から解放された王たちは、クリシュナに会って、宝を受けるにふさわしい彼に、宝物を贈った。(一二)彼は無疵で、武装し、敵に勝利し、神聖な戦車に乗り、王たちとともにギリヴラジャから出て行った。(一三)その兄弟を乗せた戦車は、二名の戦士が乗り、クリシュナを御者とし、繰り返し〔敵を〕撃破し、すべての王により打ち勝たれざるものに見えた。(一四)ビーマとアルジュナという二人の戦士が乗り、クリシュナが御者であるその最上の戦車は、一切の弓取りによって打ち破られることなく、光り輝いていた。(一五)実にインドラとヴィシュヌとが、〔悪魔〕ターラカを滅ぼす戦闘において、この戦車で走りまわった。今やクリシュナがそれに乗って進んだ。

(一六)それは精錬された黄金のように輝き、鈴の網で囲まれ、雷雲のような音を響かせ、敵を撃破する勝利の車である。(一七)それに乗って、インドラは九十九名の悪魔を殺したのだった。その時、人中の雄牛たちは、その戦車を得て喜び勇んだ。(一八)

その時、強力なクリシュナが兄弟たちとともに戦車に乗っているのを見て、マガダ国の人々は驚いた。(一九)神的な馬をつないだ戦車は、風のように速く、クリシュナに操縦されて、こよなく輝いた。(二〇)その最上の戦車の上には神に作られた軍旗が翻っていた。それは美々しく、虹のように輝き、一由旬(ヨージャナ)の遠方から見えた。(二一)その時クリシュナはガルダ鳥(ヴィシュヌ＝クリシュナの乗物)のことを考えた。その鳥はその瞬間にやって来た。その〔旗〕は、その鳥により、聖域の祭柱のように高くそびえていた。(二二)蛇を食うガルダは、口を開き大声をあげる、旗にいる〔他の〕生物たちとともに、その最高の戦車に止まっていた。(二三)その鳥は光輝により諸生物には見られがたく、この上なく輝いていた。千の光線に囲まれた真昼の太陽のように。(二四)その神聖な最高の旗は、樹々にからまることなく、武器に害われることなく、神々と人々によって認められた。(二五)

人中の虎クリシュナは雨雲のような音をたてるその神聖な戦車に乗り、パーンダヴァ兄弟と出発した。(二六)その戦車は、ヴァス王がインドラから得て、ブリハドラタがヴァスから得て、ブリハドラタから順次にその子ジャラーサンダ王に伝わったものである。(二七)名高い勇士クリシュナは、ギリヴラジャから外に出て、平地で立ち止った。(二八)そこで、バラモンをはじめとするすべての市民は、儀軌に示された作法により彼を歓迎した。(二九)拘束から解放された王たちは、クリシュナに敬意を払い、称讃して次のように言った。(三〇)

「デーヴァキーの息子である勇士よ、あなたがビーマとアルジュナの力を得た時、法(ダルマ)が守護されるということは不思議ではない。(三一)苦しみの泥のある、ジャラーサンダという恐ろしい池に沈んでいた王たちを、あなたは今日、救い出したのだ。(三二)ヴィシュヌよ、非常に恐ろしい山城で苦しんでいた人々を幸いにも解放したことにより、あなたの名声は輝かしいものになった。最高の人よ。(三三)人中の虎よ、我々は何をいたしましょうか。おっしゃって下さい。人中の雄牛よ。どのようになしがたいことでも、王たちは直ちに実行します。(三四)」

気高いクリシュナは彼らを元気づけて告げた。

「ユディシティラはラージャスーヤ祭を行なおうと望んでいる。(三五)法に専念する彼は、帝王になることを求めている。あなた方はみな、祭祀のために彼を援助しなさい。(三六)」

すべての王は喜んで、「承知しました」と言って、その言葉を受け入れた。(三七)王たちはクリシュナに宝を分け与えた。クリシュナは彼らに対する慈しみの気持から、やっとのことでそれを受けた。(三八)

ジャラーサンダの息子である勇士サハデーヴァは、司祭を先に立てて、一族と大臣たちを連れて出て来た。(三九)サハデーヴァはへり下って恭順の意を表し、多くの宝をさし出して、人間における神であるヴァースデーヴァ(クリシュナ)を崇拝した。(四〇)クリシュナはそこで、恐怖に苦しむジャラーサンダの息子の安全を保証し、その場で彼を王位につけた。(四一)その

賢明な王は、クリシュナと同盟を結び、プリターの二人の息子（ビーマとアルジュナ）に敬意を表されて、再びブリハドラタの都に入った。（四二）一方、青蓮の眼のクリシュナは、最高の栄光で輝き、多くの宝を持って、プリターの二人の息子とともに出発した。（四三）

クリシュナはパーンダヴァ兄弟とともにインドラプラスタに着き、ダルマ王（ユディシティラ）と会い、喜びにあふれて告げた。（四四）

「幸いなことに、ビーマが強力なジャラーサンダを倒しました。そして私は王たちを拘束から解放しました。最高の王よ。（四五）また幸いにも、このビーマセーナとアルジュナとは元気で、傷ひとつなく、自分たちの都にもどりました。（四六）」

ユディシティラはふさわしくクリシュナに敬意を表し、喜んでビーマセーナとアルジュナを抱きしめた。（四七）それから、ジャラーサンダが滅びたので、ユディシティラは二人の兄弟によりもたらされた勝利を得て、弟たちとともに喜び合った。（四八）それから彼はあの王たちと年齢順に面会し、もてなし、敬意を表してから、王たちと別れた。（四九）王たちはユディシティラのもとを辞し、上機嫌で、種々の車に乗り、急いで自国に帰った。（五〇）

このようにして、偉大な知性をそなえた人中の虎クリシュナは、パーンダヴァたちに、敵のジャラーサンダを殺させた。（五一）敵を制する彼は、知性にもとづいてジャラーサンダを殺した後、ダルマ王とプリターとクリシュナー（ドラウパディー）に別れを告げた。（五二）それからスバドラー、ビーマセーナ、アルジュナ、双子（ナクラとサハデーヴァ）、ダウミヤに別れを告げてから、自分の都めざして出発した。（五三）彼は例の最上の戦車に乗って、諸方に音を響かせて出発した。その朝日のように輝く神聖な戦車は、ダルマ王が彼に贈ったのだった。（五四）出発の時、ユディシティラをはじめとするパーンダヴァたちは、汚れなき行為のクリシュナのまわりを右まわりにまわって敬意を表した。（五五）

デーヴァキーの息子である聖クリシュナが去った時、パーンダヴァたちは大勝利を得て、王たちの安全を確保し、その行為によりいっそう威厳を増大させ、ドラウパディーを最高に喜ばせた。（五六―五七）その時、その王国の守護において誉れ高い王は、法（ダルマ）と享楽（カーマ）と実利（アルタ）にかなう正しいことを、法に従って実行した。（五八）

（第二十二章）

(23) 世界制覇（第二十三章—第二十九章）

パーンダヴァによる諸方の征服

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

アルジュナは、最上の弓と、無尽の〔矢を入れた〕箙（えびら）と、戦車と旗と集会場を得た後に、ユディシティラに告げた。(一)

「王よ、私は弓矢と武器と、気力と味方と、領土と名声と力とを得た。得がたい願望も達成した。(二) そこで今は宝庫の増大を図るべきであると私は考える。最高の王よ、私はすべての王から租税を取り立てます。(三) 吉祥の日、時間、星宿において、私は財主（クベーラ）に守られた方角（北方）を征服すべく遠征します。(四)」

ダルマ王ユディシティラは、アルジュナの言葉を聞くと、優しく深みのある声で答えた。(五)

「バラタの雄牛よ、尊敬さるべきバラモンたちに祝福してもらってから出発せよ。敵たちを悲しませ、友たちを喜ばせて。アルジュナよ、あなたの勝利は確実である。願望を達成せよ。(六)」

アルジュナはそう言われて、大軍に囲まれ、火神（アグニ）に与えられた、驚異的な仕事をなしとげる神聖な戦車に乗って出発した。(七) 同様に、ビーマセーナと、人中の雄牛である双子（ナクラとサハデーヴァ）も、軍隊を率いて、すべてダルマ王に敬意を表されて、〔諸方に〕出征した。(八) アルジュナは財主（クベーラ）の好む方角（北方）を征服した。また、ビーマセーナは東方を、サハデーヴァは南方を征服した。(九) 武器に巧みなナクラは西方を征服した。ダルマ王ユディシティラは、カーンダヴァプラスタに留まっていた。(一〇)

ジャナメージャヤはたずねた。

「バラモンよ、諸方の征服を詳細に語って欲しい。私は先祖の偉大な業績を聞いていて飽きることがないから。(一一)」

（第二十三章途中）

〔ジャナメージャヤの要請に応えて、ヴァイシャンパーヤナは、アルジュナたちが征服した土地について語る。ほとんど地名の列挙であるので、以下、第二十九章までを省略する。〕

(24) ラージャスーヤ祭（第三十章―第三十二章）

栄光に満ちた祭祀

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ダルマ王（ユディシティラ）は人々を守護し、真実を守り、敵たちを滅ぼしたので、国民は各自の仕事に勤しんだ。（一）彼は租税を適切に徴収し、法（ダルマ）に従って統治したから、雨神（または雲）は豊富に雨を降らせ、国土は繁栄した。（二）すべての事業、特に牧畜、農耕、商業はうまく行っていた。これらはすべて王の善行から生じたのである。（三）盗賊たちによっても、詐欺師たちによっても、王の寵臣たちによっても、お互いに対する虚言は聞かれることはなかった。（四）ユディシティラが法（ダルマ）に専念している時、雨が降らないことも降りすぎることもなく、病気や火事が増大することもまったくなかった。（五）諸王は好ましいことをするために、敬意を表するために、自発的な貢物をもたらすために、彼のもとにやって来た。別に他の理由から来たことはなかった。（六）法にかなった財物の到来により、彼の蓄財は増大して莫大なものとなり、幾百年経っても消費できないほどであった。（七）自分の宝庫と倉庫の規模を知って、ユディシティラ王は祭祀（ラージャスーヤ）を行なう決意をした。（八）すべての親しい人々は、個別に、または一緒に、彼に告げた。

「王よ、今や祭祀を行なうべき時です。なさって下さい。（九）」

彼らがこのように言っている時、ハリ（クリシュナ）が訪れた。古（いにしえ）の聖仙、ヴェーダの本質、知

者たちに見られる対象、堅固に立つ者たちの最上者、世界の本源と帰滅、過去と未来と現在の主、ケーシャヴァ、ケーシンを殺した者、すべてのヴリシュニ族の城壁、窮地において無畏を与える者、敵を殺す勇士。その人中の虎であるマーダヴァは、アーナカドゥンドゥビ（ヴァスデーヴァ）に軍隊の指揮を委ね、大軍に囲まれて合流し、ダルマ王に種々の多量な財物を贈った。（一〇—一三）その無限の多量な財物、無尽の宝の海を贈り、彼は戦車の音を響かせて、最高の都に入った。（一四）クリシュナの訪問により、バラタ族の都は歓喜した。太陽のない都が太陽の訪れにより、風のない都が風の訪れにより歓喜するように。（一五）

ユディシティラは喜んで彼に会い、作法通りにもてなして、安楽に座った彼に、「お元気か」とたずねた。（一六）ダウミヤとドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）をはじめとする祭官たちや、ビーマとアルジュナと双子をともなった、人中の雄牛である王は、クリシュナに告げた。（一七）

「クリシュナよ、あなたのおかげで全世界は私の支配下にある。そしてヴリシュニの長よ、あなたの好意により、私は多くの財物を獲得した。（一八）そこで私は、そのすべてを作法通りに、最高のバラモンと祭火のために利用したいのだ。デーヴァキーの息子マーダヴァよ。（一九）クリシュナよ、私はあなたと弟たちとともに祭祀を行ないたい。勇士よ、それを承認して下さい。（二〇）そこで勇士ゴーヴィンダよ、あなたは潔斎して下さい。クリシュナよ、あなたが祭祀を行なえば、私は罪を離れるであろうから。（二一）あるいは、私が弟たちと潔斎することを承認して欲しい。クリシュナよ、あなたに承認されたら、私は最高の祭祀を達成するであろう。（二二）」

クリシュナは彼の美質を細大漏らさず述べてから、彼に次のように答えた。
「王中の虎よ、あなたのみがふさわしい世界皇帝である。大祭を行ないなさい。あなたが祭祀を行なえば、我々はそれにより目的を成就するであろう。(二三) 私は最善を尽くすから、あなたは望んでいる祭祀を行ないなさい。私をその任に当たらせてくれ。私はあなたの言葉をすべて実行するであろう。(二四)」
ユディシティラは言った。
「クリシュナよ、私の願望はかなった。私の成功は確実である。あなたが望まれたように私のそばに居てくれるのだから。(二五)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
クリシュナに承認されて、ユディシティラは弟たちとともに、ラージャスーヤ祭を行なうために必要な準備をした。(二六) それから彼は、最高の戦士サハデーヴァと、すべての顧問官たちに命令した。(二七)
「この祭祀のためにバラモンに規定された祭祀の必需品と、すべての用具と、すべての吉祥なる品々と、ダウミヤに言われた祭祀に必須なものを、すぐに男たちに持って来させなさい。作法通りに、適切に。(二八―二九) インドラセーナとヴィショーカと、アルジュナの御者であるプールは、私によかれと願い、食物などを集める仕事についてくれ。(三〇) クルの最上者よ、バラモンたちのために、味と香りをそなえ、魅力的で喜びをもたらす、一切の望ましいこと

がなされるべきだ。(三一)」
その言葉が終わるやいなや、最高の戦士サハデーヴァは、「すべて仰せの通りにしました」と、偉大なダルマ王に報告した。(三二) それからドゥヴァイパーヤナ(ヴィヤーサ)が祭官たちを連れて来た。彼らはヴェーダを体現したかのような徳高いバラモンであった。(三三) ヴィヤーサは自らブラフマン(祈禱僧)の役目をした。ダナンジャヤ一族の雄牛であるスサーマンはサーマン(詠歌僧)を吟誦した。(三四) ヴェーダに通じたヤージュニャヴァルキヤは最高のアドゥヴァリユ(行祭僧)となった。ヴァスの息子パイラは、ダウミヤとともに、ホートリ(勧請僧)となった。(三五) そして彼らの弟子の群と息子たちは、すべてヴェーダとその補助学に通じていて、彼らの助手となった。(三六) 彼らはその聖なる日を寿ぐ句を唱えてから、教典に述べられた規定を念頭に置き、その盛大な神々の祭祀の準備を整えた。(三七) 職人たちは依頼されて、そこに諸々の建物を造った。それらは宝石で飾られ、広大で、神々の住居のようであった。(三八)
それから、クルの最上者である最高の王は、直ちに顧問のサハデーヴァに命じた。(三九)
「あなたは急いで、みなを招待するために、急使を派遣しなさい。」
彼は王の言葉を聞いて、使者たちを派遣した。(四〇)
「お前たちは諸国におけるすべてのバラモン、国王、平民(ヴィシュ)(実業者)、及び尊敬に価するシュードラ(従僕)たちを招待し、連れて来なさい」と言って。(四一)
彼らは彼の命により、すべての王を招待した。彼は更に他の使者たちを派遣した。(四二)

それからバラモンたちは、適切な時に、ラージャスーヤ祭の準備のために、クンティーの息子ユディシティラを潔斎に入らせた。(四三)徳性あるダルマ王ユディシティラは、潔斎して、幾千のバラモンに囲まれ、祭場へ行った。(四四)そして弟たち、親族の人々、友人、協力者、諸国からやって来た王族たち、大臣たちに囲まれ、その最高の王は法の体現者のようであった。(四五)すべての学術に通じ、ヴェーダとその補助学に通達したバラモンたちが、諸地域からそこに集まって来ていた。(四六)職人たちは、ダルマ王の命により、彼らとその従者たち各々のために、住居を幾千と造った。それらは多くの食物に満ち寝台をそなえ、すべての季節に適する美質をそなえていた。(四七)バラモンたちは大いにもてなされて、それらの家に住んだ。多くの物語を語らい、役者や舞踊家たち〔の演技〕を鑑賞しながら……。(四八)そして偉大なバラモンたちが喜び、食事をし、語らっている間に、彼らの大きな声が絶えず聞かれた。(四九)「与えらるべし、与えらるべし、食べなさい、食べなさい」というような会話がそこでは絶えず聞かれた。(五〇)ダルマ王は各々に百千の牛、寝台、黄金、女性を与えた。(五一)

このようにして、偉大なパーンダヴァ、天界におけるインドラのような地上に並ぶものなき勇士の祭祀は始まった。(五二)それからユディシティラ王は、パーンドゥの息子ナクラをハースティナプラに派遣した。それは、ビーシュマ、ドローナ、ドリタラーシトラ、ヴィドゥラ、クリパ、及びすべての兄弟（従兄弟）たちのうちで彼に忠誠ある人々を招待するためであった。(五三―五四)

（第三十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。──

勇猛なナクラはハースティナプラに行き、ビーシュマとドリタラーシトラを招待した。■

(一)祭祀を知る彼らは、ダルマ王の祭祀について聞くと、心から喜び、バラモンに先導されてそこに行った。(二)そして、その他の人々も幾百となく、喜び勇んで、例の集会場とダルマ王を見ようと、出かけて行った。(三)すべての王たちは、諸方から、莫大な種々の宝を持って、そこに集まって来た。(四)ドリタラーシトラ、ビーシュマ、大知者ヴィドゥラ、及び、ドゥルヨーダナをはじめとするすべての兄弟、師匠（ドローナ）を先導とするすべての王たちが歓待され、名を呼びあげられた。(五―六)ガーンダーラ国王スバラ、強力なシャクニ、アチャラ、ヴリシャカ、最高の戦士カルナ、リタ、マドラ国王シャリヤ、偉大な戦士バーフリーカ、(七)クル一族のソーマダッタ、ブーリ、ブーリシュラヴァス、シャラ、アシュヴァッターマン、クリパ、ドローナ、シンドゥ国王ジャヤドラタ、(八)ヤジュニャセーナとその息子（[illegible]）シャールヴァ国王、栄光あるプラーグジョーティシャの王バガダッタ及び海辺に住むすべての蛮族、山地の王たち、ブリハドバラ王、(九―一〇)プンドラのヴァースデーヴァ、ヴァンガ、カリンガ、アーカルシャ、クンタラ、ヴァーナヴァースヤ、アンドラ、(一一)ドラヴィダ、シンハラ、カシミールの王たち、威光に満ちたクンティボージャ、強力なスフマ、(一二)そしてその他すべてのバーフリーカ（民族名）の勇猛な王たち、ヴィラータと息子たち、偉大な戦

士マーチェーッラ。以上のような王たち、王子たち、様々な地方の主権者たちがいた。
(二三) 強力で好戦的なシシュパーラも、息子とともに、パーンダヴァの祭祀にやって来た。
(二四) ラーマ、アニルッダ、バブル、サーラナ、ガダ、プラデュムナ、サーンバ、強力なチャールデーシュナ、(二五) ウルムカ、ニシャタ、勇猛なプラデュムナの息子、及びその他すべてのヴリシュニの偉大な戦士たちが、こぞって訪れた。(二六) これらの人々、及びその他多くの中部地方の出の王たちが、パーンドゥの息子のラージャスーヤの大祭にやって来た。(二七)

ダルマ王の命により、多くの部屋のある、池と樹々に飾られた宿舎が、彼らに与えられた。(二八) そしてダルマ神の息子は、彼らに最高のもてなしをした。歓待された王たちは、それぞれ指定された宿舎に行った。(二九) それらはカイラーサの峰のように魅力的で、様々の品々で飾られ、見事に作られた高い白壁によってぐるりと囲まれていた。(三〇) それらは黄金の格子窓でおおわれ、その敷地は宝玉で装飾され、そこには容易に昇れる階段があり、立派な座席と備品がある。(三一) それらは花輪や花づなに満ちあふれ、最上の沈水香(アグル)の香りに満ち、ハンサ鳥のように純白で、一由旬(ヨージャナ)の遠くからよく見える。(三二) それらは混雑することなく、釣り合いのとれた入口を持ち、種々の美質をそなえ、その諸部分は多様な金属でおおわれていて、あたかもヒマーラヤの峰(サダスヤ)のようであった。(三三)

それから休息した王たちは、多くの祭官に囲まれた、惜しみなく報酬を払うダルマ王ユディシティラを見た。(三四) 彼の祭場(サダス)(小屋)は、諸王と偉大なバラモンたちで満ちあふれ、

神々に満ちた天界のように輝いていた。(三五)

(第三十一章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ユディシティラは出迎えて、祖父や師たちにおじぎをしてから、ビーシュマ、ドローナ、クリパ、ドローナの息子、ドゥルヨーダナとヴィヴィンシャティたちに言った。(一)
「あなた方はこの祭祀において、すべからく私に好意をかけて下さい。私とここにある財物は、あなた方のものです。あなた方は拘束されることなく、気の向くままに、私に好意を抱いて下されば幸せです。(二)」

潔斎したパーンダヴァの長子は、彼らすべてに以上のように告げてから、直ちに、適切に彼らをそれぞれの職務につかせた。(三) 彼はドゥフシャーサナを種々の食物の係りに任じた。アシュヴァッターマンに、バラモンたちを世話することを命じた。(四) またサンジャヤを、諸王を歓待する係りに任じた。思慮深いビーシュマとドローナに、すでになしたこととまだやってないことの吟味を委任した。(五) それから王はクリパを、金銭と黄金と宝石を管理する係りと、報酬を与える係りに任じた。同様にして、その他の人中の虎たちを、各々の職務につかせた。(六)

バーフリーカ、ドリタラーシトラ、ソーマダッタ、ジャヤドラタは、ナクラに導かれて、そこで主人のように楽しんでいた。(七) すべての法(ダルマ)を知る、侍従のヴィドゥラは出納係りで

あった。一方、ドゥルヨーダナはすべての贈物を受け入れ〔る係りであった〕。（八）すべての人々は、最高の成果を享受したいと願い、また集会場とパーンドゥの息子ダルマ王を見たいと望んで集まって来た。（九）誰も千〔金〕以下の贈物を持って来なかった。彼らはそこで、多くの宝物によってダルマ王を祝福した。（一〇）王たちは、「クルの王（ユディシティラ）は私の宝物の贈物により祭祀を達成することができるのでは」と考え、競って財物を贈った。（一一）

最上の宮殿と高楼をともない、軍隊に囲まれた諸々の邸宅、世界の王たちの宮殿と、バラモンたちの住居。（一二）極彩色の、宝石をちりばめた、最高に豪華な、天宮のように造られた諸々の邸宅。（一三）この上ない栄光と繁栄にめぐまれた、集合した王たち。偉大なユディシティラの祭場（サダス）はこれらにより輝いていた。（一四）ユディシティラはその栄光にかけてヴァルナ神に匹敵し、六種の火をそなえ報酬にめぐまれた祭祀を行なった。そして、豪勢に一切の望みをかなえて、すべての人々を満足させた。（一五）

その集会は、御飯や多様な食物に満ち、それらを食べる人々に囲まれ、宝物の贈物をするにふさわしい場所であった。（一六）聖句（マントラ）の発声法に通じた大仙たちが、供物、バター、護摩（ホーマ）、献供（アーフティ）によりくりひろげるその祭祀において、神々は満足した。（一七）神々と同様に、バラモンたちや一切の種姓（ヴァルナ）の人々も、報酬と食物と莫大な財物により、その祭祀において、喜び満足した。（一八）

（第三十二章）

(25) 引出物の授与（第三十三章―第三十六章）

クリシュナに引出物が贈られる

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

灌頂(かんじょう)を行なうべき日に、バラモンたちは諸王とともに、ヴェーディ祭壇の内部に入った。敬意を払うべく、ナーラダをはじめとする大仙たちは、王仙（王族出身の聖仙）たちとともに、その祭壇の内部に座して輝いていた。（一―二）それはさながら、神々と神仙（神的な聖仙）が梵天の宮殿に集まったかのようであった。無量の威厳に満ちた彼らは、祭式の合間を利用して議論をした。（三）

「これはその通りである。そうではない。それはこのようであって、別様ではない。」

多くの人々はお互いに論争しながらそのように言った。（四）論書に定められた論理によって、ある人々は、小を大とし、大を小とした。（五）ある知者たちは、他の人々によって結論されたことを〔容易に〕はねつけた。ちょうど鷲が空にいる獲物を蹴散らすように。（六）また、ある誓戒を厳守する、一切のヴェーダを知る人々の最上者たちは、法(ダルマ)と実利(アルタ)をともなう物語をして楽しんだ。（七）そのヴェーディ祭壇は、ヴェーダに通達した神々とバラモンと大仙たちに満ち、星々に満ちた曇りない空のように輝いていた。（八）ユディシティラの住居のその祭壇の中には、シュードラ（僕従）や誓戒を守らない者は、誰も近づかなかった。（九）

ナーラダは栄光ある英邁なダルマ王（ユディシティラ）の、祭祀の執行から生じた繁栄を見て満足した。（一〇）それから聖者ナーラダは、すべての王族の集会を見て考えこんだ。（一一）そして彼は、梵天の住居において行なわれた、あの〔神々の〕部分的化身についての昔話を思い出した。（一二）その集会が神々の集会であると知り、ナーラダは蓮花の眼のハリ（ヴィシュヌ＝クリシュナ）を心で想起した。（一三）

神々の敵の破壊者、敵の都市の征服者である、その英邁なナーラーヤナ（ヴィシュヌ）神は、誓約を守るために、〔クリシュナとして〕王族に生まれた。（一四）創造者たる彼は、かつて自ら神々に命じた。

「あなた方はお互いに殺し合った後、再びこの諸世界に到達するであろう。（一五）」

恵み深い世界の主、尊いナーラーヤナは、すべての神々にこのように命じてから、地上においてヤドゥの家に生まれた。家系を支える人々のうちの最上者である彼は、アンダカとヴリシュニの家系において、最高の栄光によって輝いた。星の王（月）が星宿の間で輝くように。（一六―一七）インドラなどのすべての神々は彼の腕力を敬う。その敵を制するハリが人間に化身している。（一八）ああ、自存者(スヴァヤンブー)が自ら、大きくなり力をそなえた王族を再び奪い去るのか。（一九）

法(ダルマ)を知るナーラダは、このような物思いにふけった。彼はハリすなわちナーラーヤナ神は、祭祀により崇拝されるべき主であると知っていた。（二〇）法を知る人々の最上者である、叡知に満ちた彼は、英邁なダルマ王の盛大な祭祀に、尊敬の念からとどまっていた。（二一）

それからビーシュマは、ダルマ王ユディシティラに告げた。

「王たちにふさわしく引出物を贈りなさい。(二二) ユディシティラよ、師匠と祭官と縁者とヴェーダ修得者と親しい人と王との六人は、引出物にふさわしい人々であると言われる。(二三) 彼らが訪れて一年間滞在したら、引出物にふさわしいと言われる。ここにいる彼らは、長期の間、我々のもとにとどまっている。(二四) 王よ、彼ら一人一人に引出物を贈りなさい。まず、彼らのうちで最もふさわしい者に引出物を贈りなさい。(二五)」

ユディシティラは言った。

「クル族の英雄である祖父よ、どなたに引出物をさし上げたらよいとお考えですか。おっしゃって下さい。(二六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そこでシャンタヌの息子ビーシュマは決意して、ヴリシュニ族のクリシュナが地上で最も引出物を受けるにふさわしいと考えた。(二七)

「というのは、彼は集まった人々の間で、威光と力と勇武により、燃えるかのように輝いているから。星々の間で太陽が輝くように。(二八) 実にこの我々の祭場(サダス)は、クリシュナにより輝かされ、喜ばされている。太陽のない場所が太陽により、風のない場所が風により輝かされ、喜ばされるように。(二九)」

ビーシュマの許しを得て、威光にあふれたサハデーヴァは、作法通りに、最高の引出物を

クリシュナに贈った。(三〇) クリシュナは教典に示された作法によってそれを受け取った。しかしシシュパーラは、ヴァースデーヴァ(クリシュナ)に対するそのような供応に我慢できなかった。(三一) その強力なチェーディ国王は、その集会において、ビーシュマとダルマ王を非難し、ヴァースデーヴァを侮辱した。(三二)

(第三十三章)

シシュパーラの妨害

シシュパーラは言った。

「クル族の王よ、偉大な王たちがいる中で、このクリシュナがあたかも王であるかのように、王のための引出物を受けることはふさわしくない。(一) パーンダヴァよ、恣意的にクリシュナに敬意を払ったことは、偉大なパーンダヴァにふさわしいふるまいではない。(二) あなたたちは子供でわからないが、法(ダルマ)というものは微妙である。パーンダヴァたちよ。この不見識な〔ガンガー〕川の息子(ビーシュマ)は法を逸脱した。(三) というのは、もしビーシュマが、あなたのように法を知りながら贔屓からそうしたのなら、彼は一層、立派な人々の間で軽蔑されるだろう。(四) どうして王でもないクリシュナが、一切の王たちの中で、あなた方に尊敬され、引出物〔を最初に受ける〕にふさわしいか。(五) バラタの雄牛よ、またもしクリシュナが長老であると考えるなら、老いたヴァスデーヴァ(クリシュナの父)がいるのに、どうしてその息子がそれにふさわしいか。(六) またもしクリシュナが友情を抱き好意的であるというなら、

ドルパダがいるのに、どうしてクリシュナが供応に価するのか。(七) クルの雄牛よ、またもしクリシュナを師匠であると考えるなら、ドローナがいるのに、どうしてクリシュナを敬うのか。(八) クルの王よ、またもしクリシュナを祭官であると考えるなら、ドゥヴァイパーヤナがいるのに、どうしてあなたはクリシュナを尊敬するのか。(九) このクリシュナは祭官でも師匠でも王でもない。クルの最上者よ、他でもない、贔屓により彼を敬ったのではないか。(一〇) もしあなた方がどうしてもクリシュナを敬うなら、どうして王たちがここに招かれる必要があるのか。侮辱するためか、バーラタよ。(一一)

我々はみな、恐怖から偉大なクンティーの息子に貢物をさし出すのではない。貪欲からでもなく、懐柔するためでもない。(一二) 彼が法(ダルマ)に従い、皇帝となることを望んでいるので、我々は彼に貢物をさし出すのだ。ところがその彼が我々のことを考慮しないとは。(一三) この王の集会において、資格のないクリシュナに引出物を与えて敬うとは、侮辱以外の何ものでもない。(一四) ダルマの息子(ユディシティラ)の『法を性とする』という名声は、突然失われた。というのは、誰が法から逸脱した者にこのような供応をするであろうか。このヴリシュニ族に生まれた者は、かつて国王を殺したのだから。(一五) 今や、法を性とすることは、ユディシティラから失われ、卑小さが地歩を占めた。クリシュナに引出物を与えるのだから。(一六)

[クリシュナよ、] もしクンティーの息子たちが恐れ、判断力がなく、哀れであるなら、あなたが供応に価するかどうか、あなたの方も悟るべきだ。(一七) またクリシュナよ、判断力

のない彼らに与えられた供応に対し、どうしてふさわしくないあなたが承諾したのか。(一八) しかしあなたは、自分にふさわしくないこの供応を高く評価している。供物のおこぼれを得て、犬が人のいない所で食べようとするように。(一九) 王中の王たちが侮辱を受けるだけではなく、クルの人々は明らかに、あなた自身をあざむいているのだ。クリシュナ。(二〇) 不能者に対する結婚や、盲人に姿を見せることと同じだ。王でもないあなたを王であるかのように供応するということは。クリシュナよ。(二一) ユディシティラ王やビーシュマがどのようであるか、クリシュナがどのようであるか、すべてありのままに見た。(二二)」

シシュパーラは彼らにそう言ってから、最高の座から立ち上がり、王たちとともに、その祭場(サダス)から出て行こうとした。(二三)

(第三十四章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その時、ユディシティラ王は急いでシシュパーラに近づいて、なだめ、穏やかに告げた。(一)

「王よ、あなたがそのように言われたのは正しくない。非常に法(ダルマ)にもとることであり、的外れな暴言である。(二) というのは、王よ、シャンタヌの息子ビーシュマは、決して最高の法をわきまえないことはないから。だから誤って彼を悪く言ってはいけない。(三) ここにいるあなたよりも長老の多くの王たちを見なさい。彼らはクリシュナに引出物を贈ることを承

認している。あなたも同じように辛抱しなさい。(四) ビーシュマは真にクリシュナをよく知っている。チェーディ国王よ、あなたはクル族の人々がクリシュナを知るほど、彼のことを知らない。(五)」

ビーシュマは言った。

「世界中で最も長老のクリシュナに引出物を贈ることを認めない者には、礼儀は必要ないし、なだめる必要もない。(六) 最高の戦士である王族(クシャトリヤ)は、戦闘において王族を征服し、支配下に置いてから解放すれば、その者の目上(グル)である。(七) そしてこの諸王の集会において、戦いに際しサートヴァティーの息子(クリシュナ)の威光によりうち破られない王を、私は見出せない。(八) この不滅のクリシュナは、我々にとって最も敬われるべきであるのみならず、三界の者たちにとっても敬われるべきである。(九) というのは、クリシュナは戦いにおいて、多くの王族の雄牛たちをうち破った。そして、全世界はすべてクリシュナにおいて確立する。(一〇) それ故、長老たちがいるにもかかわらず、我らは他の人々でなくクリシュナに敬意を表したのである。あなたはこのように言うべきではなかった。このように考えてはいけない。(一一) 王よ、私は知識の点で長老の多くの人々に仕えたが、そういう立派な人々が集まり、徳高いクリシュナの諸々の美質を語って高く評価しているのを私は聞いた。(一二) そして人々が、その聡明な人の誕生以来の諸々の業績を数多く語るのを、私は幾度も聞いた。(一三) チェーディ国王よ、我々は恣意的に、あるいは友好関係を前提として、または利益のために、クリシュナを敬うのでは決してない。この地上で立派な人々に敬われる、地上の幸福をもたらす

彼に対し、その名声と勇武と勝利をよく知って、我々は敬意を払うのである。(一四―一五) ここで我々は実に非常に若い者でも審査しないことはなかった。クリシュナはその諸々の美質にかけて、長老たちを凌駕して、最も敬われるべきであるとされたのである。(一六) 彼はバラモンたちと比べて知識の点で長老であり、王族たちと比べてより強力である。クリシュナが供応さるべきことに関し、この二つの理由が確定している。(一七) 世界の諸王のうちで、クリシュナ以上にヴェーダとその補助学を知り無量の力を持つ者はいない。(一八)

クリシュナには、気前のよさ、巧妙さ、博識、勇武、廉恥、名声、最高の知性、謙譲、栄光、志操堅固、満足、繁栄(などの美質)が常にそなわっている。(一九) すべての美質をそなえた師匠、父、目上(グル)である彼は、あらゆる時に敬われると、あなた方すべてが認めるべきである。(二〇) 祭官、目上、婿の適格者、ヴェーダ修得者、王、友人――以上すべてがクリシュナにおいてそなわっている。それ故、彼は敬われるのだ。(二一) 実にクリシュナこそが諸世界の生成と帰滅(の原因)である。実にクリシュナのために、この万物が捧げられる。(二二) 彼は非顕現の根本原質(プラクリティ)であり、永遠の作者であり、一切万物より高いものであるから、彼は最も長老である。(二三) 根源的思惟機能(ブッディ)、思考器官(マナス)、大なるもの、風、火、水、空、地、及び四種の出生(胎生、卵生、湿生、芽生)、これらすべてはクリシュナに依存する。(二四) 太陽、月、星宿、遊星、方角と中間の方角、これらすべてはクリシュナに依存する。(二五) このシシュパーラという男は愚かで、クリシュナが遍在し常住であることを知らない。だからこのように言うのだ。(二六) 実に最高の法(ダルマ)を考察する聡明な人が、法に従って正しく見るのであるが、この

チェーディ国王はそのようではない。(二七) 老若の偉大な王たちのうちで、何人(なんぴと)がクリシュナをふさわしいと思わないだろうか。(二八) もしシシュパーラがこの供応を間違っていると言い張るなら、その間違った供応に対して、ふさわしく行動すべきである。(二九)」

（第三十五章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そのように言って、誉れ高いビーシュマは話すのをやめた。サハデーヴァはそれを承けて、含蓄のある言葉を述べた。(一)

「王たちよ、あなた方のうちで、私が計り知れぬ勇猛さを持つクリシュナを敬うことに耐えられない者がいたら、その者は私の挑戦に正しく応えなければならぬ。私が『いかなる強力な者でも、その頭に足をのせる』と告げる時……。(二―三) しかし賢明な王たちなら、誰でも、彼が師匠、父、目上であり、あらゆる時に敬われるべきであると認めるべきだ。(四)」

知性あり立派な人々、誇りある強力な王たちの間で、彼が足を示した時、彼らのうちの誰一人として声を発する者はいなかった。(五) すると、サハデーヴァの頭上に花の雨が降った。話し手の姿は見えなかったが、「善いかな、善いかな」という声が聞えた。(六)

未来と過去を語るナーラダ、一切の疑惑を解決し、すべての世界を知るナーラダは、彼の黒い鹿皮を揺った。(七)

そこに招待されて来ていた、スニータ(シシュパーラ)に従うすべての人々は、怒って顔色を変えていた。(八) そこで王たちは、失望から、またうぬぼれから、ユディシティラの灌頂とクリシュナに対する引出物について文句を言った。(九) 友たちに制止されている彼らの姿は、肉をとることを制止されて吠えている獅子たちの姿のように見えた。(一〇) その時クリシュナは、大軍を擁する無限の王たちの海が、戦いのための約定を結んでいるのを知った。(一一)

さて、人間のうちの神であるサハデーヴァは、特に供応に価するバラモンと王族をもてなしてから、その儀式を終了した。(一二) クリシュナが接待された時、敵を苦しめるスニータ(シシュパーラ)は、怒りから真赤な眼をして、王たちに告げた。(一三)

「もし御承知いただけるなら、私は今あなた方の軍司令官になろうか。我々は準備して、集結したヴリシュニとパーンダヴァたちと戦おう。(一四)」

チェーディ国の雄牛はそう言って、すべての王たちを扇動してから、王たちとともに、祭祀を妨害しようと企てた。(一五)

（第三十六章）

(26)　シシュパーラ殺し（第三十七章—第四十二章）

シシュパーラの出生とその暴言

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

海のようなすべての王の群が、怒りにかられて揺れ動いているのを見て、ユディシティラは、最上の知者である長老、クルの祖父であるビーシュマにたずねた。敵を殺す威光に満ちたインドラが、ブリハスパティにたずねるように。(一―二)

「この海のような諸王の大群は、怒りにかられて揺れ動いています。この場合、どのように対処したらよいか、おっしゃって下さい。お祖父様。(三)決して祭祀が妨害されないように、国民が幸福になれるように、それを今、すべておっしゃって下さい。(四)」

法(ダルマ)を知るユディシティラがこのようにたずねた時、クルの祖父ビーシュマは次のように言った。(五)

「クルの虎よ、恐れることはない。犬が獅子を殺すことができるか。私は前もって容易で適切な道を選択した。(六)これらの王たちは、ちょうど獅子が眠った時、犬たちが集まって、みなして吠えているようなものだ。(七)わが子よ、彼らは眠っているヴリシュニの獅子の前に立ち、獅子のそばにいる怒った犬たちのように吠えている。(八)眠れる獅子のようなクリシュナが目覚めないうちは、獅子のような人、チェーディの雄牛(シシュパーラ)が、彼らを獅子のようにするのだ。(九)最高の王よ、愚かなシシュパーラは、すべての王を残らずヤマ(閻魔)の

住居に導こうとしている。(一〇)クリシュナは必ずやシシュパーラに属する威光を再び自分のものとすることを望む。(一一)最高の知者よ、このチェーディ国王と、すべての王たちの知性は失われた。(一二)というのは、この人中の虎(クリシュナ)が奪おうと望む時はいつでも、その者の知性は失われるのだ。チェーディ国王の場合のように。(一三)三界において、クリシュナは四種の生物すべての本源であり帰滅である。ユディシティラよ。(一四)」

チェーディ国王はビーシュマの言葉を聞くと、彼に乱暴な言葉を述べた。(一五)

(第三十七章)

シシュパーラは言った。

「老いた一族の面汚しであるあなたは、多くのこけ威しにより、すべての王を恐れさせて、どうして恥じないのか。(一)第三の性(中性)のようなあなたが、法(ダルマ)に外れたことを言うのはもっともである。あなたは全く、すべてのクルの最上者であるよ。(二)舟が他の舟につながれるように、盲人が盲人に従うように、ビーシュマよ、クルの人々はあなたに従っている。(三)あなたはプータナー殺しなどのクリシュナの業績をとりたてて称えることにより、我々の心を再び落胆させる。(四)ビーシュマよ、尊大で愚かなあなたがクリシュナを讃えようと望む時、どうしてあなたの舌は百に裂けないのか。(五)ビーシュマよ、あなたは知識の点で長老でありながら、どうして最も愚かな人々によっても非難されるあの牛飼(クリシュナ)を讃え

ようと望むのか。(六)たとい彼が幼児期に雌鳥(羅刹女プータナー)を殺したとて、どうしてすばらしいのか。ビーシュマよ、あの馬と雄牛(ケーシンとアリシタ。いずれもクリシュナに殺された悪魔)は、戦闘に長けた者たちではない。(七)ビーシュマよ、たとい彼が生きていない木材である車を蹴とばしたとて(幼児の時、車を蹴とばしたエピソード)、どうして奇蹟が行なわれたというのか。(八)ビーシュマよ、たとい彼が蟻塚ほどの大きさのゴーヴァルダナ山を七日間持ち続けたとて、私はそれがすばらしいこととは思わない。(九)ビーシュマよ、彼が山の頂で遊んでいるうち、多くの食物を食べたとあなたから聞いて、人々は最高に驚嘆したが……。(一〇)法(ダルマ)を知る人よ、彼は強力なカンサの食物を食べたが、その彼がカンサを殺したとは、大いに驚くべきことではないか。(一一)ビーシュマよ、きっとあなたは立派な人々が語っていることを聞いたことがないのだ。私はその言葉をあなたに話してやろう。法を知らぬ者よ、クル一族のうちの最低の男よ。(一二)

婦人、牛、バラモン、食物の供給者、庇護を求めて来た人、以上の者に対して武器を振り下ろすべきではない。(一三)立派な法を知る善人たちは世間において常にそのように述べる。ビーシュマよ、あなたの場合はすべてが逆である。(一四)クルの最上者よ、あなたは何も知らぬかのように私に語る。クリシュナは知識の点で秀で、長老で、偉大であると讃えつつ。だがビーシュマよ、どうして牛殺しや女殺しが称讃に値しようか。(一五)『彼は最高の知者であり、彼は世界の主である』というあなたの言葉に応じ、もしクリシュナが『すべてその通りである』と承認したとしても、すべては確実に偽りである。(一六)〔教訓の〕詩句はそれを唱える人を教導しない。いくら多く唱えても。万物は本性に帰する。プーリンガ鳥のように(プーリンガ鳥は常に「無謀なことをしてはいけない」と説きながら、自分は獅子の歯の間の肉をついばむとされる。二・四一参照。)(一七)確かにあなたの本性は最低である。(一八)彼らはクリシュナをこの上なく敬うのだから。そして、彼らはあなたを教師と仰ぐのだから。法(ダルマ)を説きながら法を知らず、立派な人々の道から外れたあなたを……。(一九)というのはビーシュマよ、法を守る人々のうちで、自己を知る最高の知者が、どうして法に関してあなたのようにふるまうだろうか。(二〇)法を知る者よ、知者と自認しているあなたは、どうして他の男を愛しているアンバーという少女を掠奪したのか(一・九六参照)。(二一)ビーシュマよ、あなたの弟のヴィチトラヴィーリヤ王は、立派な人々の行動に従い、あなたが奪った少女を求めなかった。(二二)そしてまた、知者と自認するあなたの見ている前で、彼の二人の妻に〔、〕他の男(ヴィヤーサ)により息子たちが生まれた。立派な人々の践(ふ)んだ道に従って〔ということで〕。(二三)ビーシュマよ、あなたには法は存在しない。あなたの梵行(不犯の誓い)は空しい。あなたは疑いもなく、迷妄か不能のせいでそれを守っているのだ。(二四)法を知る者よ、私はあなたの繁栄をどこにも見ない。というのは、あなたは次のように法を説いた長老たちを敬わないから。(二五)『献供、布施、学習、多くの謝礼をともなう祭祀。これらすべては、息子の十六分の一にも値しない。(二六)』ビーシュマよ、多くの誓戒や断食によりもたらされる成果、それはすべて、息子のない人にとっては、疑いもなく空しいものだ。(二七)息子のいない老人であるあなたは、偽りの法を説くことにより、あのハンサ鳥(鷲鳥)のように、今に親族によって死ぬこととなろう。(二八)

以前、ある識者たちは次のように語った。ビーシュマよ聞きなさい。私はそれをあなたに正しく話すであろう。(二九) かつて、ある年老いたハンサ鳥が海岸に住んでいたという。彼は法(ダルマ)を説きつつも法に反して行動していた。彼は鳥たちに説教した。(三〇)
『法を実践せよ。非法を行なってはならぬ。』
というその説法者の言葉を、鳥たちはいつも聞いていた。ビーシュマよ。(三一) 他の鳥たちは、法を聞くために、海上を飛び、彼に餌を運んで来た、ということである。(三二) 鳥たちは、卵をすべて彼のもとに預け、海上を楽しく飛びまわっていた。(三三) ところが悪者のハンサは、抜け目なく、油断したすべての鳥たちの卵を食べてしまった。(三四) 卵が減少したので、ある非常に賢い鳥が疑って、ある時彼を見張っていた。(三五) そしてその鳥は、ハンサの犯罪を見て非常に悩み、すべての鳥たちに話した。(三六) それから鳥たちは集まり、直接に見て、偽善者のハンサを殺した。(三七)

ビーシュマよ、鳥たちがそのハンサ鳥を殺したように、王たちは怒って、ハンサのようにふるまうあなたを殺すであろう。(三八)

昔話(プラーナ)を知る人々はこれに関し〔教訓の〕詩句を唱える。ビーシュマよ、私はそれをあなたにまさに説くであろう。(三九)

鳥よ、内心は他にあるのに、汝は偽善的に語る。卵を食べるというあなたの不浄の行為は、その言葉に勝る(矛盾する)。(四〇)」

(第三十八章)

シシュパーラは言った。

「私は強力なジャラーサンダ王を高く評価する。彼は戦闘において、『あれは奴隷だ』と言って、クリシュナと戦おうとしなかった。(一) ジャラーサンダを殺した時、クリシュナとビーマセーナとアルジュナがなした行為を、誰がよいことと考えるだろうか。(二) クリシュナはヴェーダ学者に変装し、門を通らずに入りこみ、聡明なジャラーサンダの栄光を見た。(三) その徳性ある王は、自分はバラモンに友好的であると考え、その邪悪な者に、最初に洗足の水を与えようとした(原文疑問)。(四) ジャラーサンダはクリシュナとビーマとアルジュナに、『食事をなさい』と告げたが、クリシュナは仇で返した。(五) 愚か者よ、もしあなたの考えるように、これが世界の創造者なら、どうして彼は自分のことをまさにブラーフマナ(「婆羅門」、「梵天(創造神)に関する者」)と考えないのか。(六) ところで私にはこれは不思議なことだ。このパーンダヴァたちが、あなたによって、善き人々の道から引きずり下されて、それがよいと考えていることは。(七) あるいはそれは不思議なことでないのかも知れない。老いた女々しいあなたは、すべてのことに関し、彼らの教導者であるから。(八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

以上のような彼の非常に乱暴な言葉を聞いて、最高に強力な、栄光あるビーマセーナは怒った。(九) 彼の蓮花にも似た、生来切れ長で大きな赤い両眼は、怒りでいっそう赤くなった。

〔二〇〕すべての王たちは、彼が額に三筋のしわを寄せ、眉をひそめるのを見た。それはちょうど、三峰を流れるガンガー（ガンジス）が三途に分かれているかのようであった。〔二一〕彼らは怒りから歯をくいしばった彼の顔を見た。それはちょうど、宇宙紀（ユガ）の終わりに、一切万物を燃やそうとするカーラ（時間〔破壊神〕）の顔のようであった。〔二二〕ところが、彼が決意も堅く、激しい勢いで飛びかかろうとした時、強力なビーシュマは彼を止めた。イーシュヴァラ（シヴァ）がマハーセーナ（スカンダ）を止めるように。〔二三〕目上のビーシュマはビーマを止め、種々の言葉でなだめたところ、ビーマの怒りは鎮まった。〔二四〕その勇士は、ビーシュマの言葉に背くことはなかった。海が雨季の終わりに隆起しても、海岸を越えることがないように。〔二五〕しかし勇士シシュパーラは、ビーマセーナがいきり立っても、本来の雄々しさを保ち、ふるえることはなかった。〔二六〕その勇士が幾度も激しく飛び上がっても、彼は相手をものともしなかった。獅子が小動物に対するように。〔二七〕栄光あるチェーディ国王は、恐ろしく勇猛なビーマセーナが怒り狂うのを見ると、笑って言った。〔二八〕

「ビーシュマよ、彼を放せ。王たちは彼が私の威光の火で燃やされるのを見るだろう。蝗（いなご）が火で燃やされるように。〔二九〕」

最高の知者であるビーシュマは、チェーディ国王の言葉を聞くと、ビーマセーナに告げた。〔三〇〕

（第三十九章）

ビーシュマは語った。――

彼（シシュパーラ）は三つの眼と四本の腕を持って、チェーディの王家に生まれたが、驢馬のような鳴き声で叫び、いなないた。〔一〕そこで彼の父母と親族は、彼の異様な姿を見てふるえ上がり、彼を捨てる決心をした。〔二〕王が妻や大臣や司祭たちとともに思い悩んでいると、姿の見えない者が次のような言葉を述べた。〔三〕

「王よ、ここに生まれた汝の息子は、栄光あり強力である。それ故、彼を恐れる必要はない。注意して幼児（シシュ）を守れ（パーヒ）。〔四〕汝は彼の死神（死をもたらす者）ではない。彼の死ぬ時はまだ近づいていない。彼の死神、彼を武器で殺す者はすでに生まれている。王よ。〔五〕」

この言葉を聞いて、母親は息子への愛に苦しみ、姿の見えない者に言った。〔六〕

「私の息子についてそう告げられた方に、手を合わせて敬礼いたします。もっとおっしゃって下さい。〔七〕誰が息子の死神となるか、お聞きしたいのです。」

するとその姿の見えない者は再び告げた。〔八〕

「その子がその者の膝に抱かれた時、その子の余った二本の腕が、五つの頭の蛇たちのように、地面に落ちるならば、そしてまた、この子の額にある第三の眼が、その者を見た時に消失するならば、その者が彼の死神となるであろう。〔九―一〇〕」

彼が三眼で四本の腕を持つという噂を聞いて、地上のすべての王たちは見たいと望んで集まって来た。〔一一〕王はやって来た彼らをふさわしくもてなし、一人一人の王の膝に息子をのせた。〔一二〕このようにして幼児は、順次に幾千の王たち一人一人の膝にのせられたが、

予言通りになることはなかった。（一三）
そのうち、ヤドゥ族のサンカルシャナ（ラーマ）とクリシュナが、父の妹であるヤドゥ族出身の王妃に会いに来た。（一四）ラーマとクリシュナは、作法通りに、また目上から順に、諸王に挨拶し、無病息災かどうかたずねてから席に着いた。（一五）二人の勇士は歓迎された。王妃は大そう喜び、自らクリシュナの膝に息子をのせた。（一六）その子が膝にのせられるやいなや、余分な二本の腕が落ち、額にある眼は消失した。（一七）
それを見ると、王妃は嘆いてふるえ、クリシュナに懇願した。
「勇士クリシュナよ、恐怖に苦しむ私の願いをかなえて下さい。（一八）あなたは悩む者たちの救いであり、恐れる者たちの恐怖を取り除くから。」
クリシュナは父の妹に、「恐れることはありません」と告げた。（一九）
「叔母上、どのような願いをかなえたらよいでしょうか。何をしたらよいのでしょうか。可能であろうとなかろうと、あなたのお言葉通りにします。（二〇）」
そのように言われて、彼女はヤドゥの勇士クリシュナに頼んだ。
「強力な人よ、シシュパーラが罪を犯したら、それを堪忍してやって下さい。（二一）」
クリシュナは答えた。
「叔母上、私はあなたの息子の百の罪に堪え忍びます。たといそれが死に値するものでも……。悲しまれてはなりませぬ。（二二）」

ビーシュマは（以上のように語ってから）言った。
「勇士よ、このようにして愚かな悪王シシュパーラは、クリシュナの恩寵をよいことにして、お前に挑戦するのだ。（二三）」
（第四十章）

ビーシュマは言った。——
「しかし、クリシュナに挑戦するのは、チェーディ国王自身の意志ではない。きっとそれは、世界の主であるクリシュナの決定したことなのだ。（一）というのは、ビーマセーナよ、今この地上においていかなる王が私を侮辱するだろうか。この一族の面汚しのように。彼は運命に支配されているのだ。（二）勇士よ、確かに彼はあのハリ（ヴィシュヌ神）の威光の一部である。誉れ高いハリは再びそれを回収しようと望んでいる。（三）というのは、クル族の虎よ、この愚かなチェーディ国王は、我々すべてを考慮することなく、虎のように大声で吼えている。（四）」
ヴァイシャンパーヤナは語った。——
その時チェーディ国王は、そのビーシュマの言葉に我慢できず、怒ってビーシュマに言い返した。（五）
シシュパーラは言った。
「ビーシュマよ、クリシュナの実力が我々の敵のものであったらよい。あなたは吟誦詩人の

ようにいつも立ち上がって彼を称讃するが……。(六) ビーシュマよ、そんなにいつも他の人々を称讃したいのなら、クリシュナを讃えるのをやめて、王たちを讃えよ。(七) ここにいるダラダ・バーフリーカを讃えよ。誕生の時に大地を裂いたこの最高の王を……。(八) ここにいるヴァンガとアンガの統治者、力において千眼者(インドラ)に等しい、強弓を引くカルナを讃えよ。ビーシュマ。(九) ここにいる偉大な戦士である父と息子、ドローナとその息子(アシュヴァッターマン)をよく讃えよ。ビーシュマよ、この二人の最高のバラモンは常に讃えられるべきだ。(一〇) ビーシュマよ、その二人のうちの一人でも、怒ったら、この動不動の存在を含む地上を全滅させることができる、と私は考える。(一一) というのは、戦にかけてドローナやアシユヴァッターマンに匹敵する王を私は知らない。ビーシュマよ。しかしあなたはこの二人を讃えようとしない。(一二) また、シャリヤなどの王をどうして讃えないのか。ビーシュマよ。もしいつも称讃したいと考えているなら。(一三)

ところで王よ、かつて法(ダルマ)を説く長老たちが説いたことをあなたが聞かないなら、私は何をすることができるか。(一四) 自己を誇ること。自己を敬うこと。他人を誇ること。他人を称讃すること。以上の四種の行為は、貴人(アーリヤ)の行なわぬことである。(一五)

ビーシュマよ、もし迷妄の故に、愛情をこめて、称讃に値しないクリシュナを常に讃えるなら、誰もあなたに同意しないだろう。(一六) どうして単なる友情から、あなたはこのボージャ族の従者、牛の番人である悪党が全世界の主であるとするのか。(一七) あるいは、あなたのこの信愛が本性に帰すものではないなら、私が前に語ったブーリンガ鳥の例(二・三八参照)と

同様だ。(一八)

ビーシュマよ、ヒマーラヤの向こう側の斜面に、ブーリンガ鳥が住んでいる。その鳥は常にやることと裏腹の言葉を語っている。(一九) その鳥はいつも、『無謀なことをしてはいけない』と言っているという。しかも、自分自身は非常に無謀なことをして、気がついていない。(二〇) というのは、ビーシュマよ、その愚かな鳥は、食べている獅子の口から、歯の間にぶらさがっている肉を食べている。(二一) 疑いなく、この鳥の生命は獅子の意向にかかっている。法(ダルマ)を知らぬ者よ、あなたも常にその鳥と同じように語る。(二二) ビーシュマよ、疑いなく、あなたの生命は優れた王たちの意向にかかっている。あなたのように世人に嫌われる行為をするものは他にいないから。(二三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ビーシュマはチェーディ国王の辛辣な言葉を聞くと、チェーディ国王の聞いている前で次のように告げた。(二四)

「私の生命はこれらの王たちの意向にかかっているというが、ところが私は、これらの王を草のように取るに足らぬものと考えている。(二五)」

ビーシュマにこのように言われた時、怒った王たちは、ある者たちは身ぶるいし、ある者たちはビーシュマを非難した。(二六) ある勇士たちは、ビーシュマの言葉を聞いて言った。

「この老いた悪党、尊大なビーシュマは、許しがたい。(二七) 怒ったすべての王は集まって、

この邪なビーシュマを犠牲獣のように殺せ。あるいは、乾草の火で彼を燃やせ。(二八)」

彼らの言葉を聞くと、クルの祖父である聡明なビーシュマは、彼ら王たちに告げた。(二九)

「このやりとりが止むとは思われぬ。しかし、王たちよ、私の言うことをすべて聞きなさい。(三〇) 私を犠牲獣のように殺そうとも、乾草の火で燃やそうとも、勝手にしなさい。私はあなたたちの頭に、それぞれ足をのせる。(三一) ここに、我々から尊敬されている、不滅のクリシュナが立っている。あなた方のうちで、死に急ぐ気のある者は、弓を持つクリシュナに挑戦しなさい。そして、倒されて、この神の体に帰入しなさい。(三二―三三)」 (第四十一章)

クリシュナ、シシュパーラを殺す

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

勇壮なチェーディ王は、ビーシュマの言葉を聞くと、ヴァースデーヴァ(クリシュナ)と戦うことを望み、彼に告げた。(一)

「クリシュナよ、私はお前に挑戦する。私と戦え。今日こそ、すべてのパーンダヴァとともにお前を殺してやる。(二) というのは、クリシュナよ、私はどうしてもお前とともにパーンダヴァを殺したいのだ。彼らは王たちを差し置いて、王でもないお前に敬意を表したのだから。(三) クリシュナよ、彼らは王でない召使である邪なお前を、敬うに値しないお前を、あ

たかも敬うべき者のように、幼少の頃から尊敬しているから、殺されるべきであると私は思う。」

と言って、王中の虎は、いきり立って吼えながら立っていた。(四)

クリシュナはこのように言われた時、すべての王とパーンダヴァたちに対し、その面前で、穏やかに告げた。(五)

「王たちよ、このサートヴァタの女性の息子は、我々の最大の敵である。彼は邪悪な性で、罪もないサートヴァタ族の人々に悪意を抱いている。(六) 我々がプラーグジョーティシャの都に行ったことを知って、父の妹の息子でありながら邪悪な彼は、ドゥヴァーラカー市を焼き払った。諸王よ。(七) かつてライヴァタカ山においてボージャの王たちが遊んでいた時、彼は彼らをすべて殺したり、捕えたりして、自分の都に引き返した。(八) またこの邪悪な男は、私の父の馬祀において放たれた、警護の兵たちに囲まれた犠牲の馬を、祭祀を妨害するために奪った。(九) 誉れ高いバブルの妻がサウヴィーラに行こうとしてここから出発した時、彼は迷妄の故に、嫌がる彼女を奪った。(一〇) 彼は母方の叔父に対して邪悪なことをし、幻術により姿を変え、カルーシャのために(与えられた)哀れなヴィシャーラーの王女バドラーを奪った。(一一)

私は叔母のために非常に大きな苦しみを辛抱した。しかし、幸いなことに、今日すべての王の面前でこのようなことになった。(一二) というのは、今日、あなた方は彼が私に対してこの上ない罪を犯したのを目撃した。見ていないところで彼が私に犯した数々の罪をも知る

がよい。(二三)しかし今日、彼がうぬぼれからすべての王の集会において犯した罪を許すことはできない。彼は死に値する。(二四)彼は愚かにも死に急いで、ルクミニーにも言い寄った。しかしこの愚か者は、従僕(シュードラ)がヴェーダ聖典を聞き得ないように、彼女を得ることはできなかった。(二五)」

このようなクリシュナの言葉を聞いて、すべての集まった王たちはチェーディ国王を非難した。(二六)するとその言葉を聞いて、栄光あるシシュパーラは大声で笑った。彼はあざ笑って次のように言った。(二七)

「クリシュナよ、集会において、特に王たちの前で、先に私のものとされた（私に与えると約束された）ルクミニーについて話して、どうして恥ずかしくないのか。(二八)クリシュナよ、お前以外の思慮ある人なら、誰が立派な人々の前で、先に他人のものとされた夫人について語るであろうか。(二九)もしお前がそうしたければ、私を許してくれ。あるいは許さなくてもよい。お前が怒っても好意を抱いても、私には関係のないことだ。(三〇)」

彼がまさにそのように言っている時、敵を悩ます聖クリシュナは怒って、円盤(チャクラ)により彼の頭を断ち切った。強力な彼は、金剛杵(ヴァジュラ)に撃たれた山のように倒れた。(三一)すると王たちは、チェーディ国王の体から最高の光輝が、空から太陽が高く上るように、立ち上るのを見た。(三二)それからその光輝は、世人に崇拝される蓮弁の眼のクリシュナに敬礼し、彼の中に入った。(三三)その光輝が強力な至高の神人(プルシャ)に入ったのを見て、すべての王たちは奇蹟が起きたと考えた。(三四)クリシュナがチェーディ国王を殺した時、雲もないのに天は雨を降らせ、

まばゆい雷電が落ち、大地が震動した。(二五)ある王たちは、口で言うべき時が過ぎたので、クリシュナを見つめ、何も言わなかった。(二六)他の人々は怒って、手で手の先をこすっていた。他の人々は怒りにかられて、歯で唇を噛んでいた。(二七)しかしある王たちは、密かにクリシュナを讃えていた。ある人々は激していたが、他の人々は中間的立場をとっていた。(二八)

大仙たちは喜んで、クリシュナを讃えながら近づいて行った。偉大なバラモンたち、強力な王たちも同様であった。(二九)ユディシティラは弟たちに告げた。

「直ちにダマゴーシャの息子である勇猛な王を手厚く葬りなさい。」

彼らは兄の命令通りに実行した。(三〇)ユディシティラは、王たちとともに、シシュパーラの王子をチェーディ国の王位につけた。(三一)

それから、一切の富貴をそなえたクル国王の祭祀は、若者たちを喜ばせ、威光に満ちて輝いた。(三二)その障碍は鎮まって、計画は滞りなく進み、多大の財物と穀物に満ち、御飯や多様な食物にあふれ、クリシュナによく守護されていた。(三三)強力なクリシュナは、ラージャスーヤの大祭を完了させた。聖クリシュナはシャールンガ弓と棍棒を持って、終了するまでその祭祀を守った。(三四)

それから、ダルマ王ユディシティラが祭祀の終わりの沐浴をした時、すべての地上の王族が彼に近づいて次のように言った。(三五)

「法(ダルマ)を知る人よ、おめでとうございます。王よ、あなたは世界皇帝の位に到達された。ユ

ディシティラよ、あなたはバラタ族の名声をいっそう高めた。そして王中の王よ、この儀式によりあなたは法を非常に増大させた。(三六)人中の虎よ、一切の望ましいことにより手厚くもてなされて我々はいとまを乞う。我々は自分の領地に帰ります。どうかお許し下さい。(三七)」

諸王の言葉を聞くと、ダルマ王ユディシティラは、ふさわしく彼らに敬意を表してから、すべての弟たちに告げた。(三八)

「これらすべての王たちは、友情により我らのもとに来た。敵を悩ますこれらの王は、私に別れを告げそれぞれの領地に発つ。どうかこの最高の王たちを国境までお送りしてくれ。(三九)」

法を守るパーンダヴァたちは、兄の言葉を聞くと、その主立った王たち一人一人を、ふさわしく送って行った。(四〇)栄光あるドリシタデュムナは、急いでヴィラータを送って行った。勇士アルジュナは偉大なヤジュニャセーナを送って行った。(四一)強力なビーマセーナはビーシュマとドリタラーシトラとを、勇士サハデーヴァは勇猛なドローナとその息子を送って行った。(四二)ナクラはスバラとその息子を、ドラウパディーの息子たちとアビマニュは山岳地方の王たちを送って行った。(四三)また、王族の雄牛たちはその他の王族を送って行った。同様に、バラモンたちもすべて、敬意を表されて引き上げて行った。(四四)

王中の王たちがすべて去った時、栄光あるヴァースデーヴァ(クリシュナ)は、ユディシティラに告げた。(四五)

「さようなら。クルの王よ、私はドゥヴァーラカーに帰る。めでたいことにあなたは最高の祭祀ラージャスーヤを達成した。(四六)」

そう言われて、ダルマ王はクリシュナに答えた。

「ゴーヴィンダよ、私はあなたの恩寵によりこの祭祀を達成した。(四七)あなたの恩寵により、すべての地上の王族は支配下に帰した。彼らは主要な貢物を持って、他ならぬ私に伺候した。(四八)勇士よ、あなたなしでは我々は全く楽しくないが、あなたはどうしてもドゥヴァーラヴァティー市に帰らなければいけない。(四九)」

そのように言われて、誉れ高く徳性あるハリ(クリシュナ)は、ユディシティラとともに、プリター(クンティー)のもとに行き、満足して告げた。(五〇)

「叔母上、あなたの息子たちは、今や目的を成就し富貴を得て、世界皇帝の位に達しました。お喜び下さい。(五一)私はおいとま申し上げ、ドゥヴァーラカーに帰ることにします。」

それからクリシュナは、スバドラーとドラウパディーに挨拶した。(五二)それから彼は、ユディシティラとともに後宮から出た。そして沐浴し念誦してから、バラモンたちに祝福してもらった。(五三)それからダールカ(御者の名)は、よく造られた、最上の雲のような戦車に馬をつなぎ、クリシュナに近づいた。(五四)蓮花の眼をした気高いクリシュナは、最高のガルダの旗標をつけた戦車が近づいたのを見て、その周囲を右まわりにまわってから乗って、ドゥヴァーラヴァティー市に出発した。(五五)

栄光あるダルマ王ユディシティラは、弟たちとともに、徒歩で強力なヴァースデーヴァの

後について行った。(五六) すると蓮花の眼をしたハリは、最高の戦車をしばし止めて、クンティーの息子ユディシティラに告げた。(五七)

「王よ、常に怠ることなく国民を守れ。雨神が万物を、大樹が鳥たちを守るように。縁者たちがあなたに依存して生活するように。神々がインドラに依存するように。(五八)」

クリシュナとユディシティラは互いに再会を約し、交々別れを告げて、それぞれの家に帰って行った。(五九) サートヴァタの最上者クリシュナがドゥヴァーラヴァティーに帰った時、人中の雄牛であるドゥルヨーダナ王とスバラの息子シャクニだけが、その神聖な集会場に滞在していた。(六〇)

(第四十二章)

(27) 賭博 (第四十三章ー第六十五章)

ドゥルヨーダナの怨恨と賭博の計画

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

バラタの雄牛よ、ドゥルヨーダナはその集会場に滞在している間、シャクニとともに、すべての集会場をゆっくりと見てまわった。(一) 彼はその中で、象の都（ハースティナプラ、クル族の首都）でかつて見たことのない神的な意匠を見た。(二)

ある時、彼は集会場の中で水晶の面のところに来て、水だと思い、うろたえて、自分の衣服を持ち上げた。そこで彼は落胆し、うつむいて集会場を歩きまわった。(三―四) それから、水晶のような水をたたえ、水晶のような蓮で飾られた池を見て、陸だと思い、衣服をつけたまま水に落ちた。(五) 彼が水に落ちたのを見て、召使たちはひどく笑ったが、王の命により、きれいな衣服を彼に与えた。(六) 強力なビーマセーナとアルジュナと双子（ナクラとサハデーヴァ）は、そのような有様の彼を見て、一斉に笑った。(七) 短気な彼は、彼らの嘲笑に耐えることができなかったが、内心が表情に出るのを隠そうとして、彼らを見なかった。(八) それから、彼は再び池を渡ろうとするかのように、衣服を持ち上げて陸に上がった。すべての人々はまた彼のことを笑った。(九) それから彼は、開いているように見えるドアに額をぶつけた。そしてまた、ドアが閉まっていると思い誤り、そこを通るのをやめた。(一〇)

このように、そこで種々のトリックに出くわしてから、ドゥルヨーダナ王はユディシティ

ラに別れを告げた。(一一) 彼はラージャスーヤの大祭における驚異的な富貴を見て、面白からず思いつつ象の都に帰った。(一二)

ドゥルヨーダナ王がパーンダヴァの繁栄に苦しみ、もの思いに沈んで進んで行くうちに、彼に邪悪な考えが生じた。(一三) パーンダヴァたちが幸福で、諸王がその支配下に帰し、全世界が子供に至るまで友好的であるのを見て、また、偉大なパーンダヴァたちの最高の栄光を見て、ドリタラーシトラの息子ドゥルヨーダナは青ざめた。(一四―一五) 彼はうわの空で進みながら、集会場のことのみを思い出し、また英邁なダルマ王の無比の繁栄を思い出していた。(一六) その時、ドゥルヨーダナはぼんやりして、スバラの息子（シャクニ）が何度も話しかけるのに返答しなかった。(一七) シャクニは彼がうわの空なのを見て彼に言った。

「ドゥルヨーダナよ、いかなる理由でため息をつきながら行くのか。(一八)」

ドゥルヨーダナは言った。

「この全地上がユディシティラの支配下に帰し、偉大なアルジュナの武器の威光に征服されたのを見て、また、あの神々におけるインドラの祭祀のように盛大なユディシティラの祭祀を見て、威光に満ちた叔父上よ、私は妬みに満ちあふれ、昼も夜も焼かれ、夏の季節の小池のように干涸びています。(一九―二〇) 見なさい、シシュパーラはサートヴァタの長（クリシュナ）に倒されましたが、しかしあそこで彼の後に従う男は誰もいませんでした。(二一) というのは、王たちはパーンダヴァの放つ火に焼かれ、あのような罪を許したのです。だが、誰があのような罪を許すことができましょう。(二二)

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）はあの大罪を犯しました。そしてそれは、偉大なパーンドゥの息子たちの威光によって成就したのです。（二四）そしてまた、王たちは種々の宝物を持って、ユディシティラ王に伺候しています。租税を納める平民（ヴァイシャ）たちのように。（二五）そのようなパーンダヴァの燃えるような繁栄を見るにつけて、私は妬みに支配され、我にもなく身を焦がします。（二六）私は火に入ろうか、毒を飲もうか、それとも水に入ろうか。私はもう生きることができません。（二七）というのは、この世で気概ある男は、どうしてライバルが繁栄し自分が衰えるのを見て許すことができましょう。（二八）もし私が今、彼らにあのような繁栄が訪れるのを許すなら、私は女でもなく、女でなくもなく、男でなく、男でなくもありません。（二九）彼らが地上の王者であり、あのように富を所有するのを見て、またあのような祭祀を見て、私のような者がどうして燃え焦がれないでしょうか。（三〇）私は一人きりであのような王者の繁栄を獲得することはできません。そして私は協力者を見つけられません。そこで死のうと考えるのです。（三一）クンティーの息子にあのような輝かしい繁栄がもたらされたのを見て、運命のみがすべてで、人間の努力など空しいものだと思います。（三二）叔父上、私は前に彼を亡き者にしようと努力しました。しかし彼はそのすべてを克服して、水中の蓮のように大きくなりました。（三三）そこで、運命がすべてで、人間の努力は空しいと思うのです。実際、ドリタラーシトラの息子たちは衰退し、パーンダヴァたちは常に隆盛に向かっています。（三四）私はあのような繁栄とあのような集会場を見て、そして守衛たちにあのように嘲笑されたことを思い、火で焼かれるかのように苦しみます。（三五）叔父上、今は

存分に苦しませて下さい。そして妬み心が私にとりついたことを父上にお知らせ下さい。（三六）」

（第四十三章）

シャクニは言った。

「ドゥルヨーダナよ、ユディシティラに対し妬みを抱いてはならぬ。パーンダヴァたちは常に幸運を享受しているのだ。（一）お前は以前に、多くの方法によって何度も計画を企てたが、あの人中の虎たちは、幸運により危機を脱した。（二）彼らはドラウパディーを妻とし、ドルパダとその息子を味方に得て、地上の獲得に際し、強力なクリシュナを味方にした。（三）王よ、彼らは父の遺産として過分の財産を得たが、それは彼らの威光によって増大した。それについて、どうして嘆く必要があろうか。（四）アルジュナは火神を満足させて、ガーンディーヴァ弓と、無尽の［矢の入った］箙（えびら）と、神的な武器を得た。（五）その最高の弓と自身の腕力により、彼は諸王を征服した。それについて、どうして嘆く必要があろうか。（六）勇士アルジュナは魔王マヤを火の難から解放し、あの集会場を作らせた。（七）そして、そのマヤに命じられたキンカラという恐るべき羅刹たちが、その集会場を維持している。それについて、どうして嘆く必要があろうか。（八）バラタ族の王よ、お前は協力者がいないと言ったが、それは正しくない。というのは、勇士である弟たちがお前の協力者ではないか。（九）偉大な弓取りのドローナとその聡明な息子、そして御者（スータ）の息子のカルナ、勇士クリパも協力者であ

る。（一〇）私と兄弟たち、強力なプーリシュラヴァスもそうだ。お前はこれらすべての人々とともに全地上を征服しなさい。（一一）」

ドゥルヨーダナは言った。

「王よ、もしあなたが同意されるなら、あなたとそれらの勇士たちとともに、彼らを征服しましょう。（一二）彼らが征服されれば、その時は地上は私のものになるでしょうし、すべての王たちも、財宝に満ちた集会場もわがものになるでしょう。（一三）」

シャクニは言った。

「アルジュナ、クリシュナ、ビーマセーナ、ユディシティラ、ナクラ、サハデーヴァ、ドルパダと息子たち、（一四）彼らを戦闘において力ずくでうち破ることは、神群によってすら不可能である。彼らは勇士で偉大な弓取りであり、武器を修得し、好戦的である。（一五）しかし私は、ユディシティラ本人を滅ぼせる方法を知っている。王よ、それを聞いて実行せよ。（一六）」

ドゥルヨーダナは言った。

「叔父上、もし親しい人々やその他の偉大な人々に危険なく、彼らを征服することができるなら、私におっしゃって下さい。（一七）」

シャクニは言った。

「ユディシティラは賭博を好むが、そのやり方を知らない。王中の王は挑戦されたら退くことができない。（一八）そして私は賭博に巧みであり、地上に、いや三界において、私に匹敵

する者はいない。お前は彼を賭博に招待せよ。（一九）賭博の得意な私は、お前のために必ずや彼の王国と輝かしい繁栄を奪って見せる。人中の雄牛である王よ。（二〇）ドゥルヨーダナよ、すべてのことを父王に知らせなさい。父が承知したら、私は必ずや彼をうち破ってやる。（二一）」

ドゥルヨーダナは言った。

「叔父上、あなた御自身が、クルの長ドリタラーシトラによろしくお知らせ下さい。私はうまく言うことができませんので。（二二）」

（第四十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

スバラの息子シャクニは、ドゥルヨーダナとともにユディシティラ王のラージャスーヤの大祭を経験してから、前もってドゥルヨーダナの考えを知った。そして、ドゥルヨーダナに好意的な彼は、ドゥルヨーダナの言葉を聞いてから、智慧の眼を持つ（盲目の）ドリタラーシトラ王が座っている側近くに行き、大知者である王に告げた。（一―三）

「大王よ、ドゥルヨーダナは蒼白くやつれ、悲嘆に暮れ、もの思いにふけっております。バラタの雄牛よ、注意して下さい。（四）敵から生ずる耐えがたい悲しみ、あなたはそれをよく知ろうとしない。長男の悲しみをどうしてわかってやらないのですか。（五）」

ドリタラーシトラは言った。

「わが子ドゥルヨーダナよ、いかなるわけでお前はひどく悩んでいるのか。私に聞かせたい

ことがあるなら、そのことを私に話せ。クルの王よ。（六）ここにいるシャクニはお前が蒼白くやつれて、もの思いにふけっていると告げた。だが私は、お前の悲しみの原因がわからないのだ。（七）息子よ、この大きな主権はすべてお前に渡したではないか。それに、お前の兄弟や友たちは、お前に不愉快なことをしていないのに。（八）お前は上等な衣服をまとい、肉の御馳走を食べ、よい品種の馬に乗っている。どうして蒼白くやつれているのか。（九）高価な寝台、魅力的な女たち、諸々の長所のある部屋、快適な庭園。（一〇）以上すべては、神々のようなお前の言葉ひとつで疑いもなく実現する。息子よ、お前は不可侵であるのに、どうして嘆き悲しむのか。（一一）」

ドゥルヨーダナは言った。

「私は卑しい男のように食べ、衣服をまとっています。私は恐ろしい妬みに耐えながら時を過ごしております。（一二）敵につく自分の臣民を制圧し、敵から生ずる諸々の苦悩から抜け出ようと欲する猛々しい男が、真の男と言われます。（一三）バーラタよ、満足と慢心が繁栄を殺すのです。同情と恐怖も同様です。これらに支配された者は偉大な地位に達しません。（一四）クンティーの息子ユディシティラの輝かしい繁栄は私を蒼白にします。その繁栄を見てからは、何をしても楽しくありません。（一五）自分のライバルたちが繁栄し、自分が衰えるのを見て、そしてクンティーの息子の〔繁栄が〕見えないものなのに、まるで眼前にそびえ立つかのようであるのを見て、そこで私は蒼白くなり、悲嘆に暮れ、やつれているのです。（一六）

ユディシティラは八万八千人のヴェーダ修得者である家長を保護し、彼らの一人一人が三十人の召使女を持っています。（一七）その他、一万の人々が、いつもユディシティラの家で、金の器で最上の食物を食べています。（一八）カーンボージャ国王は、黒色・暗色・赤色のカダリー鹿の皮、高価な毛布を彼に贈りました。（一九）それから、幾百幾千の戦車や女性や牛や馬、また、三万の牝駱駝が動きまわっています。（二〇）王たちはあの大祭において、ユディシティラのため、種々の宝物をたくさん持って来ました。（二一）英邁なユディシティラの祭祀においてもたらされたような財宝を、私はかつて見たことも聞いたこともありません。（二二）王よ、私は敵が無限に多量の財宝を所有するのを見て、絶えずもの思いにふけり、心が安まることがありませんでした。（二三）家畜に富むバータダーナ（腹まれたバラモンの種族の一）というバラモンが百グループほど、三百億もの貢物を持って門前に立っていたが、入るのを止められました。（二四）しかし美しい金製の水差しをそえて貢物を贈ったところ、彼らは入ることを許されました。（二五）海神はヴァールナ水の銅器を彼に贈りました。天女たちがインドラのために捧げる神酒もそれほど尊くはないような……。（二六）〔その器を入れた〕幾千の黄金のつり鎖は多くの宝石で飾られていました。それを見て、私にはすべては苦熱が形をとったもののように思われました。（二七）人々はそれを持って東方と南方の海へ行きました。同様に、それを持って西方へ行きました。（二八）しかし父上、北方へは、鳥たち以外は誰も行きませんでした。（二・四九・一六参照）

そしてそこには、次のような驚嘆すべきことがありました。話しますから聞いて下さい。

(二九)食事を給されている十万人のバラモンが食べ終わった時、合図が定められて、常に法螺貝が吹かれます。(三〇)バーラタよ、繰り返し鳴り響くその法螺の最高の音を聞いた時、私は総毛立ちました。(三一)その集会場は、見たいと望む多くの王たちによって満ちていました。そして王よ、王たちは一切の宝物を持って来ました。(三二)大王よ、王たちは、その英邁なパーンドゥの息子の祭祀において、まるで平民(ヴァイシャ)のように、バラモンたちに奉仕しました。(三三)王よ、ユディシティラの繁栄は、神々の王(インドラ)やヤマやヴァルナの繁栄、あるいはグヒヤカ(夜叉の類)の主(クベーラ)の繁栄も及ばないほどでした。(三四)パーンドゥの息子のそのような最高の繁栄を見て、私は心を焼かれ、平安に達することができません。(三五)」

シャクニは言った。

「不屈の勇者よ、そなたがパーンダヴァにおいて見た最高の繁栄を達成する方法がある。それを私から聞きなさい。(三六)バーラタよ、私は賭博に関して、地上における最高の権威者である。私はその心を知っている。賭け方を知っている。賭博の特性を知っている。(三七)クンティーの息子は賭博が好きだが、遊び方を知らない。招待されたら彼は必ずや来るであろう。二人で賭けをしようということで、彼を招待しなさい。(三八)(三九略)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

シャクニにそのように言われて、ドゥルヨーダナ王は側近くに寄り、ドリタラーシトラに言った。

「王よ、賭を知る彼は、賭博によりパーンドゥの息子の富を奪うことができます。どうか許可してあげて下さい。(四〇)」

ドリタラーシトラは言った。

「顧問のヴィドゥラは大知者である。私は彼の教えに従う。私は彼と会談して、この件の決定をしよう。(四一)というのは、彼は思慮深く、法(ダルマ)を前提として、両方の側にとって非常に有益な、確定的な意見を適切に告げてくれるであろうから。(四二)」

ドゥルヨーダナは言った。

「もしヴィドゥラが関与すれば、彼はあなたを思いとどまらせるでしょう。王中の王よ、あなたが思いとどまれば、私は必ずや死ぬでしょう。(四三)王よ、私が死んだら、ヴィドゥラと幸せに暮らしなさい。あなたは全地上を享受するでしょう。私など無用です。(四四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドリタラーシトラは息子が甘えて言った悲痛な言葉を聞いて、息子の意見に従い、召使たちに告げた。(四五)

「直ちに技師たちに命じて、私のために大きな集会場(賭博場)を作らせよ。千の柱があり、百の門を有する、魅力的で美しい集会場を。(四六)それから、それに宝石をちりばめ、いたるところに骰子をまき散らし、それを見事に作り、すぐに入場できるようにして、逐次私に報告せよ。(四七)」

ドリタラーシトラ王はドゥルヨーダナを鎮めるために、このように決定してから、ヴィドゥラに使者を送った。(四八)というのは、彼はヴィドゥラに相談しないでは何ひとつ決定しなかったからである。しかし彼は、賭博の害毒は知ってはいたが、息子への情愛ゆえにそれに引き込まれたのである。(四九)

聡明なヴィドゥラは、カリ(禍災)の入口が近づき、滅亡の口が開いたことを聞き、ドリタラーシトラのもとに急いでやって来た。(五〇)弟である彼は、偉大な兄に近づき、頭を下げて兄の足下にひれ伏して次のように言った。(五一)

「王よ、私はあなたのこの決定を歓迎しません。賭博が原因で息子たちが離間しないようにして下さい。(五二)」

ドリタラーシトラは言った。

「ヴィドゥラよ、私の息子たちが互いに争うことはなかろう。天上の神々が必ずや我らに恩寵を下さるであろう。(五三)不善であろうと善であろうと、有益であろうと有害であろうと、親しい者の賭博は行なわれるべきである。疑いもなく、これは運命なのだ。(五四)私と、バラタの雄牛であるビーシュマがそばにいれば、たとい運命に定められたとしても、決して不正行為は起きないだろう。(五五)あなたは今すぐに、風のように速い馬をつないだ車に乗り、カーンダヴァプラスタに行き、ユディシティラを連れて来なさい。(五六)ヴィドゥラよ、お前に言っておくが、私の決定を妨げることはできない。こうなったのもすべて運命の計らいであると思う。(五七)」

このように言われて、聡明なヴィドゥラは、「そうではない」と考えながら、非常に悩んで、大知者であるビーシュマのもとに行った。(五八)

(第四十五章)

パーンダヴァの繁栄を妬むドゥルヨーダナ

ジャナメージャヤはたずねた。

「非常に有害なその同胞の賭博はどのようにして行なわれたか。その賭博のせいで、私の祖父であるパーンダヴァたちはあのような災禍に陥ったが……。(一)最高にブラフマン(ヴェーダ)を知る者よ、その集会に参列した王たちは誰か。誰が彼を元気づけ誰が彼を留めようとしたか。(二)最高のバラモンよ、詳しく語ってもらいたい。このことは世界の滅亡の原因であったから。(三)」

吟誦詩人は語った。——

王にそのように言われて、すべてのヴェーダを知る栄光あるヴィヤーサの弟子は、一部始終を語った。(四)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

バラタの最上者よ、更に私から詳細にこの物語を聞きなさい。大王よ、もし聞きたいと思

われるなら。(五)
アンビカーの息子のドリタラーシトラは、ヴィドゥラの考えを知って、人のいないところで、ドゥルヨーダナに再び言った。(六)

「ガーンダーリーの息子よ、賭博はやめにしよう。ヴィドゥラは賛成しなかった。大知者である彼は、我々のためにならないことは決して言わないであろう。(七)ヴィドゥラが言うことは、最高に有益なことだと私は思う。息子よ、すべて彼の言う通りにしなさい。それはお前のためになると思う。(八)インドラの師である高邁な神仙ブリハスパティ尊者が、聡明な神々の王(インドラ)に告げた教え、そのすべてとその秘密とを、偉大な賢者ヴィドゥラは知っている。息子よ、私はいつも彼の言葉に従っている。(九―一〇)ヴィドゥラはクル族のうちで最上の知者であるとされる。大知者ウッダヴァ(クリシュナの友人)がヴリシュニ族のうちで尊敬されているように。(一一)

それ故、賭博はやめにしよう。賭博においては離間が見られ、離間においては王国の滅亡が見られるから。それ故息子よ、それを捨てなさい。(一二)父母が息子に父祖伝来の地位を伝えることは最高の義務とされるが、息子よ、お前はその地位をすでに得ている。(一三)お前は学習し、学術に通じ、常に家庭において慈しまれ、王国において兄弟の長子として君臨している。どうして幸せでないと思うのか。(一四)お前は普通の人の得られない最高の衣食を得ている。強力な息子よ、どうしてお前は嘆くのか。(一五)勇士よ、お前は天界における神々の王のように、父祖伝来の繁栄する広大な国土を、常に統治しつつ輝いている。(一六)

知性ある者よ、お前はそのようであるのに、どうして、こよなく苦しい悲哀の根が生じたのか。どうかそれを私に話してくれ。(一七)」

ドゥルヨーダナは言った。

「衣食などを気にしているのは最低の男です。憤慨しない男は最低だと言われます。(一八)王中の王よ、普通の繁栄は私を喜ばせません。クンティーの息子において、繁栄が燃えるかのようであるのを見て、私は苦しむのです。(一九)全地上がユディシティラの支配下にあるのを見ながらも、私は気丈にもまだ生きています。私は苦しみ抜いてこのことをあなたに申し上げるのです。(二〇)チャイトリカ族、カウクラ族、カーラスカラ族、ローハジャンガ族たちは、ユディシティラの王宮において、まるで平伏する召使のように見えます。(二一)一切の宝物を蔵するヒマーラヤ、大洋、湿地(または海辺)も、すべて、ユディシティラの〔宝に満ちた〕王宮においては、全く取るに足らぬものになります。(二二)

王よ、ユディシティラは私のことを長男であると考え、〔クルの〕最上者であると考え、歓待して、宝物を受け入れる係りに任じました。(二三)もたらされる最上で高価な宝物は、際限がありませんでした。(二四)財宝を受け取っている私の手は、持ちこたえることができませんでした。私が疲れ切っても、人々は遠くから運んだ財宝を持って、〔次々と〕進み出るのです。(二五)

私は水で満ちているかのような蓮池を見ました。実はそれはビンドゥサラスの宝石を用い、水晶でおおって、マヤに作られたものだったのですが。(二六)私が衣服のすそを持ち上げる

と、狼腹（ビーマ）が嘲笑いました。敵の特別の栄華に錯乱し、宝物も持たぬ私を。（二七）もしそれができたら、狼腹を殺したのだが。このようにライバルに嘲笑われたことが、私を燃やすのです。（二八）

さらにまた、同じように蓮に満ちた池を見て、私はやはり水晶の池であると思い、水に落ちてしまいました。（二九）クリシュナとプリター（クンティー）の息子は大声で笑いました。ドラウパディーや女たちも笑い、私の心を傷つけました。（三〇）召使たちは王に命じられ、水に落ちて衣服が濡れた私に別の衣服を与えました。それが私をいっそう苦しめたのです。（三一）

王よ、私はもう一つのからくりをお話しします。聞いて下さい。私はドアのように見えるがドアでない所を通り抜けようとして、石に額をぶつけて傷つきました。（三二）双子（ナクラとサハデーヴァ）は遠くからそんな私を見て面白がりました。彼らは二人して、哀れむように腕で私を抱きかかえました。（三三）サハデーヴァは笑って、繰り返し私に言いました。

『これがドアです。王よ、こちらに行きなさい』と。（三四）

私はその集会場で、かつてその名前を聞いたこともないような諸々の宝物を見ました。それがまた私の心を苦しめるのです。（三五）」

（第四十六章）

〔第四十七章から第四十八章にかけて、諸国の王たちがユディシティラにもたらした貢物が列挙されている。国々とその産物の列挙はそれ自体として史料的に興味深いが、本訳においては省略する。〕

ドゥルヨーダナは言った。

「アーリヤの王たち――約束を守り、厳格に誓戒を守り、学術を修得し、雄弁で、ヴェーダを修了した時に沐浴し、冷静で、廉恥心あり、徳性あり、名声あり、〔即位式で〕頭に水を灌がれた王たち――がユディシティラに伺候しています。（一―二）私はいたるところで、王たちが祭官への報酬として連れて来た、幾千という野生の牝牛たちと、乳を搾るための銅の桶を見ました。（三）王たちは即位灌頂（かんじょう）のために、注意深く、恭しく自ら捧げ持って、種々の瓶を運んで来ました。（四）（五―一〇略）

大仙たちは喜んで灌頂に立ち会いました。同様に、その他のヴェーダに通じた人々も、ジャマダグニの息子ラーマ（パラシュラーマ）とともに、聖句（マントラ）を唱えながら、多くの報酬を払う偉大な王のもとを訪れました。天界で七仙が神々の王である大インドラを訪れるように。（一一―一二）不屈の勇者サーティヤキが王の日傘を持ち、アルジュナとビーマセーナが扇を持ちました。（一三）海神は彼にヴァルナの法螺貝を贈りましたが、それは前の劫期（カルパ）に、造物主（プラジャーパティ）がインドラに贈ったものです。（一四）〔ヴァールナ水の〕器を入れたつり鎖（異本をとる。二・四五・二七参照）は、幾千の黄金により、ヴィシュヴァカルマン（一切造者）が見事に作ったものです。クリシュナはそれで彼を灌頂しました。そこで私に失意が生じたのです。（一五）人々は〔水を持って〕東方と西方と南方の海へ行きました。しかし父上、北方へは鳥たち以外は誰も行きませんでした。（一六）

（二一・四五・二九参照）

そこでは、吉祥のために、人々は幾百となく法螺貝を吹いていました。それらは吹かれて鳴り響き、私は総毛立ちました。（一七）王たちは自己の威光を失い平伏しました。ドリシタデュムナ、パーンドゥの息子たち、サーティヤキ、第八番目にクリシュナは、気力あり、勇武をそなえ、お互いに友好的でした。その時、彼らは度を失った王たちや私を見て笑いました。（一八―一九）それから、アルジュナは喜び、主立ったバラモンたちに、金箔を張った角を持つ五百頭の牝牛を与えました。（二〇）

クンティーの息子が、ハリシュチャンドラ王のように、ラージャスーヤ祭を達成した時、シャンバラの殺害者（インドラ）も、ヤウヴァナーシュヴァも、マヌも、プリトゥ・ヴァイニヤも、バギーラタも、彼ほど多くの最高の繁栄をそなえていないほどでした。（二一―二二）王よ、プリター（クンティー）の息子がハリシュチャンドラのように繁栄しているのを見て、どうして私の生が幸せであるとお考えになるのですか。（二三）王よ、盲人によって結ばれた頸木（くびき）のようにあべこべです。年少者が栄え、年長者が衰えています。（二四）

私はこのように見て、いくら探しても寄る辺を見出せません。クルの英雄よ。そこで私はこのようにやつれ、蒼白になり、悲嘆に暮れるのです。（二五）」

（第四十九章）

ドリタラーシトラは言った。

「息子よ、お前は年長の妻から生まれた最も年上の息子だ。パーンダヴァたちを憎んではならぬ。実に憎む者は不幸になり、死ぬこととなる。（一）ユディシティラは無邪気で、お前と同じ目的と友人を持ち、お前を憎んでいないのに、お前のような男がどうしてその彼を憎むのか。バラタの雄牛よ。（二）王よ、息子よ、生まれと力量の等しいお前が、どうして迷妄にかられて兄弟の繁栄を羨むのか。そのようであってはならぬ。よく心を静めなさい。（三）バラタの雄牛よ、もしそのような祭祀による繁栄を望むのなら、お前の祭官たちに盛大な祭祀を行なわせなさい。（四）王たちは、友情と尊敬から、お前にも多大な財物と宝物と装飾品を持って来るであろう。（五）息子よ、他人の財産を望むのは非常に有害な行為である。自分のもので満足し、自己の義務（ダルマ）を守る者は幸福になる。（六）他人のものを求めず、〔自分の仕事に常に努力し、自分のものを守ることに努力する。以上が富貴の特性である。（七）災禍において苦しまず、巧妙で、常に精励であり、放逸でなく、自己を修めた人は、常に幸運を見出す。（八）ヴェーディ祭壇の中に財物を供え、望ましい諸願を享受し、憂いなく女性と娯しみ、心を静めなさい。バラタの雄牛よ。（九）」

ドゥルヨーダナは言った。

「あなたは知っていながら、私を迷わせます。舟が舟につながれるように、〔私はあなたにつながれている。〕」あなたは自分の利益に関心がないのですか。あるいは、私を憎んでいるのですか。（一〇）あなたはこの息子たちを教え導く方ですが、彼らは存在しない〔かのようです〕。あなたはいつも、自分に都合のよいことが将来に実現されるとおっしゃいます。

〔二一〕もし指導者が敵に導かれて道に迷えば、どうして、彼の後に従う者たちは正道を進めましょうか。〔二二〕王よ、あなたは知性に満ち、長老に仕え、感官を制御していますが、自己のなすべきことを企てる我々をひどく惑わせます。〔二三〕

王の行動は世間の人の行動と異なると、ブリハスパティは言います。それ故、王は常に自己の利益を考えるべきです。〔二四〕大王よ、王族の行動は勝利に集約されます。法(ダルマ)であろうと非法(アダルマ)であろうと、〔勝利をめざす〕自己の行動に依存します。バラタの雄牛よ。〔二五〕敵の輝かしい繁栄に対抗しようと欲する者は、御者が突き棒で〔馬をかりたてる〕ように、すべての方角を攻撃すべきです。〔二六〕武器を知る人々にとって、武器とは単に切る道具ではなくて、密かな、または公然とした、敵を苦しめる方法が武器であると伝えられます。〔二七〕

不満足は繁栄のもとです。それ故、私はそれを望みます。王よ、向上に努力する人は最高の政策家です。〔二八〕実に、権力や財産について、わがものと考えてはなりません。前に得られたものを他の人々が奪います。まさにそれが王族の法(ラージャ)であると知られています。〔二九〕シャクラ(インドラ)は戦わないという約定を結びながら、ナムチの頭を切りました。それが敵に対する永遠の流儀であると考えたのです。〔三〇〕蛇が鼠の類を食うように、大地は戦わない王と遍歴しないバラモンを食います。〔三一〕王よ、人間にとって生来の敵はありません。同じ生き方をする者が敵であって(近親憎悪)、その他の者は敵ではありません。〔三二〕繁栄する敵を、人が迷妄から捨置すれば、敵は重くなった病気のように、その人の根を断ち切ります。〔三三〕非常に弱小の敵といえども、その力が増大した時は〔強敵を〕食います。樹の根もとに生じた蟻塚が樹を食らうように。〔三四〕

アージャミーダ(ドリタラーシトラ)よ、敵の繁栄があなたを喜ばせることがないように。これが気力ある人々の頭に置かれた重荷のような政策です。〔三五〕生まれて以来成長するように、財産の増大を望む者は、親類の間にあって繁栄します。実に勇武は速やかに増大するものです。〔三六〕パーンダヴァの権力を奪取しなければ、私は危機に瀕するでしょう。私はその繁栄を手に入れるか、戦いで殺されて横たわるかです。〔三七〕王よ、もし私が彼と同様にならなければ、今私は生きていて何になりましょう。パーンダヴァたちは常に増大し、我々の増大は止まっているのですから。〔三八〕」

(第五十章)

賭博場に行く

シャクニは言った。

「あなたはユディシティラの繁栄を見て苦しんでいるが、私は賭博によりそれを奪ってやろう。敵を召集しなさい。〔一〕危険を冒すことなく、軍隊の先頭で戦うことなく、賭博に通じた私は、骰子を投げ、傷つくことなく、賭博を知らない者たちに勝利する。〔二〕賭けは私の弓である。骰子は私の矢である。賭博の心(術技)は私の弓弦である。〔骰子を撒く〕敷物は私の戦車である。〔三〕」

ドゥルヨーダナは言った。

「王よ、この賭博を知る人は、賭博により、パーンドゥの息子から繁栄を奪うことができます。父上、よろしくお願いします。(四)」

ドリタラーシトラは言った。

「私は偉大な弟ヴィドゥラの教えに従う。彼に会って、この件について決定しよう。(五)」

ドゥルヨーダナは言った。

「疑いもなくヴィドゥラはあなたの思慮を失わせるでしょう。彼は私よりもパーンダヴァたちのためを思っているのです。(六) 人は他人の力によって自己の仕事を企てるべきではありません。仕事において二人の意見が一致することはありませんから。(七) 愚者は危険を避け、自己を守ろうとして、その場で衰退します。雨季に濡れそぼつ莚(むしろ)のように。(八) 病気やヤマ(閻魔)は、幸福が到来するまで待ちません。それが可能であるうちに、善を行なうべきです。(九)」

ドリタラーシトラは言った。

「息子よ、あらゆる場合、お前がより強力な者たちと戦うことは好ましくない。敵意は動揺を作り出す。それは実に、鉄でできていない武器のようだ。(一〇) 王子よ、お前は不利益を利益と考えている。それは非常に恐ろしく、不和を作り出す。実にそれは様々に発動して、刀と矢を放つであろう。(一一)」

ドゥルヨーダナは言った。

「古人は賭博における作法を定めました。賭博には死の危険も戦闘もありません。そこで今、

シャクニの言を承認して下さい。すぐに集会場を作るよう命じて下さい。(一二) もし我々が賭博をすれば、天界への門は特別〔に開かれています〕。同様に、賭博をすれば〔彼らとしても〕自分に似つかわしくなるでしょう(原文疑問)。あなたはパーンダヴァたちと賭博をして下さい。(一三)」

ドリタラーシトラは言った。

「お前が述べた言葉は、私を喜ばせない。王よ、お前の好きなようにするがよい。だが、その言葉のように実行したら、お前は後悔するであろう。そのような言葉は法(ダルマ)にかなったものとならぬであろうから。(一四) 実にこのことはすべて、知性と学識のあるヴィドゥラによって、以前に、このように予見されたことであった。王族(クシャトリヤ)の種子の滅亡という大きな恐怖が無力な人類に近づいたのだ。(一五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

賢明なドリタラーシトラ王はこのように言ったが、運命は最高に越えがたいものと考え、息子の言葉に従い、運命に心迷い、声高らかに従者たちに命じた。(一六)

「余のために専心して、急いで最上の集会場を作れ。黄金と瑠璃で多彩に飾られた千本の柱と、百の門をそなえ、トーラナ門と水晶の尖塔をそなえた、長さ一クローシャ、広さ一クローシャの集会場を。(一七)」

彼の命を聞くや、有能で巧みな技師たちは、急いで、躊躇なく、専心して速やかに、言わ

れた通りにそれを作った。そして、その集会場に、何千となく、すべての資具を運びこんだ。(一八) そのすぐ後で、その集会場が完成し、心地よくきらびやかに多くの宝石で飾られ、多彩な金の座席をそなえたことを、彼らは喜んで王に報告した。(一九) それから、賢明なドリタラーシトラ王は、顧問の長であるヴィドゥラに言った。

「ユディシティラ王子のもとに行き、次のような私の言葉を告げて、速やかに彼をここに連れて来なさい。(二〇)『私のこの集会場はきらびやかに多くの宝石で飾られ、高価な寝台と座席をそなえている。弟たちとともに来て、それを見なさい。そこで親しい者たちの賭博をやろう。(二一)』」

ドリタラーシトラ王は息子の考えを知り、そしてそれが越えがたい運命であると思い、息子の考え通りにした。(二二) 道理にあわぬことを言われて、最高の賢者ヴィドゥラは兄の言葉に喜ばなかった。そしてこう言った。(二三)

「王よ、私はこの命令を喜びません。そのようになさってはなりませぬ。私は一族の滅亡を恐れます。賭博のせいであなたの息子たちが離間すれば、必ずや諍いがありましょう。王よ、私はそのことを恐れます。(二四)」

ドリタラーシトラは言った。

「ヴィドゥラよ、この世で運命が逆しまにならなければ、諍いの恐れはない。実にこの全世界は配置者(ダートリ)(創造神)に定められたことに支配されて行動し、自由に行動できない。(二五) そこでヴィドゥラよ、今日ユディシティラ王のもとに行き、私の命令だと言って、あの無敵のクン

ティーの息子を速やかに連れて来なさい。(二六)」

(第五十一章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それからヴィドゥラは、ドリタラーシトラ王に無理にせき立てられて、駿足で強力でよく調教された良馬に乗り、聡明なパーンダヴァたちのもとに行った。(一) 大知者ヴィドゥラは、その道程を越えて王都に着き、バラモンたちに歓待されつつそこに入った。(二) 徳性ある彼は、クベーラの宮殿のような王宮に着き、ダルマの息子ユディシティラに近づいた。(三) 堅く誓いを守る偉大なユディシティラ王は、ヴィドゥラをふさわしく歓迎した後、ドリタラーシトラとその息子たちについてたずねた。(四)

ユディシティラは言った。

「ヴィドゥラよ、あなたの心は晴れぬようにお見受けする。恙なく来られたか。叔父上の息子たちは父王に従順であるか。平民(ヴィシュ)も彼に服従しているか。(五)」

ヴィドゥラは言った。

「偉大な王とその息子たちは元気である。彼はインドラのような親族に囲まれている。王よ、彼は礼儀正しい息子の群に満足し、憂いなく、自らに喜び、心確かでいる。(六) しかし、クルの王は、まず健康と繁栄をたずねてから、そなたに次のように告げる。『お前の従兄弟たちのこの集会場は、お前の集会場に匹敵する。わが子よ、来てそれを見なさい。(七) プリタ

ーの息子よ、弟たちとともに来て、そこで親しい人々の賭博をして楽しみなさい。お前が参加すれば我らは嬉しい。すべてのクルの人々が集合している。（八）」偉大なドリタラーシトラ王によって、そこに賭博者たちが指名された。お前はそこに集まった賭博者たちを見るであろう。ということで私はここに来た。王よ、それを承諾してくれ。（九）」

ユディシティラは言った。

「ヴィドゥラよ、賭博をすれば我らに諍いが生じる。それを知りながら、誰が賭博を喜ぶだろうか。あなたはどうすればよいと思うか。我々はすべてあなたの言葉に従う。（一〇）」

ヴィドゥラは言った。

「賭博が不利益のもとであることは私も知っている。私は彼を止(と)めようと努力した。しかし王は私をそなたのもとに派遣した。知者よ、これを聞いたら、ここで最善のことを行なえ。（一一）」

ユディシティラは言った。

「ドリタラーシトラ王の息子を除いて、その他のいかなる賭博者たちがそこでゲームをするのか。ヴィドゥラよ、あなたにたずねる。幾百と集まって〔いるうちで〕、我らが共にゲームをする人々の名を言って下さい。（一二）」

ヴィドゥラは言った。

「王よ、巧妙で賭博に通じた、卓越した賭博者の、ガーンダーラ国王シャクニ、ヴィヴィンシャティ、チトラセーナ王、サティヤヴラタ、プルミトラ、ジャヤである。（一三）」

ユディシティラは言った。

「非常に危険な賭博者が集まったものだ。彼らは詐術を弄して賭博をするだろう。しかしこの世は配置者(ダートリ)の定めたことに支配される。今、それらの賭博者とゲームしないわけには行かない。（一四）聖者よ、ドリタラーシトラ王の命令であるから、私は賭博に行きたくないと言うことはできない。息子にとって、父はいつも愛しいものだ。ヴィドゥラよ、あなたが私に言うようにするでしょう。（一五）そして、私はシャクニと賭博をしたくないと言うこともできない。もししなければ、無謀な彼は集会場において私に挑戦するでしょう。挑戦されたら、私は決して引き下がりません。私は永久にそう誓ったのです。（一六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ダルマ王はこのようにヴィドゥラに告げてから、急いですべての旅支度をさせて、翌日、一族郎党を連れ、ドラウパディーをはじめとする婦人たちとともに出発した。（一七）

「運命は知性を奪う。光の襲来が眼を奪うように。人間は輪縄で縛られたかのように、配置者の支配下に帰す。（一八）」

ユディシティラ王はそう言って、ヴィドゥラとともに出発した。この勇猛なプリターの息子は、挑戦に応じないことはできないのであった。（一九）

勇士ユディシティラは、バーフリーカに贈られた戦車に乗り、王衣をまとい、弟たちとともに出発した。（二〇）彼はドリタラーシトラに召集され、また時間(カーラ)（運命）の定めにかかりたてら

れ、王者の栄光に輝き、バラモンに先導されて進んで行った。(二一)徳性あるパーンダヴァは、ハースティナプラに着き、ドリタラーシトラの家へ行き、ドリタラーシトラに会った。(二二)彼はまた、ドローナ、ビーシュマ、カルナ、クリパ、ドローナの息子に、適宜に会った。(二三)強力な勇士はまた、ソーマダッタ、ドゥルヨーダナ、シャリヤ、シャクニに会った。(二四)そして、前もってそこに来ていたその他の王たち、ジャヤドラタや、すべてのクルの人々に会った。(二五)それから勇士は、すべての弟たちに囲まれ、英邁なドリタラーシトラ王の家に入った。(二六)そこで夫に忠実なガーンダーリー王妃に会った。彼女は嫁たちに囲まれ、常に星たちに囲まれるローヒニー(月宿の名。「畢」)のようであった。(二七)彼はガーンダーリーに挨拶し、彼女から歓迎されてから、智慧の眼を持つ(盲目の)、年老いた父王(ドリタラーシトラ)に会った。(二八)王はビーマセーナをはじめとする四名のパーンダヴァたちの頭に接吻した。(二九)人中の虎である見目よいパーンダヴァたちを見て、クル族の人々は歓喜した。(三〇)それから彼らは許しを得て退出し、宝石で飾られた各自の部屋に入った。人々はドラウパディーをはじめとする女たちが彼らに近づくのを見た。(三一)ドラウパディーの燃えるかのような最高の気高さを見て、ドリタラーシトラの嫁たちは非常に意気阻喪した。(三二)

それから人中の虎たちは、女たちと再会を約して出て行き、運動をはじめとする日課をし、化粧をした。(三三)それから、日課を終え、神々しい栴檀を塗った一同は、爽快な気分になり、バラモンたちに祝福してもらった。(三四)そしてクルの勇士(パーンダヴァ)たちは、すばらしい食事をしてから宿舎に入った。彼らは女たちに歌を歌ってもらいながら眠った。(三五)彼らが性の悦びを愉しんでいるうちに、その清らかな夜は過ぎていった。そして朝が来て、彼らは疲れもとれ、祝福されながら目覚めた。(三六)こうしてその夜を快適に過ごした一同は、朝の日課をすませ、賭博者たちに満ちた美しい集会場に入った。■(三七)

(第五十二章)

ユディシティラ、賭けに敗れる

シャクニは言った。

「王よ、集会場は賭博の準備ができた。人々はゲームをしようと待ち焦がれている。ユディシティラよ、骰子を投げるに際し、ゲームの協約を定めよう。(一)」

ユディシティラは言った。

「賭博は欺瞞的で罪悪です。それには王族にふさわしい勇壮さがなく、また確固とした政策もありません。王よ、どうしてあなたは賭博を讃えるのですか。(二)実際、人々は賭博者の詐術についての誇りを讃えません。シャクニよ、冷酷な人のように道ならぬ方法で我々をうち負かさないで下さい■(三)」

シャクニは言った。

「〔勝敗の〕計算ができ、詐術に対する作法を知り、賭博にともなう種々の行動に疲れることなく、非常に聡明で賭博をよく知る賭博者が、賭博行為においてあらゆることに対応できる。(四)賭博は我々をこの上なくうち負かすかも知れない。だからこそ、それは時間(カーラ)(運命)で

あるとあなたは言うのである。王よ、我らは賭博をやろう。恐れてはいけない。すぐに賭けなさい。ぐずぐずするな。(五)」

ユディシティラは言った。

「常に諸世界の門を出入する、最高の聖者アシタ・デーヴァラは、次のように告げました。(六)

『詐術により賭博者とゲームすることは罪悪である。しかし、法(ダルマ)により戦闘において勝利することは、最高に優れたゲームである。(七)』

貴人(アーリヤ)は曖昧に話すことはなく、詐術により行動しません。邪でなく正当に戦うこと、これが立派な男の信条であります。(八)我々は能力の限り、バラモンを尊敬しようと努力しています。そこでシャクニよ、財産を過度に賭けないで下さい。あまりにも勝たないで下さい。(九)私は詐術により幸福や財物を望みません。賭博者が詐術を用いない場合でも、賭博行為は称讃されません。(一〇)」

シャクニは言った。

「ユディシティラよ、学者は無学な人に、知者は無知な人に、詐術によって近づく。しかし人々はそれを詐術と呼ばない。(一一)あなたは今、このように私に近づいたが、もしそれが詐術だと思うなら、ゲームをやめよ。もし恐れるのなら。(一二)」

ユディシティラは言った。

「挑戦されたら、私は決して引き下がらない、というのが私の信条です。そして運命(さだめ)は強力

です。王よ、私は運命の支配下にあります。(一三)この集会において、私は誰とゲームするのでしょうか。私に対戦して品物を賭けるのは誰ですか。それでは賭博を始めましょう。(一四)」

ドゥルヨーダナは言った。

「王よ、私が宝物と財物を賭けよう。そしてこの叔父のシャクニが、私のためにゲームをするであろう。(一五)」

ユディシティラは言った。

「他の者が別の者のためにゲームをすることは、私には不公平に思われる。賢い者よ、そのことを承知しておいてくれ。だがよかろう、そのようにしよう。(一六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

かくて賭博が始まった時、すべての王はドリタラーシトラを先頭に、その集会場に入った。(一七)ビーシュマ、ドローナ、クリパ、大知者ヴィドゥラは、あまり乗り気ではなかったが、後について行った。(一八)獅子のような首をした強力な王たちは、二人連れでまたは一人ずつ、きらびやかな大きい獅子座に座った。(一九)その集会場は集まった王たちで輝いていた。天界が集まった栄光ある神々で輝くように。(二〇)彼らはすべてヴェーダに通じ、すべて太陽のように輝く体をしていた。それから、すぐに親しい人々の賭博が始まった。(二一)

ユディシティラは言った。

「王よ、これは海の渦巻から生じた、高価な真珠、最上の金で飾られた美しい最高の真珠の首飾りである。(二二) 王よ、これが私の賭ける品物だ。あなたがそれに対して賭ける物は何か。兄弟、準備しなさい。私はこの賭けに勝つ。(二三)」
ドゥルヨーダナは言った。
「私にも真珠や様々な財物がある。そして私は財物について惜しみはしない。私はこの賭けに勝つ。(二四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
それから、賭博の真髄を知るシャクニは、骰子を取り上げた。そしてシャクニは「勝った」とユディシティラに告げた。(二五)
（第五十三章）

ユディシティラは言った。
「私は詐術によって賭けに敗れた。勝ち誇るシャクニよ（異本の読みをとる）。よし、勝負しよう。何千回でも賭けて。(一) これら一千ニシュカ金貨に満ちた百の容器、宝庫、無尽の財貨、夥しい黄金。王よ、この私の財産を賭けて、あなたと勝負しよう。(二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
王はそう言って（賭けたが）、シャクニは「勝った」と彼に告げた。(三)
ユディシティラは言った。
「この我々をここに運んだ王者の車は、千車にも値し、虎皮でおおわれ、見事に造られ、上質の車輪を装備し、美々しく、鈴の網で飾られている。その最高の車は、雷雲や海のような大音響をたて、勝利をもたらす。(四―五) 尾白鷲（クララ）の色をした国中で評価される八頭の駿馬がそれをひく。地面を歩く者は、それから逃れることはできないであろう。王よ、この私の財産を賭けて、あなたと勝負しよう。(六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。(七)
ユディシティラは言った。
「シャクニよ、私は千頭の精力的な象を持っている。彼らは金の腹帯をし、飾り立てられ、蓮花の斑点を持ち、金の首輪をつけている。(八) よく調教されていて、王が乗るに適し、戦闘において一切の音に耐える。長い牙を持ち、巨軀であり、いずれも八頭の牝象を持つ。(九) すべて城砦を破砕することができ、山や雲のような色をした象たちである。王よ、この私の財産を賭けて、あなたと勝負する。(一〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そのように言うユディシティラに対し、シャクニは嘲笑して、「勝った」と告げた。（二一）

ユディシティラは言った。

「私には若く美しい一万人の奴隷女がいる。彼女らは貝殻の腕環をつけ、金の胸飾りをつけ、美しく飾られている。（二二）高価な花輪で飾られ、美しい衣裳をつけ、栴檀水を注がれ、宝玉や黄金をつけ、薄衣をまとっている。（二三）彼女たちは歌舞に巧みで、私の命により、スナータカ（ヴェーダ修得者）、大臣、王侯に奉仕する。王よ、この私の財産を賭けて、あなたと勝負する。（二四）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それを聞いてシャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。（二五）

ユディシティラは言った。

「私には一万人の奴隷がいる。彼らは好意的で従順であり、常に上等の衣服をまとっている。（二六）賢明で知性あり、巧妙で若く、輝かしい耳環をつけている。彼らは昼夜食器を手に持って客人を接待する。王よ、この私の財産を賭けて、あなたと勝負する。（二七）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それを聞いてシャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。（二八）

ユディシティラは言った。

「［私には］同数の戦車がある。それらは黄金の装飾をつけ、旗を揚げ、訓練した馬をつなぎ、めざましく戦う戦士たちをともなう。（二九）彼らは戦う時も戦わない時も、それぞれ、月給として最高一千の禄を得ている。王よ、私のこの財産を賭けて、あなたと勝負する。（三〇）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ユディシティラにこのように言われて、邪悪なシャクニは敵意をあらわにして、「勝った」と彼に告げた。（三一）

ユディシティラは言った。

「かつてチトララタは満足して、アルジュナに、ガンダルヴァ族の馬たちを与えた。それらは鶺鴒のような葦毛で、黄金の首輪をつけている。王よ、この私の財産を賭けて、あなたと勝負する。（三二）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。

（二三）

ユディシティラは言った。

「私にはふさわしい一万の戦車、車輛、馬があり、それらは種々の牽引動物に囲まれている。（二四）同様に、各種姓（ヴァルナ）ごとに数千人ずつ集めた六万人の戦士がいる。彼らは乳を飲み、米粒を食べ、すべて広い胸をしている。王よ、この私の財産を賭けて、あなたと勝負する。（二五―二六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。（二七）

ユディシティラは言った。

「私には四百の金庫がある。それらは銅と鉄に囲まれ、それぞれ五斛（ドローナ）の純金が入れてある。王よ、この私の財産を賭けて、あなたと勝負する。（二八）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。（二九）

（第五十四章）

ヴィドゥラは言った。

「大王よ、私があなたに申し上げることを注意深く聞きなさい。死のうとする者にとって薬が快くないように、あなたにとって聞いたことが快くなくても。（一）

バラタの一族を滅ぼす、邪な心のドゥルヨーダナは、かつて生まれるやいなや、ジャッカルのように、奇妙な声で吠えた。この男はまさしく我らの死滅の原因となるであろう。ドゥルヨーダナの姿をしたジャッカルが家に住んでいるのに、あなたは彼のことを考えて目覚めようとしない。私はカーヴィヤ（シュクラ）の言葉を申し上げるから聞きなさい。（三）

『蜜を集める人は、蜜を得て、落下することに気づかない。彼は蜜を求めて登り、それに溺れるか、あるいは落下する。（四）』

この男は、蜜に酔うように賭博に酔って、〔その結果を〕考慮しない。勇士たちに敵対し、落下することに全く気づかないのだ。（五）大王よ、王たちにとってふさわしくないことをあなたはよく知っている。アンダカ族、ヤーダヴァ族、ボージャ族は、集結して、カンサを捨てた。（六）そして、彼らの指示によって勇士クリシュナが彼を殺した時、彼のすべての親族は百年もの間喜んでいる。（七）あなたに指示されて、アルジュナがドゥルヨーダナを成敗するようにしなさい。この悪者を成敗して、クル族が幸せに喜べるようにしなさい。（八）鴉とひきかえに孔雀を、ジャッカルとひきかえに虎を買いなさい。王よ、パーンダヴァたちを買いなさい。悲しみの海に沈んではならぬ。（九）

『家族のために一人の男を捨てるべきだ。村のために家族を捨てるべきだ。国土のために村を捨てるべきだ。自己(アートマン)のために地上を捨てるべきだ。(一〇)』
一切智であり、全存在を知り、すべての敵に恐れられるカーヴィヤは、ジャンバを捨てるに際し、偉大な阿修羅たちにこのように告げた。(一一)
王よ、ある男は森に住む黄金を吐く鳥たちを家に住まわせていたが、貪欲から彼らを絞め殺してしまった。(一二)彼は黄金を求め、貪欲に盲目となり、常に享受できた鳥たちを殺し、現在と未来に得られるものを、一度に駄目にした。(一三)バラタの雄牛よ、あなたはその場限りの利得を望んで、パーンドゥの息子たちを害そうとしてはならぬ。鳥を殺した男のように、迷妄から後悔してはならぬ。(一四)バーラタよ、花輪作りが庭園において、繰り返し愛情を注ぎ、一つずつ生じた花を摘むように、パーンダヴァたちから少しずつ花を受け取りなさい。(一五)炭焼きが樹々を焼くように、彼らを根こそぎ焼いてはならぬ。息子や大臣たちや軍隊とともに、滅亡してはならぬ。(一六)というのは、バーラタよ、誰が結束したパーンダヴァたちに対抗できよう。マルト神群をともなったインドラ自身といえども……。王よ。(一七)』

(第五十五章)

ヴィドゥラは続けた。■

「賭博は諍いの根であり、相互の離間や、大きな戦争に帰結する。ドゥルヨーダナは今それ

に訴えた。ドゥルヨーダナは恐ろしい敵意を生み出したのだ。(一)プラティーパとシャンタヌとビーマセーナの子孫たちと、バーフリーカたちは、ドゥルヨーダナの罪によりすべて災いに陥るであろう。(二)ドゥルヨーダナは狂気にかられ、国土から安寧を奪った。興奮して自ら力まかせに角を折る牛のように……。(三)王よ、彼は勇士で賢者でありながら、自己の知見に背き、他人の心に従い、海上で小児が操縦する舟に乗ったかのように、恐ろしい災禍に沈むであろう。(四)ドゥルヨーダナはパーンドゥの息子と賭をし、あなたは彼が勝ったと喜んでいる。この度を越した娯楽から戦争が生じる。それから人類の滅亡が訪れるところの。(五)この誤って導かれた賭博は悪しき結果をもたらす。■政策にもとづいてよく熟慮すべきだ(原文疑問)。ユディシティラと実りある講和をなすべきだ。講和により、優れた弓取り(アルジュナ)は、敵意を捨てる。(六)王よ、プラティーパとシャンタヌの子孫たちよ、聖賢の言葉を聴きなさい。それがあなた方を通り過ぎることがないように。戦争をすることなく、この燃え上がるひどく恐ろしい火を鎮めなさい。(七)もしユディシティラがどうしても辛抱できず、恨みを抑えることができないなら、そして、狼腹(ビーマ)とアルジュナと双子も同様であるなら、戦闘において、あなた方にいかなる寄る辺があるであろうか。(八)大王よ、賭博の前には、あなたは心で望む限りの財産を得ることができた。もしあなたがパーンダヴァたちから多くの財産を勝ち取っても、それが何になるだろう。彼らが財産であると知りなさい。(九)我々はシャクニの賭博のやり方を知っている。この山から来た男は賭博における詐術を知っている。シャクニを帰国させなさい。バーラタよ、この男は幻術により勝負するのだ。

（一〇）」

（第五十六章）

ドゥルヨーダナは言った。

「あなたはいつも敵の名声のみを自慢する。密かにドリタラーシトラの息子たちを非難して。ヴィドゥラよ、我々はあなたのことを知っている。あなたが誰の友であるか。あなたは我々のことを、まるで愚者であるかのように軽蔑している。(一) 他のものを讃える人は、容易にわかる。というのは、彼は嫌いなものを非難し、好きなものを讃えるから。あなたの舌がその心のうちを露呈する。それは強い敵意を告げている。(二) あなたは膝に抱かれた蛇のようだ。あなたは猫のように、養う者に仇をなす。主人殺しよりも悪いことはないと言われる。ヴィドゥラよ、あなたは罪悪を恐れないのか。(三) 敵をうち負かせば、我々には大なる成果が得られる。ヴィドゥラよ、我々に乱暴なことを言うな。あなたは敵との友好関係を望んでいる。そして迷妄により、繰り返し我々に敵対する。(四) 人は我慢できないと言って敵となるが、敵を讃えることについては、秘密を守る。敵についたことの後めたさが、どうして彼を制止しないか。しかしあなたは、今ここで望みのままに話している。(五) 我々を侮ってはならぬ。我らはあなたの心を知っている。長老たちのもとから知性を学べ。ヴィドゥラよ、今までに得た名声を守れ。他人の仕事にかかわるのはやめろ。(六) ヴィドゥラよ、自分が取り仕切ると思って、我々を侮ってはならぬ。我々にいつも乱暴なことを言うな。ヴィドゥラよ、私のためになることをあなたにたずねるつもりはない。ヴィドゥラよ、さようなら。あなたは耐えている者たちを滅ぼしてはいけない。(七) 教導者は一人で、第二の教導者はいない。教導者は胎児をも教導する。私は彼に教えられて、水が下方に流れるように、指示された通りに行なう。(八) 頭で岩を割る者、そして蛇を食べる者、そのような者こそ、なすべきことについて彼の教えを実行するのである。(九) しかし、無理遣りに教えようとする人は、そのために敵を得ることになる。

ところで、友情を追い求める〔ヴィドゥラの〕教えを、賢者は無視すべきである。(一〇) 燃え盛る火をおこしておいて、その前を急いで走らない者は、〔焼死して、〕残った灰すらどこにも得られないだろう。バーラタよ。(一一)

ヴィドゥラよ、敵に味方する敵意ある者を住まわせるべきではない。特に有害な男を。ヴィドゥラよ、そこであなたの望む所へ行くがよい。悪女はいくら可愛がられても、男を捨てるものだから。(一二)」

ヴィドゥラは言った。

「王よ、これほどまでに臣下を捨てる人々にとっては、友情は終わった、と告げて下さい。というのは、王たちの心は揺れ動き、優しく語る場合ですら、棍棒で打ち殺すものであるか[illegible]王子よ、お前は自分は愚かでなく、私が愚かだと思っている。全く思慮なき者よ。[illegible]んであるとしておきながら、後で彼を非難する者は愚かである。(一四) 思慮なき者は幸[illegible]かれぬ。不実の女が学者の家に導かれないように。確かに〔私の忠告〕はこのバラ

タの雄牛には気に入らないであろう。六十歳の夫が少女の気に入らないように。(二五)王子よ、すべての善悪の行為について、もしお前が気に入ることを聞きたいと望むなら、種々の愚か者にたずねるがよい。(二六)プラティーパの子孫よ、実にこの世で気に入ることを言う者は容易に得られる。しかし、不快であるが有益なことを述べ、そして聞く者は得られがたい。(二七)法(ダルマ)を信じ、主君が気に入るか気に入らないかを顧みず、不快であるが有益なことを述べる人、そういう人こそ王の真の友だ。(二八)苦い、刺激的な、熱い、不名誉な、粗野な、悪臭のする薬は、賢者には飲まれるが、愚者はそれを飲まない。大王よ、恨みを鎮めて、それを飲みなさい。(二九)ドリタラーシトラとその息子に、常に名声と財産があることを私は望む。ともあれお暇(いとま)する。バラモンたちが、あなたと私を祝福せんことを。(三〇)賢者は毒を含む眼をした蛇を怒るべきではない。クルの王よ、私はこのように、恭しくあなたに申し上げる。(三一)」

（第五十七章）

弟たちと妻を賭けて取られる

シャクニは言った。

「ユディシティラよ、お前はパーンダヴァの多くの財物を奪われた。クンティーの息子よ、まだ取られない財物がお前にあるなら言ってみよ。(一)」

ユディシティラは言った。

「シャクニよ、私には数えきれない財物があることを私は知っている。しかしシャクニよ、どうしてあなたは私の財物についてたずねるのか。(二)一万、百万、千万、何億、何兆、何京という財を賭けることができる。王よ、この私の財産を賭けて、あなたと勝負する。(三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。

(四)

ユディシティラは言った。

「シャクニよ、シンドゥ川の東方の、種姓に属する人々の所有物は何でも、牛たち、多くの牝牛、無数の山羊や羊など、以上の私の財産を賭けて、あなたと勝負する。(五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。

(六)

ユディシティラは言った。

「王よ、私の都市、地方、領土、バラモンを除く人々の財産、バラモンを除く人民、以上が私に残った財産である。王よ、この私の財産を賭けて、あなたと勝負する。(七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。
(八)
ユディシティラは言った。
「王よ、この王子たちは、耳環や胸飾りや一切の装身具により飾られて輝いている。王よ、私の財産であるそれらの品を賭けて、あなたと勝負する。(九)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。
(一〇)
ユディシティラは言った。
「浅黒く、若く、赤い眼をし、獅子のような肩で、大きい腕を持つナクラと、彼の持つ財産が、私の賭けるものだ。(一一)」
シャクニは言った。
「ユディシティラ王よ、ナクラ王子はお前の愛しい弟だ。もし彼が我々のものになってしまったら、お前は更に何を賭けて勝負するのかね。(一二)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――

しかしシャクニはそう言い終わると、骰子を取り上げた。そして彼は、「勝った」とユディシティラに告げた。(一三)
ユディシティラは言った。
「このサハデーヴァは法(ダルマ)について教える。そして彼は、この世において、賢者と称えられている。この賭けるにふさわしくない王子を、愛しいのに愛しくないように賭けて、あなたと勝負する。(一四)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。
(一五)
シャクニは言った。
「私はお前の愛する、このマードリーの二人の息子を勝ち取った。しかし、ビーマセーナとアルジュナは、お前にとって更に愛しいと思う。(一六)」
ユディシティラは言った。
「愚か者よ、あなたは政策を考慮せず、善良な我々を離間させようとして、実に非道なことを行なっている。(一七)」
シャクニは言った。
「酔った者は穴に落ち、不注意な者は柱にぶつかる。王よ、お前は目上で最も優れている。

パラタの雄牛よ、お前に敬礼する。(二八) 賭博者というものは、勝負している間、酔人のように、夢の中でも目覚めていても見ないようなことをしゃべるのだ。(二九)」

ユディシティラは言った。

「この強力な王子は、敵どもを征服し、舟のように我々を戦闘の彼岸に導く。シャクニよ、賭けるにふさわしくないその世界的英雄アルジュナを賭けて、私は勝負する。(三〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。(三一)

シャクニは言った。

「私は今、パーンダヴァの優れた弓取りアルジュナを勝ち取った。パーンダヴァよ、愛しいビーマを賭けて勝負せよ。それがお前に残った賭けられるものだ。(三二)」

ユディシティラは言った。

「彼は我々の導き手であり、我らの戦いの指導者であり、インドラのように悪魔の最大の敵である。その偉大な男は、眉をひそめ、斜めに見る。獅子のような肩をし、常に猛々しい。(三三) 力にかけて彼に匹敵する男はいない。棍棒で戦う者たちのうちで最強の勇士である。賭けるにふさわしくない、そのビーマセーナ王子を賭けて、私は勝負する。王よ。(三四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。(三五)

シャクニは言った。

「あなたは多くの財産、弟たち、馬や象を失った。クンティーの息子よ、もし取られていない財産があなたに有るなら言いなさい。(三六)」

ユディシティラは言った。

「すべての弟たちに愛されているこの私が残っている。もし敗れたら、この身を逆境におき、我らは自らあなたの仕事をする。(三七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それを聞いて、シャクニは準備し、詐術を用いて、「勝った」とユディシティラに告げた。(三八)

シャクニは言った。

「自分を取られるとは、最悪のことをしたものだ。王よ、財産が残っている時に、自分を取られることは罪悪だ。(三九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

賭博に巧みな男はそう言って、賭博において、骰子を投じて、残ったすべての世界的な英雄たちを、一人ずつ勝ち取った。(三〇)

シャクニは言った。

「あなたには愛しい王妃がいる。それだけがまだ賭けで取られないものだ。パーンチャーラの王女クリシュナー（ドラウパディー）を賭けなさい。彼女を賭けて自分を取りもどしなさい。(三一)」

ユディシティラは言った。

「彼女は背が低からず高からず、色は黒すぎず赤くもなく、その眼は愛情に満ちて赤い。私は彼女を賭けてあなたと勝負する。(三二) 彼女の眼は秋の蓮の花弁のよう、その香は秋の蓮花の香のようである。その美しさで秋の月に仕えるかのようであり、吉祥天女さながらである。(三三) 彼女は柔和であり、容色にめぐまれ、よい性質にめぐまれているから、男は彼女を妻に望むのである。(三四) 彼女は最後に眠り、最初に目覚める。牛飼や羊飼に至るまで、彼女はその行なったこと、行なわなかったことをすべて知っている。(三五) 汗をかいたその顔は蓮花のように、またジャスミンのように輝いている。彼女はヴェーディー祭壇のようにくびれた胴を持ち、長い髪、赤い眼を持ち、体毛は濃すぎない。(三六) 王よ、このようなパーンチャーラの王女、美しい胴をした魅力的な肢体のドラウパディーを賭けて勝負する。さあ、シャクニよ。(三七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

このようにダルマ王が言った時、集会場にいた長老たちは、「ああ、何たること」という言葉を発した。(三八) その集会場は動揺した。王たちはざわめいた。ビーシュマやドローナやクリパなどは冷汗をかいた。(三九) ヴィドゥラは頭を抱えて、茫然自失の状態になった。彼は考えこんでうつむき、蛇のようにため息をついていた。(四〇) しかしドリタラーシトラは喜んで、「勝ったか、勝ったか」と何度もたずねた。内心が表情に出るのを隠すことができなかったのである。(四一) カルナやドゥフシャーサナなどはこの上なく喜んだ。しかし、集会場にいる他の人々の眼からは、涙が落ちていた。(四二) だが勝ち誇るシャクニは、勝利に酔い痴れ、躊躇することなく賭博をして、「勝った」と告げた。(四三)

（第五十八章）

ドラウパディーの凌辱

ドゥルヨーダナは言った。

「さあ、ヴィドゥラよ、ドラウパディーを連れて来なさい。パーンダヴァたちに敬愛された、愛しい妻を。部屋を掃除させなさい。急いで使い走りさせなさい。奴隷女たちとともに。我々が喜ぶように……。(一)」

ヴィドゥラは言った。

「お前のような男によって、考えられないことが起こった。愚か者よ、お前は輪縄に縛られているのに、気づかない。断崖にぶらさがっているのに、それがわからない。お前はあまり

の愚かしさから、鹿が虎を怒らせるようなことをしている。(二)お前の頭上には、猛毒に満ちた蛇がいる。愚鈍な男よ、怒るな。ヤマ(閻魔)の国へ行ってはならぬ。(三)バーラタよ、実にクリシュナー(ドラウパディー)は奴隷女の状態にはなっていないと私は考える。自由を失った王が彼女を賭けたのであるから。(四)

このドリタラーシトラの息子である王は、竹のように、実を結ぶ時に身を滅ぼす(竹は実をつける時に枯れるとされる)。まことに賭博は非常に危険な不和をもたらす。彼は死期に達し、そのことを知らない。(五)人は他者を傷つけてはならぬ。辛辣に語るな。劣った者からあまりにも多くを奪ってはならぬ。他人が苦しむような、相手を傷つける非道な言葉を述べてはならぬ。(六)というのは、乱暴な言葉は、口から発せられ、それらに傷つけられた者は昼夜悲しむ。それらの言葉は他人の弱点に落ちずにはいない。賢者はそのような言葉を他者に発すべきではない。(七)ある山羊は、刀がなかった時、足で地面を掘って、刀を掘り出した。それは自分の首を切る恐ろしい道具となったという。それと同じように、パーンドゥの息子たちとの不和を掘りおこしてはならぬ。(八)人々は〔一般の〕林住者や家住者については、よくも悪くも言わない。しかし学問を完成した苦行者に対しては、常にかくのごとく、犬のように吠える。(九)不正は非常に恐ろしい地獄の門であることを、ドリタラーシトラの息子よ、あなたは知らない。賭博の勝利に際し、クル族の多くの人々は、ドゥフシャーサナとともに、あなたに従うであろう。(一〇)瓢箪が沈み石が浮かぶ。舟は常に水上でさまよう。ドリタラーシトラの息子である愚かな王は、私の有益な言葉を聞こうとしない。(一一)必ずやクル族の滅亡があるであろう。非常に恐ろしい、すべてを奪う滅亡が。親しい人々の有益な聖賢の言葉は聞き入れられず、貪欲のみが栄える。(一二)」

(第五十九章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ドリタラーシトラの息子は慢心に酔い痴れ、「ヴィドゥラめ、いまいましい」と言いながら、集会場にいる案内係を見た。そして、高貴な人々の中で、彼に告げた。(一)

「案内係よ、お前がドラウパディーを連れて来い。パーンダヴァたちを恐れることはない。ここにいる臆病なヴィドゥラは反対するが、彼はいつも我々の繁栄を望まないのだ。(二)」

このように言われた、吟誦者(スータ)である案内係は、王の言葉を聞くと急いで出かけて行った。彼は獅子の住処に入る犬のように入り、パーンダヴァの王妃に会った。(三)

案内係は言った。

「ドラウパディー様、ユディシティラ様が賭博に狂った時、ドゥルヨーダナ様があなたを勝ち取りました。そこであなたは、ドリタラーシトラ王の住居においで下さい。ヤジュニャセーナ(ドルパダ)の娘よ、仕事をするためにあなたをお連れするのです。(四)」

ドラウパディーは言った。

「案内係よ、一体どうしてお前はそのように言うのです。王が妻を賭けたりするでしょうか。王は賭博に狂って血迷ったのです。ああ、何か他に賭けるものがなかったのですか。(五)」

案内係は言った。
「他に賭けるものがなくなった時、ユディシティラ様はあなたを賭けたのです。王はまず弟たちを賭け、次に自分自身を賭け、それからあなたを賭けたのです。王女様。(六)」
ドラウパディーは言った。
「吟誦者（スータ）の息子よ、行って集会場にいるあの博奕打ちにたずねなさい。『バーラタよ、あなたは先に自分自身を取られたか、それとも私を取られたか』と。そのことを知ったら、あなたはここに来て、私を連れて行きなさい。吟誦者の息子よ。(七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
彼は集会場に行き、ドラウパディーの言葉を告げた。
「『誰の主人としてあなたは私たちを取られたのですか』とドラウパディーはあなたにたずねました。『あなたは先に自分自身を取られたのか、それとも私を取られたのか』と。(八)」
しかしユディシティラは身動きせず、茫然自失の状態であった。彼は吟誦者に、うんともすんとも答えなかった。(九)
ドゥルヨーダナは言った。
「パーンチャーラの王女クリシュナー（ドラウパディー）がここに来て、彼にたずねればいい。ここにいるすべての者が、彼女と彼の言葉を聞くようにせよ。(一〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
吟誦者（スータ）である案内係は、ドゥルヨーダナの支配下にあったので、王宮に行って、悩むかのようにドラウパディーに告げた。(一一)
「王女様、集会場にいる人々がお呼びです。クル一族の滅亡が訪れたと私は思います。王女様、もしあなたが集会場に来られれば、あの愚かな方は繁栄を守れないでしょう。(一二)」
ドラウパディーは言った。
「きっと制定者（運命）がそのように定めたものでしょう。賢者も愚者も二様の接触（幸福と不幸？）に触れるのです。しかし、この世で法（ダルマ）のみが最高であると言われます。それは守護されれば我々に平安をもたらします。(一三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
一方、ユディシティラはドゥルヨーダナの意図を聞くと、ドラウパディーに敬愛された使者を送った。(一四)パーンチャーラの王女は、生理期間中で、一衣のみを下半身にまとい、泣きながら集会場に行き、義父の前にいた。(一五)それから、彼らの顔を見て、ドゥルヨーダナ王は喜んで吟誦者に言った。
「案内係よ、彼女をこの場に連れて来い。クル族の人々が彼女の面前で話せるように。(一六)」
吟誦者は彼の支配下にあったが、ドラウパディーの怒りを恐れて、誇りを捨て、再び会衆

にたずねた。
「私はクリシュナー様に何を申し上げたらよいのですか。(一七)」
ドゥルヨーダナは言った。
「ドゥフシャーサナよ、この私の吟誦者は愚かで、狼腹(ビーマ)を恐れている。お前は自らドラウパディーをつかまえて連れて来い。我々の無力なライバルはお前に何をすることができるか。(一八)」
そこでその王子は兄の言葉を聞くと立ち上がり、怒りでその眼を赤くし、勇士たちの部屋に入ると、王女ドラウパディーに告げた。(一九)
「さあ、来い、パーンチャーラの王女よ。クリシュナーよ、お前は勝ち取られた。恥じらいを捨てて、ドゥルヨーダナを見ろ。切れ長の蓮の眼をした女よ、クル族の人々を愛せよ。お前は合法的に獲得されたのだ。集会場へ行こう。(二〇)」
すると彼女は悲嘆に暮れて立ち上がり、青ざめた顔を手でぬぐい、思い悩んで、クルの雄牛である老王の女たちがいるところへ走った。(二一)ドゥフシャーサナは怒って大声をあげながら、急いで王妃に追いすがり、彼女の長い波うつ黒髪をつかんだ。(二二)ラージャスーヤの大祭において、祭祀の終わりの沐浴に際し、聖句(マントラ)で清められた水を灌がれた髪を、ドゥフシャーサナはパーンダヴァの力を軽んじて、無理遣りに撫でまわした。(二三)彼は黒い髪のクリシュナーを撫でてから、集会場の近くに連れて行き、主人(夫)を持つ彼女を主人がいないかのように引きずって行った。風が苦しむバナナの木を引きずるように。(二四)彼女

は引きずられながら細い身体を撓めて、静かに告げた。
「今日は私は生理中です。愚かな人よ、私は一枚の衣しか着ていません。私を集会場に連れて行くのはよくありません。卑しい人。(二五)」
すると彼は、力ずくで黒髪をつかんで、クリシュナーに言った。
「クリシュナ、ジシュヌ、ハリ、ナラに、救いを求めて叫べ。それでもお前を連れて行くぞ。(二六)ドラウパディーよ、お前が生理中であろうと、一枚の衣だけであろうと、全裸であろうとかまわない。お前は賭博で勝ち取られて、奴隷にされたのだ。そして奴隷女に対しては、好きなようにしてもかまわないのだ。(二七)」
クリシュナーは髪をふり乱し、その衣は半ば落ち、ドゥフシャーサナに弄ばれ、恥じらい、怒りに燃えながらも、静かに次のように告げた。(二八)
「集会場には、教典を学び、祭式を行なう、すべてインドラのような人々、すべて目上(グル)のような人々、実際に目上である人々がいます。このような状態で彼らの前に立つことはできません。(二九)邪悪な行為をする人よ、卑しいふるまいをする人よ、裸にしないで。苦しめないで下さい。王子たちはあなたを許さないでしょう。もしインドラをはじめとする神々があなたの助力者であるとしても。(三〇)ダルマの息子である王は、法(ダルマ)に立脚しています。そして法は微妙で、賢者のみがそれを理解できます。たとい主人の言葉によっても、私は自分の美徳を捨ててほんのわずかの過失をも犯したくありません。(三一)クルの勇士たちの中で、生理中の私を引きずることは卑しいことです。しかし誰もあなたを非難しない(異本による)。き

っと彼らはあなたの考えに従っているのだ。(三二)何たること。実にバラタ一族の法は滅びたのだ。王族の道を知る人々の作法も滅びたのだ。集会場にいるすべてのクル族の人々は、クルの法の境界が害なわれるのをただ見ているのだから。(三三)ドローナやビーシュマには気概がない。またこの偉大な王にも、確かに……。クルの主立った長老たちは、この恐ろしい非法を見ようとしない。(三四)」

美しい胴の女は、悲し気にそう言いながら、なじるような眼で、怒っている夫たちを見た。彼女はそのながしめによって、怒りを全身にみなぎらせているパーンダヴァたちを燃やした。(三五)王国や財産や主要な宝が奪われても、苦しみ、怒りを含んだクリシュナーのながしめに見られるほど苦しくはなかった。(三六)しかし、ドゥフシャーサナは、哀れな夫たちを見つめているクリシュナーを見て、激しく彼女を揺すぶり、ほとんど気を失わんばかりの彼女に、「奴隷女め」と言った。冷酷に、薄笑いを浮かべて。(三七)カルナは、その言葉を殊の外に喜び、声をあげて笑いながら誉めそやした。ガーンダーラの王である、スバラの息子(シャクニ)もまた、ドゥフシャーサナを称えた。(三八)しかしその二人とドゥルヨーダナ以外の、集会場にいるその他の人々は、集会場で引きずられているクリシュナーを見て、非常に苦しんだのであった。(三九)

ビーシュマは言った。

「美しい女よ、法は微妙であるから、私はあなたの問いに適切に答えることはできない。自己の財産を持たぬ者は他者の財産を賭けることはできない。しかしまた、女性というものは

夫の支配下にあると見て……。(四〇)ユディシティラは繁栄する全地上を捨てるとも、真実を捨てないであろう。そして彼は、『私は勝ち取られた』と告げた。それ故、私はこの問いに答えることができない。(四一)シャクニは人々の間で、賭博にかけて無敵である。彼はユディシティラを自由意志に任せた。その偉大な男はそれが詐術であると考えなかった。それ故、私はあなたの問いに答えられない。(四二)」

ドラウパディーは言った。

「巧妙で邪悪で不実で卑しい賭博の好きな連中に、集会場で挑戦されて、王はあまり努力して(熟練して)いないのに、どうして彼は自由意志に任されたと言うのですか。(四三)その清らかな心の、クルとパーンダヴァの長は、詐術を用いられることに気づかず勝負を交わし、すべてを奪われてから、私を賭けることに同意しました(原文疑問)。(四四)この集会場にいるクル族の人々、息子たちや嫁たちの持ち主はすべて、私の言葉をよく考慮して、私の問いに適切に答えて下さい。(四五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

彼女はそのように告げて、悲嘆に暮れて泣き、何度も夫たちを見ていたが、ドゥフシャーサナは彼女に、乱暴で敵意に満ちた残酷な言葉を述べた。(四六)彼女は生理中であったが引きずられ、その上衣はずり落ち、全くふさわしからぬ仕打ちを受けていた。狼腹(ビーマ)はユディシティラを見て、この上なく苦しみ、怒りをぶつけた。(四七)

(第六十章)

ビーマは言った。

「ユディシティラよ、賭博者たちの国には多くの身持ちの悪い女がいる。しかし彼らは、彼女たちを賭けて勝負しない。彼女らに対しても憫れみがあるのだ。（一）カーシ国王がもたらした貢物、及びその他の最上のもの、そしてその他の王たちが捧げた諸宝、乗物、財物、鎧、諸々の武器、王国、自分自身、我々、以上のものが賭博により敵に奪われた。（二―三）しかしその点については私は怒らない。あなたは我々の一切の所有者だから。だが、ドラウパディーを賭けるのはやりすぎだと思う。（四）彼女はそんなことにふさわしくない。この乙女はパーンダヴァに嫁したが、あなたのせいで、卑しくて冷酷で詐術を好むカウラヴァの連中に悩まされている。（五）王よ、彼女のためにあなたに怒りをぶつける。私はあなたの両腕を燃やすぞ。サハデーヴァよ、火を持って来い。（六）」

アルジュナは言った。

「ビーマセーナよ、あなたは未だかつてそのような言葉を言ったことがない。きっとあなたの法（ダルマ）を重んずる気持は、冷酷な敵どもにより奪われたのだ。（七）敵たちの望みをかなえてはならぬ。最高の法のみを実践せよ。徳高い長兄に背いてはいけない。（八）王は敵に挑戦され、王族の法（クシャトラダルマ）を念頭に置いて、敵の望みのままに勝負したのだ。これは我々にとって大いに名誉なことだ。（九）」

ビーマセーナは言った。

「アルジュナよ、もし彼がそのような動機でやったのではないと考えるなら（異本による）、私は力ずくで、その両腕とも燃え盛る火の中で燃やしてやるのだが。（一〇）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ドリタラーシトラの息子ヴィカルナは、パーンダヴァたちとパーンチャーラの王女が苦しんでいるのを見て、次のように言った。（一一）

「王たちよ、ドラウパディーが告げた問いに答えよ。その問いに答えなければ、我々はすぐさま地獄に堕ちるであろう。（一二）ビーシュマとドリタラーシトラはクル族の最長老である。その二人とも、ここにいるが、何も言わない。大知者のヴィドゥラも同様である。（一三）みなの師であるドローナとクリパは、最高のバラモンであるが、その二人も問いに答えない。（一四）すべての方角から集まったその他の王たちは、欲望と怒りを捨てて、正しいと思うことを言うべきである。（一五）王たちよ、どちらの側であろうと、この美しいドラウパディーが何度も言った言葉についてよく考えて答えなさい。（一六）」

彼は集会場にいる人々に、このように何度も告げた。しかし、王たちは、彼によいとも悪いとも答えなかった。（一七）ヴィカルナはこのように、すべての王に繰り返したずねてから、両手をこすり合わせて、ため息をつき、次のように言った。（一八）

「王たちよ、問いに答えようと答えまいと、この場合私が正しいと考えることを申し上げる。

クル族の人々よ。(一九)最上の人々よ、王たちにとって、狩猟、飲酒、賭博、淫事に耽ることは、四つの悪徳であると言われる。(二〇)これらに執着した人は法を捨てる。このように不適切になされた行為を、世人は尊重しない。(二一)このパーンドゥの息子は、賭博者たちに挑戦され、この上なく悪徳に耽溺して、ドラウパディーを賭けた。(二二)そしてこの非の打ち所がない婦人は、パーンダヴァすべての共通の妻である。またユディシティラは前に自らを勝ち取られたのに、彼女を賭けたのである。(二三)そしてまたシャクニが、賭ける物を求めて彼女を指名したのである。以上すべてを考慮して、彼女は勝ち取られていないと私は思う。(二四)」

それを聞いて、集会場にいる人々の間に、ヴィカルナを讃えシャクニを非難する大喚声が上がった。(二五)その声がやんだ時、ラーダーの息子(カルナ)は怒り狂って、その輝かしい腕を広げて次のように言った。(二六)

「ヴィカルナには多くの誤りが見られる。火鑽棒から生じた火が棒を燃やすように、彼から生じたものが彼を滅ぼすことになる。(二七)これらの人々は、クリシュナー(ドラウパディー)にうながされても、何も言わない。ドルパダの娘は合法的に勝ち取られたと私は考えるが、彼らもそう考えているのだ。(二八)ヴィカルナよ、お前は単なる幼稚さから悩んでいる。お前は子供なのに、集会場の中で、長老のような言葉を言うとは。(二九)ドゥルヨーダナの弟よ、お前は真に法を知らない。まったく愚かにも、勝ち取られたクリシュナーが勝ち取られなかったと言うのだから。(三〇)ヴィカルナよ、パーンダヴァの長子が集会場で全財産を引き渡し

た時、お前はどうしてクリシュナーが勝ち取られなかったと考えるのか。(三一)バラタの雄牛よ、ドラウパディーは彼の全財産の中に含まれる。それなのに、お前はどうして、合法的に勝ち取られた彼女が勝ち取られなかったと考えるのか。(三二)ドラウパディーは指名されて、パーンダヴァたちによって承認された。いかなる理由で、お前は彼女が勝ち取られなかったと考えるのか。(三三)

また、彼女が一衣のみで集会場に連れて来られたことを非法であると考えるなら、その点についても、私のすばらしい言葉を聞け。(三四)クルの王子よ、女性は一人の夫を持つと神々に定められた。しかし彼女は多くの夫に従っているから、まさしく娼婦である。(三五)彼女を集会場に連れて来たのは不思議ではないと私は思う。一衣であろうと、全裸であろうと……。(三六)彼女はパーンダヴァたちの財産であり、彼らはシャクニによって合法的に全財産を勝ち取られたのだ。(三七)ドゥフシャーサナよ、このもっともらしく話すヴィカルナはまるで子供である。パーンダヴァたちとドラウパディーの着物をはぎ取れ。(三八)」

それを聞くと、すべてのパーンダヴァは自分たちの上衣を脱ぎ捨てて、集会場に座りこんだ。(三九)するとドゥフシャーサナは、集会場の中で、ドラウパディーの衣を力まかせに引っぱって脱がせようとした。(四〇)しかし、ドラウパディーの衣が引きはがされる度に、幾度も、それと同様の衣が現われ出るのであった。(四一)するとすべての王は、その世にも不思議な奇蹟を見て、ものすごい歓呼の叫び声をあげた。(四二)その時、ビーマは諸王の中で大声をあげ、怒りで唇をふるわせ、両手をこすり合せて呪った。(四三)

「この世に住む王族(クシャトリヤ)たちよ、私のこの言葉を聞け。他の人々によってかつて発せられたことがなく、これから他の人が発することのないであろうような言葉を。(四四) 諸王よ、もし次のように言って実行しなければ、私はすべての祖先たちの行なった道に達せなくてよい。(四五) もし戦いにおいて、この邪悪で生まれ損ないの、バラタ族の外道の胸を力まかせに裂いて、その血を飲まなければ……。(四六)」

すべての人々をふるい立たせる彼の言葉を聞いて、聴衆はドリタラーシトラの息子を非難しつつ、それを大いに讃えた。(四七)

集会場の中で、衣が山と積まれた時、ドゥフシャーサナは疲れ、恥じ入って座った。(四八) それから、集会場にいる王たちは、クンティーの息子たちを見て、総毛立たせるような非難の声をあげた。(四九) 人々はドリタラーシトラを非難して、「クル族の人々はあの問いに答えなかった」と叫んだ。(五〇)

すると、すべての法(ダルマ)を知るヴィドゥラは、手を上げて集会場にいる人々を制し、次のように告げた。(五一)

ヴィドゥラは言った。

「ドラウパディーはあのように質問して、身寄りがいないかのようにひどく泣いている。集会場にいる人々よ、もしその問いに答えなければ、法が損なわれることになる。(五二) というのは、誰か燃え盛る火のように苦しむ人が集会場に来るなら、集会場の人々は、真実の法により彼を鎮めるものだ。(五三) もし苦しむ人が集会場の人々に対して、法に則する質問を

するならば、彼らは欲と怒りにとらわれず、その質問に答えなければならぬ。(五四) 王たちよ、ヴィカルナはその問いに、彼が正しいと思うことを答えた。あなた方も、その問いに対し、正しいと思うことを述べなさい。(五五) 集会場(廷法)にいる法を知る人が、質問に対して答えないなら、偽証の罪の半分を得る。(五六) また、集会場にいる法を知る人が、偽って答えるならば、必ずや偽証の罪のすべてを得る。(五七) この点に関し、人々は古(いにしえ)の伝承を例としてあげる。プラフラーダと、アンギラスの息子である聖者(ムニ)との対話を。(五八)

プラフラーダという魔類の王がいた。彼の息子がヴィローチャナである。彼はある少女のことでアンギラスの息子スダンヴァンと争った。(五九) 二人は少女を欲して、互いに自分の方が優れていると言い、生命を賭けて賭けをした。(六〇) 二人はその問題について論争をし、プラフラーダにたずねた。

『我々のうちのどちらが優れていますか。その質問に答えて下さい。嘘をついてはいけません。(六一)』

彼はその論争に驚いて、スダンヴァンを見た。スダンヴァンは怒り、梵杖(バラモンの呪詛)のように燃えて彼に言った。(六二)

『プラフラーダよ、もしあなたが嘘をついたり、答えなかったりすれば、インドラ(帝釈天)がその金剛杵(ヴァジュラ)であなたの頭を撃って百に砕くだろう。(六三)』

スダンヴァンにそう言われて、魔王はアシュヴァッタ樹の葉のようにふるえ、威力に満ちたカシャパのもとに相談しに行った。(六四)

プラフラーダは言った。
『あなたは神と阿修羅(アスラ)の法(ダルマ)を知っています。大知者よ、このバラモンの法に関する難問を聞いて下さい。(六五) 質問に答えなかったり、あるいは偽って答えたりすれば、その人の来世はいかなるものか、どうか私に告げて下さい。(六六)』
カシャパは言った。
『欲望や怒りや恐れから、知りながら質問に答えなければ、自分に対し千のヴァルナの輪縄を放つことになる。(六七) 満一年たつと、彼の一つの輪縄が取り除かれる。それ故、真実を知っている人は、速やかに真実を述べるべきである。(六八) 非法により刺し貫かれた法が集会場(法廷)に来た場合、会衆がその矢を断たなければ、彼らがそれに刺し貫かれる。(六九) もし人々が非難される行為を非難しなければ、集会場の長はその罪の半分を受け、四分の一は行為者に帰し、あとの四分の一は会衆に帰す。(七〇) 非難されるべきものが非難されれば、長は罪なく、会衆は罪を免れ、罪は行為者に帰す。(七一) しかるにプラフラーダよ、問う者に対し、法について偽って答える人々は、前後七世代にわたって慈善の行為を台無しにするであろう。(七二) 財産を奪われた者の苦しみ、息子を殺された者の苦しみ、借手に対する(貸手の)苦しみ、王に強奪された者の苦しみ。(七三) 夫を失った婦人の苦しみ、仲間外れされた者の苦しみ、多妻を持つ男の妻、証人たちに破滅させられた者の苦しみ。(七四) これらの苦しみは等しいと主たる神々は述べた。偽って答える者は、以上すべての苦しみを得る。(七五) 直接に見ること、聞くこと、理解することにより証言がある。それ故、証人は真実を

述べれば、法(ダルマ)と実利(アルタ)を失うことはない。(七六)』」
ヴィドゥラは続けた。
「カシャパの言葉を聞いて、プラフラーダは息子に告げた。
『スダンヴァンはお前より優れている。(彼の父の)アンギラスは私より優れているから。(七七) またスダンヴァンの母はお前の母より優れているから。ヴィローチャナよ、今やスダンヴァンはお前の生命の主である。(七八)』
スダンヴァンは言った。
『あなたは息子への愛情を捨てて、法を守りました。そこで私はあなたの息子を解放します。彼が百年間生きますように。(七九)』」
ヴィドゥラは続けた。
「集会場にいるすべての人々は、このように最高の法を聞いて、クリシュナーの問いにどのように答えるべきか考えなさい。(八〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
ヴィドゥラの言葉を聞いても、王たちは何も答えなかった。しかし、カルナはドゥフシャーサナに告げた。
「この奴隷女のクリシュナーを家に連れて行け。(八一)」
ドゥフシャーサナは集会場の中で彼女を引きずった。彼女はふるえ、恥じらい、パーンダ

ヴァたちに向かって嘆声をあげていた。(八二)

(第六十一章)

ドラウパディーは言った。

「私には前にしなければならなかった大切な仕事がありました。この強力な男に力ずくで引きずられて、私は動転していたのです。(一) 私はこのクルの集会において、目上の方々に挨拶しなければなりません。私がそれをしないで、過失を犯すことがないように。(二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼女は哀れにも彼に力まかせに引きずりまわされ、そのようなしうちに慣れていないので、集会場の中で倒れ、次のように嘆いた。(三)

ドラウパディーは言った。

「私はあの婿選び式において、競技場で、集まった王たちにより見られました。しかしその他の場所では、かつて見られたことがありません。ところが、その私が今、集会場に連れて来られました。(四) 家においては、風や太陽もかつて私を見たことがありません。その私が今、クルの集会において、集会場の中で見られています。(五) パーンダヴァたちは、前には、家の中で私が風に触れられることさえ耐えられなかったのに、今や、その私が邪悪な男に触れられているのに耐えています。(六) そしてこのクル族の人々も、嫁であり娘である私が、

ふさわしくなく苦しめられているのを容認しています。世も末だと思います。(七) これよりも嘆かわしいことがあるでしょうか。貞節で殊勝な女性である私が、今、集会場の中に入らなければならぬとは。王たちの法(ダルマ)はどこにあるのです。(八) 以前は敬虔な女性を集会場に連れて行くということはなかった、と私たちは聞いています。その古の永遠の法は、クル族の間で失われました。(九) パーンドゥの息子たちの妻、ドリシタデュムナの妹、ヴァースデーヴァ(クリシュナ)の友である私が、どうして王たちの集会場に入りましょうか。(一〇) ダルマ王(ユディシティラ)の、等しい階級に生まれた妻である私が、奴隷女であるかないか、クル族の人々よ、言って下さい。その通りにしましょう。(一一) というのは、このクル族の名声を奪う卑劣な男が、私をひどく悩ませるのです。クル族の人々よ、私はこれ以上耐えられません。(一二) 王たちよ、私が勝ち取られたか否か、考えられる通りに答えて欲しいのです。クル族の人々よ、私はその通りにしましょう。(一三)」

ビーシュマは言った。

「善女よ、私は法の最高の帰趨を述べた。世の偉大なバラモンたちも、それに達することができない。(一四) 世間において、法の境界においては、強力な人が法と見ることが、他の人々によって法であると言われる。(一五) 私は確信をもってあなたの質問に答えることができない。問題は微妙で、難解で、重大であるから。(一六) きっとこの一族は遠からず滅亡するのであろう。というのは、すべてのクル族の人々は貪欲と迷妄に支配されているから。(一七) 善女よ、良家に生まれた人々は、どのように災禍に悩まされても、正しい道からそれ

ることはない。我々の嫁であるあなたがそうであるように。(一八)パーンチャーラの王女よ、そしてあなたのこのような行為は適切である。あなたは苦境に陥っても、法を考慮しているのだから。(一九)あの長老のドローナなど、法を知る人々は、空虚な身体をして、生気が抜けたように、うつむいて立っている。(二〇)しかしユディシティラは、この質問に関する権威であると私は考える。あなたが勝ち取られたか否か、彼が自ら告げるべきである。(二一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

このような多くのことを見て、またドラウパディーが苦しむ雌の鶚(または、尾白鷲)のように泣き叫ぶのを見ても、王たちはドゥルヨーダナを恐れて、よいとも悪いとも言わなかった。(二二)ドゥルヨーダナは、王たちとその息子や孫たちが沈黙しているのを見て、その時、嘲笑してパーンチャーラの王女に言った。(二三)

「ドラウパディーよ、気力あふれるビーマ、アルジュナ、サハデーヴァ、ナクラというお前の夫に質問せよ。お前の発した問いに対し、彼らに答えさせろ。(二四)パーンチャーラの王女よ、お前のために、高貴な人々の中で、彼らにユディシティラは主君でないと言わせろ。彼らすべてが、ユディシティラは嘘つきであると言うべきである。パーンチャーラの王女よ、そうすればお前は奴隷の状態から解放されるであろう。(二五)また、インドラにも似た、法を守る偉大なユディシティラが、自ら次のことを告げよ。彼はお前の主人であるか否かを。

彼の言葉によって、速やかに誰か一人を愛せ。(二六)というのは、この集会場にいるすべてのクル族の人々は、まさにお前の苦悩の中で戸惑っている。その高貴な人々は、お前の不幸な夫たちを見て、正しく問いに答えられない。(二七)」

すると集会場にいる多くの人々は、クルの王の言葉を、声高らかに讃えた。彼らは大声をあげて衣服を振った。しかし、「ああ、ああ」という嘆声も聞こえた。だが、ほとんどすべての王たちは喜んで、「法にかなった」とクルの長を讃えた。(二八)すべての王は顔を横に向けて、ユディシティラを見つめた。

「法を知る彼は何を言うだろうか。戦いにおいて無敵のアルジュナは何を言うだろうか。ビーマセーナと双子は何を言うだろうか」と、大いに好奇心にかられて。(二九―三〇)

ざわめきが静まった時、ビーマセーナは栴檀を塗った大きくて太い腕を拡げて、次のように言った。(三一)

「もしこのダルマ王ユディシティラが、我々の目上で一族の主君でなかったら、我々は我慢しないのだが。(三二)彼は我々の福徳の主であり、生命の主でもある。もし彼が、自分は勝ち取られたと考えるなら、我々も勝ち取られたのだ。(三三)地上を歩く人間が、パーンチャーラの王女の髪に触れたりしたら、生きて私から逃れることはできないだろう。(三四)この私の鉄棒のような、長く太い両腕を見よ。この両腕につかまったら、インドラですら逃れることはできないだろう。(三五)しかし、このように法の輪縄に縛られ、兄に対する敬意に妨げられ、アルジュナに制止されて、私は恐ろしいことをしないのだ。(三六)だがダルマ王に

許可されたら、私は獅子が小動物を襲うように、刀のような平手により、邪悪なドリタラーシトラの息子たちを粉砕してやるのだが。(三七)」

その時、ビーシュマとドローナとヴィドゥラが彼に告げた。

「そのように耐えていなさい。そうすれば、お前にとってすべてが可能である。(三八)」

（第六十二章）

カルナは言った。

「この世には財産を持たぬ者が三名いる。奴隷と弟子と他に依存する婦人とである。可愛い女よ、お前は奴隷の妻だ。彼の『財産』なのだ。奴隷の妻は奴隷の『財産』であり、奴隷女である。(一) さあ、中に入って我々の召使とともに奉仕せよ。家に入れられたら、命じられた仕事をせよ（テクスト疑問）。王女よ、パーンダヴァたちでなく、すべてのドリタラーシトラの息子たちがお前の主人である。(二) 美しい女よ、すぐに他の夫を選べ。お前を賭けて奴隷にしないような。奴隷の場合、夫に対する放縦は常に非難されないと認められていることが、お前に適用さるべきだ。(三) ナクラ、ビーマセーナ、ユディシティラ、サハデーヴァ、アルジュナは勝ち取られた。ドラウパディーよ、お前は奴隷女となった。中に入れ。勝ち取られた彼らはお前の夫ではない。(四) そしてユディシティラは、自分にとって勇武や男らしさが何の意味があると考えるのか。彼は集会場の中で、このパーンチャーラ国王ドルパダの娘を賭けるようなことまでしたのだから。(五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それを聞くとビーマセーナは非常に怒り、苦悩の相をして、激しくため息をついた。王に従い、法（ダルマ）の輪縄に縛られてはいたが、怒りで眼を赤くして、王を焼くかのようであった。(六)

ビーマは言った。

「王よ、私はカルナのことを怒らない。確かに奴隷の義務（ダルマ）が我々に生じた。しかし王よ、もしあなたが彼女を賭けて勝負しなければ、今、敵どもが私を制止できるだろうか。(七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドゥルヨーダナ王は、カルナの言葉を聞いた時、茫然として沈黙しているユディシティラに次のように言った。(八)

「王よ、ビーマとアルジュナと双子は、お前の命令に従う。クリシュナーが勝ち取られていないと考えるなら、彼女の問いに答えよ。(九)」

彼はユディシティラにそう言ってから、権力に酔い痴れて、自分の衣服をめくり、笑いながらパーンチャーラの王女を見た。(一〇) そしてカルナの方に笑いかけ、ビーマを侮辱しながら、ドラウパディーが見ている前でその左の腿を見せた。その腿はバナナの幹のようで、すべての吉相をそなえ、象の鼻に似て、金剛杵（ヴァジュラ）のように重々しかった。(一一―一二) 狼腹（ビーマ）

はそれを見て、赤い両眼を見開き、諸王の中で、集会場全体に聞こえるかのような声で彼に告げた。(二三)

「もし大戦闘において、棍棒で彼の腿を砕かなければ、狼腹は祖霊たちと世界を共にすることができないであろう。(二四)」

怒った彼のすべての器官（体の穴）から、火焔が噴出した。燃える樹の穴から火焔が噴出するように。(二五)

ヴィドゥラは言った。

「〔諸王よ、〕ビーマセーナから発する最高の恐怖を見よ。それはヴァルナ王の輪縄から発する恐怖のようであると認識せよ。確かにこれは、かつて運命の神に放たれた災禍がバラタ族に生じたのだ。(二六)ドリタラーシトラの息子たちよ、度を越した賭けが行なわれたものだ。この集会場で、女性のことで口論するとは。お前たちの安寧は大危機に直面しているようである。クル族は悪しき協議をしている。(二七)クル族の人々よ、この場合の法（ダルマ）を速やかに理解せよ。もしそれが間違って理解されたら、集会は罪を犯すことになる。もしこの賭博者（ユディシティラ）が、自分自身が勝ち取られない前に彼女を賭けたとしたら、彼は彼女の所有者となるであろう。(二八)その財産の所有者でない者がそれを賭けて勝負すれば、その財産を勝ち取っても、夢の中で勝ち取ったようなものだと私は思う。(二九)」クル族の人々よ、ドゥルヨーダナの言葉を聞いて、この法から逸脱してはならぬ。

ドゥルヨーダナは言った。

「私はビーマとアルジュナと双子の言葉に従う。彼らがユディシティラを主君と呼ばないなら、ドラウパディーよ、お前は奴隷の状態から解放されるであろう。(二〇)」

アルジュナは言った。

「偉大なダルマ王であるユディシティラ王は、まず我々を賭けた時は我々の主君であった。しかし、自分自身が勝ち取られた時、彼は誰の主人であるのか。すべてのクル族の人々よ、それを判断して下さい。(二一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、ドリタラーシトラ王の家の火供が行なわれる場所の周辺で、ジャッカルが大声で吠えた。そして驢馬や恐ろしい鳥たちが、それに呼応していたるところで叫び声をあげた。(二二)真理を知るヴィドゥラ、スバラの娘（ガーンダーリー）、ビーシュマ、ドローナ、賢者ガウタマ（クリパ）は、その恐ろしい声を聞いて、「桑原、桑原」と大声で言った。(二三)それから、ガーンダーリーと賢者ヴィドゥラは、その恐ろしい前兆を認めて、悲しそうに王に告げ知らせた。すると王は次のように言った。(二四)

「愚かなドゥルヨーダナよ、お前は破滅した。というのは、このクルの雄牛たちの集会場において女性に言い寄った。とりわけ、〔パーンダヴァの〕正妻であるドラウパディーに対して。無礼者め。(二五)」

賢明なドリタラーシトラは、そのように言うと、親族たちの幸福を願って退出した。そし

て、真理を知る彼は、知性によって考慮してから、パーンチャーラの王女クリシュナーをまず慰めて、そして彼女に告げた。(二六)

ドリタラーシトラは言った。

「パーンチャーラの王女よ、何でも望むことを私に願い出なさい。そなたは法（ダルマ）に専念しているから、私の嫁たちのうちでも特別である。(二七)」

ドラウパディーは言った。

「私の願いをかなえて下さるのなら、お願いいたします。バラタの雄牛よ。一切の法を守る、栄光あるユディシティラが奴隷でないようにして下さい。(二八)賢明な〔息子の〕プラティヴィンディヤが奴隷の子になって、無知な子供たちが『あれは奴隷の息子だ』と言うことのないように。(二九)彼はかつて他の人々より優れた王の息子であって、可愛がられていたのに、自分が奴隷の息子であると知ったら、死んでしまうでしょう。バーラタよ。(三〇)」

ドリタラーシトラは言った。

「善女よ、私は第二の願いごとをかなえる。私に願い出なさい。そなたはただ一つの願いだけではふさわしくないと考えるから。(三一)」

ドラウパディーは言った。

「戦車と弓とともに、ビーマセーナ、アルジュナ、ナクラ、サハデーヴァを返していただきたいというのが私の第二のお願いです。(三二)」

ドリタラーシトラは言った。

「我々から第三の願いを選べ。そなたは二つの願いだけでは十分に遇されたとは言えない。そなたは法（ダルマ）を守り、私の嫁たちのうちで最も優れているから。(三三)」

ドラウパディーは言った。

「貪欲は法を滅ぼします。尊い方よ、私は選べません。第三の願いを受けるにふさわしくありません。最高の王よ。(三四)平民（ヴァイシャ）の願いごとは一つとされます。王族とその妻には二つの願いごと、王には三つ、バラモンには百の願いごとが許されるとされます。王中の王よ。(三五)私の夫たちは最悪の状態になりましたが、救われました。王よ、彼らは善行により幸運を見出すでしょう。(三六)」

(第六十三章)

最上の人々は敵意を憶えていない

カルナは言った。

「容色にかけて定評のある、人間のうちで有名な女性の場合でも、誰にもこのような行為を我々は聞いたことがない。(一)パーンドゥの息子たちとドリタラーシトラの息子たちが怒りにかられていた時、今、ドラウパディーはパーンドゥの息子たちを救った。(二)パーンドゥの息子たちが、舟なく依り所なく水中に没し溺れようとした時に、このパーンチャーラの王女は、彼らを渡す舟となった。(三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

「パーンドゥの息子たちは妻に救われた」と言うのを聞いて、非常に短気なビーマセーナはすっかり気分を害して言った。(四)

「人間には三つの光明があるとデーヴァラは説いた。すなわち、子孫と行為(カルマン)と学問とである。それにより生類が創造されたから。(五)人間の肉体が生気がなくなり、汚れ、空虚になり、親族から捨てられる時、この三つのものが再生する。(六)我々の光明は害われた。我々の妻が汚されたのだから。アルジュナよ、汚された者の子孫はどうなるだろうか。(七)」

アルジュナは言った。

「バラタ族の人々よ、最上の人々は卑しい者に直接間接に言われた乱暴な言葉に対し、決して言い返さない。(八)立派な人々は自信があるから、他者になされた善行のみを評価して記憶し、敵意ある行為は記憶しないものだ。(九)」

ビーマは言った。

「私はこの場ですぐに、集まったすべての敵を殺す。王中の王であるバーラタよ、外に出て敵を根こそぎに滅ぼせ。(一〇)我々は議論したり悩んだりする必要はない。バーラタよ、まさに今、この場で私は彼らを殺す。あなたはこの地上を支配しなさい。(一一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

弟たちに囲まれたビーマセーナは、さながら鹿たちの中にいる獅子のようであったが、何

度も自分の鉄棒を見た。(一二)汚れなき行為のアルジュナは、彼をなだめ、熱を冷まそうとした。するとその強力な勇士は、その内なる熱により汗をかいた。(一三)怒った彼の諸器官や耳などから、煙と火花とともに火が噴き出した。(一四)彼の顔は眉をひそめ額にしわを寄せて、見るも恐ろしい形相になった。それは宇宙紀(ユガ)の終末が訪れた時に出現した破壊神の顔のようであった。(一五)ユディシティラは剛腕のビーマをその腕で制止した。そして、「そのように言ってはならぬ。黙っていなさい」と彼に告げた。(一六)彼は怒りで赤い眼をした勇士を制止してから、合掌して父(伯父)のドリタラーシトラに近づいた。(一七)　(第六十四章)

ユディシティラは言った。

「王よ、我々は何をしたらよいでしょうか。我々にお命じ下さい。あなたは我々の主君です。バーラタよ、我々はいつもあなたの命令に従おうと願っておりますので。(一)」

ドリタラーシトラは言った。

「アジャータシャトルよ、お前に幸あらんことを。恙無く幸せに行くように。さらばじゃ。財産とともに自分の王国を治めよ。(二)しかし、老いた私の教えを理解せよ。その教えはすべて知性に従って述べられ、適切で、最高に有益である。(三)

わが子ユディシティラよ、お前は法(ダルマ)の微妙な帰趨を知っている。大知者よ、お前は修養を積み、長老たちに奉仕している。(四)知性あるところに寂静がある。バーラタよ、寂滅に

赴け。斧は木でないものに用いられず、木のみに振り下ろされる。（五）最上の人々は相手の敵意を憶えていない。相手の長所を見て、短所を見ない。相手に敵意を抱かない。（六）ユディシティラよ、最低の人々は、論争において、乱暴なことを言う。言われたら、中位の人々は、相手に乱暴なことを言い返す。（七）しかし、賢明な最上の人々は、敵意ある乱暴な言葉を直接間接に言われても、決して言い返さない。（八）立派な人々は自信があるから、他者になされた善行のみを評価して記憶し、敵意ある行為は記憶しないものだ。（九）

この立派な人々の集会において、高貴なお前はそのように行動した。だからわが子よ、ドゥルヨーダナの乱暴を心に留めるな。（一〇）母のガーンダーリーと、お前の美質を願って近くにいる、老いた盲目の父である私を見よ。バーラタよ。（一一）私はよく考えてこの賭博が行なわれるままにした。友たちに会いたいと望み、また息子たちの強みと弱みを見たいと望んで。（一二）王よ、お前がクル族の指導者であり、すべての論書に通じた賢者ヴィドゥラが顧問であるから、クル族は有望である。（一三）お前には法が、アルジュナには気力が、ビーマセーナには勇武がある。最上の人である双子には、信仰と、目上（グル）への奉仕がある。（一四）

ユディシティラよ、幸あらんことを。カーンダヴァプラスタに帰れ。弟たちと仲よくせよ。法に専心せよ。（一五）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そう告げられて、バラタ族の長であるダルマ王ユディシティラは、すべての貴人の誓約を交わしてから、弟たちとともに出発した。（一六）彼らは〔雷〕雲のような〔音響をたてる〕戦車に乗って、クリシュナー（ドラウパディー）とともに、満足してインドラプラスタの都に向けて出発した。（一七）

（第六十五章）

(28)

第二の賭博（第六十六章—第七十二章）

再び賭博で敗れる

ジャナメージャヤはたずねた。

「パーンダヴァたちが多量の宝石や財物とともに辞去したことを知って、ドリタラーシトラの息子たちの気持はどのようであったか。(一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

王よ、彼らが賢明なドリタラーシトラのもとを辞去したことを知って、ドゥフシャーサナはすぐに兄のところへ行った。(二) バラタの雄牛よ、ドゥフシャーサナは重臣といっしょにいるドゥルヨーダナに会って、苦悩して次のように述べた。(三)

「あの老王は我々が苦労して手に入れたものをすべて失わさせてしまった。彼は財物を敵の手に渡したのだ。勇士よ、そのことを認識しなさい。(四)」

そこで高慢なドゥルヨーダナとカルナとシャクニは、パーンダヴァたちに対処するために、一堂に会して相談し合った。(五) そして彼らは急いで賢明なドリタラーシトラ王のもとに行き、穏やかに告げた。(六)

ドゥルヨーダナは言った。

「王よ、神々の司祭である賢者ブリハスパティが、シャクラ(インドラ)に政略(ニーティ)を説いている時に

告げたことを、あなたは聞いたことがないのですか。(七) 敵を苦しめる者よ、敵が戦闘や武力によりあなたに災いをなす前に、すべての方策により敵を滅ぼすべきです。(八) もし我々がパーンダヴァの財産によりすべての王に敬意を表してから、彼らと戦えば、我々は失敗することはありません。(九) しかし、怒って咬もうとする毒蛇を、首や背中に置いたら、どうして取り除くことができましょう。(一〇) 父上、パーンダヴァたちは武器をとり、戦車に乗り、怒っています。彼らは毒蛇のように怒って、我々を全滅させるでしょう。(一一) 実にアルジュナは武装を整えて進んでいます。最高の箙(えびら)を開けて、ガーンディーヴァ弓を何度も握りしめ、息を吐き出して見まわしています。(一二) 狼腹(ビーマ)は速やかに重い棍棒を振り上げ、急いで自分の戦車に馬をつなぎ、出発したと聞いております。(一三) ナクラは刀と八つの月のついた楯を取って出発しました。サハデーヴァと王は、そのしぐさによってその意図を表明しています。(一四) 彼らはみな、多くの武器を装備した戦車に乗り、戦車〔馬の〕群を打って、軍隊を集めるために出かけました。(一五) 彼らは我々に侮辱されたので、決して我々を許さないでしょう。彼らのうちの誰が、ドラウパディーを苦しめたことを許すでしょうか。(一六)

どうかお願いします。我々は再びパーンダヴァたちと賭博をして、森で暮らすようにさせましょう。そうすれば、我々は彼らを支配下に置くことができるでしょう。バラタの雄牛よ。(一七) 彼ら、あるいは我々は、もし賭博に負けたら、十二年間、鹿皮をまとって大森林に入らなければならないということにしましょう。(一八) そして第十三年目は、人々の間で、正

体を知られることなく暮らさなければなりません。しかしもし知られたら、更にもう十二年間、森で暮らさなければなりません。(一九) 我々か彼らが、そのように暮らすことになるのです。さあ、賭博をやりましょう。パーンダヴァたちに、再び骰子を振らせて、賭博をやらせるべきです。(二〇) バラタの雄牛である王よ、これが我々のなすべき最も重要なことです。このシャクニは、賭博の要件とそれについての術を知っています。(二一) 我々は王国に堅く根をおろし、友邦を獲得し、精強で無敵の大軍を養いましょう。(二二) そうすれば王よ、もし彼らが十三年の誓戒を満了したとしても、我々は彼らに勝利するでしょう。敵を苦しめる王よ、どうか賛成して下さい。(二三)」

ドリタラーシトラは言った。

「彼らは遠方に行ったであろうが、急いで連れもどせ。パーンダヴァたちに再び賭博をやらせよう。(二四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

するとドローナ、ソーマダッタ、偉大な戦士バーフリーカ、ヴィドゥラ、ドローナの息子、平民(ヴァイシャ)の女の強力な息子(ユユツ)、ブーリシュラヴァス、ビーシュマ、偉大な戦士ヴィカルナたちは、みなして、「賭博はいけません。平和であるように」と告げた。(二五―二六) すべての親しい人々が、利益を望んで、賭博を望まなかったが、息子を愛するドリタラーシトラは、パーンダヴァたちを呼び寄せた。(二七) その時、ガーンダーリーが、息子への愛情ゆえに悲

嘆に暮れながらも、ドリタラーシトラ王に、法(ダルマ)にかなったことを述べた。(二八)

「ドゥルヨーダナが生まれた時、大知者のヴィドゥラが言いました。『どうかこの一族の面汚しをあの世に送って下さい』と。(二九) バーラタよ、彼は生まれるやいなや、ジャッカルのように吠えました。必ずやこのクル族は滅亡します。クル族の人々よ、そのことに注意しなさい。(三〇) 王様、無知な子供の意見を容れてはなりません。あなたが一族の恐ろしい滅亡の原因となりませんように。(三一) 築いた堤を誰がこわすでしょうか。鎮まった火を誰が再燃させるでしょうか。平和を守っているパーンダヴァたちを、誰が再び怒らせるでしょうか。バーラタよ。(三二) アージャミーダよ、あなたは記憶しているでしょうが、もう一度念を押します。学問は愚者に対しては、よくも悪くも教え導きません。(三三) そして王様、幼稚な考えの者は、決して精神的に成長しません。あなたが彼らの導き手になって下さい。あなたの息子たちが離れ離れになって、あなたを捨てることがないように。(三四)

静寂と法と他者の知性によりあなたに生じた知性が、逆しまになることのないように。邪に得られた富貴は滅び、穏かに増大した富貴は子子孫孫までも続くものです。(三五)」

すると大王は、法を知るガーンダーリーに告げた。

「一族の滅亡があろうとままよ。私は止(と)めることはできない。(三六) 彼らが望むようにすべきだ。パーンダヴァたちを引き返させよう。私の息子たちに、パーンダヴァたちと再び賭博をさせよう。(三七)」

(第六十六章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
それから案内係が、遠方に行ったユディシティラに、英邁なドリタラーシトラ王の言葉を伝えて言った。(一)
「『王よ、集会場は賭博の準備ができた。さあユディシティラよ、骰子を投げて勝負せよ』と、父君があなたに告げられました。バーラタよ。(二)」
ユディシティラは言った。
「万物は配置者（ダートリ）の指令により幸不幸を得る。もし再び賭博をするならば、その両者は不可避である。(三) そして老王の指令により賭博に招待されたら、破滅することを知っていても、それに背くことはできない。(四)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
そのように告げて、ユディシティラは弟たちとともに引き返した。そして彼はシャクニの幻術を知りつつも、再び賭博にもどった。(五) 偉大な戦士たちは再びあの集会場に入った。そのバラタの雄牛たちは親しい人々の心を痛ませた。(六) 彼らは賭博を再開するために安楽に座った。全世界の滅亡に向けて、彼らは運命にかりたてられていたのだった。(七)
シャクニは言った。
「老王はお前のために財産を返却した。それはよいことだ。しかしバラタの雄牛よ、一つの

高価な賭けをしたい。私の言うことを聞きなさい。(八) もし我々がお前たちに賭博で負けたら、十二年間、ルル鹿の皮を着て大森林に入るであろう。(九) そして第十三年目は、丸一年、人々の間で、正体を知られることなく暮らそう。しかしもし知られたら、さらに十二年間、森で暮らすであろう。(一〇) また、お前たちが我々に負けたら、クリシュナーとともに、十二年間、鹿皮を着て森に住まなければならない。(一一) そして第十三年目が無事に終了したら、また適切に、お互いに相手の王国を返却しなければならない。(一二) ユディシティラよ、この取り決めにより、お前は骰子を振って、再び我々と賭博をすべきである。バーラタよ。(一三)」
集会場にいる人々は言った。
「ああ、何ということだ。親族たちは彼に重大な危険を悟らせようとしない。それは理性によって知られることなのに、バラタの雄牛たち自身もそれに気づかない。(一四)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
ユディシティラ王は、非常に多くの人々の言葉を聞きながらも、廉恥心により、また法（ダルマ）への愛着から、再び賭博に向かった。(一五) 大知者の彼はすべてを知りつつも、再び賭博を始めたのだった。「これはクル族の滅亡にならないだろうか」と考えながら。(一六)
ユディシティラは言った。
「私のような、自己の法を守る王は、挑戦された時、どうして退散するだろうか。シャクニ

よ、私はあなたと勝負する。(一七)」
シャクニは言った。
「すべての牛馬と多くの乳牛、無限の羊と山羊、象、宝庫、黄金、男女の奴隷はさておき、今度は我々はただ一つの賭けをする。森に住むことを賭けて。パーンダヴァたちよ。お前たちか我々は、敗れたら、森に入って住まなければならぬ。(一八―一九) バラタの雄牛よ、この取り決めにより勝負しよう。骰子を一回振って、負けた方が森に住むという条件で。バーラタよ。(二〇)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
ユディシティラは彼に同意した。シャクニは骰子を取り、「勝った」とユディシティラに告げた。(二一)

(第六十七章)

鹿皮の上衣をまとって森へ出発

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
賭博に敗れたパーンダヴァたちは、森に住むことを決意した。彼らは次々と鹿皮の上衣を身につけた。(一) 勇士たちが王国を奪われ、鹿皮をまとって、森に住むために出発するのを見て、ドゥフシャーサナは言った。(二)

「ドリタラーシトラの息子である偉大な王の車輪がまわり始めた(統治が始まった)。パーンドゥの息子たちは打倒され、この上ない不幸な境遇に陥った。(三) 今や神々は、天空の滑らかな道を通って我々の方にやって来た。というのは、我々は敵たちより美質の点で優れ、目上であり、多数であるから。(四) パーンダヴァたちは、長期間、終わりのない地獄に落ちた。そして彼らは、永久に幸福を奪われ、王国を失った。(五) パーンダヴァたちは力に酔い、ドリタラーシトラの息子たちを笑っていたが、その彼らがうち破られ、財産を奪われ、森へ行くことになった。(六) 彼らはすべて、彼らの多彩な鎧と、神々しく輝かしい衣服を脱ぎ、ルル鹿の皮衣を着なければならない。シャクニとの賭けの条件に同意したのであるから。(七) 彼らはいつも『諸世界には我々のような男たちはいない』と思いこんでいた。しかし今やパーンダヴァたちは、この逆境において、自分たちは実を結ばない不毛の胡麻のようであると知るであろう。(八) クルの末裔(パーンダヴァ)よ、このようなお前たちの衣などは、賢者たちのものとは決して同じではない。潔斎していない強力なパーンダヴァたちの鹿皮の衣を見よ。(九) 大知者ソーマカ・ヤジュニャセーナ(ドルパダ)が、娘のドラウパディーをパーンダヴァたちに与えたのは、まずいことをしたものだ。不能なパーンダヴァたちは、もはや彼女の夫ではないのだから。(一〇) 繊細な衣服を鹿皮に変えさせられ、森で財産なく依り所のない彼らを見て、ドラウパディーよ、お前は愛情を抱けるか。ここで、お前の望む誰か他の男を夫として選べ。(一一) というのは、ここにすべてのクル族の人々が集まっている。忍耐強く、自己を制し、非常に金持ちな人々が。彼らのうちの誰か一人を夫に選べ。この逆境はお前を苦しめることはなか

ろう。（二二）すべてのパーンダヴァたちは、実を結ばない不毛の胡麻のように、皮でできた鹿のように、不毛の麦のようになった。（二三）どうしてお前は堕ちたパーンダヴァたちに仕えるのか。不毛の胡麻に仕えるのは徒労である。」

残酷なドリタラーシトラの息子は、このように乱暴な言葉を、パーンダヴァたちに聞かせた。（二四）この上なく短気なビーマセーナは、それを聞くと、大声で彼を非難し、怒って彼を制止し、急いで近づいて、次のように言った。ヒマーラヤの獅子がジャッカルに対してするように。（二五）

ビーマセーナは言った。

「冷酷な男よ、お前は悪人に好まれるようなたわごとをしゃべる。お前はガーンダーラ（シャクニ）の術のおかげで、諸王の中で勝ち誇っている。（二六）お前がここで言葉の矢により我々の弱点をひどく傷つけるように、私は戦闘においてお前の急所を断ち切ってやろう。憶えていろ。（二七）そして欲望と貪欲にかられて、守護者としてお前に従う連中を、その従者もろともヤマ（閻魔）の住処へ送ってやる。（二八）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

鹿皮を着たビーマがこのように告げて、苦悩に沈みながらも、法（ダルマ）に従っていた時、クル族の中で、ドゥフシャーサナは恥知らずにも、彼に向かって「牛よ、牛よ」と呼びながら、踊りまわっていた。（二九）

ビーマセーナは言った。

「ドゥフシャーサナよ、お前は邪悪で無謀で冷酷なことができるな。というのは、詐術によって財産を得て、誰が自慢することができよう。（三〇）プリター（クンティー）の息子である狼腹は、もし戦いにおいてお前の胸を裂いて血を飲まなければ、幸ある世界に行かないであろう。（三一）戦いにおいて、すべての弓取りたちが見ている前で、ドリタラーシトラの息子たちを殺せば、私はすぐに平安に達するであろう。私はお前たちにこのことを誓う。（三二）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

パーンダヴァたちが集会場から出て行く時、ドゥルヨーダナ王は有頂天になって、愚かにもふざけて、ビーマセーナの獅子のような歩き方をまねた。（三三）狼腹は半身を向けてふり返り、「これだけではすまないぞ」と彼に告げた。「馬鹿め、憶えていろ。すぐにお返しするぞ。お前と仲間たちを殺してやる。（三四）」

強力で誇り高いビーマは、自分に対するこのような侮辱を見ても、怒りを抑え、王に従って退出しながら、クル族の集会において次のように告げた。（三五）

「私はドゥルヨーダナを殺す。アルジュナはカルナを殺す。サハデーヴァは賭博師のシャクニを殺すであろう。（三六）そして私は集会場の中で、もう一度このことを高らかに告げる。我々の間に戦闘があるというが、神々はその通りにして下さるだろう。（三七）私は戦いにおいて、この邪悪なスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）を棍棒で殺すであろう。そして足で彼の頭を地面に

押しつけてやる。(二八)またこの口だけは勇敢な、乱暴で邪悪なドゥフシャーサナの血を、獅子のように飲んでやろう。(二九)」

アルジュナは言った。

「ビーマよ、立派な人々の決意は、言葉だけでは知られない。今から十四年目に、彼らはどのようになるか見るであろう。(三〇)ドゥルヨーダナ、カルナ、邪悪なシャクニ、そしてドゥフシャーサナの血を、大地が飲むであろう。(三一)ビーマセーナよ、あなたの指示により、私は戦闘において、妬みぶかいおしゃべり、邪悪な連中の顧問(異本による)であるカルナを殺すであろう。(三二)アルジュナはビーマによかれと望み約束する。私は戦闘において、カルナとその従者を矢で殺してやる。(三三)そして、他の王たちが、血迷って私に立ち向かって来たなら、鋭い矢で、彼らをすべてヤマ(閻魔)の住処に送ってやる。(三四)もし私が約束を破るようなことがあれば、ヒマーラヤがその場所から動き、太陽がその輝きを失い、月から玲瓏さが失せるであろう。(三五)もし今から十四年目に、ドゥルヨーダナが、我々に敬意をこめて王国を返却しないなら、この言葉通りになるであろう。(三六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

アルジュナがそう言った時、栄光に満ちたマードリーの息子サハデーヴァは、長い腕を拡げ、シャクニの死を望んで次のように告げた。彼は怒りで眼を赤くし、蛇のように息を吐いていた。(三七―三八)

「愚か者、ガーンダーラの人々の名声を奪う者よ。あなたは賭博を重視するが、戦いにおいてあなたが選ぶのは賭博ではなく、鋭い矢なのだ。(三九)ビーマがあなたとその縁者について述べたように、私は実行するであろう。やらなければならないことがあるなら、すべてやっておけ。(四〇)私は戦いにおいて、あなたと縁者を力ずくで攻撃して殺すであろう。シャクニよ、もしあなたが、戦いに際し王族の法(クシャトラダルマ)に従うなら。(四一)」

サハデーヴァの言葉を聞くと、人間のうちで最も見目麗しいナクラは次のように言った。(四二)

「この賭博において、ドリタラーシトラの息子たちは、常にドゥルヨーダナに気に入られるようにふるまい、ヤジュニャセーナの娘に乱暴な言葉を聞かせた。(四三)そのカーラ(時間、破壊神)にかりたてられ、まさに死なんとしているドリタラーシトラの息子たちに、私は存分にヤマの住処を見せてやろう。(四四)ダルマ王の命に従い、またドラウパディーの足跡をたどり、私は遠からずこの地上からドリタラーシトラの息子たちを抹殺してやろう。(四五)」

このように、これら強力な人中の虎たちは、すべて堅い誓いをしてから、ドリタラーシトラのもとに行った。(四六)

(第六十八章)

ユディシティラは言った。■

「バラタ族の方々、長老の祖父様、ソーマダッタ王、バーフリーカ大王、さようなら。(一)

ドローナ、クリパ、他の王たち、アシュヴァッターマン、ヴィドゥラ、ドリタラーシトラ、そのすべての息子たち、さようなら。(二)ユユツ、サンジャヤ、その他集会場にいる方たち、すべての方に別れを告げて私は行きます。またもどってお会いすることもありましょう。(三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。──

人々は恥ずかしくてユディシティラに何も言わなかった。彼らはただ心によって、その英邁な王の幸運を念じた。(四)

ヴィドゥラは言った。

「王の娘プリター(クンティー)夫人は森へ行かない方がよい。彼女は繊細で、老いて、いつも快適な暮らしに慣れているから。(五)彼女は幸せに、もてなされて、私の家に住むであろう。プリターの息子たちよ、わかったな、このようにするぞ。いつも元気でいてくれ。(六)

ユディシティラよ、私の言うことをよく聞きなさい。非法(アダルマ)によって敗れた者は、誰もその敗戦で苦しまないものだ。(七)あなたは法(ダルマ)をよく知っている。アルジュナは戦いを知っている。ビーマセーナは敵どもを殺す。ナクラは財産を蓄積する。(八)サハデーヴァは管理能力がある。ダウミヤは最高のヴェーダ学者である。ドラウパディーは法を践み、法と実利(アルタ)に通じている。(九)あなたたちはみな、お互いに愛し合い、好ましいことを語る。敵によって離間させられることなく、満足している。この世で誰があなたたちを羨まないだろうか。

(一〇)バーラタよ、あなたのこのような精神統一は、全くすばらしいものだ。インドラのような敵でもそれに対抗できない。(一一)かつてヒマーラヤにおいて、あなたはメール・サーヴァルニに教えられた。ヴァーラナーヴァタの都においては、クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ(ヴィヤーサ)に教えられた。(一二)ブリグトゥンガにおいては〔パラシュ〕ラーマに、ドリシャドヴァティー川においてはシャンブ(梵天?)に教えられた。アンジャナの付近では、あなたは大仙アシタの教えを聴いた。(一三)そして、あなたの司祭であるこのダウミヤは、常にナーラダを見る(異本では、「ナーラダと……ダウミヤは、常にあなたを見守る」)。あなたは未来世においても、この聖仙に敬われる知性を捨ててはならぬ。(一四)パーンダヴァよ、あなたは知性にかけて、イラーの息子プルーラヴァスに勝る。能力にかけて、他の諸王に勝る。法(ダルマ)を尊重することにかけて、聖仙たちに勝る。(一五)あなたはインドラに属する勝利に心を注ぐ。ヤマに属する怒りの制御に、クベーラに属する気前のよさに、ヴァルナに属する抑制に心を注ぐ。(一六)自己を惜しみなく与えることは、月に似ている。生活を支える〔能力〕は水から得ている。忍耐は地から、すべての威光(輝き)は日輪から得ている。(一七)力は風から得ている。自己の起源は諸元素から得ていると知れ。

元気でいてくれ。幸あらんことを。あなた方がまた帰って来たら会おう。(一八)ユディシティラよ、窮迫時の生き方、財政的な困窮において、あらゆる仕事について、あらゆる時に、適切にふるまうべきである。(一九)クンティーの息子よ、さようなら。バーラタよ、御機嫌よう。あなたが目的を果たし、恙無くもどって来た時にまた会おう。(二〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
このように言われて、不屈の勇者ユディシティラは、ビーマとドローナに敬礼してから出発した。(二二)

(第六十九章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
彼が出発しようとした時、クリシュナー（ドラウパディー）は誉れ高いプリター（クンティー）のもとに行き、悲嘆に暮れて、彼女とそこにいる他の婦人たちに別れを告げた。(一)彼女はふさわしく挨拶し、抱擁してから、立ち去ろうとした。すると、パーンダヴァの婦人部屋で、非常に大きな嘆声がおこった。(二)クンティーは去って行くドラウパディーを見てひどく苦しみ、悲しみにふるえる声で、ようやく次のように言った。(三)
「娘よ、この大きな災難にあっても、悲しんではいけません。あなたは女の義務（ダルマ）を知っていて、徳性をそなえ、作法を心得ています。(四)美しい微笑の女（ひと）よ、私は夫たちについてあなたに説教する必要はありません。あなたの二つの＊族が、あなたの貞女の美徳によって飾られています。(五)そして非の打ち所のない女よ、このクル族があなた〔の怒り〕により燃やされなかったのは幸運です。あなたは私の好意に元気づけられ、恙無く道（ダル）を行きなさい。(六)立派な女性は、不可避のことについては悩まないものです。あなたは長上の法（ダルマ）に守られ

て、すぐに幸福になれるでしょう。(七)森に住んだら、私の息子サハデーヴァをいつも見守ってやって下さい。この災難に陥って、気高い彼が意気消沈しないように。(八)」
王妃は「かしこまりました」と告げて、流れる涙に濡れ、〔月経の〕血にまみれた一衣をまとい、髪をふり乱して出て行った。(九)彼女が泣きながら出て行くと、プリターは悲しんでその後を追った。するとプリターは、装身具や衣裳を奪われたすべての息子たちに会った。(一〇)彼らはルル鹿の皮を身にまとい、大喜びしている敵たちに囲まれ、恥じて少しうつ向いていた。親しい人々は彼らに同情していた。(一一)
プリターはそのような状態の息子たちに、この上ない愛情をもって近づき、悲しみのあまりあれこれとひどく嘆きつつ、抱きしめて次のように言った。(一二)
「あなたたちは正しい法（ダルマ）とよい行ないと確固たる性格に飾られ、卑しくなく、強固な信仰を持ち、常に神の崇拝に専念しているのに、どうしてあなたたちに災いが降りかかったのか。どうしてこのように運命が逆しまになったのか。誰の不心得であなたたちにこの罰が下ったのかわからない。(一三―一四)私が不幸であるせいかも知れない。私があなたたちを生んだのだから。あなたたちが最高の美質をそなえていながら、この上なく苦労を味わっているのも。(一五)あなたたちは富貴を失い、難儀な森にどうやって住むのですか。(一六)もしあなたたちが確実に森に住むとわかっていたら、勇気と腕力と気力と威光にかけては衰えていないが、体は痩せ衰えて。パーンドゥが死んだ後に、私はシャタシュリンガから象の都（ハースティナプラ）へ来なかったものを。(一七)あなたたちの父上は、幸運だったと思います。あのように

功徳と知性を積み、息子たちについて悩むことなく、幸いにも天国へ行こうと望んだのだから。(一八)そして今は、あのマードリーも幸運だったと思います。彼女は法をわきまえ、あらゆる面ですばらしいひとで、予見能力をそなえ、最高の帰趨に達したのです。(一九)彼女は愛情と知性とその帰趨の点で私を出し抜きました（異本による）。私にこの苦しみをもたらした生への愛着は災いなるかな。(二〇)」

このように嘆いているクンティーを慰めてから、別れの挨拶をし、パーンダヴァたちは悄然として森へ出発した。(二一)ヴィドゥラたちは、自分たちも非常に苦しんでいたが、理を尽くして悩むクンティーを慰めて、徐々にヴィドゥラの家に導き入れた。(二二)ドリタラーシトラ王は悲しみで動転し、急いで来るようにと、ヴィドゥラのもとに使いをやった。(二三)そこでヴィドゥラはドリタラーシトラの王宮に行った。ドリタラーシトラ王は取り乱して彼にたずねた。(二四)

（第七十章）

ドリタラーシトラは言った。

「クンティーの息子であるダルマ王ユディシティラは、どのようにして出発したか。ビーマセーナは、アルジュナは、マードリーの二人の息子は……。(一)ヴィドゥラよ、ダウミヤと哀れなドラウパディーは、どのようにして出発したか。私は彼らの行動をすべて聞きたいと思う。(二)」

ヴィドゥラは言った。

「クンティーの息子ユディシティラは、衣で顔をおおい隠して出発しました。ビーマは両腕を拡げて出発しました。(三)アルジュナは砂をまき散らして王に従って行きました。マードリーの息子サハデーヴァは、顔に（顔料を）塗って出発しました。(四)この世で最も美男のナクラは、心を痛め、全身をほこりまみれにして王に従って行きました。(五)切れ長の眼をした美女クリシュナー（ドラウパディー）は、髪で顔をおおい隠し、泣きながら王に従って行きました。(六)王よ、ダウミヤはクシャ草を手に持ち、道々、恐ろしいヤマ（閻魔）の歌詠を朗唱しながら行きました。(七)」

ドリタラーシトラは言った。

「パーンダヴァたちは様々な様子をして出発したものだ。ヴィドゥラよ、彼らがどうしてそのような様子で出発したのか、私に話してくれ。(八)」

ヴィドゥラは言った。

「あなたの息子たちに欺かれ、その王国と財産を奪われたにもかかわらず、英邁なダルマ王の知性は法（ダルマ）から逸れません。(九)バーラタよ、この常に慈悲深い王は、詐術に欺かれ、ドリタラーシトラの息子たちに対して怒りに燃えているので、両眼を開けないのです。(一〇)『私は恐ろしい眼で見て、人々を焼くことのないように』と考えて、そのパーンダヴァの王は顔をおおい隠して出発したのです。(一一)

次にビーマがどうしてあのような様子で行ったのか、お話ししますから聞いて下さい。バ

ラタの雄牛よ、腕力において自分に匹敵する者はいないということで、ビーマは両腕を拡げて行ったのです。腕力を誇る彼は、両腕を見せて、敵に対し腕力にふさわしい行為をまさに行使しようと企てているのです。(二二―二三) その時クンティーの息子アルジュナは、矢をふり注ぐことを予告して、砂をまき散らしながら王に従って行ったのです。(二四) バーラタよ、今、彼のまいた砂が散乱するように、彼は敵に対して絶え間なく矢の雨を注ぐでしょう。(二五)

バーラタよ、サハデーヴァは『今日、誰も自分の顔を見分けないように』と考えて、顔に(顔料を)塗って出発したのです。(二六)

王よ、ナクラは『道中、女たちの心を奪わないように』と考えて、全身をほこりまみれにして出発したのです。(二七)

ドラウパディーは一衣をまとい、泣き、髪をふり乱し、生理中で、血にまみれ濡れた衣でもって、次のことを告げたのです。(二八)

『彼らのために私はこのような有様になったのだが、彼らの妻たちは、今から十四年目に、夫を殺され息子を殺され、親類や親しい人々を殺されるだろう。(二九) 彼女らの身体は親類の血にまみれ、彼女らも髪をふり乱し、生理中で、死者に水を手向けて、象の都に入るであろう。(三〇)』

司祭である賢者ダウミヤは、ニルリティ(南西を守る死の女神)に捧げるダルバ(クシャ)草を持ち、ヤマの歌詠を朗唱しながら先導しておりました。(三一) ダウミヤは、『バーラタよ。(三一) ダウミヤは、『バラタ族の

人々が戦闘で殺された時、クル族の長上(グル)たちもこのように歌詠を朗唱するであろう』ということを告げて出発したのです。(三二)

都の人々は悲嘆に暮れて、『ああ、ああ、我々の主君たちは行ってしまわれる。この有様を見よ』と言って、いたるところで叫びました。(三三) 気高いクンティーの息子たちは、以上申し上げたように、その様子により心中の決意を示唆して出発したのであります。(三四)

このように彼ら最上の人々が象の都から出発した時、雲のない空に稲妻が光り、大地は震動しました。(三五) 王よ、ラーフ(日食の悪魔)が、食の時期でないのに太陽を呑み込みました。また流星が都を左まわりにまわって落下しました。(三六) 猛獣や禿鷲やジャッカルや鴉たちが、神殿、聖域、城壁、塔の周囲で鳴きました。(三七) パーンダヴァが森へ行く時、バラタ族の滅亡を示すこのような大凶兆がありました。これもあなたの悪しき政策のためです。(三八)』

その時、ナーラダ(神仙の名)が集会場の中に現われて、クル族の人々の前に立った。彼は大仙たちに囲まれて、恐ろしい言葉を述べた。(三九)

『今から十四年目に、クル族は滅びるであろう。ドゥルヨーダナの罪過により、またビーマとアルジュナの力により。(四〇)』

とそう言って、広大なブラフマン(ヴェーダ)の栄光を身につけたその最高の神仙は、天空を通って速やかに消え去った。(四一)

それから、ドゥルヨーダナとカルナとシャクニ・サウバラは、ドローナを寄る辺と考え、彼に王国を献上した。(四二) するとドローナは、短気なドゥルヨーダナと、ドゥフシャーサ

すとカルナと、すべてのバラタ族の人々に告げた。（三三）

「バラモンたちは、パーンダヴァは神々の息子たちで不死身であると言った。しかし私は、庇護を求めて来た者たちを力の限り守る。（三四）全身全霊で信愛をこめて庇護を求めている、すべてのドリタラーシトラの息子たちとその他の王たちを、私は捨てることができない。後は運を天に任せる。（三五）パーンドゥの息子たちは敗れて、法（ダルマ）に従って森へ行った。彼らは十二年間、森に住むであろう。（三六）パーンダヴァたちは梵行（清浄行）を行なうが、怒りと怨恨にかられ、敵意を新たにして私を悩ませるであろう。（三七）

ところで私は、友達同士の争いで、ドゥルパダを王位から落とした。彼は怒って私を殺すために、息子を求めて祭祀を行なった。（三八）そして彼は、ヤージャとウパヤージャの苦行により、火の中から息子ドリシタデュムナを得た。また祭壇の中央から、美しい胴をしたドラウパディーを得た。（三九）その神々に授けられた息子は、火焔のような色をし、弓と鎧と矢を身につけていた。私は人間であるから、彼への恐怖が私に入り込んだ。（四〇）その人中の雄牛であるドリシタデュムナはあちらの側についた。それ故、私は生命を捨てても、あなたの敵たちと猛烈に戦うであろう。（四一）彼は私を殺すために生まれたと言われている。世に知れわたっている。確かに、今やあなたのために、終末の時が近づいたのだ。（四二）あなたたちは急いで最善のことをやりなさい。これだけではよくない。この幸福は束の間のものだ。冬における棕櫚の陰のように。（四三）盛大な祭祀を行ないなさい。諸楽を享受しなさい。布施をしなさい。今から十四年目に、あなたたちは大きな災禍を得るであろう。（四四）ドゥルヨーダナよ、これを聞いたら、望みのままにせよ。もしよければ、パーンダヴァたちと和解せよ。（四五）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ドローナの言葉を聞いて、ドリタラーシトラは次のように言った。

「師の言われたことは正しい。ヴィドゥラよ、パーンダヴァたちを引き返させなさい。（四六）もし彼らが引き返さないなら、丁重に敬われて行くようにさせなさい。息子たちが武器や戦車や歩兵をともない、諸楽を享受して行くように。（四七）」　（第七十一章）

ため息をつくドリタラーシトラ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

プリターの息子たちが賭博に敗れて森へ行った時、ドリタラーシトラは物思いにふけった。（一）王が考えこんで、ため息をつき、心を乱している時、サンジャヤが彼に言った。（二）

「王様、財宝に満ちた大地を得られ、パーンダヴァたちを王国から追放したのに、どうして悲しまれるのですか。（三）」

ドリタラーシトラは言った。

「パーンダヴァたちは偉大な戦士であり、戦いに長け、盟友を有する。彼らに敵対した者た

ちが、どうして悩まないだろうか。(四)」
　サンジャヤは言った。
「王様、これはあなたのなさったことです。大きな不和が生ずるでしょう。全世界の滅亡が結果として生じるでしょう。(五)ビーシュマやドローナやヴィドゥラに制止されたにもかかわらず、あなたの愚かで恥知らずの息子ドゥルヨーダナは、パーンダヴァたちの徳高い愛妻ドラウパディーを連れて来いと命じて、吟誦者（スータ）の息子を遣わしました。(六―七)」
　ドリタラーシトラは言った。
「神々がある人の破滅を望む場合、彼らはその人の知性を奪い、彼はものごとを逆しまに見る。(八)知性が汚れ、破滅が近づく時、悪い政策が正しい政策のように見え、心から離れない。(九)不利益が利益に見え、利益が不利益に見え、その人を破滅させる。しかもそのことが彼を喜ばせる。(一〇)カーラ（時間、破壊神）は杖を振り上げて、誰の頭をも裂きはしない。カーラの力は、逆のものごとを見せるだけである。(一一)集会場の中で哀れなドラウパディーを引きずった者たちにより、この身の毛もよだつ恐ろしい混乱がもたらされた。(一二)彼女は女陰から生じたものではなく、美しく、良家の生まれで、輝かしく、一切の法を知り、誉れ高い。あの邪な賭博をする男以外に、他の誰が、そのような彼女を侮辱して、集会場の中に連れて来るだろうか。あの生理中で血に濡れ、一衣をまとう、美しい尻のパーンチャーラの王女を……。彼女はパーンダヴァたちを見ていた。彼らは財産を奪われ、意気阻喪し、妻を奪われ、繁栄を奪われていた。すべての享楽を奪われ、奴隷の境遇になっていた。法の輪縄に

縛られ、もはや勇武を発揮できないようであった。(一三―一六)怒り憤慨し苦しむクリシュナー（ドラウパディー）に対し、ドゥルヨーダナとカルナは、クル族の集会において、不快な言葉を浴びせた。(一七)彼女の哀れな両眼により、大地も燃えるほどであった。サンジャヤよ、今私の息子たちに何が残されているだろうか。(一八)
　ガーンダーリーのもとに集まったバラタ族のすべての女たちは、集会場に連れて行かれたクリシュナーを見て、ひどく泣いた。(一九)その晩は、火供（アグニホートラ）は全く行なわれなかった。ドラウパディーが引きずられたことに対して、バラモンたちが腹を立てたからである。(二〇)恐ろしい雷鳴が起こり、大地震があった。天空から恐ろしい流星が落ちた。ラーフ（日食の悪魔）が、食の時期でもないのに、太陽を呑み込み、生類をひどくおびえさせた。(二一)また車庫で火が燃え上がった。旗竿が折れ、バラタ族の滅亡を告げた。(二二)ドゥルヨーダナの火供において、ジャッカルが恐ろしい声で吠え、あらゆる方角で、驢馬たちがそれに呼応して鳴いた。(二三)サンジャヤよ、ビーシュマはドローナとともに立ち去った。クリパとソーマダッタと、勇士バーフリーカも立ち去った。(二四)
　それから私は、ヴィドゥラにうながされて告げた。クリシュナーに何でも願いごとをかなえてやると。(二五)そこで彼女は、無尽の光輝を有するパーンダヴァ兄弟を選んだ。私は戦車と弓とともに彼らが行くことを許した。(二六)その時、一切の法（ダルマ）を知る大知者ヴィドゥラが言った。
『バラタ族の人々よ、クリシュナーがあなたたちの集会場に行ったということは、あなたた

ちの終わりということだ。(二七) このパーンチャーラ国王の娘は、至高のシュリー(繁栄の女神)である。運命(神)に造られたパーンチャーラの王女は、あのパーンダヴァたちに嫁した。(二八) 猛々しいパーンダヴァたちは、彼女に加えられた侮辱を許すことはないだろう。勇猛なヴリシュニの人々や、非常に強力なパーンチャーラの人々も許すことはないだろう。(二九) 彼らはあの約束を守るヴァースデーヴァ(クリシュナ)に守られている。アルジュナはパーンチャーラの人々に守られて、もどって来るであろう。(三〇) 彼らの中で、勇猛で大力のビーマセーナは、死神が杖を振るうように、棍棒を振るってやって来るだろう。(三一) それから、賢明なアルジュナのガーンディーヴァ弓の音を聞いて、王たちはビーマの棍棒の激しさに耐えることができないだろう。(三二) そこで私は常に、プリター(クンティー)の息子たちと戦うことを望まないのだ。私はいつも、パーンダヴァたちがクル族よりも強力だと思うから。(三三) 例えば栄光に満ちた強力なジャラーサンダ王は、戦闘において、ビーマの腕の一撃によって殺されたではないか。(三四)

バラタの雄牛よ、「パーンダヴァたちと和解しなさい。ためらうことなく両方の側によいようにしなさい。(三五)」

サンジャヤよ、ヴィドゥラはこのように法(ダルマ)と実利(アルタ)をともなう言葉を述べた。しかし私は、息子の幸せを願って、それを受け入れなかった。(三六)」 (第七十二章)

本書は「ちくま学芸文庫」のために新たに訳出されたものである。

ちくま学芸文庫

原典訳マハーバーラタ2

二〇〇二年三月六日　第一刷発行

著者　上村勝彦（かみむら・かつひこ）

発行者　菊池明郎

発行所　株式会社 筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四一二三

装幀者　安野光雅

印刷所　三松堂印刷株式会社

製本所　株式会社積信堂

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市櫛引町二―六〇四　〒三三一―八五〇七
電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三

ISBN4-480-08602-1 C0198